

---

# とある I S の非現実事件

不知火

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とあるISの非現実事件

### 【Nコード】

N6742T

### 【作者名】

不知火

### 【あらすじ】

いろんな異世界に旅をしたオリ主が学園都市で上条当麻達と日常を過ごしていたら、ISが展覽されると友人が言って、見に行くことになった。

見るだけだったはずなのだが、当麻の不幸でISを動かしてしまった、

主人公はIS学園に入学することになった。IS学園の外で起こった非現実には飛び込む主人公に巻き込まれ一夏達は魔術と超能力を知ることになる。

この作品はとある魔術のindexとIS インフィニット・ストラトスのクロスオーバーです。中盤以降他の作品も加わります。

0話 不幸だー！ー！！ 「当麻、それ俺が言いたい」 (前書き)

とある魔術のindexと IS インフィニット・ストラトスのクロス作品です。

序盤RPGのような仲間集め？

中盤からある作品達の事件もかわらせる予定です。

0話 不幸だー！ー！！ 「当麻、それ俺が言いたい」

主人公 Sid o

春休みが始まる数日前に、青髪が突然言ってきたことから俺のこの世界での物語が始まったのかもしれない。

「なあ、カミヤンもアキヤンもこの後は暇やる？」

ISが展示されてるねん、見にいかなん？」

「たしか、スーパーの近くだったな？ いいぜ、買い物ついでだし」

当麻があっさりと了承した。

「晶はどうするんだ？」

「俺も、買いたい雑誌があるから行くわ」

この時、なぜ断らなかったのかいまさら後悔している。

放課後、俺、当麻、土御門、そして発案者の青髪は目的地に向かった。

先に買い物済まし、ISが展示されてる場所に向かった。

「しっかし、学園都市の外は相変わるの女尊男卑にや」

「俺達は能力差だからな、まるで別世界の出来事だと思っちまうぜ」

「そつやな〜」

「俺達のレベルが低いから評価は外と変わらないだろう？」

「オールスキル「全能力が言うな!!!」」

「でも、A I M拡散力場が検出されないから実質レベル0だぜ」

俺の能力は、世界の数値化。世界のあらゆるものを数値として認識できる。そのため、能力者の自分だけの現実を数値化として認識できる。くわえ、それを再現が出来る演算能力があるから実質、すべての能力が使えるが、レベル5の未元物質や7位が再現が出来ない。それはいいが、なぜかA I M拡散力場が出ないらしくレベル0止まり。

「それでも、チートだろう？」

「同感だにゃ〜」

「おまけに三年連続生徒会長。その上。常に主席。うらやましいわ〜、残りの三年も会長に選ばれるやるな〜」

うちに学園は学園都市でも優秀と言っわけではない、むしろ学園のレベルは下から数えたほうが早い。しかし、学園都市では珍しい中等部と高等部が合わさった学園だ。

「晶のおかげで学食や購買のパンが安くなったから、大助かりだぜどな、」

俺は」

「アキヤンが会長になって、学園の生徒たちの成績も結構あがり、大覇星祭では

5位。教師も信頼しとるからな」

「学食などを低価格するには学園の教師達から信頼させるのが手っ取り早いからな。

俺達の成績も教師のボーナスに影響するし。それに此処だと実際の値段はかなり安いだろうしな」

あるいはアレイスターが俺が暴走しないように命令したかだ。

そんなことを話してるうちにISが展示されてる場所についた。

「なんや、パイロットはおらんのか？ 折角美人がいるかと思ったのに残念や〜」

「「おい！」「」

俺と当麻は同時に声を上げた。

「まさか、ISではなく、パイロットが目的だったのかよ？ ったくそれならついて来なかったのによ」

「まあまあ、青髪の目的はいなかったけど、ISをじっくりとみるにや〜」

ISは女性しか動かせない為、美人がセットでついてくると思ったのだろう。

「それより、帰ろっぜ。目的は果たしたんだから」

当麻はそう言っつてこの場を離れようとしたが、落ちていた空き缶を踏んでバランスを崩す。

そして手に持っている買い物袋が俺の法にとんできた。

受け止めようとしたが、袋から卵パックが飛び出してきた。

「何で!!」

これも、当麻の不幸体質がなせる業なのか？　だが不幸はこの先だった。

卵パックが破れてる、その上何個か俺の頭上に落ちてるし。

俺が冷静に考えてると、腹に激痛が走った。

どうやら、当麻は後ろに倒れこんだせいで、後頭部がおれのはらに激突した。

俺達はISが展示されてるところに転んだ、さらに生卵のオマケつき。

「相変わらず不幸にや〜。それにしてもアキヤンもご愁傷様」



そんな時、

マスターを認識、これより、最適化、並びに・・・最良化、適応化を開始します。

「「「は!?!」「」「」

ISに触れてるのは当麻ではなく俺だった。

こうして俺は唯一ISを動かした男になった。

だったが、その数日後にTVでもう一人現れたがどうでもいい。

ISを動かしてしまっただけから次の日、アレイスターに呼ばれ窓のないビルに向かった。

アレイスターと顔を合わせた。

「やあ、久しぶりだねフランキシヌス」

俺はアレイスターを睨んだ。

「その前で呼ぶな、首を切られたいのか？」

フランキシヌス、それが俺の本名。はるか昔、どこかの世界で世界を守護するシステムとして生まれた、本来なら自我がなく世界の道具として生まれなくてはならなかったが、自我が強く生まれてしまったため、世界の道具として生きる気はなかった。

それからは、覚えてないが平行世界や異世界をわたる知識と力があった為、他の世界に渡った。

俺に最初についていた力は、アナライザーと膨大な魔力。生まれた世界では魔法があったのかすら覚えてないが、異世界に渡る能力がなかった為、生まれた世界ではあったのだろう。アナライザーでそれを手にした感覚は覚えている。

それから、いろんな世界でアナライザーで解析し、再現をした為いろんなスキルを持っている。

だから、それなりの強敵の前でも余裕があるが、この男だけは違う。当麻のように幻想殺しでアナライザーが聞かない人間はいたが、この男にはなぜか効かない。

その為、俺はアレイスター警戒している。 それに俺の本名を知っているのは当麻以外にはあと二人だけだ。

アレイスターがなぜ知っているのかは疑問を持つが、こいつの前から消えたい為、  
呼ばれた理由は聞いた。

「貴様の顔は見たくないからな、さっさと本題に入れ」

「私を理解できる君とはもう少し話しをしたいのだが、仕方あるまい。」

君には外のIS学園に通ってほしいのだが」

「本命はなんだ？ 学園都市の科学技術を表舞台に見せつけるためではないのだろうか？」

外での学園都市の評価はあまり高くはない。 だが実際は30年以上は進んでいる。

開発者以外に解析できないISのコアもその気になれば量産して、世界の経済を思いのままに出来るはずだ。

「世間での評判など、どうでもいい。 問題は魔術師達はISではなくこの学園都市を警戒している」

「つまり、餌になれってか？」

「いや、日本でおきる魔術事件を君に解決してほしい。能力などは好きに使ってもかまわない、必要な物はできるだけそろえよう」

「能力を表舞台に出すのか？」

学園都市の生徒達が使う能力は外での使用は禁止されている。そのせいもあってか、能力の噂はチラホラあるが、都市伝説としか思われていない。

もっとも、それは表舞台だけの話だ。魔術などのオカルトを使う人間は確信しているようだが。

「今年の大覇星祭は世界に映像を流すことになった」

ようは、いずれ知られる。

こいつが隠していたものを世界の表舞台に出すということは何かをたくらんでいる。

それに魔術側もIS開発している企業は警戒するだろう。

本音は断りたいが、外に能力をさらす以上、外の情報もほしい。ISが出てきた所為で各国は内紛は激化した。

そんな世界に学園都市の中身をさらけ出したら、各国はどんな行動をとるか知るのには外にいたほうが都合がいい。

最悪、大戦になりかねない。

学園都市は日本に存在している。他国がそれをよく思わないだろう。

魔術側はIS事件にはまったくかわろうとしない。魔術などは秘匿するのが当たり前だから文句はないが、大戦になったら、どう動く分らない。

「オーケー、だが俺からいくつか条件を出すぞ？」

俺はアレイスターに条件付でこの仕事を引き受けた。

出した条件の一つは俺に対する政府の圧力をどうにかしろだ。

学園都市からの生徒だとはいえ、今の俺の戸籍は日本在籍している。

鬱陶しい圧力がかかる可能性はある。男でISを動かしたんだ、モルモットとして狙われるかも知れないし。

返り討ちにしてもいいが、今の生活が気に入っているから、穏便に済ませたい。

つか、政府関係者とはかかわりたくない。

少なくとも、当麻や土御門の結婚式でやつらの黒歴史を語るまでこの世界にいるつもりだ。

ん？ 青髪はって？

そんなやつは知らん！！ あいつの一言の所為で俺の生活が激変するんだ。

つゝか本音は、当麻が誰と結婚するかが気になる。 だって、あのフラグー級建築男が選んだ女を見てみたいってのが本音だが。

俺はアレイスターの用件の後はある男のマンションに向かった。

「おい、ヒッキーいきてるかー！？」

目的の男の部屋のドアの前で叫んだら、中からは何も反応がない。

しかし、中にいる形跡はある。

「ふむ、ドアが開かず困っているのだろう。助けてやるか」

俺は学園都市のレベル5一位の能力を再現して、ドアを壊そうとした瞬間に

「まてまて!!! テメエはなに人の部屋を壊そうとしてんだ？」

「おお!! ドアが開いた」

「知ッててヤッてるだろう?」

玄関から出てきた一方通行が不機嫌な顔で言ってきた。

「なんのようだ?」

「俺は外のIS学園に通うことになったんだ」

「はア!？」

一方通行は驚いたがすぐに呆れた表情をした。

「そこまで女に飢えていたのかお前?」

「あれ? 名のこの反応? 俺には彼女がいるの知ってるだろう?」

「二股かけてるんだ、まだ足りねえとおもってなあ」

「二股といっても双子だぞ？」

一方通行が言ったよう二股だが、二人とも了承している。

それどころか、俺がどういいう人間かを知ってうえで告白してきた。

それを受けて何が悪い？　すべてを知った上で告白してくれたんだ。

「テメエは何百面相してやがる」

「顔に出てた？」

「ああ、気持ち悪いくらいになア。　テメエはあの二人のことになると

ムキになったりガキ見たなところがあるからなあ」

「うわあ、お前に言われるとショックだわ」

「んなことより、それだけ言いに来たのか？」

「ああ」

「ピキ」

一方通行の顔がヒクヒクと引きつっていく。

「今年の大覇聖祭はテレビ中継を行うらしい」



その一言で、一方通行の雰囲気が変わった。

「外での能力の許可が下りたのか？」

「やっぱり、お前頭の回転が速いわ。お前の予想通り  
統括理事会は外の事件を俺に押し付ける気満々みたいよ」

実際はアレイスターのみだが。

「テメエも物好きだな？」

「だって、あの二人に会いやすくなるし」

「聞いた俺がバカだった。ンで何で俺に報告するんだア？」

「だって、お前、お友達は俺しかいないだろう？  
もし俺がいなくなったら寂しくなると思って？」

「ぶッ殺されてえのか？ アア！！」

「冗談だったのー（一割ほどだけど）」

「なんか言ッたか？」

「いえいえ」

一方通行は俺の能力を知っている為、本気で襲ってこない。

初めて俺の能力を説明したら驚かれたが、本人はすぐに納得したよ  
うだ。

「外で面白い事件（祭り）があつたら連絡しようと思つてな」

「そりゃあ、どうも」

「一年」

「あア？」

「一年したら俺は戻ってくる、その「テメエは本当に殺されて欲し  
いらしいなア」

俺がそれなりの雰囲気と言おうとしたら止められた。 何故だ？

「帰ってきたらからかってやるからと言いたかつたんだが」

「ゼッってー、違つたらろっ？」

「お前の反応は面白いからな」

俺はケラケラと笑う。

「上には俺が言つといたから、気が向いたら外に来いよ」

「気が向いたらな」

俺は用件を言っただけで自分のマンションに戻った。

初めて一方通行と出会ったのは夜のコンビニだった。

不良に絡まれて、そいつらを吹き飛ばした一方通行が観察していた俺に気付いてこう言った。

「テメエもこいつらの仲間か？」

と言っただけで、問答無用で襲ってきたが、ベクトル操作を再現して、一方通行（自分）の攻撃を止めた俺に興味を示した。

それから、俺の能力のことを話したり、趣味を話したりした。

その後、何度が道端であつたら挨拶するぐらいの関係だったが、一方通行は思いのほかからかいがあつて今の関係だ。

一方通行との今までのやり取りを思い出し、よく生きていたなあと思つながら部屋に戻った。

と、IS学園の校門前で現実逃避と言つた名の過去を振り返ったが、現実はかわらない。

俺は覚悟をあまり決めないで校門をくぐった。



0話 不幸だー！ー！！ 「当麻、それ俺が言いたい」 (後書き)

主人公設定

あらゆる世界を旅をした不老の主人公

名前 本名 フランキシヌス

学園都市とISがある世界では 神代 晶

偽名を使ったのはこれがはじめて。

年は少なくとも4桁

親しいものにはフランと呼んでくれと言う。

上条当麻は本名を知っているが晶と呼びなれてるからフランとは呼ばない。

彼女はとある18禁ゲームの双子キャラ

そのキャラの声優の名前は成瀬未亜と風音

此処まで言っ分ける人は何人いるか……。

作者のお気に入りキャラなので。

初期能力はアナライザーと倉庫と見た目の年の操作 (5歳〜80歳)

アナライザーは本編で書いたとおり、

倉庫は大きさ、量なども関係なく何でも入れる異空間。

アナライザーは攻略本みたいなもので各作品で得た、魔法などのスキルは再現できるだけの魔力と頭脳があったから。

旅をした世界は (ゲーム名や作品名)

および手に入れた技術やスキル

サガフロンティア？（技や術、クヴェルや他のアクセサリーと酒とギユスターヴの剣）

ティルオブヴェスペリア（術技とプラスティアと酒）

鋼の錬金術師（錬金術とグリードとスロウスの賢者の石（体内に）と酒）

ワンピース（酒）

サモンナイト3（召喚術と王の書とサモンナイト石と酒）

機動戦士ガンダム 逆襲のシャア（デルタプラス（試作機）

Hi - ガンダム（技術者を脅して）

銀魂（酒、ボケ、相手をからかう能力）

ゼノサーガ（酒、E、Sアシエル、仮想現実<sup>エンセフェロン</sup>体験機

機動戦士ガンダム00（GNドライブ）とESアシエルやHi -

ガンダムにGNを装着させた

火星（エヴォリミット）（パッチを持っているが装着してない）

ネギま！（魔法と別荘と酒）

サガフロンティア2前に他にもあるが、本人は覚えていない。

好きなもの 酒 技術の再現 突然のイレギュラー

彼女達 当麻達とバカ騒ぎ 相手をからかう事

嫌いなものは 退屈 束縛 命令

設定

現在は気まぐれ。

世界を監視するためのシステムとして生まれたが自我が強くなるその任は放棄して世界を回った。

その世界は魔法が普通に存在する世界だった為、アナライザーで解析して、ほとんどの魔法を習得。

何の目的も持たためま異世界を渡る術で世界を渡るが人間にかかわるうとしなかったが、

サガフロンティア2のギユスーヴ13世の境遇や死に様に影響を受け自分の思いを貫く意志を決意した。

それからは自由奔放に世界を回る趣味を得る。

ロジャーや白ひげとスメラギさんやエヴァとは酒飲み仲間。

各作品で原作をそれなりにかかわって原作ブレイクみたいなことをしているが、本人は転生者でない。

各作品の酒を大量に買占め、倉庫に保管してある。

本編世界の始まりは、いろんな人に一般人と少しずれてるといわれたが

紅き翼のアルに小学校に通えばとそそのかされ、

本編では子供サイズの姿となり小学校に入学した。

小学校では一夏達と会っているが本人はまったく覚えていない。

小六になる直前に失踪、飽きて旅に出る。

その途中で彼双子出会い恋人に。

そしてアナライザーの効かない当麻と出会い、一緒に学園としに入学。

小学校では天才やら四年生から生徒会長やっていたことが知れ渡って、

学園入学即生徒会に入れられたが本人は面白うそうだから承諾して今に至る。

本来は色恋沙汰には無関心だったがエヴァに告白され、断ったときのエヴァの表情に驚いてすぐに冗談で済ましたが、本編の世界ではそのことを後悔している。

そのことで好意を向けてくれた人の悲しい顔を見たくないから好意を向けてくれ、言葉ではつきりと告白してきた相手には受け入れる。その為、恋人は増える予定？

最初の恋人の双子はそれを承知で付き合っている。

本人曰く

ぶっちゃければ人間の常識に従う気はない。

現在ではエヴァに謝りたいと思っているが、一度渡った世界には渡らない制約がある為あきらめている。

戦闘では楽しむ為にスキルは制限して戦うが、

相手の驚く顔を見たいが為に相手に予測していないスキルを使う癖がある。

魔術or魔法と超能力の同時使用はできるが、使った反動で体内が土御門のようになるが、回路を魔と超能力の二種類の使い分けで回避しているが、

両方とも切り替えず行ったら吐血やら内臓に反動がくる。

サガフロ2とTOVの術は魔にあたる。

とまあめちゃくちゃな設定です。

よければ暇つぶしにでも見ていただければうれしいです。



1話 IS学園、そしてかつてのクラスメイトとの再開。

「いや、俺おぼえて

校門をくぐった後、一人の女性が待っていた。

「お前が神代晶だな？」

「違います。俺は道に迷っただけの人です」

晶は即答で返し、Uターンし校門を出ようとした。

が、

「なぜ逃げる？」

「ノリで？」

「聞き返すな。でお前が神代晶だな？」

「そついうことにしといてください。あなたは？」

「織斑千冬、お前の担任だ。それにしても随分とふざけた奴が入学してきたものだな」

「ノリがいい奴だと言ってくださいよ千冬ちゃん。人生楽しまないと損ですよ？」

「二度は言わないぞ。私のことは織斑先生と呼べ」

「頭の隅にでも覚えときますよ千冬ちゃん」

そう言った瞬間、織斑先生はどこからか出席簿を取り出し、晶を叩こうとするが、晶は難なく避ける。

「危ないよ千冬ちゃん（どっからだしたんだ？　もしかして俺の倉庫と同じかな？）」

「避けるな！！」

「え、避けられるのに受けるなんてMだけですよ？　俺Mじゃないし。」

千冬ちゃんはそっち系が好みなの？　生徒を性癖に目覚めさせるのはどうかと

「はあ。　せめて学園では先生と呼んでくれ」

あきらめたように織斑先生はため息をこぼした。

「すみません。　前の学園からの癖で、教師は全員ちゃん付けで読んでるんで。　無論男子教諭も含めますが」

「教室に向かうぞ」

現実から目を背けたいのか何事もなかったかのように案内される。

(キツイ)

一夏の最初の感想これだった。

(マジで、女だけじゃないか。 幕に話しかけてもそっけないしよ。俺やっていけるかな)

と心配していたら、

「一夏くん？織斑一夏くん？」

「は、はいっ!?!」

「あ、あのっ、お、大声出しちゃってごめんなさいっ！自己紹介してくれるかな？だ、ダメかな？」

俺は立ち上がり。

「お、織斑一夏です。よろしく願いします・・・」

咄嗟だったので言えたのはこれだけだったが、視線が痛い。

「・・・・・・・・・・・・・・・・以上です」

と言ったら、全員ずっこけた。

ガン！！！！

「ぐうつ！？」

「げえっ！！関羽！？」

こちらも咄嗟に後ろを見たときでた感想だったが。

スパアン！！

また一夏が叩かれた。・・・って！？

「ぐふぁ・・・」

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者。」

俺がうずくまっているうを無視し

「あ、織斑先生。もう会議はもう終わられたんですか？」

「ああ。山田君、クラスの挨拶を押し付けてすまなかつたな。」

先生同士で会話をする千冬姉。

「諸君！私が担任の織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言う事はよく聞き、よく理解しろ。出来ないものには出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五歳を十六歳までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うこと

は聞け。いいな？」

・・・なんとという暴力宣言。千冬姉それはいくらなんでも思っ  
ていたら。

だがしかし、教室に響いたのは困惑の声ではなく、

『きゃああああああああああっ！！！！！！』

黄色い歓声だった・・・

「千冬様！千冬様よ！！」

「ずっとファンでした！！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から！！」

いや別に南北北海道でもいいけどさ・・・

「あの千冬様にご指導いただけるとはなんて嬉しいです！！」

「私、お姉様のためなら死ねます！！」

・・・物騒なこと言うなよ・・・

きゃいきゃいと騒ぐ女子たちを、千冬姉はかなりうつつしそつな

顔で見る。

「・・・毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

「・・・で？挨拶も満足に出来んのか？お前は・・・」

「織斑先生と呼べ。」

「・・・はい、織斑先生・・・」

このやり取りで、俺達が姉弟だと分かって少し騒ぎ出すが、千冬姉の一言でみんな黙りだす。

「神代、入って自己紹介しろ」

ドアが開き出てきたのは一人の男子生徒だった。

（あれって、晶か！？）

小学校のときはいつも同じクラスだったが、あまり話したことがない。

教師をちゃん付けでよんでふざけているのに、成績と運動神経は常に一番だった。

俺の目標であった人物の一人だ。

「えーと……、俺が通ってた学園の帰り道にあるスーパーは水曜日が卵が1パックが58円で」

千冬姉が出席簿で叩こうとしたが、晶は避けた!?

「避けるな!」

「いや、避けるのに避けないのどうかと思うですよ千冬ちゃん。つーか何で叩こうとしたの?」

( )( )(千冬ちゃん!?) ( )( )

(相変わらず教師はちゃん付けて呼ぶんだな)

「先生と呼べ。それとお前の自己紹介だ。お前が通っているスーパーの紹介じゃない」

「……あゝあ。そうだった。……………」

それから無言になり。

「なんでしたっけ?」

千冬姉も含んだ全員がずっこけた。

「貴様はボケているのか?」

千冬姉はとんでもない精神力で立ち上がり晶に質問をした。

「いや、最初の掴みが重要かと思ひまして。では改め かみしろあきらです。」

えーと、趣味はいろいろ。好きなものはいろいろ。かな？」

( )( )( ) (わかったのは名前だけなんだが)( )( )( )

「えーと・・・」

晶が山田先生を見て教師かどうか質問をした。

「私は副担任の山田真耶です」

「真耶ちゃん、俺の席はどこ？」

「真耶ちゃん！？」

ちゃんと呼ばれて、あわてる山田先生だが。

「いい加減に、教師をちゃんと呼ぶのはやめる神代」

「千冬姉」

Bannon!!



「織斑先生と呼べ。」

「……はい、織斑先生……」

「で、なんだ？」

晶はどうやってこの攻撃を避けたんだ？

「晶は小学校のころから教師をちゃん付けで呼んでいるから直らないかと……。」

それに当時教師達もがんばって先生と呼ばせようとしたが、結局は諦めたみたいでさあ」

「はーあ、とりあえず今は保留しよう」

（千冬姉が諦めた！？ 保留と言っているても雰囲気と表情諦めてる。あるいはちゃん付けで呼ばれてうれしいのか？）

と考えていたら、睨まれた。

それから休み時間。

空気が重いので、箒に晶に挨拶しに行こうかと誘ったら、あっさり

と了承された。

やっぱ、箒も晶のことを好いていたんだとおもいだした。

小学校のころは付き合うなんてことは殆どないだろうし、それに晶は6年に上がる直前に消息不明となったし。

俺達は晶の前までいった。

「や、やあ、ひさしぶり……」

我ながら情けない挨拶だと思ったが。

「誰だお前等？」

やっぱり覚えてない！？ 箒は3回程度しか会話したことないから、本人はあまりシヨックを受けてないが

俺は晶が消息を絶つ直前によく話しかけるようになったから、覚えてると思ったが。

「やっぱり、忘れてるな。　　はは。　　俺は織斑一夏、こっちの子は篠ノ之箒、俺達は一応晶と小学校のころは同じクラスだったんだぜ」

「そうなん？　悪い小学校のちの記憶は薄いんだ。俺の名前は言わなくてもいいみたいだな」

「ああ……そのよく……見ていたし……」

「は？」

箒、それはストーカー発言だぞ！！

「そ、それより、お前はなんでいきなりなくなったんだ？ 鈴なんてシヨックで一週間も学校の来なかつたんだぞ？」

「鈴って誰？」

「ああ、えーとあの子だよ、ファン・リンヤン鳳鈴音、中国人の女の子」

「……………ああ、そういやいたな。 じゃあお前はあの子と一緒にいた織原か？」

「織斑だ！！」

なんか、箒から黒いオーラ見えるんだが気のせいだな。

「ああ、そうだった。織斑、おりむら……。よし一応記憶しておこう」

「いや、それよりなんでいきなりなくなったんだ？」

箒が雰囲気怖かったので、もう一度質問をしたら。

「小学校に飽きて、日本を徒歩で回っていただけだ」

「は！？ 学校にも家に連絡せず？」

「ああ。 家と言っても俺は一人しかいないし」

うっ。なんか聞いちゃいけない話みたいだ。

「まあ、学校には手続きが必要だとは知らなくてな。家の物を片付けて旅に出ただけだ」

「おいおい、そ」一夏・・・」

箒が俺の方に手を置いた。

「すこ〜〜し、その鈴と言うこの事が聞きたいのだが？」

「は、はい・・・」

「エーーーーー！！めっちゃこえええので箒の指示に従った。

「そ、その昴、また後で話できるか？」

「ああ、いいぞ」

この後、俺は鈴のことを話した。特に今は中国にいることを強く言っ  
つて何とか開放された。

何とかなつたと安堵したら、次の授業でさらなる危険が待っていた。

すらすらと教科書を読んでいく山田先生。

( まずい、全く分からん……。晶の方はどうだろう )

仲間を探すため、晶を見ようとしたら。

「 織斑くん、何か分からないところがありますか? 」

「 っへ! ? 」

いきなりの事で変な返事をしてしまったが。それ以上に全く分からない事がやばいと思った。

「 えつと…… 」

「 分からないところがあったら聞いてくださいね。なにせ私は先生なんですから 」

そ、それなら本当のことを言ったほうが良いな。と思って俺は。

「 先生! 」

「 はいっ、織斑くん! 」

「ほとんど、いえ全部分かりません」

「え……。ぜ、全部ですか……？」

山田先生の顔が困り顔なので、晶に質問をした。

「晶は分かるのか？」

仲間よとおもって質問をしたら。

「ああ、一応渡された本などは暗記してきた」

(この世には神も仏もないのか……!!!!)

「……織斑入学前の参考書は読んだのか？」

うそを言っても千冬姉には見破られるから俺は真実を語った。

「古いタウンペ ジかと間違えて捨てました」

バゴッ

「必読と書いてあっただろうが馬鹿者。あとで再発行してやるから一週間で覚える。いいな」

「一週間はちょっと・・・」

「覚える」

「は・・・はい」

「はあ、織斑、これ」

晶が折れに自分の参考書を渡してきた。

「いいのか？」

「さっき言ったように暗記してきたら問題はない」

「再発行は必要ないようだな」

「すみません・・・」

「最初に覚えたほうがいいところには線を引いてあるから、そこから覚えていけば楽だぞ」

神様~~~~。

「ほう、では織斑の面倒を見てやってくれ」

「ういゝす。千冬ちゃん」

最後の一言で、千冬姉は手刀を決めようとするが避けられた。

「避けるな!!」

「無茶言わんでください、大佐」

このやり取りがこのクラスの名物になるんだなあと思いつつながら授業が終わった。

休み時間に晶の参考書に引いてある線から覚えようと参考書を読んでいたら、

金髪的女子生徒が晶に話しかけてた。

「ちよつと、よろしくて?」

が、晶は反応もせず本を読んでいる。

何の本を読んでいるだろうと思っていたら。

「ちよつと。私を無視するなんていい度胸してますわね? あなたは私が誰なのかお分かりかしら?」



しかし、晶は無反応。

「いい加減にこつちを向きなさい無礼者!！」

しかし、まだ無反応。

(ある意味すごいなあ。 ああも大声で呼ばれるのに眉一つ動かさないなんて)

俺は晶に知らせようとすと立ち上がり、晶の目の前にたった。

「ん？織斑に誰だ？ (音を反射していたな。この癖やめたほうがいいか)」

「今頃、返事ですか？ わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるのではないのかしら？」

「ない、以上」

晶はズツパリと女子生徒の言葉を両断し、本を読むのを再開した。

女子生徒は顔に青筋を立てている。

(相変わらず変わらないな。 自分のペースを崩さないのは)

感心しながら晶が読んでいる本に目を向けると全く見たことがない

文字だった。

「なあ、晶……、それって何の本だ？」

「翻訳してないギリシャ神話の本だよ。取り寄せるのに時間がかかったがそれなりの価値があるな」

「ギ……ギリシャ語かあ……分かるのか？」

「ああ、この手の本は好きだから大抵の言葉は覚えたぞ。今は古代語つを覚え始めてるな」

「そ……そっか（それならあの参考書は楽勝か）」

「ちょっと、私を無視しないで下さるかしら」

「誰だ？」

ああ、なんかループしてない？

「ほ、ほらこの子がお前に用事があるみたいだからさ、聞くだけでも」

「いえ、あなたにもあります」

「オ、オレも!？」

「とりあえず誰だ？」

「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試首席のこのわたくしを！？」

「セトノウチ・オットセイ？ 知らんな」

からかつてるよ！ いま一瞬間がにやけたぞ。

「セシリア・オルコットですわ！！ 貴方ふざけますの？」

「んにゃ、いったてはじめ？」

いや、そこは真面目！！ しかも疑問系。

「くっ……」

オルコットさんは何とか切れないように落ち着こうとしているみたいだが……。

「ISについては泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくつてよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートなのですから」

「ふん、オレも倒したが、きっかり7分で」

「へ！？」

「入試つてあれか？IS動かして戦うつてやつ？」

俺が質問したら。

「それしかないわな」

「だったら、俺も倒したぞ」

「は……？わ、わたくしだけと聞きましたか？」

「女子ではってオチじゃないのか？」

と俺が言ったら晶は爆弾を投げた。

「んにゃ、気をつかわれただけじゃないのか？ だって自称エリートだし。」

「真実はいつも残酷だからな」

「なっなっ……」

それが事実ならひどい話だぞ？ 俺は空気を変えるべく話しをそらした。

「そ、それにしても、晶は運がいいなキツチリ7分で勝つなんて」

「いや、計算したぞ。 じゃないと面白くないからな」

オルコットさんの顔がやばい

（お前は何かソリンスタンドに爆弾を投げてるんだ！！）

と心の中で叫んでいると。

(爆弾ではない、核弾頭だ)

(俺の心を読むな——！！ 空気を読んでくれ——！！)

(何を言う。空気を讀んだ結果だ)

又オルコットさんを無視する形になった為、まずいと思った瞬間にチャイムがなった。

「……っ！また後で来ますわ！逃げないことね！よくって!?!」

晶はケラケラ笑いながら

「こりゃあ、ちょっとは暇つぶしになるな。数日間だけだと思っけど」

といった。

俺は晶には口喧嘩では絶対に勝てないと確信した。

## 2話 クラス代表は誰？

### 三時間目

「それではこの時間は実戦で使われる各種装備の特性について説明するが、

その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないとな

「クラス代表とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席・・・まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間の変更できないからそのつもりで」

「はいつ。織斑くんを推薦します！」

「はあ！　？俺っ!？」

「私は神代君を推薦します」

「.....」

「自薦他薦は問わない。他にないなら、この二人で投票を行いクラス代表、副クラス代表をやってもらうことになるぞ」

「ちょっと待ってくれ、千冬姉」

スパアン！！

「織斑先生だ。それに言ったはずだ自薦他薦は問わないと。他薦された者に拒否権などない。選ばれた以上は覚悟をしろ」

「うう、って言うか晶も何か言ってくれ！！ 晶だって嫌だろう？」

一夏が晶に援護をしてもらおうと問いかけたが。

「別に、慣れてるし。伊達に一年から生徒会長をやってないんだよ。」

それより、千冬ちゃん」

千冬が晶に出席簿で叩こうとしたが避けられる。

「チツ！ でなんだ神代？」

「クラス長になったら抜き打ちテストとか出来る？ クラスの成績を上げたいし」

「そういう理由ならかまわんど。生徒みずから成績を向上するならうれしい限りだ」

ニヤリと晶が微笑むが、晶以外の生徒は冷や汗をかいている。

「で、お前が代表になったら何をするつもりだ？」

「そうですね、まず一週間最低一回は抜き打ちテストをします」

言い方を変えれば毎日と言っているが千冬意外には気付いていない。  
が

週に一回必ず抜き打つテストは嫌なのかショックをうける。

「ほっ」

「で、期末試験でクラスの平均点がある一定の点数を下回ったら、  
連帯責任でクラス全員で夏休みは補修」

「「「「「え〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜！！！！！！！！！！」」」」」

「ふむ、私から学園長にいつておこっ」

「ちょっと待ってくれ晶。一定ってどれぐらいの点数だ？」

「そうだな、きりがいいところで85点」

笑顔で答える晶に一夏は。

「85って!?! 無理だろう?」

「無理じゃないぞ。俺は全科目満点だし。やれば出来るんだ。  
夏休みがほしければ普通にいい成績をとればいいだろう?」

「その通りだ。私も神代を推薦するな」



「鬼か！？ 一般人をお前と一緒にするな」

「そうか？ 俺が通っていた学園都市の中で中学なのに大学並みの授業を受けてる場所もあったぞ」

晶が言っているのは常盤台中学。

常盤台は「義務教育終了時までには世界で通用する人材を育てること」を目標とした英才教育が施されている為大学のカリキュラムを生徒にやらせている。

晶を推薦した子は後悔していますと表情に出ている。

そんな時

「待つてください！ 納得いきませんわ！」

晶の案に一人だけ無反応だった生徒 セシリアが声を上げた。

「男がクラス代表だなんて、いい恥さらしですわ！ このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？ 物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！ わたくしはこのような島国まで訪れてサーカスをする気は毛頭ありませんわ！」

どうやら、自分が推薦されなかったことで晶の案を聞いていなかった

た。

「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

その言葉に一夏も声を上げた。

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「なっ……！？」

「貴方は口の聞き方を考えるべきですわっ！貴方達、わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

「先に侮辱したのはそっちだろう？ イギリス人は記憶力はないみたいだな」

「決闘ですわ！」

「千冬ちゃん」

「何だ？」

「空が青いね」

「そうだな」

「みんな死ねばいいのに」

「そうだなって、お前は何恐ろしいことを言っている？」

「いや、人が話している途中で断りもせず会話を中断したんだし」

二人だけで会話をする晶と千冬。

二人がヒートアップしてる中、クラスの生徒たちは内心で二人を応援している。

このまま、晶がクラス代表になる案が消える可能性が出てきたからだ。

だが、セシリアはみんなの空気を読まず。

「あなたも先ほどわたくしを無視した事を後悔させますわ！！」

この瞬間、晶、一夏、篝以外の生徒は

(((((空気をよんでよー！！！！！！！！))))))

とシンクロしていた。

「それより、ハンデはどれぐらいだ？」

と。晶の存在を無視して、セシリアに問う一夏。

「そうですね、あなた方二人でかかってくれてもよくなってよ」

「そっちがハンデ      スパアン！！      グオっ、  
何するんだよ？」

「自分の未熟さを知らずえらそうなことを言っな」

「うっ！」

頭に血が上って強気に出ていたことを自覚した一夏。

「オルコット、織斑の戯言は兎も角。後で余計なことを言われたくないからいっておくが神代を相手にするならにハンデをもらえ」

セシリア以外の生徒たちは千冬の言葉が神の声に聞こえたが



「そこ」

晶はの反応は薄かった。

晶の反応が薄いのも無理はない話だ。

サンダイルでは文字通りの化け物が普通に存在する、

人造人間ホムンクルスとも戦っている、加え海賊次代の世界では、

海賊王になったロジャーと酒のことで喧嘩をして、とある島は半壊させた。

その世界では見た目が人間なのに実力は化け物を超えた連中がごろごろいた。

くわえて、今いる世界の学園とにいるレベル5の一位一方通行を知っているからかう奴は晶以外存在しない。

「本人はあまり自覚がないからその話しは追いとくが、織斑とオルコットが束にかかっても勝てないと思うぞ」

一夏は千冬の言葉と態度に驚いている、いつも厳しい姉が他人を此処まで絶賛するのは珍しいからだ。

「じゃあ、ハンデは俺の武器は一種類だけで、最初にセシコットと遊んで、その後で勝った方が織斑と遊べばいいんじゃない？」

「名前を略ないですかい」

セシリアも千冬の言葉を受け入れたのか、あまり強く出ていない。

てつきり、なめないでくさいとか言つと思つたが」と殆どの生徒が思っている。

「オルコットの勝負は明日でいいな。織斑は一週間後に専用機がとどくから一週間後に勝負しろ」

男子で！Sを動かせるから専用機を用意されるんだろうと今の言葉で思つたため、一人の生徒が千冬に質問した。

「神代君も専用機もちなんですか？」

専用機もちなら自分達の夏休みが終わるだろうと恐る恐る質問をしたが、意外な言葉が返ってきた。

「いや、神代は専用機を持っていない。実際は周りも専用機を進めたが、神代本人が拒んだ」

「え！？」

千冬の言葉にまた生徒達が驚いた。この学園に入った以上、殆どの生徒は専用機を持ちたいと思つている為だ。

「なんで、神代君は断つたの？」

「俺がこの学園に入学してやる条件の一つは一年間だけ通うと条件出したからな、一年しかいない奴に専用機は無駄だろう？」

（実際は専用機持ちはいつでもISが展開できるため、面倒ごとが多くなると思つて断つただけだが）

晶の言葉に一番驚いたのが一夏だった。

「えー！一年だけ通うのかよ？卒業まで通ってくれよ？」

一夏とつては死刑宣告なのだろう、晶がいなくなった後の残りの二年間は男一人なのだから。

「断るよ。俺は俺のやりたいようにするだけだ。政府が反発するなら俺もそれなりな行動を取らせてもらっぜ」

と、不気味な笑みを浮かべた晶に千冬も含め、全員が冷や汗をかいた。

晶はただの学生だ、政府が圧力をかけたら学生では無力だろうと常識だと思ってしまうが、

晶ならとんでもないことをしでかすかもしれないと、本能が告げた。

（しつつかし、アレイスターの奴は日本政府に圧力をかけられる力があることが分かっただけでも収穫か）

（わたくし、とんでもない人を相手することになったの？）

（どうにか、晶を卒業式まで通ってもらえるよう説得するしかない。折角チャンスが来たんだ）

（晶の相手だけじゃなく、晶を卒業まで通ってもらっよう説得しないと俺の胃が持たないぞ）



とそれぞれの考える、三人。

授業も終わり生徒達は寮に帰っていくなか、男子生徒である晶と一夏は山田先生に部屋の鍵を受け取って、お互いの部屋の前までやってきた。

その途中で晶は一夏に特訓はやっぱり必要ないのかと聞かれたら、

「あほか？ 疲れた後で部屋の片付けなんてやってられるかよ、荷物を片付けるのが先だ」

と、いって一夏も納得した。

二人とも鍵を開けてそれぞれの部屋に入った

「人の気配はしないな、この広さだと二人部屋だろう。さすがに女子と一緒にさせないと思うが、この広さを一人でつかってってくれてか？ 気前がいいな」

晶は独り言を言っていると隣の部屋から一夏の叫び声が聞こえた。

別の鍵をもらったため、一人部屋だと思っていたが

『第！！ 俺が悪かったからあけてくれ』

「……………そうでもないみたいだな」

晶は隣の様子を見たら、ドアにすがりついた情けない一夏の姿があった。

「なにやってるんだ織斑？」

「他の生徒に迷惑だろう、あ……晶!？」

ドアが開き、一夏に注意するバスタオル姿の箒がいた。

「篠ノ之、バスタオルを巻いた綺麗な体を拝めた俺は目の保養になつてラッキーだと叫びたいが、男二人の前でその姿はないだろ？」

「あ……あ、すすまん」

ボタンと勢いよくドアが閉まる。

「晶、もう少し言い方があるだろう？」

一夏は箒のやり取りをすっかり忘れて、晶に助言をするが。

「なに言ってるんだ？　綺麗な体だったろう？」

ガタン

と、部屋の奥で音した。

「それを堂々と言うか？」

「織斑、お前は男色趣味？」

「俺はノーマルだ!!」

「お前、この学園で女子やその体に興味がないという態度を貫いたら、最後は男色？」と聞かれるぞ。

終いには何を言ってもホモだと勘違いされるぞ。俺はそれがやだから素直に言っただけだ。

男には絶対に恋愛感情は浮かばんからな」

「で、でも。お前のルームメイトは困るんじゃないのか？それに何かあったら大問題だろ？」

「興味があるといっても手を出さないようにすればいいだろ？」

「でも、さすがにジロジロみるのはやばいだろう!!」

「いや、誰もそこまで言っていないぞ」

「うっ」

「ふむ、それに俺は一人だぞ「俺もそこに入っただいいか？」 却下だ！！」

「何で！？」

「そのホモ発言をやめろ。少なくとも女の子や女の子の体に興味がある思春期の男子学生だと、周りに認識されるまで駄目だ」

「なんだよそれ！？ どうすればいいんだよ？」

「エロ本持つてるところでも確認されればいいんじゃないかねえ」

「俺の灰色の学園生活が始まるよそれ！！ お前はどつなんだよ？」

何とか反撃に出た一夏だが

「この学園はかわいい子が多いから必要ない俺には。 それとも何？ トップモデル並以下には用はないと？」

「ち、ちがう」

あっさりとカウンターを食らう。 そりゃあ、トップモデルが目の前にいれば目がいくだろうが、いないのにそんな話を聞かされた女子は嫌な気分になるだろう。

なんせお前は興味に値しないといってるようなものだし。

「なら、着替えでも覗くんだな。篠ノ之に伝えといて唐突とはいえ綺麗な体を勝手に見る形になったと悪かったと。んじゃあ」

「待ってくれ」

ガタンとドアが閉まる。

「あいつに口で勝てねえよ。ん？」

「いい加減に入れ変態」

「俺が！？ 晶だろう！？」

何とか部屋に入れてもらった一夏は箒と気まずい雰囲気になっていた為、晶の伝言を伝えようとしたが、箒は聞いていたと顔を真っ赤にして返した。

一夏と箒は疲れたので荷物を片付けた後はすぐに寝始めた。

晶は一夏の参考書を覚えさせるよう千冬に頼まれた為、参考書より分かりやすい資料作成をしていた。

（ ）（ ）何か忘れてると思ったが晩飯食べるの忘れてた（ ）（ ）

三人は同時に思い出したが、一夏は参考書を覚えることを思いださなかったのはいたしか仕方ない話し何かは別の話。

翌日

「ふあゝあ」

あくびをしながら朝食を取っていた晶の前に一夏と篤がやってきた。

「おはよう、晶。寝不足か？ 晶はオルコットとの勝負だろう？」

起床した瞬間に考えて始まらないと思い吹っ切れた一夏は普通に会話を始めた。

「あゝおはよう。篠ノ之もおはよう」

「お、おはよう／＼／＼」

「それと、昨日は悪かったな。偶然とはいえ見る形になった」

「い、いや、あれはその、私が迂闊だったただけだ。お前は悪くない／＼／」

「ん、そう言ってもらえると気が楽になる。偶然と入っても見たことには変わりはないしって、食堂でする話じゃないか」

「そ、そうだな。それより」

「ん？」

「その篠ノ之ではなく、名前で読んでくれるとその……」

「名前？ いいけどじゃあ俺も晶でいいぞ」

「ああ、ありがとう」

「きにするな、織斑は晶とはじめから呼んでいるし」

「俺の方も一夏でいいぞ晶」

「いたのか？」

「ひでえ！？」

「冗談だ、それと俺に一太刀浴びせたら読んでやる」

「なんだよそれ？」

「誰のせいで眠いと思ってるんだ？」

その発言に周りが少し疑問に思ったが。

「俺は昨日はちゃんと静かに寝てたぞ！！」

晶にエロ本をもつなり着替えを覗くなりの変態行為を進められた為、何もなかったと言う一夏だが、

その態度はあつたが何も何もなかったと言いつてしてるようだった。

「なっ!?!? 一夏誤解を生むような態度をとるな。 本当だぞ晶。」

「一夏とは何もなかった!?!」

「ああ、それは分かつてる、一夏の所為だといったのはこれのだ」

晶は資料を一夏に手渡した。

「なんだこれ?」

「はあ、お前千冬ちゃんに参考書を一週間で覚えろといわれただろ?」

「あっ!」

すっかり忘れてましたといわんばかりのリアクションをとった一夏。

「これは参考書より分かりやすく俺が作ったもんだ。 おかげで寝たのは一時間前だ」

もともと生徒会長として面倒見がいい晶は一夏が理解しやすいように資料を作った。

「うっ、そんなことしてるとは思わず熟睡して悪かった」

「んなことより、一週間で覚えないとまずいだろ。 それに一週間後は今日勝ったほうと勝負だし」



「やることが多いぞ」

何か絶望的な状況のごとく気が滅入った一夏に晶は

「そのノートを読みながら授業を受ければあらかた覚えられるぞ。それに勝負のほうもどっちが勝っても戦闘が見れるんだ、何も知らないで勝負するよりらくだろ？俺は負けるきは全くないがな」

「それはそうだが・・・」

「そんなことよりも、大丈夫なのか？かなり眠そうだが？」

「ああ、数分仮眠とれば今日は乗り切れるだろう、だから少し寝る」

机の上で寝始めた晶。

「一夏、ここまでしてもらったんだぞ。確実に覚えろ」

「ハイ」

食堂でのろのろしている生徒がいるか確かめるため、食堂に来た冬は堂々と寝てる晶を見つけた。

「入学早々これとは・・・」

「まっってくれ千冬姉」

スパン

「織斑先生だ」

「うう、お織斑先生、晶はこれを作るのに寝る時間を削ったんです」  
叩かれた頭を抑えながら晶を弁護する一夏に渡された資料見た千冬  
はため息をつきながら

「はあ、ここまでして面倒を見るとは言ってないが。とりあえず神  
代を起して、教室に向かえ」

「分かりました」

「わかった」

一夏と晶はしびしび晶を起こし教室に向かった。

### 3話 クラス代表決定 その一

一夏 Side

授業中の晶は眠気があることを感じさせないような表情で授業を受けていた。

本人は数分仮眠を取れば大丈夫といていたのは本当だった。

俺は晶からもらった資料と参考書を開き授業を受けているが、かなり分かりやすい。

参考書の専門用語は晶のくれたノートには分かりやすく解説されていた。

千冬姉が俺に質問をし答えたら、千冬姉自身が驚いたし。

頼む、少しは俺を信じてくれといたいが、晶の資料のおかげだ。

(俺、当分晶に頭上らないな)

俺は苦笑しながらISの授業を乗り切った。

Side out

授業も終わり、生徒達は晶とセシリアの勝負を観戦するため、アリーナに向かった。

晶は打鉄を展開し、ピットに向かおうとしたが、一夏がなぜ専用機を受とらなかつたと質問をした。

一年間だけ通うといっても専用機を持つてはいけない規則はない、周りが何かをいっても千冬に勝った晶なら普通は納得するだろう。

だから、一夏は何か別の理由があるんだと思つて質問したら。

「まあ、お前らならいいか、学園都市の研究者たちはあまりISに興味がないんだが、例外がいたんだがそいつが造ろうとしたISのスペックを見て断つたんだよ」

「そんなにひどい出来だったのか？」

「逆だ、性能が馬鹿げてるんだよ。そんなものを持つと厄介ことも来そうだから断つた。」

（一機だけで大国を殲滅できるスペックだった。

HSB-02、学園都市が開発した超音速ステルス爆撃機の性能をISに再現した上に、その兵器の地殻破断アースクレイドを装備してるんだ。馬鹿げてるしか言いようがない。）

「そうだったんだ」

一夏は晶が呆れた顔で顔でそのISのことを言っていたのですぐに信じた。

「さてと、いつて来るわ」

「勝てよ」

「日本男児がどういうものか教えてやれ」

「あ、ああ。（日本人どころか、この世界の住人じゃないが）」

晶がアリーナ・ステージに向かった後、一夏と箒は千冬が観戦して  
る部屋に向かった。

「それにしても、織斑君は頭がいいんですね。一晩でISの授業  
についてきてましたね」

山田先生が千冬の一夏の事をほめていると

「あれは、神代が作ったノートのお陰ですよ。私も見たが教師のお  
株を奪えかねない代物だ」

「そ、そうなんですか!？」

「生徒会長をやっていたからなのか面倒見がいいんでしょう」

「でも、すごいですね一年から生徒会長なんて」

二人がそんな話しをしていると一夏達は入ってきた。

「何を話してるんだ、千冬姉」

「参考書をタウンペ　ジと間違っ捨てたバカでもわかるノートを  
作った奴の話しだ」

「織斑先生、さすがにそんな言い方は・・・」

「ぐ・・・、俺が悪いですからいいです。それより晶達の戦いは始  
まってるし」

映像ではオルコットのISブルー・ティアーズが先に仕掛けた。

授業で千冬に勝った学生という事でスターライトmk?どBTで一  
気に勝負かけてきたが。

晶はそれをなんなく避ける。

「晶の奴、なんで逃げてばっかなんだ？」

晶の打鉄の装備は晶がなぜ持っていたクナイ10本しか装備してい  
ない。

なぜクナイなのかと聞いたが、はぐらかされたがそれ以上にあのク

ナイは本物だった。

触らしてもらったが一夏達は驚いたが、それをどこからもなく持ってきた晶に驚いた。

銃刀法違反になるんじゃないかと聞いたが、ばれなきやいいんだよとケラケラ笑いながらISに装着した。

千冬達も呆れていたが、何を言っても無駄だろうと諦めたのか、クナイを検査して、ただのクナイだとわかった為、使用許可をだした。クナイの数は10本だけなので、晶は慎重に行ってるんだと思っていたら千冬姉達我突然驚愕していた。

「どうなってるんですか!? この回避の仕方は以上ですよ!?!」

「神代の奴は遊んでいるな」

「ど、どついう事だよ?」

一夏と等は意味がわからず、千冬たちに聞いた。

「モニターに表示されてる神代君の回避行動が以上なんです。最初の回避にシールドエネルギーが削られる一ミリ手前で回避し、次の回避は二ミリ、その次は三ミリ、その次は最初の一ミリに戻ってるんです」

『おりよ、そんなに攻撃してるのにおれのシールドエネルギーはけづられてないんだけど?』

ケラケラ笑いながら、セシリアを挑発する。

『くっ』

嫌味全快で言う晶。

「回避パターンは全くずれてない、オルコットは気づいていないよ  
うだな」

気付いたら気付いたでショックを受けるのは目に見えているが、それ以上に

「シールドと機動以外の機能を停止したままで、この回避パターンは怪物だな」

「「「はい!?!?!」」」

千冬という言葉に場にいた三人は驚愕した。

「待ってください、それじゃあ、神代君はハイパーセンサーなど機能を停止しているんですか?」

「ハンデだそうだ。 というより楽しみたいとっていたからな。本人曰く、油断しているだけで意表をついた攻撃がくるならいくらでも油断してやるだそうだ。本人は楽しみたいだけだろう」



『さて、一気にこのハエみたいな奴を退治させてもらおうかな』

『ハ、ハエ！？ あなたわたくしのブルーティアーズを侮辱しないでください！！』

『じゃあ、蚊』

『く』

あきらかにオルコットを小ばかにして楽しんでいる。

『いきなさい！！』

B Tをもう一度展開させ晶に襲い掛かろうとしたが、晶はクナイを二本同時に投擲した。それを三回同じ様に投擲した。しかし四本はB Tが展開した方向に行かない所か、投擲したクナイ同士がぶつかり合い弾いたら、弾かれたクナイはB Tに命中して同時に破壊した。

『「「「なっ！！」「「「』

そんな出鱈目な、技能を見たものは一人の例外もなく驚愕した。

『そ・・・そんな！？』

オルコットは戦慄し見惚れていた。

男は自分の父のように情けな

いものだと思っていたが、

目の前の男はその逆どころか、強気でもなく弱気でもない、へらへらした口調で相手を小馬鹿にする姿とは不釣り合い強さをもった男に。

それでも一矢報いおうとしてスターライトMK?を構えた瞬間にスターライトMK?が爆発した。

晶は構えたと同時にクナイをスターライトMK?の銃口に的確に投擲した、しかも肉眼では影が走ったかのようにしか映らない速さで。

『く・・・、でもまだ終わりませんわ』

残りのBTを展開しようとしたが、BTは全く反応しない。

何事かとオルコットはBTがある腰のパーツを見たら、クナイが刺さっていた。

いつの間にと口にしようとしたが、先ほど4基のBTを破壊する時に6本のうちの二本だとすぐに理解した。

視線を晶に戻したら、

『バアア!!!』

『きゃあーーーーー!?!?!?!?!?!』

目の前に化け物の顔が映っていた。

晶はオルコットが視線をはずしたわずかな時間で不気味な仮面を背中から取り出し、それを被り瞬間加速でオルコットの目の前まで接近した。

いきなり目の前に化け物が映っていた為、悲鳴を上げたオルコットだが腰を抜かしたようで、立ち上がれない。

『千冬ちゃんー、勝負は？』

と、大声で聞く晶に、

『し、試合終了、勝者、神代晶！』

「立てそうにないな」

晶はそういいながら、オルコットを抱きかかえた。

「あ、あのー！」

「ああ、悪い、やっぱり嫌か。それじゃあ、すぐに」「いえ、少し驚いただけですから・・・／／／」

それをモニターで見ていた篤はお約束のごとく黒いオーラを出すが、一夏は気付かず。

「次は俺が戦うのか・・・」

楽しみなような、そうではないような変な気持ちになっており気付かない。

晶との実力は差は言葉で表せないほど言ってもだれもが納得してしまっただけ、晶がBTを破壊した方法はすごかった。

「あいつはまともに勝とうと思わんのか」

頭を抱えながらつぶやく千冬。

観覧席にいる殆どの生徒達は最後にどんな方法で勝負を決めるか期待していたが、その期待はぶった切られただけじゃなく粉々にされたような感じだった。

75

四人とも晶が元に向かった。

「はるゝ、どうだった？」

「馬鹿者、あんな勝負のつけ方があるか」

「えゝ。千冬ちゃんに言ったじゃん、楽しみたいって？  
それに観客席の子達の顔は面白かったゝゝ」

楽しんでできましたといわんばかりな笑顔に幕以外の三人は顔は引き攣った。

「そ、それより、いつまでその女を抱きかかえている？  
それに、腕を晶の首に回すなんて」

「ん？ こうしたほうがオルコットの首に負担がすくないからな」

「あ・・あの、負けたわたくしがお願いを言うのはお門違いですが・  
・・」ん？」 セシリアと呼んでほしいのです／＼」

「んらじゃ〜」

「な!？」

「・・・」

二人のやり取りに算は驚き、千冬は無言のままだった。

「千冬姉？ もしかして 「ああん!!」 いえなんでもないです」  
にらまれるどころか、チンピラみたいに声をあげた自分の姉に対して  
すぐに黙った一夏。

晶はすぐに、セシリアを席に下ろす。

「さ〜て、織斑か〜。楽しませてくれよ?」

「はは」

苦笑いをする一夏。

「俺はお前に一矢報えるどころか、もてあそばれるビジョンしか浮かばないんだけど」

「しゅあ〜ね、のこりの日程まで鍛えてやるよ」

「いいのか？」

晶との勝負の後に頼もつとしていた一夏は晶から言ってくれたのは予想外だった。

「ああ、生贄の子羊はしっかりと育てないと？」

悪魔の微笑みの如くニヤリと微笑んだあと、ケラケラと笑い出した晶に一夏は。

「鬼か？」

あるいは悪魔と聞いたかった。

その日の夜。

晶は千冬の部屋に向かった。

理由は知り合いの漁師からフグが届いたからだ。 晶は大の酒好きで、ヒレ酒を飲みたいと思ったが、生徒の部屋で酒の匂いや残り香が残ったら問題な為である。

教師の部屋から酒の残り香が残っても不思議じゃないということ、フグを口止め料として千冬の部屋に向かった。

「千冬ちゃんいる？」

「貴様は何しに来た？」

「知り合いの漁師が季節外れのいいフグを送ってきてくれたから千冬ちゃんにもって？」

ふぐ刺しは兎も角、ヒレ酒を飲みたいから、その口止め料」

「仮にも教師の前でいう言葉じゃないだろう？」

と言っても、口が少し微笑んでいたと事をも逃さなかった晶。

「どうします？」

「いただきます」

「それじゃあ、お邪魔します」

晶は台所に案内され、フグを調理する。

「出来ましたよ」

「ほう本格的だな、それにいい香りだ」

熱燗に焼けたヒレを入れる。

「うまいな」

「おお、絶賛されてしたよ」

「お世辞抜きでもうまいぞ。好きなのか？」

「ええ、酒は大好きですよ。たまに自分で作りますから。その時は今日みたいに持ってきますよ？」

「はあ、お前は本当に元生徒会長か？」

教師に酒好きと堂々という生徒に呆れる千冬だが、うまい酒が飲めるなら黙認程度なら安いものだと考え始めた。

「これで、この寮でも酒が飲めます」

「まあ、私もうまい酒が飲めるから、ありがたいが……、神代」

「ハイ？」

「あの馬鹿を頼む」

「大丈夫ですよ」



晶は一夏をからかってはいるが、男二人しかいない学園だ、普通なら肩身が狭い。

「まあ、変わりに少しはからかいますけど？」

「それぐらいがあの馬鹿に丁度いいさ」

「ひどい姉」

二人は苦笑しながら、酒を飲んだ。

帰り

「学園都市の時はマンションだったから問題なかったけど、これで酒には困らないな。酒瓶などは千冬ちゃんが捨ててくれるから証拠の隠滅も出来るし」

と、学生にあるまじき言葉を口にしながら自分の部屋に戻った晶。

### 3話 クラス代表決定 その一（後書き）

ISのバトル難しいです・・・、  
圧勝で決めさせたかったです、決め技はノリでやってしまった。

仮面に関しては各自の想像にお任せします。

#### 4話 クラス代表決定 その二

セシリアの勝負して翌日、授業も終わり、俺達は一夏の教育を始めた。

「なに、言ってるんだ!？」

「む、ナレーションだが? いや、現状説明か?」

晶の言葉にツツコム一夏達を見ている筈にセシリア。

「さて、生贄(一夏)は、セシリアに俺と戦ったときの感想や、状況を教えてもらえ。

筈からみた感想もな。その間に俺は儀式(戦い)に使う武器を選んでおくから」

「待て待て、いまいろいろと突っ込みたい事が多々あったぞ?」

「さして、どれにしようかな? 槍もいいし、斧もいいな。いや、弓捨てがたい。

どれで楽しもうか迷うな〜」

一夏の話など無視して、武器選びに夢中の晶。

「俺って、敵としてすら見てもらえないのか?」

「当たり前ですわね。晶さんは異常と言ってもいいくらいの強さでしたわ。」

代表に選ばれないのが可笑しいと政府に言いたいくらいに」

「お前だって見ただろ？ 晶の動きは達人なんてレベルじゃないぞ。それより、剣道は続けていたのか？」

「え．．．えと、その．．．」

一夏は筭の言葉に戸惑い

「この三年間は帰宅部でした」

「威張るな」

「威張る事じゃないですわね」

「うう」

一夏にも言い訳はあったが、このままじゃあ、晶からは先生に面倒を見て貰うよう頼まれた生徒の一人になってしまう。

一夏としては二人しかいない男だから、友達になりたいがこの三人の中で自分だけがいまだ織斑と呼ばれている。

セシリアとは昨日の晶との勝負の後に誤ってきた為、和解している。

「とりあえず、晶さんと戦い始めたときの印象は捨てたほうがよろしいですわね」

「??？」

「私は最初から全力でいきました。その為最初に抱いた「感想はそれほどではない」でしたが、すぐに勘違いだと自覚しましたわ。 晶さんは実力を隠すぬがうまいですわ。」

おそらく、もう一度戦っても同じ感想を抱きますわね」

「どついう事だ？」

「常に後一步で攻撃があたる寸前で避けてますから、こちらもう少し正確な攻撃であたると錯覚を受けるからです」

昨日の試合では序盤では全く気付かなかったセシリアだが、中盤の晶の言葉で遊ばれてると自覚した。

それでも油断している内に攻撃を当てればと常に頭によぎる。それが後一步の攻撃ならなおさらだ。

「だが、剣一本で向かえば、0.1%ぐらいなら勝機はあるんじゃないか？」

箒の言葉に思わずツツコム

「それだけかよ？」

「ああ、剣で攻撃するにしても、避けるか防ぐかでも動きは限定されるぞ。 昨日の晶の動きは無駄な動きがなかったが、

それ以上にセシリアがつかうBTの操作が難しいからだろう、避けられても追撃が出来なかったんだ。

剣で接近して、避けられてもすぐに避けた方向に攻撃できればある

いわ・・・な？」

「たしかに、そうですね。なんとか無理をしてBTで追撃に出  
ていれば、逆にBTが破壊されますし」

「希望の光が全然見えないが・・・」

一夏は心情をよそに晶は一夏と戦うときの武器を決めた。

「これでいいか」

「決めたのか？」

一夏は晶がどんな武器を使うのか気になって、真っ先に聞いた。

「この鉄扇だ!!」

晶は常時腰に装備してある？ 鉄扇を掲げた。

「・・・、落ち着け俺。・・・。」

晶もそうだが、お前等銃刀法違反じゃねえかよ!!」

「よく知ってるな？ しかしばれなきやいいんだよ」

「そうだな」

晶もなぜか常時刀を装備しているが、だれ一人突っ込まなかった為、  
一夏は晶の鉄扇を含め、

突っ込もうとしなかったが我慢の限界か突っ込んでしまった。

「専用機持ちよりはましだと思っぜ？ まあそれより儀式（勝負）の時はこれ一本だから、  
楽しませてくれ。 そっちはどうだ？ もっとも専用機の武装がわからなければ意味がないと思うが？」

「俺「剣一本だ。 一夏の専用機に装備されていなかったら打鉄のを使わせてもらえればいいし」

晶の質問に一夏より早く答えた筈。

一夏は落ち込んでいるが、だれも気にせず

「じゃあ、早速訓練開始だな。 木刀でも竹刀でもいいから来い。  
まず俺の動きに慣れてもらっぞ」

「わかった・・・」

対戦あいて直々に鍛えてくれるというおかしな状況だが、そんな状況を無視して、  
自分と晶の差を知りたかった一夏は竹刀を構え晶に向かった。

三時間後

「ゼエーゼエー・・・ハアハア・・・」

「ハア・・・ハア・・・」

「もう終わりか？ まあ三時間もやったし今日はこれくらいでいいか」

特訓の途中、箒も加わり、一夏一箒一箒のローテーションで二人を相手をした晶。

「ば・・・化け物か・・・よ・・・ハアハア・・・汗所か息が乱れないなんて」

「「「「・・・」」」」

見学していた剣道部の部員とセシリアは言葉を失っていた。

「とりあえず、箒はかなり腕だが、織斑は無駄な動きが多すぎるな。昔は剣道していたといっていたが、

素人よりはマシだというだけだから、素振りなどをやっておいたほうがいいぞ。明日は一時間やった後、ISで箒と模擬戦しておけ。学園には俺が言っておくから」



「わ・・わかった」

一夏は晶との差に落ち込みたかったが、そんな気力も体力も失っていた。

晶は一夏の攻撃を避けていたが、途中で飽きて防御に回った。

一夏は避けられてもすぐに追撃につでるが、先に息が乱れダウンの繰り返し。晶が防御に回った時もすべて防がれ先にダウン。

筈も加わったが、差が絶望的だった。

「ち・・千冬姉が普通に思えてきたぞ・・・」

「だろうな、それ以上に無駄な動きがないから、あまり体力を使っていないかった。長期戦は不利だぞ」

「わかってる。　はあゝ風呂はいりてエゝ」

「晶も入れないんだ、少しは我慢しろ」

「そうですね。一夏さんはもう少し我慢するべきですわ」

「オルコット・・・、いたのか？」

「最初からいましたわ!!」

(ツツコム気力もない・・・)

晶 Side

学園にアリーナと打鉄二機の使用の許可を得て、自分の部屋に戻った晶。

「別荘の風呂に入るか」

別荘とは以前いた世界から持ってきたダイオラマ魔法球のこと。

魔法球の中と外の時間はかなり違う。俺の知り合いのエヴァンジェリンが持っていた、魔法球は中での24時間は外では一時間の物だが、

晶が今使うの外の中の時間が差がないものだ。

「まさか、酒以外でこれを使う事になるとは」

俺は外と中の時間が違う魔法球を持っているが、それは酒を作るとき以外は使わない。

酒のための魔法球は以前といっても前の世界ではチャチャゼロやエヴァ、それにラカンに侵入され酒を大量に失った。

「エヴァ達は兎も角、ラカンの野郎はムカついた、飲むだけじゃ飽き足らず、京都での飲み会にみんなに出しやがったから、かなり減ったし……、くっ思っただけでも殴りたくなってきた」

昔の事を思い出していると、携帯がなった。

「土御門？ まさか一ヶ月はおろか一週間もたたない内に魔術がらみの事件が起きたのか？」

俺は携帯を取り出し

「ぶっ殺されてえのか」

『ひどいじゃ〜』

「冗談だ。一割ほどだがな」

『お前が言つと冗談に聞こえんぞ』

普段のふざけた口調から、真面目な口調になった土御門。

「ま、それはいい。何かあったのか？」

『いや、そつちの様子はと思つてな』

「イギリス聖教や他の組織に動きがあつたのか？」

『まあな。学園都市の人間のアキヤンが外の学園に入学した事が知れ渡つてるから、特にローマ聖教は何かと学園都市を消したいらしいから、

アキヤンを狙う可能性が大だな』

いや事を言つな。

「まさか、授業中に襲ってくる事はないよな？」

『腐っても宗教をなのるから、なんらかの理由をつけるだろう。たとえば科学を一方的に悪だといってな』

「ローマ聖教はそこまでゆがんでいるのかよ？」

『まあ、ほんの一部だけだがな。連中は学園都市の能力開発に気付いてるからな。ぶっちゃけIS学園を消してでも学園都市の情報がほしいんじゃない？』

「その時は別の意味でIS学園が消えるけどな」

俺がIS学園ごと刺客を同時に消すからな。

『「ははははははは」』

『とまあ、確立の低い話しは追いとくか』

「ありえない話しと言ってほしいが、もう用事は終わったか？」

『いや、まだかなり、いや相当重要なことだ』

先ほど異常に真面目な声になった為か、似合わず緊張したが

『IS学園の女の子はどうだ？』

ピッ

「さうて、風呂はいるか」

俺は携帯を切り（無論電源をきって）魔法球にはいり風呂に浸かった。

織斑との勝負当日。

はやくね？ とツッコミは聞かないが、この数日あった事をかたろ  
う。

まず、毎晩千冬ちゃんの部屋に行ってる、無論酒がらみで。  
織斑との特訓はISでの特訓以外は俺が見ていた。

剣道をやっていたから体はそれなりに出来ていたが、まだまだと言  
いたい。

俺は打鉄を展開し、鉄扇握りアリーナ・ステージに向かった。

一夏 Side

俺は専用機白式を展開した。

装備を見たら剣一本。

「武器はこれだけかよ？」

「よかったじゃないか。今までの特訓を生かすことが出来るぞ。晶が言っただろう、付け焼刃の射撃より、経験のある剣一本で行ったほうがいいと？」

確かに、他の武器も使いたいと言ったら、そう言われた。

「いい判断だな。織斑」

「なんだよ千冬姉？」

「織斑先生だ馬鹿者。まあ無様に負けても自分に何が足りないのかぐらいは気付けよ？」

「そうですね」

「そうですね」

「あんたらは俺が勝つ可能性は考えないのか？」

「ありえん」

「ありえない」

「ありえませんわ」

「ひでえ」

「まあまあ。織斑君がんばってください」

「俺の味方は山田先生だけだ」

と泣きくずれるような声で言ったら

「何を言う。内のクラスの女子はお前を応援しているのだぞ？」

「夏休みのためだろ！！なんか皆奇跡が起きてほしいような顔だぞ？」

「そうですね。晶さんの強さは一年最強だといっても誰もが納得しますし」

以前戦ったから、セシリアは大分晶を評価している。

まあ、あのクナイの使い方は異常だったが。あの戦いからか学園ではダーツが流行っている。

クナイはさすがに売ってないからしょうがないが。

「そろそろ言っ来て来い。時間だ」

「わかった」

俺はアリーナ・ステージに向かった。

ISが晶の情報をよ見上げたが。俺は無視して、そのまま雪片を構え晶に突撃した。

(すごい、この白式は打鉄とは違う。これなら晶に勝てるかもしれない)

と思つての事だが、その幻想はもろくも破壊される。

俺が晶の目の前まで行つた瞬間に晶の後ろにまり込み背後から雪片を振り下ろしたら、  
晶は後ろを向いたまま鉄扇で防いだ。

「くっ!?!」

生身と違い、いろいろ動けるので何とかなると思つたが甘かつたと痛感した。

(考えても仕方ない。晶はあの鉄扇以は装備してない。なら一気に攻めるだけだ)

「うおおおお!!」

俺は何度も攻撃したが、防がれる。



背後はもちろん、左右からや頭上からなどの攻撃もことごとく防がれる。

ISの反応速度はこちらが上なのに、こつも防ぐ晶は別格だと直に肌で感じた。

「お前は馬鹿か？ 武器は剣だけじゃないだろう？」

「いや、この白式の武器はこれだけだぞ」

「そうじゃない」

晶はそう言って、鉄扇を振り下ろした。

俺は咄嗟に雪片で防ごうとしたら、腹に衝撃が走った。

「ぐぐっお」

俺はそのまま後退して、何があったと確認したら、晶は足をこちらに向けていた。

「そのあまつた足と片腕は飾りか？」

「そういう事か」

確かに俺は馬鹿だった見たいだな。雪片だけしかないと思いこんで

いた。

「蹴りもある、片腕でパンチも出来るんだ。同じ接近なら使わない俺は馬鹿か？」

自分で自分を馬鹿にした。けどそのお陰で何か吹っ切れた。

「晶、俺はお前に勝ちたい」

「意気込みはいいが、まず俺をここから一歩でも動かせるようにしろ」

「は!？」

何を言ってると思って確認したら、晶は俺の初撃を防いでから、一歩も動いてなかったと確認できた。

前言撤回したい気持ちが出てきた。

勝てるかもしれないからつい行って見たが、現実をみると甘いんだと認識された。

セシリアもこんな気持ちだったんだろうな。

勝てるかもしれないという幻想だともしらず思ったら、所詮は幻想だと認識してしまう。

「だったら、お前をそこから引っぺがす」

そういつた瞬間に俺のISはファースト・シフト一次移行が完了した。

ようやく俺専用になったが、それでも勝てる可能性はゼロに近い。

でも、小学校のころから憧れた。千冬姉とは違う強さを持った同級生に。

その同級生に認めて貰うため、俺は全力で向かった。

『試合終了。勝者。』  
。 神代晶

「馬鹿者、ISの特徴も知らずに、使うからだ。」

何も考えず思うまま突撃したら負けを宣言された。

「だってよ〜」

「猪突猛進みたい突っ込んでばかりだったな？」

篤があきれたように言っ て来た。

「晶が最後に使ったあれを思いつくのは常識はずれにもほどがある  
だろ？」

俺が突撃する瞬間に鉄扇を俺に向けて投擲してきた。

その上、晶は投擲した鉄扇と同時に俺に向かってきた為、咄嗟に晶  
に向けて雪片式型を突いたが、

ブザーが鳴った瞬間に左肩と腹に衝撃が走った。

俺のシールドエネルギーがゼロになったと同時に晶の蹴りと晶が投  
擲した鉄扇が俺に命中して今に至る。

「お前がああの瞬間にするべき事は迎え撃つのではなく、お前自身も  
突進するべきだったな。もっとも鉄扇を弾いてたら、  
弾いた瞬間に鉄扇を回収して頭に叩きつける自身はあったが。鉄  
扇を無視しても、雪片式型を足で弾いてそのあと追撃できる自身も  
あったから手詰まりだったけどな」

晶も俺が出てきたピットからステージをでた。がそんなことより

「結局勝てねえじゃん」

「精進するんだなとしか言えないな子羊君」

「せめて一夏と呼んでほしいんだが」

「馬鹿いぢか？」

「馬鹿と書いていちかとよんだろ？」

「お約束か、まあ俺も暇つぶしが出来たし、一夏と呼んでやる」

「ほ、本当か？」

と質問をしたが「別に呼んでも呼ばなくても変わらんし」といって、ISを千冬姉に渡して、寮に戻っていった。

俺達も解散したが、内のクラスの皆は夏休みがなくなったと落ち込んでいた。

千冬姉もなんだか晶の夏休みを補修にする案を推薦しているから、奇跡は起こらないと確信した顔だった。

今年の夏は地獄だなと俺も実感が沸き憂鬱になって篋と部屋に戻った。

「織斑先生、やっぱり……」

「ああ、神城が使用したISが神代自身の動きについて行けず、中身がボロボロになってるな。」

「しかも三機とも。ハア」

千冬は晶が使用したIS打鉄のデータをみてため息をついた。

「訓練機である機動性をだしたんだから当然の結果といえましょうがないが、クラス対抗戦や学年別トーナメントを考えると痛いぞこれは」

「修理するより、中身を新しくかえたほうが安いですよ、これ」

中身は修理できないほどまでにダメージを受けている。

（専用機を作るにしても神城の反応にあわせられるISを作れるのは束しからないし）

「とりあえず、上に意見を求めたほうがいいですよ。三機の修理代だけでも頭を悩ませると思いますけど」

「だろうな、はあ専用機を作っても拒絶するだろうし」

と愚痴をこぼした千冬だが、彼女達はこれから晶がISに乗らず、IS以上の戦闘して驚愕することになる。



4話 クラス代表決定 その二（後書き）

後三人・・・、忙しく投稿時間が・・・。  
早くオカルト事件をと頭の中で苦しんでいます。



## 5話 二組の転校生といきなりの告白

一夏との戦闘が終わり、夕飯を済ました晶は千冬達に呼ばれた。

「何すか〜。千冬ちゃん、今晚は早くやりたいと?」

呼ばれた部屋に入った晶が最初に口にした言葉で待ってた二人が動揺した。

「貴様は、何を誤解を招くようなことを言っているノノノ!!」

(おお〜、千冬ちゃんのレアな態度だ〜)

「神代君と織斑先生ってそういう関係だったんですか!??」

学園に来て一週間の晶は戸惑ったりアクションをする千冬みて面白がっていた。

「ええ、毎晩」

「ままま毎晩!?!?!」

「貴様は面白がっているだろ?」

「あれ〜、千冬ちゃん顔真っ赤だよ?」

「あわわわ!!」

「まあ、酒のつまみをおいしく食べてくれるから、こっちは作りがえがあるから、うれしいけど?」

「え? え?」

「毎晩、千冬ちゃんにお酒のつまみを作ってたんですよ。真耶ちゃんは何を想像していたのかな?」

あれから、毎晩千冬と酒を飲んでいる昴。酒のつまみも作っている。うそはついていない。

自分は酒を飲んでいるともいえないとも言っている。とケラケラと笑って見える笑みを浮かべる昴。

「わ、私は!!!!!!」

「真耶ちゃんのムツツリスケベー」

「/////////!!!!!!」

「教師をからかうな」

千冬は昴に手刀を決めようとしたが昴は毎回の如く避ける。

「いやいや、お二人の反応が面白いから? それに俺はうそはついてないですよ?」

「く・・・」

「あう……」

「で、真面目な話しみたいなので、空気を無理やり変えます。用は？」

「はあく、まあいい。お前が乗ったすべてのISは「限界を超えて使い物にならないと？」 知っていたのか？」

「ええ、仮にも自分で使ったからね。 使用してる武器の耐久度くらい常にみてない？」

「それなら、単刀直入にいいますと訓練機では神代君の反応に合わせられませんし、専用機を与えたい「お断りします」 ええー！？」

「やっぱりか？」

「ええ、初日に言いましたけど専用機を持つ気は一切ないので、晶にきつぱり断られた山田先生はなおも食い下がろうとしたが、

「しかしですね「俺はISに全く興味がありません。 此処にきたのは幾つかの条件を飲んでくれたから此処にいます」……」

「はあく、山田先生、本人も拒んでいるようですよですし、これ以上無理を言うのはどうかと思うのだが？」

「はい、神代君も無理を言ってますいません」

「かまいませんよ。お二人は上に言われてるんですよね？」

「そこまで知っていても断るか？」

「はい。どの組織でも上の連中は気に入りませんからね。本人達が目の前に来て無様に土下座をすれば考えてもいいですが」

「はあ。 (考えるだけか。 そんな事を政府の連中がしても、後に『考えましたよ』?』と云っただけだろうな)」

千冬は晶の言葉の裏の意味を理解した。

「訓練機が駄目になるか、クラス代表を辞退してくれですか？」

「……半分はそんな話した」

「クラス長になるのはかまわないが、代表戦は代理を立ててくれと？」

「……はい。そうです」

千冬と山田先生は晶の頭の回転の速さに驚きながらも答えた。

「構いませんよ。それと弟君を推薦しますから」

「そうか、すまないな呼び出して」

「ええ、お二人のかわいい反応を見れたし。バンっ。俺はこれです」

千冬は出席簿を投げつけたが、避けられるどころか、いつの間にか部屋の外で笑顔になっている晶。

「あでゆ〜」

「辞表を出したくなった」

「我慢してください織斑先生。私もがんばりますから」

その夜、千冬は晶に一番とくいな料理と珍しいお酒を用意された二つの味は絶品だった為、何もいえなくなった。

翌日

「と、言うわけだ馬鹿。クラス代表戦がんばれよ」

「は!?!」

突然、教室で晶に言われた一夏は啞然となった。

「だから、俺の代理としてクラス代表戦を出るんだよ」

「誰が？」

「お前が」

「な「何をしてでも決定事項だ」　せめて現実逃避する時間をくれ」

「言っても無駄だし。　いきなりダイレクトアタックを掛けるぞ。　敗者は勝者に従え」

とんでもなく残酷な言葉を笑顔で言う晶にクラスの殆どが引いた。

そして、一夏はその一言で何も言えなくなった。

「理由はちゃんとするぞ。　俺が訓練機を使うと限界が来て修理費が馬鹿にならないからな。　専用機のお前に白羽の矢をむけた訳だ」

「それだったら、セシリアも条件に入るだろ？」

「男子が出たほうが盛り上がるし。　これは決定事項だがお前がどうして嫌なら俺が出てやるが、代わりにISの修理費を頼むな？」

「ちなみにどれくらい？」

「これっくらい」

晶はどこから出したのか、計算機を一夏に見せた。

「なんだよ、この値段は？」

訓練機とはいえISだ。しかもコアは467個しか存在しないなら、修理費もとんでもなくなる。

「さあ、選べ？ 俺の代理としてクラス代表戦にでるか？ それとも断って代表戦のあとでマグロ漁船で働くか？ 選択のときだ？」

「悪魔かよ！？」

「魔王とよべ！！」

「威張るなよ」

と、ツツコミを入れた一夏だが、これから少したってから、魔王のような外道だと逆にツツコミを入れるちはこの時は思いもしなかったと語るのは別の話し。

「つーか、選択がないようなものじゃないか？」

「逃げ道には地獄を用意するほうがいい選択すると思つてな」

「はあ、わかったよ。出ればいいだろ」

元から、一夏は晶に恩がある為に断れないと思つている。晶が用意したノートお陰でISの授業はついでに行つている。

「まあ、お前が勝てば抜き打ちテスト前日にどんな科目かぐらいは皆に教えてやるから」

「織斑君、がんばって勝つてね」

「何か必要なものがあればいって」

クラスの女子はいきなり協力的になった。

「現金だな」

「晶さんが言う言葉じゃないですわね」

「そつだな」

「お前らいつから入たの？」

「「最初から（だ）（ですわ）。」」

晶はケラケラ笑いながら自分の席に戻った。

Side ????

（来たぞ、ようやくあいつがいる世界に）



「フランよ私はやってきた!!」

一人の少女がいきなり大声を上げた。

「マスターのテンションが以上です」

「仕方あるまい。フランにあえるのだからテンションもかなりあがるじゃろう」

「ケケケ、ご主人も諦メガ悪イナ。振ラレタノニ、追イカケルトワ」

「ぶっっちゃ言えば、ストーカじゃのう」

「そこ、うるさいぞ。それにシヨタジジイは黙ってる」

「わしだけひどくないかのう」

「マスターはこの中でフランさんと一番長く過ごしたゼクトさまに嫉妬しているだけです」

「わかっておる。それより茶々丸。早くこの世界の事を知ったほうがいいのう」

「そのことですが、この世界は我々いた世界のかなり似ています」

「なんだと!?!」

「むう、おそらく並行世界のようなものじゃのう。フランも同じような世界があるとも言ったからのう」

「それより、フランの、奴の居場所だ」

「待っておれ、せつかちじやのう」

ゼクトと呼ばれた少年はポケットから紙をだした。

「それが、ビブルカードか？」

「そうじゃあ、フランがいつてきた世界のものじゃ。あやつが死んでいるならこの紙はもえるようじゃあ。」

そして、生きておるならあやつが入る方角にこの紙は動く」

「今まで動かなかったのは、フランがその世界にいなかったからか？」

「そうじゃなあ、そう考えるほうが妥当じゃあ。この紙が今動いて折るかのう」

「よし、その方角にいくぞ」

「まあ、待つんじゃあ。先に資金を手に入れんといかんじゃろ」

「そうですね。それにこの世界で魔法を感知されるかも調べないといけませんし」

「ソレヨリ酒も用意シロヨ妹ヨ」

「安心せえ、フランは色んな異世界の酒を倉庫にためておるから、酒の種類は豊富じゃぞ」

「ソウダッタナ。楽シミダゼ」

3人＋人形は目的の人物を探す為に行動を開始した。

Side out

IS学園に通っている晶は自分が行った事ある異世界の住人が自分を探しに追いかけることを露知らず、ダラダラと授業を受けていた。

「ふあゝ、ISの授業にも飽きたな」

「はやいな!？」

「しょうがねえだろ。全部覚えちゃったし。以前読んでいた本も読んだ。新しい本も来るのは二週間後だし。暇だな」

授業が終わり、教室から出て行く晶と一夏、それに箒とセシリア。

「さゝて、俺は部屋に戻って古い本でも漁るか」

「俺の特訓をみてくれよ」

「嫌だ、めんどくさい」

「即答かよ？」

「その二人に見てもらえればいいだろう。俺はお前よりISに乗った時間が少ないんだから」

実際は一時間も乗っていない。

「それで、あの強さは感服しますわ」

「そうだな」

「何か、コツでもあるのですか？」

「いや、お前らより戦い方がうまいだけだ。例えるなら、同じ射撃性能をもつ二人の人物がいたとする。

片方は的を相手にしかしたことない人物ともう片方は実践を経験した人物が射撃戦を行えばどっちが有利かわかるだろう？

実戦経験が多い人物が素手だとしてもな」

「それはそうだが、晶はISの戦闘経験は三度しかないだろう？」

「ああ、俺が言いたいのは、視野と思考の問題だ。悪く言えばISは所詮は戦う道具ツールだ。道具をどう使うかが問題だ。それと戦い方だな。

だから専用機のお前らに勝てたというわけだ。じゃあ、また明日」

これ以上の説明はうまく出来ないという顔をした後、手を上に上げ晶は自分の部屋に向かった。

「さて、私も帰るか」

「わたくしも自分の部屋に戻りますわ」

「待って、訓練に付き合ってください。このまま一人であのアリーナで訓練だと思つと寂しいのであります」

「晶にも言われたし面倒を見てやる」

「あら、専用機をもつわたくし一人で十分ですわ。箒さんは部屋に戻つて適当に過ごしてください」

「何!？」

「また始まつた……」

一夏は呆れながら二人のいい争いが終わるまで待った。

晶 Side

「さて、コンビニにでも行こうかな。レナと二ナはいま海外だしな、はあ、学園都市にいたときは当麻達と馬鹿騒ぎで時間をすごせるが、

此処だと暇だ。 ん!？」

晶が校門を出ようとしたと、

「これでクラス代表戦で一夏をぶっ飛ばせるわね」

何やら、面白い言葉、もとい物騒な言葉をいう女の子に少し興味を引いた晶。

(一夏の知り合いか?)

と、傍観をきめて二人の衝突を想像しようとした矢先に自分の名前も出てきた。

「晶の情報があるかないかくらい連絡しなさいよね。私がどれだけ待ってたか知らないで」

(あり? 俺の名前か? ……ってあの子は確か鳳鈴音ファン・リンインだったよな?)

鈴 Side

受付で一夏がクラス代表戦に出ると聞いて、ぶっ飛ばせる。

晶が行方をくらまして、4年。私はできるだけのことで探したけど見つからなかった。

そのうえ、中国に帰らないといけなくなって、晶を探す事が困難になった為、一夏に頼んだのに、あいつは連絡の一つもよこさなかった、  
せめて、情報がないくらいは連絡してほしかったのに。

「それを・・・」

一人の情報を集めるのは難しいと理解してるけど、やっぱり情報がなかったとかくらいの連絡がほしかったと口にしよつとした時

「よう、覚えてないかもしれないけど、久しぶりだなファン・リンイン鳳鈴音」

「へ!?!」

一番聞きたかった声の主が目の前にいた。

「あ・・・きら?」

「おお、覚えてたか? そういえば一夏がなんか言ってたな?」

私は突然のことで混乱して、涙が出た。

晶 Side

「いい!?!」

いきなり泣いたよこの子？どうすればいいんだ？

今までにない出来事だったので混乱したが、鳳の言葉で冷静になった。

「う・・・そ、じゃないよね？」

ああ、なんか心配掛けたみたいだなと理解した。

「ああ、本物だ」

そう言ったら、鳳は抱きついてきた。

「心配したんだからね。いきなりいなくなっ」

そついいながら、泣き続けた鳳の頭をなでた

「悪い、少しあつてな」

実際は小学校に飽きて旅に出たなんていえない。

それに、こんな時に冗談が言えないほど人とかかわってきたんだなと自覚した。

「とりあえず、俺の部屋に行くか？　こんなところだといろいろと話せないし」

「う・・・ん」



とりあえず、誰もいない自分の部屋にむかう。

途中でこんな状態の女の子と一緒にいるなんて見られたくないから、咄嗟に認識妨害の魔術を使った。

この事である魔術師に狙われるなんてこのときは思わなかったが。

認識妨害のお陰で俺達は誰の目に留まることなく俺の部屋に入れた。

鳳は再開した気持ちで回りに気がつかなかったのはうれしい誤算だ  
といたいたいが、自分の所為で泣かせた為、そう思いたくなかった。

「ここが・・・晶の部屋？」

「ああ、俺一人だから言いたいことも言えるし、思いっきり泣けるぞ」

「い・・・ごめん。なんかいきなりで私も泣き出したりして」

必死に誤ってきた鳳。

「気にするな、それにいきなり失踪した俺も悪かったし」

「そう・・・だよ。いっぱい心配したんだから」

また、泣きそうになったが、鳳は堪えて笑顔で言った。

「わるいな、学校の仕組みがわからなかったからな。何も言わず出て行った」

「それって、誘拐されたとかじゃないよね？」

「ああ」

俺の意思で出て行ったことを確認した鳳はほっとした表情をした。

「よかった、なんか事件に巻き込まれたと思ったから」

「なんで、またそんな想像を？」

「だって、子供ころ、晶は銀行強盗を倒したじゃない。私や一夏が人質にとられたとき真っ先にむかつたし。」

そいつらの仲間が仕返しにきたのかなって考えちゃって」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

いえない、便秘で銀行のトイレを借りて、トイレから出て、早く家のトイレで安心したいと思った矢先に銀行強盗の所為で腹の調子が心配になって、こうなったらこいつらを倒してトンズラを刻の手っ取り早いと思って倒したのはいえない。

家なら誰もいないから何時間もトイレにいても文句を言われないから早く帰りたいなんて思った俺は悪くないよな？

だって、他人？のトイレを長時間使うのもどうかと思うぞ？

「そ、そうか……」

そういえば、鳳や一夏はその後になって、教室で話しかけるようになったんだっただな。こいつらも銀行にいたことを気付かなかったし。

\*その時、一夏もおなかを壊しトイレに行きたかったことは晶は知らない。晶のおかげで漏らさずにすんで心から感謝している事を。

「心配掛けてすまなかった、鳳」

「名前」

「へ？」

「名前で呼んで」

「リンイン  
鈴音」

「うん」

「それで、鈴音は中国の代表候補生としてきたのか？」

「半分はね」

「半分？」

意外な答えに、聞き返した。

「というか、……その晶を探した……め／＼／」

「はあゝ。何でまた？」

呆れ気味に質問したら、鈴音は勢いに任せ

「す、好きだからに決まってるじゃない！！　じ、実際晶が行方不明になった前日に告白しようと思ったなら、次の日に行方不明になるんだもん」

「あー、それは悪かった。それと今のは告白として受けとってもいいのか？」

そう聞き返したら鈴音の顔は真っ赤になっていく。

「／＼／う、うん」

「とりあえず、もう少し俺の事を知っておけ。ハッキリ言って、俺はお前が思ってるような出来た奴じゃないぞ。気に入らない相手には容赦しない。だからもう少し俺という個人を見てから告白しても遅くないと思うぞ？」

「他の子と付き合ったりしないの？」

「自分の気持ちを言葉に出来ない奴とは話をあわせるだけだよ俺は」

「以外に冷たいのね……」

「当たり前だ、言葉は最高のコミュニケーションツールだぞ？ 言葉にしなきゃ伝わるもんも伝わらん。」

それに、俺は一般常識は嫌いだからな、三人目の恋人も問題ない」

「それはそうだ……、今すごい常識外の言葉を聞いたんだけど？」

さわりと、お二人と付き合ってることを話す。

「ああ、今は双子と付き合ってるんだよ。ちなみに二人は俺の意志を知ってる上で付き合ってるから。」

これから恋人が増えるかもしれないこともな」

「それって、女たらしなことじゃないの？」

「さっき言ったように、気持ちを言葉に出来ない奴とは付き合わんし言ったとしても中途半端な気持ちの奴とも付き合わん。逆に言えば大事な人意外は眼中にない、ひどく言えば数千数万の人の命が大事な人の命を選べといわれたら躊躇なく大事な人の命を選ぶぞ、たとえ大事な人に恨まれてもな。」

用は俺の自己満足だがな。あの二人はそれを知った上で俺の事を好きだといってくれたからな」

「あ、あのさその大事な人って私も入れるのかな？」

「普通は軽蔑するところじゃね？」

「それでも晶にいじめから助けたときからずっと見てたから、晶が冗談でそう言うことを言わないって思ってる。

晶がどんな奴でやっぱ私は晶が・・・その・・・す・・・好きだから!..!」

まっすぐな目で俺を見てくる鈴音。

(あいつらと同じ目だな)

「さっき言ったように、もう少し俺を観察してからのほうがいいぞ。これで俺の立場は結構面倒だからな」

すこしムスツとした顔をした鈴音だが、立場という言葉に反応して質問をしてきた。

「立場って？」

「俺は学園都市の人間なんだよ。くわえてIS学園には一年しか通わない条件を出してる上、専用機を持ってとるさくしてる政府の要請を蹴った事で大分睨まれてるんだよ。なんかIS適正が高い上、他の連中より強いからどこぞの研究上が狙ってるって言われたからな(土御門に)」

「晶ってどれぐらい強いの？」

「少なくとも千冬ちゃんって言ってもわからんか? いや、一夏と一緒にいたから知ってるよな?」

「千冬ちゃんって一夏の一夏のお姉ちゃんの千冬さん!？」

「ああ、試験時にな。他の連中も騒いでるけどピンとこねえんだよ」

「千冬さんに勝ったならどこもほしいわけね・・・ん、なんで千冬さんをちゃん付けしてるの?」

なんか、暗いオーラをだしてるぞ鈴音さん。

「教師だからだろ。鈴音も知ってるだろ、俺は基本年上はちゃん付けだからかうって」

「そういえば、そうね。小学校の時はナチュラルに呼んでから気にしてなかったけど」

「教師の反応は面白いからな」

「クスッ、本当に変わってないねそ言つと」

「当たり前だ、人生楽しまなきゃ損だぜ?」

「そっだね」

「今の笑顔可愛かったぞ」

「／／／ちよつとききなりなに言ってるのよ？」

おお、赤くなってる

「本当のことだって」

「晶はいつも唐突に恥ずかしいことをいうんだから／／／」

「昔の鳳は泣いてる顔より笑ってる顔のほうが可愛い言ったところ？  
懐かしいな」

「／／／／／／」

「今日は此処で泊まってけ」

「／／／／／」

「泣いた後のその顔でルームメイトになんていうつもりだ。　まだ  
目元が赤いぞ」

「・・・うん」

「その顔で食堂も無理だし、何か作ってやるよ」

俺は台所にむかって調理を始めた。



晩飯を食べた後、いつもどおり千冬ちゃんと酒盛りして、自分の部屋に帰った後は鈴音に学園都市の学園生活を話して、眠りについた。

## Side out

バチカン、聖ピエトロ大聖堂。  
ローマ正教の総本山の聖堂に、その静謐な空気を荒々しく引き裂くような足跡が響く。

「日本のIS学園にて、若干の魔力が反応がありました。使われた魔術は認識妨害の魔術です。使われた魔力、術式構築の速さを見るに相当の魔術師だと判断してます」

「ほう、それはまた面白いですね。たしか学園都市の猿が一匹入ったと聞きましたが」

「学園都市の人間が魔術を使った目撃ではないのだろうか？」

「それでもだアックア。魔術師がISなどというくだらないオモチ

「ヤに手を出したんですよ？ かつてのアレイスター・クロウリーが魔術を捨て、科学に走ったと同じように我々魔術師に対する冒瀆なのです。それにISのせいで我々ローマ正教徒の人達も紛争に巻き込まれ死んでいるんです。」

「開発者の異教徒の猿は責任を投げ捨て行方をくらましています。学園都市が行動を起こす前にIS学園にいる学園都市の人間と同時に魔術師を始末すればいいのです」

「だがな、テツラ。彼の者達はまだ主をしらぬ子供だ。異教への信仰は罪だが、知らぬだけならまだ救いはある」

「甘いんですよ。貴方。ねえアックア？ それに私にとって人とはローマ正教徒だけです。そのほかただの猿なのですよ」

「私が直々に魔術師と学園都市の猿を始末しますよ。ああ、心配しないでください学園都市の猿は学園都市の情報を引き出してから始末しますから」

「なら、私もいこう」

「アックア!？」

「私一人で十分なのですが？」

「戦場でその油断が命取りだぞ。だが安心しろ私は万が一の場合の保険だ」

「ふふふ、まあいいでしょう」

そう言って二人の男が廊下を出た。

学園都市 窓のないビル

「思ったよりも早く魔術を使ったかフランキシヌス。ローマ正教にある程度噂を流した。

これなら思った以上に早く魔術師と交戦する。それに冬木市の聖杯戦もいいタイミングで開始する。

フランキシヌスに聖杯戦争を終わらせるよう言えば、一方通行に連絡するだろう。そこに幻想殺しイマジンブレイカーに関わせれば幻想殺し、一方通行は予定よりはやく魔術を知る事になる。私のプランもかなりの短縮につながる。フッフ」

男にも女にも、大人にも子供にも、聖人凶人にも見えるアレイスタは不適に笑う。

## 5話 二組の転校生といきなりの告白（後書き）

は、いい、鈴の登場です。

しかし、他の連中に存在が食われてそうです。

さて、ネギまのエヴァと茶々丸にゼクトが登場です。

くわえてFateも加わりますがあくまで魔術事件としてのゲストです。

上記の三人と当麻に一方通行を聖杯戦争もくわえますのでカオスになる予定です。今のところは一夏達は聖杯戦争では驚く側ですのであしからず。

## 6話 能力の披露目

晶 Side

目を覚ましたら、がふと布団以外の感触に気付き、そこに目を向けるとそこには鈴音がのしかかる様に眠っていた。

鈴音は隣のベットで寝てるはずだが、大方途中でで忍び込んだんだろつと推測。

「はあく、勢いとはいえ告白したお陰で大胆だな。以前はまともに俺の顔も見れないで話しかけた鈴音がな」

まあ、かわいい寝顔を見れたからいいかと思い、鈴音を起こす。

「鈴音、少し早い起きろ」

ゆさゆさと鈴音の体を揺らす。

「ん〜、もうちよつと〜」

俺の体にしがみつきながら断った。

「しょうがねえ、もう少し寝ていいから、朝食ぐらいは作らせる」

「んにゅ〜」

理解したのか、しがみついた腕が離れた。

「ただ、寝ぼけてるだけかもしれないが、朝食の準備でもしてるか」  
俺はそのまま、朝食の準備をした。準備が終わるところ鈴音も起きてきたが、

「う、ごめん。晶が朝食作ってるのに、私だけ寝ちゃって」

「気にするな、長旅といえるのかは知らんが疲れてるだろ？ それに料理は嫌いじゃないし」

「一夏もそうだけど、料理が得意といわれると女としての立場が・・・」

「料理なんて経験だあと無駄にアレンジしなければいいだけだ。それより、出来たから食べるか」

「うん」

朝食を口にしてショックを受ける鈴音。

「なんで、こんなにうまいのかな？」

「俺の古い知り合いのおかげだな。」

一人は甘いものが好きな黒髪長髪の皆の兄貴分に、オムライスが得意な見栄っ張りのリーゼントチビに、

見た目に似合わずお菓子作りが得意な胡散臭いおっさんに、ナチュラルに男共を餌付けするどこぞの部族の姉貴分に、板前顔負けの腕を持つ爺くさい口調の海賊娘、堅物で料理は博打と言ってもいいような金髪達に教えてもらったかな。

俺以外にもあと、お人よしな箱入り娘と周りから変人扱いしても気にしない天才少女も料理を教えてもらったんだよ。そのお陰で料理の腕は今の感じだ」

俺の説明に若干、口が引き攣っている鈴音。

「……………、なんかえらく個性的ね……………その人達」

「ああ、あと絶対に飼い主と意思疎通が出来てる犬もいたな、そいつは犬ご飯を自らつくってたな」

「晶の交友関係ってすごいね……………」

「かなり前の話だな」

「??？」

朝食を食べ終えた後、鈴音は自分の部屋に荷物を置きに行った。ついでにルームメイトに言い訳やら、挨拶などをしてほしいが詳しく聞いてない。

鈴音と別れ、教室に向かった。

「さてと、テストはどんな科目にするかな」

俺の開口にクラスの女子達は青くなる。

抜き打ち？テストは学園の成績に反映しないが、赤点をとればそれなりにシヨックをうけるだろうが、  
授業を聞き、每晚復習すればいい点は取れるもんだが。

「それは、お前のような頭がいい奴だけだろ？」

「人の脳内でツッコムな」

「いや、顔に出てたからつい」

一夏からのツッコミをツッコミで返した。

「だが、実際は問題はそれほど難しくもないぞ。  
それに、ISを動かすのは天才的でも、頭が悪い筋肉馬鹿とか言われたくないだろ？」

「それは、そうですが・・・」

「毎週抜き打ちテストはさすがにきついぞ？」

「何を言ってる？ 毎週？ 俺が言ったのは最低一週間に一回は抜き打ちテストだぞ。」

言い換えれば毎日と言っても差し支えんぞ」



「「「「「えーーーーーー！？」」「「「「「」

「鬼かよ!?!」

「まあ、クラスの平均点をあげるならこれくらいはな? まあ、さすがに毎日は飽きるからやらんがな」

「あきるからって……」

「クラスの平均点が上がれば、文化祭とか、学園行事にある程度有利進められるし、ISの貸し出しも楽になると思うぞ?」

学生の本分は勉強。IS学園と呼ばれても一般の授業がある。ISにのれるが馬鹿と世間に思われたくない学園側は成績のいいクラスにISの貸し出しを優先する可能性は高いとクラスがシンクロするように同時に考えにたどり着いた。

「そうだね、クラスの平均点が高い上、クラス代表戦で織斑君が勝てば……」

「だったら、楽勝だよな。四組さえ、気おつけければ後は訓練機だし」

「その情報、古いよ」

と、突然会話に入った鈴音。

「お前、鈴か?久しぶりだな」

一夏は久しぶりに再開した鈴音に声をかけた。

「久しぶりね一夏」

と鈴音は返したが、鈴音がまどつていいる雰囲気さがらりと変わった為、一夏は固まった。

「お、お久しぶりですね……?」

急に敬語になるだけじゃなくもう一度挨拶をした。

「ニュースだと、入学式からいるじゃない? なんで晶の事を報告してくれなかったかな?」

俺の名前が出た途端に、傍観していた筈とセシリアが反応した。

「あ……いや、その俺も入学してからその……いそがしくってですね」

この空気に耐えられず、一人の生徒が鈴音に質問をした。

「あ、あの先ほどの情報が古いとのいうのは?」

「へ!? ああ、私も専用機持ちなの、だからそう簡単に優勝できないよ」

「じゃあ、貴方は宣戦布告を?」

「私の名前は鳳鈴音<sup>ファン・リンイン</sup>。今日転向して来たの。それと別にそうじゃないよ、ただ晶に用があっただけ、そしたら、貴方達の話の聞いただ

けだから」

俺に用事といった事で回りも興味を抱き始めた。

「神代君に？」

「あ」

一夏は何か嫌な予感をしたという表情になったが鈴音には気にせず、俺のところに向かってきた。

「ねえ、晶お昼一緒に食べよ？」

「かまわんぞ」

「うん、じゃあお昼になったら迎えに来るね」

そう言っつて、自分のクラスに戻っていった。

「晶、アレは誰だ？」

「晶、誰だあの子とどういう関係だ？」

「晶さん、あの方とどのような関係ですか？」

二人の質問は兎も角、一夏の質問がわからん。

「誰だよアレ。本当に鈴か！？ 鈴の形をした別の存在か！？」

「ひどいいわれようだな鈴音も」

「いや、だってあいつがあんなに素直に言うなんて何があったんだ。……いやその前にお前らってそんな仲良かったのか？ おれの記憶だと鈴も他の生徒と同じような対応だっただろ？」

二人の質問を無視し、一夏は怒涛の如く質問をしてきた。

「まあ、鈴音とは昨日の帰りに再開というのはどうかと思うな、お前の言った通り、小学校のときの対応は他の生徒と大して変わらなかったからな」

「だったら、なんであんな仲がいいんだ？」

「昨日いろいろと話したからだ。それより授業始まるぞ」

俺の一言で皆が自分お席にたついた、若干、いやかなり鈴音との関係が気になるようだ。

授業中、箒とセシリアが千冬ちゃんに叩かれ、俺のせいにしたが無視した。

午前の授業が終わり、鈴音と一緒に学食に向かった。

箒とセシリアは俺を睨みつける様な感じで俺に視線を向け、一夏は鈴音は偽者なんじゃないかと見ながら学食に向かった。

「お前、本当に鈴か？」

「あんだ、いきなり名に言ってるのよ？」

「鈴だ」

「何を根拠に言ってるのよ？」

「それだ、その偉そうな言葉使いが鈴だ」

「ほい」

「ありがとう」

俺は鈴音に鉄扇をわたし、鈴音はけ取り一夏にハリセンのように叩いた。

一夏はかなり痛かったのか悶絶してる。

「ちなみに、鉄扇を持っている理由はこれで叩くと地味に痛いからな」

「なるほど」「なるほど」

俺の何気ない言葉に箒とセシリアが納得した。

「私としてあんだこそ本当に一夏？」

その一言に箒も反応した。

「そうだな、以前と違って……」

「馬鹿になってる?」「」

グサツと刺されたみたいに一夏は落ち込んだ。

「晶みたいな非常識極まりない才能の持ち主と比較されれば誰でも馬鹿に見えるぞ」

「いや、お前の反応だろ二人が言ってるのは?」

「うん、なんかツッコミキャラみたいな」

「そうだな、何かとツッコミを入れてるし」

「お前らがボケるからだろ。まあいい、それより鈴が専用機持ちって本当なのか?」

「中国代表候補だからね。まあ本来の目的は遂げちゃったけど。それよりこの子は誰?」

「ああ、依然話したろ、鈴とい違いで転校したんだ  
さしずめ箒はファースト、鈴音はセカンド幼馴染ってとこだ」

「何かの続編なの私達は?」

「いや、なんとなく」

四人は質疑応答に夢中だが、俺は食べるのに夢中だ、そのため

「じっちゃん」

「「「はや!?!」」

「じゃ、俺は読書でもしてるから」

Side out

晶は昼食おえ、学食を出た。

「あんたらの所為で晶との昼食が台無しだわ」

「お前は晶とどういう関係だ?」

「貴方は晶さんとどういう関係ですか?」

鈴音の一言で晶との関係を聞き出された鈴音は。

「別に、貴方と同じようなものだよ箒さん」

笑顔で答えた。

「それにしても、随分となれなれしいですわね」

鈴音の言葉に若干落ち込んだ箒、

「(はあ)、も昨日勢いに乗って告白しなかったらこうなってたの

ね……)  
それより、あんた誰？」

一夏と篤は

( (デジャブ?) )

と同時に思った。

「私のことを忘れてもらわれては困りますわ！私はセシリア・オルコット。イギリスの代表候補生で「ふん、で私が晶に話しかけちゃ駄目なの？」

そ、そういうことではなく、淑女なら「晶は物じゃないよ。私達が何を言ってもどう接しても晶が決める事だし。なれなれしいのが嫌なら晶も拒絶するよ」

( (そもそも、初っ端から上から目線の態度を取ったセシリアのせりふじゃないな) )

一夏と篤は同時にツッコんだ。心の中で。

「晶がどんな態度を取ろうが、周りがどんな反応しようがアタシは自分の気持ちも接しかたもかえないよ」

鈴音はハッキリ言って、すっかり伸びたラーメンを食べ始めた。

「お前、本当に変わったな。中国で何かあったのか？」

鈴音の変わりように一夏が質問をした。



「確かに、中国で問題が起きたけど、今のアタシになったのは昨日かな。行方不明になった晶と念願の再会を果たしたんだから」

「そりゃあ、そうだが（以前なら篤やセシリアみたいに本音を言わずとごまかすと思っただけど）」

「……………」

「（晶にどんなに好きだと態度だけでアピールしても、見向きもされないのは昨日でわかつたし。とりあえず晶の立場と何を抱えてるかを知ってから、もう一度告白すると決めまし。うん、今は晶の事だけをみないと）」

「一人で納得した顔してるが、何考えてるんだ？」

「べ、別に。それよりあんた達は晶の事どう思ってるの？」

「「！！」」

「私は別に、ただクラスメイトでそれ以上は……………」

「わたくしは、少し興味があるだけで……………」

鈴音は「勢いって大事だね〜」みたいな気持ちになって、一夏にある質問をした。

「千冬さんはどうなの？ 一夏達の担任だよな？」

鈴音は晶が千冬にお酒を持っていくところを見ている為、千冬が晶の事をどう思ってるかを聞きだした。

「多分だけど、千冬姉は晶に気があると思うぞ。自分を倒した始末の男だし、いつの間にかちゃん付けで呼ばれても体罰はないし」

「それは、諦めただけじゃない？」

箒と鈴音が同時に答えた。

「俺もそう思うけど、でもなんでそんな事きくんだ？」

「別に、ライバルがいるかいないか知りたいだけ」

「そ・・そうか」

その言葉で箒とセシリアは危機感を覚えた。

「そういえば、一夏がクラス代表戦出るのよね？」

「ああ」

「じゃあ、遠慮なくぶっ飛ばすわ。晶の情報どころか本人がいるのを報告してくれなかったし」

笑顔でいう鈴音に恐怖を感じた一夏。

「おてやわらかにおねがいします」

「一夏の特訓は二人が見てるの？」

「そうだが」

「二人に特訓してもらった一夏を倒せば二人の評価が下がるから一石二鳥ね」

「一夏。特訓だ」

「そうですね」

「いや、俺まだ食べおえて・・・はい」

一夏は二人に連れられ食堂を出た。

「はあく、なんかあの二人他人とは思えない」

晶と再会し、告白してから大胆になった事を驚いているのは自分自身だと思っている鈴音。

「応援したいのかな」

晶と付き合い合えば、晶は三股。普通なら軽蔑やら嫉妬するが、晶が付き合ってる双子との写真を見たとき別に二股でもそれ以上でも構わないのかなと思いはじめた。

常識を壊す晶と一晩会話したのか、常識的な考えから離れ始めた鈴音。

ちなみにクラス代表戦まで一夏の幕とセシリアの特訓は厳しくなったのは言うまでもない。

「つーわけで、そしてクラス

対抗戦当日」

「貴様は何を言っている？」

「ノリで」

「そうか」

晶の答えに千冬は流した。

織斑先生もなれてきたな〜と関心を始めた幕たち。

「にしても、いきなり鈴音との勝負とは。なにか細工したの千冬ちゃん」

「どうして、私がそんな事をしなければならん」

「だってえーその方が面白いから。つーのは冗談で、俺がIS学園にいることを一夏が鈴音に教えなかった所為で鈴音がヤル気になってるからその気持ちを汲んでかなーと思ってるね」

「その為にくじをいじるのはどうかと思っぞ」

「まあ、そりゃあそうだけど。千冬ちゃんはどうち勝つと思っぞ?」

「一夏」「一夏さん」

晶の質問に。箒とセシリアは即答した。

「私はそうだな、鳳のほう有利だな、織斑は鳳のISの特徴を知らんからな」

「まあ、情報があるとないとじゃ全然違うからね。一夏がどれだけ成長したかだな」

そんな話しをしていると試合が始まった。

序盤は鈴音が押してたが、一夏も鈴音の攻撃に慣れたのか、動きがよくなった。

しかし、ここである問題が起きた。

アリーナのシールドバリアを突破したISが現れた。

「なんですか!?!? アレは!?!?」

『試合中止！ 織斑！ 鳳！<sup>ファン</sup> 直ちに退避しろ！』

千冬はマイクで二人に伝えたが。

一夏は拒否した。

「の前に、一夏の奴も「良くぞ此処まで来た。ほめてやろう」「ぐら  
いは言えんのか」

周りが騒いでいるのに、一人だけ冷静どころか、冗談をいえる晶に  
不審に思った千冬たち。

「まあ、余裕がないみたいだし助っ人に行くか」

遊びに行くみたいに軽くいう晶に千冬は。

「無駄だ、遮断シールドが完全ロックされてこちらから干渉は出来  
ん」

「あの壁を壊せばいいだけじゃね？」

「簡単に壊せるなら遮断シールドなんて呼ばれてないぞ」

「まあまあ、ここは魔王に任せて。おなごたちはここで待つがよい」

晶はケラケラ笑いながら誰もいない遮断シールドに向かった。

「いいんですか？」

山田先生は晶の行動に千冬に質問するが。

「神代をとめても無駄でしょう。ここは外部が遮断シールドの制御を取り戻すまでまつしかない」

そんな事を行っていると、モニターには扉の前に止まった晶が移っていた。

「どうやって、壊すきだあいつは？」

幕の疑問に三人は「IS忘れちゃった」と惚けて、帰ってくる晶を想像したが、

晶がキックボクシングみたいに動き始めたと思ったら、扉にけりを入れた。

そうしたら、扉が蹴り飛ばされ、そのまま遮断シールドを突破した。

「『……は……！……！！……！？……？……？……！……』」

モニターに映っていた映像に四人が驚いた。その中で千冬も三人と同じように声を上げた。

『な、なんだ!?!』

『あ、新しい敵!?!』

と二人はモニターの二人は驚いていたが、突破された遮断シールドから知っている顔が現れた。

『晶!?!』

『ちよつと、あんたISは!?!』

二人の言葉を無視して

『此処までたどりつた事を褒めてやる。だが、それも終わりだ!?!』

『『『『『『………何を言ってるん

だ!?!?』』』』』』

『お前、ふざけてないで早く逃げろ!?!』

一夏が叫んだと同時に、なぞのISは無慈悲に晶に超高出力ビーム砲で攻撃した。

『『あきら!?!?!?!?!』』

晶に攻撃が届く寸前、晶の回りに電気が走ったと思ったら地面から黒い壁が晶を守った。



『『な!?!』』』

その事で、一夏達も千冬達も驚いた。

『まあ、アクセラレータはさすがに酷だから、ミコちんの電気で遊ばせてもらおうかなイレギュラー』』

晶がそういうと、槍のような雷が謎のISの横を通った。

『どうした木偶人形？ 理解不能な現象でエラーでも起きたか?』

晶は笑みを浮かべ言い放った。

『なんだよ、それ!?!』

『見てわからん？ 電気、雷、以上!』』

『どうしてそんなものを放てるんだよ!?! もしかしてISの能力か?』』

『んなわけねえだろ。よくみる生身だぜ』』

『いやいや、服の中にISの部分が展開してるんじゃないのか?』

晶の答えに一夏は信じられず、自分で出した考えを言ったが。

『それはいいから、お前らは下がれ。後は俺がやる。こういうイレギュラーは大好きだからな』』



『無人機だ』

『違う!!! そっちじゃなくお前だ!!!』

『違う!!! そっちじゃなくあんたよ!!!』

千冬達も一緒になってツツコミたかったが、モニター越したため二人よりは落ち着いている。

『500円玉だが』

『~~~~~』

答えになっていないと叫びたいのだろう。言葉になっていない二人。

『正確には電気を使って音速の三倍で飛ばした超電磁砲レールガンだが』

『レ、レールガン?』

『ああ、つーわけで、生身で戦えるからお前ら離れてる。ぶっちゃけ数億ボルトぐらい出せるがお前らを巻き込まない自信がない。巻き込まれて死にたいなら別だが』

一夏と鈴音は納得していないが、晶から離れた。無人機は微動だにしていない。

『おいおい、こっちはハプニングでテンション上がってるのに、こ

れないでしょ？

ほら、俺一人だよ。早く攻撃してきなさい」

無人機に言い放つと同時に無人機も先ほどと同じように超高出力ビーム砲を放ったが、同じように防がれた。

『ちよつとちよつと、学習機能プログラムはついてないのかよ？

これ作った組織も余裕ないのか？  
はあっ〜』

晶は盛大にため息をしたと同時に無人機は空を飛んだが、

『ふふん。馬鹿の一つ覚えみたいに攻撃したら一気に決めようかと思っただが、どうやら違うらしいな』

晶は笑みを浮かべ、先ほどの自分を守った黒い壁を操作した。

「アレは砂鉄か！！」

「織斑先生？ どういう事です？」

千冬の言葉に三人は疑問に思った。

「神代はあの電気で砂鉄を操作して壁にして先ほどの攻撃を防いだんだ」

「砂鉄ですか・・・、でもどうやってあれほどの電気を？」

「わからん」

晶はそんな四人の疑問も知らず、磁気浮上や、空気中の水分子をブースターのように展開して無人機に向かった。

『もう少し楽しませてみるよ』

砂鉄が無人機の左足を切断した。

『さあー、後は右の手足しか残ってないぜ木偶人形？』

千冬達はただ驚愕するだけだった。生身でIS以上の戦闘する晶に。

無人機の動きはただ鈍るだけだった。自身に搭載されているOSでは目の前の現象の理解できず、再計算している。

晶はそんな無人機に飽きたのか、雷の槍で右足を切断した。

『さーて、期待はずれだな。まあちょっとしたハプニングを起こしてくれた礼だ』

そうすると、手を上にかざした。

『集え雷光』

すると、雲行きが怪しくなる。

『『『『』ら、雷雲！！！！！』』』』』』

晶 Side

アナライザーで無人機を調べたがアレイスターの学園都市製のものじゃなかった。

だったら、純粋にISのデータがほしい組織、そして無人機はISそのものを狙ったものだろう。

これ以上、遊べそうにない。

「さーて、期待はずれだな。まあちょっとしたハプニングを起こしてくれた礼だ」

俺は腕を上挙げて、雷雲を呼び寄せた。

「集え雷光……」

魔術の呪文のように言うが、魔術じゃない気分だけだ。それにしてもミコちんの能力は恐ろしいなと思いつつながらも、その能力を使おうとしてる俺って。

「まあいいや、これは出血大サービス  
雷鳴と共にちりな」

俺は雷を落としたが俺の意識も消えた。

意識が戻り、目を開ける前に薬品のおいした。  
あれ、気を失ったのか俺？

そう思い目をあけると。

「無茶をするね君も」

カエル顔の医者が目の前にいた。

「あんたは、冥土返し？　じゃあ学園都市か？」

「いや、君が倒れたと報告がはいったから、学園都市の医者である僕が呼ばれたんだよ」

なるほど、学園都市の人間の体を普通の医者に見せられないというわけか。おおかたアレイスターは衛星で戦闘をみていたんだらう。

「それより、気おつけないと。君の能力はあくまで再現だ。超電磁砲みたいに電気の耐性があるわけじゃない」

「ってことは、しってるのか俺の能力？」

実際は能力ではないが。

「ああ、報告書を見せてもらったからね。それと今言った通り、君の能力再現はあくまで体の外部に限った事だけだよ」

「ってことは、自動再生とか無理か。俺が気を失ったのは最後の攻撃で自分自身を巻き込んだ所為ってわけか」

「そうだ。さすがだね、レベル5の能力者の能力を再現できるだけの演算を持っている事だけはある」

「よく死ななかつたな俺」

「無意識の防衛本能だらう。無意識に体に電気まとい、雷をそらしたか、防御したんだらう」

なるほど、体に痛みがないという事は、雷を防御したが、音と衝撃で気を失ったということだな。



「ふあゝあ、それじゃあ、ベクトル操作で自分の血流とかは操作できないか……」

「いや、それは出来るだろう。それにしてもとんでもない事を考えるね君は。まあ目を覚ました事だし僕は学園都市にもどるよ」

「ああ、ありがとう」

「それじゃあ」

まあ、それより、日本政府はどうでるかな。あの戦闘の映像をみたら……、とか考えるうちに部屋に誰が入ってきた。

「晶、大丈夫か？」

ぞろぞろといつものメンバーが来たようだ。

「ああ、気を失っただけだから問題ない」

近くにあった時計を見たら、数日が変わっておらず数時間しかたっていないようだ。

「単刀直入にきく、お前が使ったアレは何だ？」

千冬ちゃんの言葉に全員が俺のほうに目を向けた。

どうやら、知りたいみたいだな。

「こちらの条件に従えば教えますよ？」

「……」

「条件は先ほどの戦闘映像の削除と、これから言う事は他言無用」  
緊張していたのか、俺の条件に目を丸くした。

「安心しろ、映像はお前が落とした雷でデータがぶっ飛んだっえ、私達以外はお前の戦闘を見れなかった」

「あーあ、そうなの。データがぶっ飛んだか……、ちなみにそのお咎めは？」

「はあく、あの無人機の所為になっている。くわえ、無人機は織斑達が倒した事になっている。ISの戦闘データも消えているから安心しろ」

「言いふらしても、精神科を紹介されるだけだからね」

俺はいつものように笑い、能力の事を説明した。

口調は普通で、だってめんどくさいから。

「まずは、都市伝説の超能力はきいたことあるだろ？アレを再現したようなもんだ」

「でも、あれってただのうわさじゃないんですか？」

真耶ちゃんはそう言うが、実際に目の前で起きた。

「まあ、わざと噂程度に情報操作したんだろうが、ISの存在の  
陰か簡単に隠せたんだろ。」

学園都市は総人口は230万、そのうちの8割学生だ。能力を持つ  
ているのは学生だけだが、俺が使った能力ぐらいの威力を出せるの  
は俺外に7人だけだ、

能力の種類はいろいろあるが、最も多いのは俺が使った電気使いそ  
れ以外は重力を使ったり、水を出したり操作したり、珍しいのはテ  
レポートが使えたり他だったり、つまそれ以上あるが説明が面倒な  
んであと自分達で想像して。

それと能力には0から5段階に分けられてる、レベル0は無能力、  
レベル1は低能力、レベル2は異能力、レベル3強能力、レベル4  
は大能力、

レベル5は超能力。6割は無能力だから、誰でも使えるわけじゃな  
い。それに能力は一人に一つだけだから俺みたいな例外がいるけ  
ど」

「例外とは？」

「一人につきひとつという理由は自分だけの現実が原因だ、自分だ

ハイソナルリアリテイ

けの現実とは能力発現の根本法則であり、能力者が個々に持つ感覚  
のこと。現実や常識から切り離された独自の感覚や自分だけの世界  
認識を指し、ある種の人為的な脳障害ともいえるからな、後からそ  
の感覚を変更することは不可能だが、俺の能力はそれが可能だ。俺  
の能力はアナライザー、計測器みたいなものだ。相手の自分だけの  
現実を計測しそれを再現をする、

だから俺は複数の能力を使うことが出来る例外だ。もつともつかえ  
る本当の理由は俺の演算能力がほかのレベル5並にあるからだ」

「なんで演算能力が関係してるんだよ？」

「強力な能力を使うには演算が必要なんだよ。レベルの高い連中は演算能力が高い。俺に演算能力がなかったら能力は使えないんだよ。演算能力が高くなければアナライザーなただの測定器だ。ああ、ちなみにレベル5の連中はどいつもこいつも頭がべらぼうにいいやつばかりだ。」

「一般の学生はよくてレベル2だ、それ以上は天才とか言われてもおかしくないし」

それをきいた一夏はがっかりしている。おおかた自分もなんかの能力を使いたいんだと思ったのだらう。

だが、それ以外の千冬ちゃん達はISを超える存在がいることになんらかショックを受けてるようだ。

「能力は今年の九月に世界に教える予定だった」

「九月？」

「九月には学園都市がやっている体育祭があるからな、体育祭は能力の使用が認められている」

「どんな体育祭だよ？」

「学園都市の全学校が参加する超大規模な体育祭だから、7日間かかるぞ」

「……………」

さすがに絶句したようだ。大覇星祭の規模は馬鹿げてるからな。

「その体育祭は以前までは身内だけしか知られていなかったんだが、今年はTVをつかって世界に放送するそうだ。もっともこれはまだ機密事項だが」

「はあ、とりあえずお前が使った能力の正体がわかった。お前がISに興味がない理由もな」

「学園都市では外みたいに女尊男卑じゃなく能力のレベルで優劣が決まるからな。学園都市の人間の殆どがISに興味がないな」

俺が動かした時、あのISの周りに人がいなかったからな。ISではなく俺達が目立ってたし。青髪もISではなくその操縦者を見たかったが、そんな人じゃいなかったし。

「とりあえず、お前達は寮にもどれ、神代も戻れるか？ もどれないなら今日は保健室で休め」

「んにゃ、無事だ。荷物をもって、自分の部屋に戻る」

「そうか」

「本当に大丈夫か？」

「ああ、モーマンタイだ。一人でいろいろ考えたいし」

俺は見舞いに来た連中より先に保健室を出て教室に向かった。

俺は教室に置いた鞆をもって、教室を出ようとしたら鈴音が待っていた。

「本当に大丈夫なの？」

「いきなりそれか？ 信用ないんだ俺……」

「当たり前じゃない、失踪経歴がある晶の大丈夫なんて信用できない」

きつぱりと言いつつ放った。

「はは、それはそつだ」

「あのさ、晶の立場って能力に関係してるの？」

告白のときに言った事か。

「少しは関係してる。それに多分いろいろと厄介ごとにクビを突っ込まないといけないからな」

魔術がらみの事件はまだ起きてないが、それも時間の問題だろう。鈴音を巻き込むわけには行かないし。

「私はまだ晶のこと」まだだ、今日起きたことが子供の悪戯程度と

思えるような事件にクビを突っ込むかもしれない、その後には言ってくれないか？

「ふ〜、あんたも頑固ね。何が起きても私の気持ちは変わらないよ」

「そつちも頑固だろ？ 学園都市にいる連中はなれてるが、普通はあんな能力を見せ付けられたら離れるぞ？」

「晶が二股かけてることに比べれば小さい事だと思っけど？」

「それは・・・違う。学園都市でも周りに不評だったからな」

「これから三股になる晶がきにするの？」

「きにしないな。俺は俺だし」

「だったら、そんな疑問すてて、帰ろ」

可愛い笑顔でいった鈴音の手を自然に握り、寮に戻った。

夜、いつものように千冬ちゃんと酒盛りの為、千冬ちゃんの部屋に入ったら、すでに飲んでいただけじゃなく、

俺が来た事に驚いていた。

「大丈夫なのか？」

「むしろ、飲まないと気分が悪くなる」

俺の言葉に呆れる千冬ちゃん。

「はああく、まあいい、今日は何だ？」

「菊酒。本来なら九月だけど、飲みたいと思って作つといた」

「……………どこでだ？」

「俺の部屋」

透明の入れ物に入ってた為鈴音に花を飾る趣味があるのかと聞かれたが、菊酒だと説明した。むろん呆れた顔をされたが。

「能力といい、菊酒といい非常識だな」

「それが、俺のロード」

千冬ちゃんは菊酒を飲みはじめた。

「相変わらず、市販と違って本当にうまいな」

「うれしい言葉だね」

「……………」

「何で学園都市は今頃になって能力を明かすって顔をしていますね？」



「するどいな。それに、すまんな折角の酒の席で」

「んにゃ、それが普通の反応だから気にしませんよ。それにそれは俺も気になるし」

「やはり、お前も知らないのか晶」

「ええ、俺だから外に送ったんじゃない、ISを動かしたから送ったと考えたいんですけどね」

「学園都市にも闇があるのか？」

「組織である異常に闇なんてどこも一緒でしょう。大きい小さいかだけで。もつとも学園都市が抱える闇はかなりの大きさだけど」

千冬ちゃんも裏の悲惨さをしっているのだろう。だから能力を使った悲惨な事件もあると気づいた。裏をしらない連中は願望のまなざしを送るが、裏を知っている人間はその能力で何かをやらされると感づく。

つまみがなくなった為、台所に向かい立ち上がった。

そしたら、急に後ろから千冬ちゃんに抱きつかれた。

「何かあったら私に言え。頼りにならんかもしれんが、お前の居場所くらい守れる」

「.....」

裏の連中なら俺より周りの連中を襲うだろ。それを知っているから

千冬にお言葉がうれしかった。

「お前はまた、何かを隠しているがそれでも構わない、だから少しは私を頼れ」

千冬が先ほど飲んでた酒の所為なのか、いつもと違う。

けど

「それは、教師としての「一人の女としての行動と言葉だ」……、最後まで言わせてくださいよ？」

「ふん、私を負かしただけでなく、常にからかつてる晶にはこれがちょうどいいだろ？ それにうれしかったんだぞ、初めてからかわれたり、なんの気兼ねもなく酒を共に出来る異性がいるというのは」

「俺は二股をかけてる奴ですよ、それに鈴音に告白されそれを受けようと思ってる奴だ」

「お前の能力や立場以前にお前の人格なら納得できる」

「うわゝ、常にひっぱたかれ、サイテーとか言われる覚悟があったのに、なんか無駄に終わってる」

「ふふ、鳳の奴も同じ答えをだすだろうな」

「もう少し待っていてください。鈴音にも言ったが、俺が関わるであろう間を把握するまで待ってほしいです」

「わかってるさ。お前の足手まといになりたくないからな」

「でも、さすがにびっくりした」

「なんだ？ 篠ノ之やオルコットの気持ちに気付いていて私の気持ちには気づかなかったのか？」

「千冬ちゃんは教師やその立場があるから、態度でわからなかった」  
年下にからかわれる教師として認識していたし。

「酒の席ぐらい千冬とよんでほしい」

「どんな酒飲んだの？ 本当に？」

そんな疑問を持って酒盛り再開したが、千冬の甘えんぼぶりに戸惑い、からかわれた。

酒盛りが終わった後、千冬ちゃんがのん出していた酒のアルコール度数にびっくりした。普段ならビールや日本酒程度だけかと思った。帰りの際には学園では今までどおりで頼むといわれた。

「なんか、今日は別の意味でサプライズだったな」

と口にして部屋に戻った。」



## 6話 能力の披露目（後書き）

ようやく能力の見せ場が・・・、  
後は魔術とか、それはさておき千冬先生のデレは迷った、これのお陰で数日間悩んだ、仕事中でも。

さて、ネギまのエヴァ達はもう少し後で登場です、アックアとの戦いより後との登場です。それよりヒロイン達に仮契約させようかと思っていますがいかがでしょう？アーティファクトのアイデアは全くありませんが、  
させるなら募集しようかなと思いますので。

7話 転校生、そして晶の正体 (前書き)

一万5000文字突破しました。

とりあえず、オカルト事件までこれぐらいの量です。

だつて早く魔術偏を書きたいからです。

魔術偏に入ったら文字の数はかなり減るかも。

あと、タイトルをつけることにしました。

## 7話 転校生、そして晶の正体

晶 Side

無人機が襲撃して溶かしてから数日。

とその前に、今言った無人機は電熱で溶けていたそうだが、千冬ちゃんには気にするなといったけど、やっぱり気にしない。

その、千冬ちゃんに転校生が二名来るから、クラス長として面倒を見てくれと昨晚言われた。

そのうちの一人は千冬ちゃんがドイツ軍に教官をしていたときになつかれたと説明された。

その子の前ではちゃん付けをしないでくれと頼まれた、理由は問題を起こすからだそうだが。

まあ、尊敬する人が年下（見た目だけだが）に馬鹿にされていたら誰でも怒るだろうし。

しかし、俺は面白そうだから初日だけ先生と呼びますといったら千冬ちゃんは頭を抱えた。

まあ、そんなんで、転校生が職員室で待っているから職員室に。

「おはようございます。織斑先生に呼ばれたんですけど？」

俺の開口一番に周りの教師達が騒ぎ始めた。

「神代君、頭大丈夫なの？」

「すぐに保健室、いや救急車を!!」

と、騒ぎ始めた。この学園にきて苗字＋先生と口にしたのが始めてだ、その為か教師達は驚いたようだ。

面白い反応だからたまにやるかな。転校生が周りの反応に驚いている。

何も知らないから無理はない。

「大丈夫ですよ。大西先生。俺は正常ですから」

さらに、混乱したが無視して千冬ちゃんのところに向かった。

「やっぱり、今まで通りの呼び方のほうがよかったかもしれん。(鳥肌が)」

「あ、あの……」

「ん！俺は神代晶。君達のクラスの委員長みたいなもんだ。何かあったら相談してくれ。周りの反応に気にする必要はないぞ」

「う、うん……」

「はあ、まあそういうわけだ、神代にはお前達の世話を頼んだ二人とも何かあったら私か神代にそうだしろ」

「僕はシャルル・デュノア。此処に僕と同じ境遇の子がいるから本国から転入してきたんだ」



「境遇？」

「僕も男だから」

「ああ、でも男にしちゃあ可愛すぎない？」

「ふうえー!!」

「ボーデヴィツヒ、お前も自己紹介だ」

千冬ちゃんがもう一人の転校生に命令するように強気に言った。  
かわいい反応だなと思っていると睨まれましたよ。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「オツケ」。はい。二人にお近づきのしるし」

俺はハンカチに包まれんだ箱を二人に手渡した。

「え・・・えと・・・」

「織斑先生 「ガタガタ」 にお世話を頼まれたから、お弁当を用意した。というのは建前で、転校初日のお昼は購買やら学食やらで時間をとりたくないだろ？ まあ、味は保障するから」

「ありがとうでいいのかな？」

「・・・」

(千冬ちゃんの方もいるから、睨まない)

(べ、別にそんなことは……)

千冬ちゃんの告白？からこうやって目で会話をしている。

「そ、それよりデュノアはフランスのボーデヴィツヒはドイツの代表候補生だ」

「それはまた(代表候補が二人面白い事がおきる前兆か？ くくく)

」

「神代は先に教室に戻っている、私達もすぐに行く」

「わかりました。織斑先生」

俺が先生というたびに職員室は騒ぎ始める。

(おもしれ〜。なんかはまりそう)

俺はクラスに向かった。

予断だが、千冬ちゃんはこの後、他の教師に俺が先生と呼んだことの説明に苦労したそうだ。

教室でクラスの連中に挨拶し、チャイムがなるまでたわいもない話をした。

千冬ちゃん達が入ってきて、連絡事項を話した後、転校生達の紹介をした。

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！しかも二名です！」

「「「えええええっ！？」「」」

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

転校生の一人、デュノアがにこやかな顔でそう告げて一礼あつげにとられたクラス全員、俺以外だが。

「お、男？」

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を

」

「きゃ」

「はい？」

「きゃあああああ　　っ！」

咄嗟に音を反射した。

一方通行には感謝だな。こんど何か送るか。

何がいいかな、脱引き籠り生活の書見たのを送るか？

そんな、くだらない事を考えても事態は進む。

「男子！三人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「地球に生まれて良かった〜〜！」

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

「「「「は、はい」「」「」」

「挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

千冬さんの言葉は素直に聞く転校生  
教官？

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も  
一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「」

「あ、あの、以上　　ですか？」

「以上だ」

できる限り笑顔でボーデヴィツヒに聞く山田先生だが、その一言に  
撃沈

「！貴様が　　」

千冬ちゃんにラウラの事は説明されたので、ラウラの行動が読めて  
いた。

「予想通りの行動だ」

俺は誰にも聞こえないようつぶやいた。

ラウラが一夏を殴ろうとした瞬間

「ポチツとな」

ノリでボタンを押すしぐさをとった。だってボタンなんか無いし。

一夏の椅子が真上に飛んで一夏の顔面が天井にぶつかり、そして落下。

「「「「「」」」」」」

千冬ちゃんと俺以外はキョトンとしている。

千冬ちゃんの場合は俺の仕業だと気付いたからだろう。

しかし、すぐに笑いを堪えようと後ろを向いた。

おそらく、周りの生徒だけじゃなく、転校生のラウラもキョトンしているからだろう。

自分が殴ろうとした人物が天井に激突したのだから、きまづいだろう。

「な・・・何が？」

一夏は何とか起き上がった。

「危うく殴られるとこだったな。何かあった時にお前の椅子に推進エンジンを取り付けたがこんなところで役に立つとは・・・」

「殴られたほうがよかったわ!! 千冬姉も笑いを堪えるならいっそのこと爆笑してくれ!!」

「す、すまない。(ラウラのあんな顔を見たのは初めてだな。あんな顔が出来るのか)」

「っーか、いつつけた？」

「最近は暇でついな……」

実際に着けたのはオモチャで、一夏を天井まで風で飛ばしただけだ  
が。

「お・・・お前な」

「クク・・・、ゴホンゴホン！ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でIS模擬戦闘を行う。解散！」

神代は先ほど言ったようにデュノアの面倒を見てやれ」

「アイアイサー」

「とりあえず簡単に、

コブが出来てるこいつのなは織斑一夏。俺はさっき言ったとおり。自己紹介は終了。

俺たちは男だから上の階の開いている更衣室に着替えたから。すぐに行くぞ」

「へ！？」

俺はデュノアの手をとり教室をでた。

「くっそ、コブの事で言いたいことはあるが今は着替えだ」

と、一夏はぶつぶついつて後に続いた。

「ああっ！転校生発見！」

「しかも織斑君、神代君と一緒に！」

「うち、500円がねえ」

「お前はアレをやるつもりかよ!？」

無人機での戦闘をみた一夏は超電磁砲のことは知っている。

「ああ、500円ないか？」

「あってもかさねえよ」

「???僕はあるけど。何に使うの?」

きょんとした顔でデュノアが言ってくる。

「駄目だぞ!!晶に今500円を渡したら、大量に死人が出る」

「????」

なんで500円で死人が出るのかわからない顔をしているデュノア。

「500円もそうだけど、何でみんな騒いでいるの?」



「男に飢えた猛獣化してるんだよ。それにデュノアのは転校生だ。珍しい肉かと思われてるんだろ？」

「お前、本当に関係者以外にはキツイな……」

一夏は目を細める。

「それより、前から来たぞ。挟み撃ちにあつたな。馬鹿が余計な知恵をつけ始めたか？」

俺の一言に一夏の顔が引き攣った。

「こつなつたら」。悪いデュノア!!」

俺はデュノアに一言謝った。

「へ!？」

デュノアを抱ききかえる。

女子達は大騒ぎになるが無視して。

「悪いが、カメラード戦友、ご武運を」

「?」

俺は窓から廊下を出た。

「って、飛び降りるのかよ？」

が、俺は降りるのではなく、一度の跳躍で上の階の窓に飛び上った。

「降りるんじゃないか上った!？」

「夏はタイミングよくツッコミを行うが、自分の事態に気付き。

「ぎゃあああ!！」

無事上の階についた俺は

「哀れなり」

一言つぶやいた。

「あははは」

デュノアは苦笑したが。

「それより、悪くないきなり抱きかかえて」

「あ。いいよ、なんか助かったしノノ。神代くんってすごい運動神経だね」

「ああ、別にたいした事じゃないぞ。それに俺のことは晶でいい」

「僕もシャルルでいいよ」

俺達は更衣室にはいり着替えを始めた。

「安心しろ、今女の子の着替えを覗く時間がないから」

「ぼ、僕は男だよ!!」

どうやら女の子という一言に反応したようだ。後半は言い換えれば覗きますよ言っただつもりだが。

「俺の股間センサーをなめるな」

「こ、股間!?!?!?!」

顔が真っ赤になった。

「というのは冗談で、さっきデュノアを抱えた時、やわらかい胸の感触が体験できたからな。なかなか気持ちよかったぞ」

親指を立ててみたが

「!?!」

「安心しろ。誰にも言わない。それに幸いデュノアは俺と同室だから何かとフォローできるぞ」

「……なんで協力してくれるの? 僕は皆をだますんだよ」

「ん、男が二人しかいない学園で女の子として入学すれば全く怪し

まれないのに、わざわざ目立つ男と偽って入学するには何か理由があるんだろ？」

「……」

「それに、縁えにしは繋がったし。これも何かの縁だ」

「えにし？」

「えんつてことだ。何か困った事あったら相談すればいい。助けてやるから」

「ありがとう……」

「ええ！？泣く！？」

いきなり泣きながらお礼言ってきたので動揺した。

「だって、うれしかったから」

「そっか、何かあったら相談すればいいから」

「うん」

「それより、早く着替えるか」

「あ、うん」

俺は裏技テレポートを使いスーツを着て、制服を脱いだ。

「俺は着替えを終わったぞ」

「ええ!?!」

驚いてる、驚いてる。

「僕より早いの!?!」

「まあ、裏技を使ったからな」

「う、裏技?」

「まあ、その内見せるから。それよりデュノアも早く着替えたほうがいいぞ。一夏はいつ此処につくかわからんし」

「う、うん」

俺が制服を片つけてる間にデュノアは着替えを終えた、丁度その時、一夏が着した。

「ぜえ……ぜえ……卑怯だぞ晶。自分達だけ……」

「おお、けっこう早かったな?」

「あははは……」

「は……早く……着替えないと……」

かなり息がきれてるな。

「じゃあねえ」

俺は一夏のスーツを取り

「デュノア、これが裏技」

「へ!？」 「?」

一夏の肩に手を置き、スーツをテレポートさせた。

「な、なんだこれ!？」

「消えた!？」

「スーツを直接お前の体にテレポートさせたんだよ。後は脱ぐだけだ」

「て、テレポート?」

「本当に便利だな」

「テレポートに関しては昼に説明するから。ほれもう一丁」

一夏がきているスーツ以外を一夏の手にテレポートさせた。

「うらやましい能力だ」

「能力!？」

「さっさと行くぞ」

「う、うん」

「ああ」

一夏が制服をロッカーに入れた後、集合場所に向かった。

その途中で、シャルルと名前で呼ぶようになった。

「ずいぶんとゆっくりでしたわね。スーツを着るだけで、どうしてこんなに時間がかかるのかしら？」

セシリアが言うが

「道が込んでる上に頭が痛いんだよ」

「頭痛持ちか、大変だな？」

「誰のせいだ!!」

「一夏の奴また何かやったの？」

「またって？」

鈴音も会話に入ってきた。

「更衣室に向かう途中で挟み撃ちにあってな、蹴散らしそうしたら一夏がとめた為、遅くなった」

「レールガンを撃とうとしたんだぞ？ こいつ」

「……………」

「うざかったからなそろそろ周りに飛んでいるハエを片つけようかと思っただけだ」

「……………」

「そこ、私語は慎め」

「ウィーッス」

「今日は戦闘を実演してもらおう。 嵐！オルコット！」

お前たちには戦闘を実演してもらおう。さっさと準備をしろ」

「どうしてわたくしたちが!?!」

「専用機持ちはすぐに始められるからだ」

「……………」



「お前ら少しやる気を出せ。                    アイツに良いところを見せられるぞ?」

千冬ちゃん、人を餌にしないように。しかし、二人は思いのほかヤル気が出てきた。

「それで、相手はどちらに? わたくしは鈴さんとの勝負でも構いませんが」

「ふふん。こっちの台詞。返り討ちよ」

「慌てるなバカども。対戦相手は                    」

キィィィン

「ん?」

上のほうを見ると、何か突っ込んで来た。

しかも、ピンポイントに俺のほうに向かってくる。

(ふふふ、向かって来る物は弾き飛ばす。ISを動かした日の二の舞にはならんぞ)

と、向かってきた物体を誰もいない方向に蹴り飛ばした。



置き土産をおいた。

「ちょっと!?! やはりわたくしが!?!」

「まで、私が運ぶぞ!?!」

「はあく、あの程度でやきもち? 器が小さいわねあんた達?」

「何を!?! この貧乳!?!」

ピクッ。

「晶に何に言われてもいいけど。あんたらは別よ!?!」

後ろで爆弾が爆発したようだ。俺は気にせず真耶ちゃんを保健室に運んだ。

授業にもでつて来たときは千冬ちゃんに睨まれた。

シャルルは苦笑していて、一夏と他の生徒は震えていた。

例外は暴れた三人は正座させら、ラウラは俺を睨んでいた。

「鎮火した?」

「自分からやっというてその台詞か神代?」

「ごめんなさい。反省は数年後します」

「もういい、専用機もちは織斑、オルコット、デユノア、鳳、ボーデヴィツヒだな。では5人グループになって実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやること。いいな？ では分かれ」

「織斑君、一緒に頑張ろう！」

「わかんないところ教えて」

「デユノア君の操縦技術見たいなあ」

「ね、ね、私もいいよね？同じグループにいられて！」

などと、混乱しそうになったので

「悪いけど、出席番号順に一人ずつ各グループね。嫌なら正座、或いは明日は小テストで」

と、言ったら有象無象みんなはそれぞれの専用機もちのグループはすぐに出来上がった。

「神代は遅れているグループの補佐をしてくれ」

「合点承知」

「頼むから真面目に返事してくれ」

ラウラが睨んでくる。

(ちゃんと先生と呼んでますよ千冬)

(／／／／)

ラウラ以外は実習で千冬ちゃんに気付いていない。

ラウラ以外はすんなり実習が出来ていた。俺はラウラのグループを手伝ったが、ラウラはずっと俺を睨んでいた。

授業が終わり

「なあ、俺おぬしと会ったことあるん？」

「貴様のような奴とはあったことはない」

「なら、親の敵みたいに睨むのはどうして？」

「貴様が邪魔をした所為だ」

「邪魔って、今朝の事。一夏を殴って、きまづい雰囲気にならずの処置なんだが。お気に召さなかった？命は有限だ、楽しまなきゃ人生損だぜ」

「ふん」

ラウラはソッポむいて教室に戻った。

「何を話しをしてたんですか？ 晶さん」

「私達にも聞かせてくれないか？」

「相変わらず以嫉妬深いわね」

「そうだな、俺も気になるし」

「なんだ、一夏は真耶ちゃんの体を知りたいの？」

「そうそう、どんな風だったってちがうわー！」

一夏のツッコミのレベルが上がった。

一夏はノリツッコミを的確に覚えた。

晶はスルーを使った。

「やわらかかったな、寝ている隙にいろいろって、俺のツッコミを無視するな」へいへい。その二人。保健室には先生がいたから何もなかったぞ」

「……………ギロツ」

「晶もからかわないの」

「そうだな、で何のようだ皆して？」

「皆で屋上で食べないかと誘いに来たんだよ」

「夏が疲れた様子で言ってきた。」

「かまわんぞ」

「夏以外は弁当だ。」

「なんか、俺だけ仲間はずれ？ 晶って弁当作る日がめっちゃくちゃだよな？」

「朝起きたときの気分で決めるからな。昨日は千冬ちゃんに転校生の面倒を頼むといわれたから、シャルルとポーデヴィツヒも作ったからな」

「気まぐれすぎるぞ」

「ん、晶の分の酢豚作ったけど、食べる？」

「いいのか？」

「うん、晶に作ったから」

「んじゃ、お言葉に甘えて」

「晶さんもわたくしのもどじゆぞ」

「晶、私のもどじゆだ」

「少しは一夏に分けてやれ」

「そじゆですわね。一夏さんもどじゆぞ」

「お、お」

セシリアのサンドイッチを食べた一夏は

「……………」

「どじゆでじゆじゆか？」

「お、おいしじゆじゆにいます」

「なら、俺もいただじゆか」

と云って、口にしたが。

「まじゆい」

「ええええ！」

「晶!？」

「「「即答なんだ」」」



「とりあえずセシリア食ってみる」

「は、はい」

自分で作ったサンドイッチを口にした瞬間。

「%&\$#%&%&%」

「ん」

苦しそうなのでお茶を渡したら、すごい勢いで喉に流した。

「はあ・・・はあ・・・その、すいませんでした」

「一夏、こういう場合はハッキリといったほうがいいぞ」

「そうね」

「そうだな」

「そうだね」

「俺が悪いのか」

セシリア以外は同意した。

「感想だけはな、セシリアも落ち込むな。味オンチというわけじゃないから十分に成長できるぞ」

「そつでしようか？」

「そつだ、俺の昔の知り合いなんか味オンチで調味料の量が洒落にならん。レシピどおりに作ればおいしいのに自分のアレンジをいれると破壊的な味だ。」

くわえ本人は料理好きだから性質がわるい。そいつが料理担当の時は一種のギャンブルだ。レシピ通りかアレンジかと口にするまで緊張しっぱなしだ」

「」「」「」「……」「」「」「」

「ふああ（まあ）、ごくん

そいつが造ったのに比べればまだ食えるほうだな」

と、言いながらセシリアのサンドイッチを平らげてやった。

「って、いつの間に!?!」

「あの量を!?!」

「もったいないだろう。ほい、セシリアは俺の弁当を分けてやるから」

「で、ですが……」

「遠慮するな、これが嫌なら一夏のパンを奪えばいいし?」

「それは勘弁してくれ」

一夏がマジ顔で訴えてくる。

「冗談だ。俺には鈴音の酢豚もあるしな」愛が愛を『重過ぎる』  
って理解を拒み　　」俺の携帯か。食事中ですまんな」

俺は一言いって、携帯のディスプレイを見た。そこには前副会長の  
名前が映っていた。

（実家の用事が終わったか）

俺は通話ボタンを押したら

『これはどういふことか説明してもらおうよ！！！！！！』

俺は事前に耳から話していた為、ダメージは受けてない。

「どうしたん。実家の用事は終わったのか会長」

『それよ、なんで私が会長になってるのよ？』

『いや、いろいろあってな』

『今どこ？』

ニヤリ

「学園の屋上」

『そこで待つてないさい』

「ちなみに、IS学園って聞いてないか。うん、俺は悪くないな。勝手に電話を切ったあいつが悪い」

「」「」「」「」「」「」「」「」

「誰なの？」

鈴音以外は引き攣っている。

「元生徒会副会長。俺がこの学園に来たんで、本人はしらず会長になったんだよ。まあ、元会長の俺が推薦したからすんなり会長に任命された。本人は実家の用事で学園は休校してたからな。どうやら今日復学したようだ」

「晶って会長やってたの？」

「シャルルは知らなかったな、一年のころからやってたんだよ」

「すごいね」

「いろいろと目的があったからな」

「目的？」

「ああ、学食と購買の価格を減らしたり、面白いイベントとか出来たから、いい暇つぶしになったな」

暇つぶしって顔をしながら苦笑している皆さん。

「愛が愛を『重過ぎる』って理解を拒み　　」

そんな話しをいると電話が鳴り始め、通話ボタンを押して先制攻撃をした。

「待て、今回はセツちゃんが最後まで話を聞かず電話を切ったのが悪いぞ」

「く……、そうね、とりあえずどこにいるの？」

「実はかくかくしかじかで、IS学園の屋上」

「晶、可愛いそうだからちゃんと説明を『バカ四天王の三人の所為で、ISを動かし、IS学園にかよつことになったのね』  
わかんのかよ!？」

「夏はわざわざツッコミを入れる。実際はテレパスで教えた。」

「まあ、すまないと思ってるが、俺の後任は真田設子しかいないと冗談で言ったら、マジに受けちゃって」

『……、まあいい、けど、晶が進めたイベントはどうするんだ』

「安心しろ、来年の卒業式は今年の卒業式を手本にすればいい。クリスマスは俺もそっちに戻ってフォローする。  
場合によっては、生徒会の指示をだすから」

『それならいいが、本当に頼むぞ。何かあったら連絡を入れるからな』

「ああ」

会話が終わったが

「晶が通っていた学園って、クリスマスに何かやっているのか？」

「いや、俺がいろいろやって、クリスマスに文化祭みたいなのをやるんだよ。今年からあの学園は文化祭を二回増やしたからな」

「……………二回!?」「……………」

「ああ、卒業式に、クリスマスの日にな。学園都市の8割以上が学生だから結構盛り上がるからな。苦労したぜ、

学園長を脅したり、取引したりして、なんとか予算を確保したんだよ。あの学園は中学と高校が一つのめずらしい学園だからな、後三年は楽しもうかと思っただよ」

「脅したのかよ？」

「まあな、それぐらいしないと文化祭クラスの出し物が出来ないからな。あいつらと馬鹿やるのは結構楽しいからな」

「あいつらって、電話の子が言ってたバカ四天王？ その人達の所為でISが動かしたっていったからよく遊んでたの？」

シャルルが質問してきたから、四人の事を話した。

「ああ、生徒会がないときはよくゲーセンやらやってたからな。そのバカ四天王のうちの二人は寮の隣人だからな。ちなみにバカと言われる所以は唯の問題児と言うことだからべつに頭が悪いわけじゃないな」

「問題児って？」

「四人全員つてわけじゃない、一人はそいつらに巻き込まれ四天王の仲間入りをさせられた不幸少年の俺の親友。」

残りが問題児でな、リーダーが性質が悪い。なんせ女の子の下着を抜き取るからな、上下問わず、しかも能力は待ったくつかわないと言つかそいつはレベル0で能力がなかったが、その所為での残り二人にリーダーやら師匠と慕われてるんだよ」

ちなみに鈴音達にはシャルルに能力の事を教えたことをいった。

「スリかよ……」

「でも、晶さんはそんな人達と遊んで会長の評価は下がらないのですか？」

「それ以上に学園に貢献しているからな、今年は入学希望者が4割増えたし。卒業式にやった卒パ（卒業パーティーの略）がいいPRだったからな。それに、学園全体の成績も上げた。くわえて体育祭では上位に入選させたからな、教師は俺の味方だし」

「お前、その内学園を乗っ取れるんじゃないのか？」

「その内じゃなく、今すぐに乗っ取れるぞ。といつても乗っ取った後に学園都市そのものに危険視されるからやらないし、興味がない」

その言葉に沈黙した一夏達。

「意外なつて顔だな」

「晶なら魔王の如く乗っ取つて、高笑いしそうなんだが……」

「興味ないことに力はつかいなたくないからな、それに俺の目的は俺の卒業式をド派手に決める事だ。」

「なんか、納得」

など、俺の話で昼は終わった。

授業もおわり、シャルルに寮の部屋に案内した。

その途中、ラウラに空の弁当箱を返された。そのときの台詞は「味は悪くなかった」とそっぽ向いていた。

俺のシャルルは内心苦笑していた。これからも作つてやろうかと言つたが。

「必要ない」といって、自分の部屋に向かった。

まあ、ラウラが一夏にちょっかいかけて面白い事してくれることを



期待するか。

だがラウラがちよっかいをかけた相手が一夏から俺になるのをこの時は思いもしなかった。

「此処が俺達の部屋だ」

「けっこう、広いね。学園の寮だから、もう少し狭いと思ったけど」

「その辺は各国の血税を無駄に使った結果だな」

「クス、そうだね」

シャルルは苦笑しながら、ベットに座った。

「晶に聞いてほしいんだ」

「シャルルが男装している理由？」

「うん。晶に更衣室で言われた事うれしかったから、晶に全部知ってほしいんだ」

「全部・・・ゴクン」

というリアクションをとつたら。

「ちちちがうよ、そつちの全部じゃないよ。晶のエッチ!! / / / /」

「あゝれ、シャルは何を想像したのかな？ 俺はどんな重い話しか 覚悟を決めてただけなのに」

「……晶って意地悪だよ / / / /」

顔を真っ赤にして、むくれるシャルル。

「でも、少しは気分が和らいだら？ からかう前まで嫌われたら どうしようって不安な表情をしてたぞシャルは？」

「へ？ そっか、ありがとう晶」

自分がそんな表情をしていたと言う自覚しているシャルはうれしそうに笑って御礼を言ってきた。

「シャルって？」

「シャルルは男の名前だろ？ シャルならどつちでも違和感ないし」

「シャル……シャル……えへへ」

「おーい、もどつてこー」

「ハッ、そうだった、僕がIS学園にきた理由を話すんだっ」

意外とノリがいいのか？ けどすぐに真面目な顔になって語り始めた。

「まず、僕が男の振りをしてIS学園に入った理由なんだけど、実家の方、デュノア社の社長である僕の父から命令されたからなんだ」

「実家ねえ、シャルは養子か何かか？」

「引き取られた事は正解だけど、ほかは違うかな  
僕は愛人の子供なんだ」

「それはまた」

「結構冷静だね」

「まあな、シャルは知らないだろうけど学園都市には表向きに出来ない実験をしているし、それをとめた事もあるからな、  
もともとそれは、学園都市以外でも一緒だけど。だからかねえよ  
ほどの事が起きないと驚かなくなっただよ」

「そうなんだ」

「ああ、話しは戻すとして、その血の繋がった息する肉片の命令で来たのか？」

「うん、ツツコマいなよ晶にあって僕の常識が壊れたから、その程度ではツツコまないから」

「でも顔色を変えない所見ると、いい親父さんどころかその家族全体にいい思い出がないんだな」

「うん。奥さんには殴られるし、あの人とは二回ほどしか話しをしていないからいい感情はないかな」

「けど、それならチャンスだな」

「え!？」

「常識に縛られると、視界が狭くなるいい見本だな。シャル、特記事項第二一はなんだ？」

「え?」

俺は生徒手帳の特記事項第を見せた」

「これって!!」

特記事項第本二十、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする

「これから三年もあるんだ、抜け道はある。それに場合によっては学園都市の統括理事会の連中をおどして、シャル一人ぐらいかくまうのは簡単だし」

「統括理事会?」

「学園都市を統括する理事会の連中の事だ。どいつもこいつも気に入らない連中ばかりだし、脅す事に関しては全く躊躇しないしな」

「そんな、そんな嫌な人達なの？」

俺が嫌悪感を出しているのが不思議かシャルが聞いてくる。

「ああ、さっき言ったように、表向きにできない研究などを黙認どころか進める奴もいる」

「……」

「シャルは学園都市にくるなら歓迎するぞ。俺は一年で戻るし。一人所か数十人養える金があるからな」

「そういえば、そんなことを言ってたね。晶の家ってお金持ちなの？」

「いや、ただ学園都市の学生達は全員奨学金を毎月もらってるんだよ。俺の場合は毎月千五百万近くかな」

「せ、千五百万!？」

「ああ、レベル0だが、威力はレベル5並だからな。くわえていくつかの研究にも貢献してるからそのお金も合わせると5億ぐらいだった」

「そ、そうなんだ」

「だから、人一人分の人生ぐらいの金はほんと出せるぞ」

「僕ね、この学園にきて、晶に出会ってよかったと思ってるよ。この二年間は人形のように生活してたから、僕とりあえず自分で探してみるよ、他の道を、それでも何とかかなりそうになかったら晶を頼っていいかな？」

俺は泣きそうなシャルを抱きしめ

「えー！」

「泣きたいなら泣けばいい、何をやってもシャルはデュノアに戻る必要ないんだから」

「……うん……ありがとう」

シャルが泣き止むまで頭をなで続けた。

「落ち着いたか？」

「うん、ごめんね」

「じれづらいはいいな」

シャル Side

晶に全部話したおかげで肩の荷が下りた感じがした。

今日あったばかりの男の子。少しエッチで意地悪だけど周りに気を  
使う優しい人。

そんな事を考えていると

ああ、晶の事を好きになっただんだなと自覚してまった。

晶の周りにいる女の子達もそうかなと思いつきながら彼女たちのや  
り取りを思い出した。

篤さんとセシリアさんはその思いを隠そうとして強気に出ている、  
鈴音さんは見て目より大人びているやり取りだったな。

うう、僕が一番不利だ。

ど、どうそしよ、でも同じ部屋だから少しは有利かな。で、でも

「お〜い、シャル。戻って来い〜」

「へ？あ、晶！？／＼／＼」

考え事に夢中で晶に呼ばれた事に気付かなかったようだ。

「お風呂入りたくないか？」

「お・・・風呂？ でも男子は使えないよね？」

「寮の風呂はな、ないなら作ればいいか持ってくればいい、それが

自前を使うかだ」

「いくらなんでもそれは無理じゃないのかな。常識的に考えて」

「まあ、半分は冗談として、シャルは入りたくないか？」

「それは、入りたいけど・・・」

「なら、決定だな。いやゝ楽しみだ。（シャルはどんな反応するかね」

晶の手に少し大きめのフラスコが現れた？　というかテレポートで持ってきたのかもしれないけど。

「じゃあ、行くか」

晶はフラスコを机の上に置き、私の手を握った。

「あ、晶／＼／」

僕が驚いた瞬間に地面が光り出した。

急にまぶしくなったので目をつぶった。さっきまでと違い気温が変わっただけじゃなく、風の音が鮮明に聞こえた。

不思議に思い、目を開けたら、そこにはどこかのリゾート空間があった。

「え！？　???　えーーーーー！？」



僕は夢でも見ているの？

「なにこころー！ー！ー！ー！！？？」

「ようこそ、俺のダイオラマ魔法球別荘へ」

晶の別荘？

晶にあつて、僕の常識が壊れたが、でもこれは僕の残った常識のかけらまでを木っ端微塵にされた。

「これは魔法で作った空間に、このリゾート空間をぶち込んだんだよ」

マ・・・ホ・・・・・・・・ウ、マホウ・・・魔法！！

「ま、魔法！？」

超能力の次は魔法！？

頭がこんがらがってきたら晶は

「とりあえず、中に入って、お茶飲んで、落ち着こうか？」

「うん・うん」

誰もいない旅館に案内され、晶はお茶を出してくれた。

「とりあえず、落ち着く為にハーブティーにしたけど、大丈夫か？」

「うん・うん」

晶が出してくれたハーブティーはおいしく、かなり落ち着いてきた。

「さてと、さっき言ったようにここは魔法で作った空間だ。細かく説明すると面倒なんで、割合だけど、魔法も存在する」

「学園都市って魔法も教えたりするの？」

「いや、俺は特例、本来はあるのは魔法ではなく魔術だが」

「魔術？ 魔法とは違うの？」

「厳密は違うな。細かく説明すると頭がこんがらがっていくからな、簡単に言つと魔法は魔術で実現不可能な神秘だ。一般人に魔術をおしえるなら魔法という単語がわかりやすいからな」

たしかに、最初に魔術と言われてもぴんと来ないかもしれない。アニメや漫画、小説やファンタジー映画など魔法という単語はよく聞くから。

「別世界じゃあ魔術と魔法に違いはないだろ言っつがこの世界じゃ魔法と魔術の違いは今言ったとおりだ」

「……………別世界？」

「ああ、いずれあいつらに説明するし、先にシャルに答えを見せるか」

と、いった晶の姿がいきなり小さくなって幼い子供姿になった。

「俺は元は魔法使いで、この世界に来て超能力を覚えた。つまり俺はこの世界の人間じゃない、それだけではなく見た目どおりの年でもない。」

実際は忘れたが、三桁所か4桁はさすがにいつていないだろうってっている

木っ端微塵になった常識が風で飛ばせれたよお母さん。

そんな事を思っていると、晶はすごく真面目な顔で

「怖いかな？」

「へ!？」

なぜ、そんな事を聞くのか理解できなかったが

「何百年生きた化け物だぞ。魔法も使える、能力も使える。くわえ俺はこの事を隠している」

晶は真剣なまなざしで僕を答えを待っている。僕は自分で化け物と言った晶にカチンと来て

「晶は化け物じゃない。確かに普通の人とは違うけど晶は優しいよ。僕の事を考えてくれたり、気を使ってくれたり。僕は魔法使いや能力を伝えるから晶を好きになっただけだから。化け物じゃないよ」

「は？」

「へ！？」

ボクハナンテイッタノ？ 自分の今の台詞が頭にリピートされた。

「晶は化け物じゃない。確かに普通の人とは違うけど晶は優しいよ。僕の事を考えてくれたり、気を使ってくれたり。僕は魔法使いや能力を伝えるから晶を好きになっただけだから。化け物じゃないよ」

「////////////////////」

「あゝ、そのなんだ、俺の正体をしても、好きだと言ってくれるのはうれしいな。うん。でもさすがにあって初日の女の子に言われたことはなっただな」

「じ、ごめん。いきなりで////」

「全く、この世界に来てから女関係が激変してるな」

晶は苦笑しながら呟いた。

「この世界でこれを知っているのはシャルで三人目だ」

「なんで、僕に教えたの？」

自分のいった事は本当の事だし撤回したくないと言う気持ちがあったけど、それ以上になんて迷惑しかかけてない自分に教えたのが疑問になった。

「シャルだって話したろ自分の事。それに話しをするときに嫌われてもいい覚悟って表情だったからな。俺と重なってみえたからが大きいな。」

本来はお風呂を使わせる為に魔法使い問い事だけを教えようと思っただけど。シャルも勇気出したんだし俺もなと急に思ってた、お昼に一夏がいったように気まぐれだから俺は」

「気まぐれすぎるよ」

「自覚してる」

おそらく、本当のことだろう。幼い姿にならなくてもよかったのに、幼い姿になった。

「僕達がいる此処にも色々な世界があるの？」

晶が言ってる単語で気になった事だ。

「まあな、いろいろ存在する。ちなみに正体を隠したのはこの世界が始めてだ」

意外な事をいった。

「なんで？ この世界って危険なの？」

「ん？ いやいや、ただな知り合いに君は考え方が一般人とかけ離れてると言われてな、その後のことは思いませんが、いやおそらく自分で消したんだろうな記憶を。まあ思いませんがそいつに学校と言うもの通えばいいと言われてな、知り合いになった連中がいる世界より他の世界のほうがいいだろうと思ってな。学校に入るためには何が必要かと調べれて、正体は隠したほうがいい考えただよ」

「学校に通った事ないの？」

「ああ、世界から世界へと旅してきたからな、中には数日で他の世界に行く事もあれば数年、数十年いた世界もあるが、その世界が変わる節目を見る為だからな。学び舎などに通うという発想は全くなかったし」

「そうなんだ、うらやましいな。いろんな景色を見たんだね」

「ああ、常識などかけらも役に立たない世界もあったしな。それにしても、以外にと受け入れるのはやいなシャルは」

「うん、晶に勢いで告白しちゃったし、それに晶は晶だよ」

「（レナとニナといい、全く、これじゃあ鈴音や千冬も同じ事をい  
いそうだ）」

「それで、返事は・・・」

「ああその前に、俺は恋人は二人、それに鈴音と千冬ちゃんに告白  
されてるんだけど・・・」

「鈴音さんと織斑先生は知ってるの？」

「冷静だな？」

「うん、晶の所為で僕の常識は木っ端微塵になった上、風に飛ばさ  
れて消えちゃったもん。なんか普通に受け入れてる自分に驚いてぐ  
らいだし」

「はは、なんか気にしてた俺がバカみたいだな・・・」

「一般のひとなら軽蔑するけど、晶なら納得で来ちゃうからだと思  
うよ。晶のそばにいらるとなんか落ち着くし」

これは僕の本音だ。晶にあったのは今日が初めてだけど、すごく安  
心する。

「そっか」

「三人って言うってたけど、他の二人は鈴音さん達？」

「いや、最初の恋人のほうだよ。もつとも二人はシャルと同じ正体を知ってから告白してくれた。鈴音や千冬にはまだいってないんだよ」

「嫌われるのが怖いのか？」

「そうかもしれん。いや、わからんな実際には。正直いって好意を持つてくれたお前達を守る為なら、残虐な事が平気で出来るし、その所為で嫌われてもいいと思ってるし。異性に興味を持ったのはこの世界に来てからだから、よくわからないんだよ」

「今まで、全く興味なかったのか？」

「ああ、それどころか男も女も関係なしに気が合ったら親友って感じだからな。自分でも異性に関して此処まで変わったことに驚いている」

「なんか、以外」

「そうか・・・、さてと長話は此処までにして風呂にはいるか。好きな風呂を使ってもかまわないから」

「どれくらいあるの？」

「八ヶ所」

「はは、出来れば晶と一緒にいいかな。道に迷いそうだし」



「そつか、男女別々に作ってある風呂ならこの中の露天風呂でいいか」

「何でもありだね」

僕は晶についていき、お風呂にはいった。

「晶に告白したんだよね・・・僕」

「こんな、俺でもいいならシャルを守りたい。これは俺の本音だ」

隣から聞こえてきた声に

「僕の気持ちは変わらないよ晶。僕は晶と一緒にいたい」

「そつか、これからよろしくなシャル」

「うん／＼／」

「フランキシヌス」

「え」

「これが、俺の本名だ。これを知っているのはシャルで四人目だ」

さっき言った恋人達は納得できたけど、

「もう一人は……?」

「俺の親友だ。そいつのお陰で俺は二人に出会えたし、学校にまた通うと思っただけだから。そいつには魔法や魔術関係はまだ話してない話せばそいつは事件に嫌でも巻き込まれるからな」

「そうなんだ。晶が親友ってよぶその人と合ってみたいな。もちろん恋人達とも」

「恋人のほうは双子の姉妹で両親と一緒に海外にいるけど、当麻のほうはこっちから会いに行くのが手っ取り早いかな」

「楽しみにしてるよ。それにしてもフランキシヌスっていうの?」

「当麻のほうは晶に慣れてるから晶と呼ばれてるけど、二人にはフランって呼ばれてる」

「僕も呼んでいいかな?」

「ああ、むしろこの世界に来る前はフランって呼ばれてたから全く問題ないぞ」

「そっか、フランか。次は僕の番かな、僕の本名はシャルロット」

「それがシャルの本名か?」

「うん、シャルのほうが親しみがあつてきに気に入っちゃったけど」

「そっか。あらためて、これからよろしくなシャル」

「うん、よろしくフラン」

この後、フランと夕飯を作って一緒に食べた。

「お母さん、僕は幸せだよ」

と、呟いて眠りについた。

## 7話 転校生、そして晶の正体（後書き）

今回は魔術バトルですのでお楽しみに。

多分、長くなったらそのまま掲載させるか、分割するか迷っていますが。

### キャラ紹介

真田設子

AXLの恋する乙女は守護の盾の設子さんです。

この作品では副会長で主人公の無茶に付き合ったタフな人という設定。

ナイフによる接近戦は健在だが使う予定はない。

バカ四天王

メンバー 土御門、青髪、当麻そして名前は出てないが加茂 寿士

加茂 寿士はゆずソフトのEXEのキャラ。

家族設定などはそのまま魔術師の設定もそのまま、出番はあるかもしれない。女の子の下着を抜き取る特技がある為、土御門や青髪に師匠、リーダーと呼ばれ慕われている。

このように、ゲームキャラがサブとしてちょっとだけ登場します。

知っている人は何人いるか・・・、そして知らない人で興味がある方はWikiや画像を名前で検索してください。

誤字、脱字、感想など受け付けております。

## 8話 ラウラとの戦闘、晶の過去（前書き）

今回は魔術戦にいきませんでした。いけば2万文字超えるし

そんでもって、タイトルの通り主人公の過去の一部です。

ネタバレしますと機動戦士ガンダム00の劇場版です。

それを、見ている方々じゃないと、今回はわかりづらいです。

それど、00も原作と違って、ニールやクリス達は生きています。  
あしからず。

## 8話 レウラとの戦闘、晶の過去

シャル Side

学園に来てから一晩たった。

「そっか、IS学園の寮だった。・・・フ、フランに告白したんだよね僕／＼／」

昨日の出来事を思い出したシャルは顔を赤くなる、がそれ以上に自分の常識がなくなった日だと考えたら苦笑した。

「魔法に能力か、それにフランの子供姿可愛かったな」

と、ルームメイトの子供バージョンを思い出した。

「いろんな服を着せたら似合うだろうな」

「そっか？」

「そっだよ、かわいいし」

「まさかと思うが、女装させるといわないよな？」

「フランが嫌がったらやらないけど、それも似合うと思うなって、フ、フラン!？」

「おはよう。お姉ちゃん」

子供姿のフランが笑顔で挨拶してきた。昨日はお風呂に入る前に何時もの姿に戻っていたが話のインパクトですっかり気づかなかったけど、僕はそんな事より

「かわいいよう」

と、僕は本能全快で子供フランを抱きしめ頬擦りをした。

子供姿のフランの頬っぺたは綿の用にやら若いため、思わず数分ぐらい頬擦りした。

「あゝ、シャル。とりあえず。俺、委員の仕事があるから、早く朝食をとりたいんだが」

「あゝ、ごめん」

「いいよ、シャルの肌も柔らかかったから、気持ちよかったし。そこに胸も」

「フ、フランノノ」

フランはケラケラ笑いながら、元の姿に戻っていた。

「じゃあ、俺は先に朝食を採って学園に向かうから、シャルはゆっくりしているといいぞ。まだ時間に余裕があるからな」



「う、うん」

フランは部屋からでていった。

フランにからかわれても、

何時もの姿は、そばにいと落ち着くし、一緒にいと楽しい子供姿は、すごく可愛く、そのまま抱きしてたくなる。

「う、一日で虜になっちゃったよ」

ラウラ Side

朝食を食べている途中で、他の学生達が学年別トーナメントで盛り上がった。

「くだらん」

そんな事を言っていると、学生達は誰が優勝するかの話をしていった。

「やっぱり、神代くんかな？ 織斑先生に勝ったんだから、学生では最強じゃないのかな」

なに！？ 教官に勝つただと！？

あの、へらへらしている男に教官が負けたと聞こえてしまい。

「その話しは本当か？」

「へ!？」

呆気にとられている生徒に、再度質問した。

「その話しは本当かと聞いている？」

「う、うん。織斑先生が直接言つてたから・・・」

「くっ」

私は真意がどうか確かめる為、教官の下に向かった。

「ボーデヴィツヒさんて、無愛想だと思つてたけどあんな顔するんだ・・・」

後ろでなにやら言っているが、私は教官に会いに行く為、無視した。

「教官!！」

「なんだ! ラウラか。どうした珍しくあわてて？」

教官は少し驚いたが、

「教官がああの神代という男に負けたというのは本当ですか？」

「そんなことか、ああ。負けたぞ。清々しいほどにな」

「一番聴きたくなかった言葉を教官はあっさりと言った。」

「あの、男がなにか教官の弱みを握ったのですか？ それか何K卑怯な手を」

「おいおい、神代はそんなことはしてないぞ。（今は惚れた弱みを持っているが・・・）」

「では、教官の体調が悪かったのですか？」

「おいおい、私だって人間だぞ？ お前は私を何と思っているんだ？ 本当に真つ向から勝負して負けたんだよ」

うれしそうに語る教官に理解できず困惑していると。

「お前も勝負すれば判るだろうな」

「千冬ちゃん、今日の連絡事項は？」

「ナイスタイミングだな」

「貴様！！」

「あれ、ナイスタイミングって？」

「神代、今日はラウラとISの勝負しろ。そっちのほつが手っ取り早い」

「エエエエ！」

「なんだ、そのワザとらしい驚きかたは？」

「アレ、似合いません？ 折角驚いている俺の姿を演じようとしたんだが・・・、ちなみに点数をつけるなら？」

「0点だな」

「厳しい。まあそれはいいや、俺は構いませんよ」

「ラウラもそれでいいな？」

「願ってもいません。教官に勝ったという事がマグレだと思い知らせてやります」

（（負けフラグの台詞だよな？ それ））

「それと、連絡事項はこれと言ってない、すまん、態々此処まで来て」

「いいすつよ、じゃあ俺は教室に行くわ」

教室いく神代を私は殺気をこめて睨みつけていたが、へらへらした態度を崩さず奴は教室の方角に歩いていった。

「ラウラ、神代と戦うときは常に気をしっかり持たないと惚れるかも知れんぞ」

教官は微笑みながら呟いた。

(神代晶、私はお前を認めない。教官を変えたお前を)

Side out

「なぜ、こんな事になってるんだ!？」

「一夏、うるさい」

「一夏、うるさいよ」

鈴音とシャルルにうるさいとしかられた一夏。

「あの、シャルルさんは何かあったのですか、昨日とは雰囲気の違いますし?」

「僕、別に。すこしフランと話したただけだから。」

「フランって誰だ?」

「僕からはいえないよ。それより始まるよ二人の勝負が」

突然、二人が勝負する事になったが、一夏達はなんでそんな事になったのが気になったが、授業がなくな為、特に気にせず観覧することにした。

「相手はドイツの代表候補生だけど、晶の奴、今回はどんな風にかつきだろっな？」

「どいことよ？」

「セシリアと戦ったときは、クナイを同時に投げて、クナイ同士で激突させセシリアのBTを落としたんだよ。それに最後はセシリアが晶から目をそらした瞬間化け物のに被り物を被り、セシリアの目の前まで一瞬で移動し、セシリアを脅かして勝ったんだよ」

「それは・・・」

シャルルと鈴音がセシリアに目を向ける。

「突然、化け物が目の前にいたら誰だって驚きますわ」

「それはそうだね」

「でも、そんなに怖いお面だったの？」

「大抵の人間はアレを見たら引くだろうな」

箒はあの時の被り物を思い出し、二人に教えた。

「「そ、そう・・・」」

「始まったみたいだね」

開始の合図がなり、ラウラはすぐに瞬間加速で距離をある程度詰め、

レールカノンを撃つたが、晶は難なく避ける。

「いきなりかよ?」

「まあ、千冬さんに勝った晶に様子見は悪手でしょうけど」

鈴音も自分なら先制攻撃しすると思い、口にした。

ラウラはA C Iで晶の動きを止めた。

が、晶は止まった瞬間に実弾を地面に撃った、その為土煙が舞い二人の姿が見えなくなった。

突然、土煙で視界が奪われ集中が乱れた為、A I Cで拘束した晶が解放された。

「なるほど、俺の動きを止める為にはかなりの集中力が必要なようだな、ラウラちゃん」

「貴様!!」

ラウラはハイパーセンサーで晶の場所を探そうとした瞬間に、自分のシールドエネルギーが減り始めた。

晶はラウラにサブマシンガンで攻撃していた。土煙も無くなって晶

の姿が見えたが、ラウラはかなりのシールドエネルギーを減らされた。

「くっそ」

「全く、千冬ちゃんのがままを聞いてみれば、暇つぶしにもならんぞ。降参していい？」

突然聞こえてきた声にラウラは怒りを感じ、自棄になってワイヤーブレードを放つが晶は装備してた鉄扇で弾く。

「何で出来てるんだよ、あの鉄扇？ 俺アレで鈴に殴られたんだよな？」

「ハリセンのように叩いただけよ、しかも軽く」

「アレで軽くかよ。つーか、本当に何で出来てるんだ？」

と、一夏の疑問をしらず、やる気がなくなる晶。

自身の切り札であるACIうら一発で見破られ、自身の攻撃も軽く防がれる、ラウラ・ボーデヴィツヒは思う。

（私は、負けるのか？ いや、私は負ける訳にはいかないのだ！）

自分の憧れている織斑千冬を負かした男に負ける。



『 願うか・・・？ 汝、自らの変革を望むか・・・？ より強い力を欲するか・・・？ 』

言うまでもない。力があるのなら、それを得られるのなら

力を・・・比類なき最強を、唯一無二の絶対を 私によこせ！

「あああああつつつ！！！！！！！！！！」

そして、晶の前には黒い全身装甲のI.S。

「あゝれえ、何この展開？」

『 非常事態発生！ 模擬戦は中止！ 状況をレベルDと断定、鎮圧のため教師部隊を送り込む！ 生徒はすぐに避難すること 』

そんな、放送がされているのに

「離せ！！ 今すぐにあの馬鹿をぶっ飛ばす！！」

「落ち着け一夏！！」

「一夏さん落ち着いてください！！」

アリーナに向けて走り出そうとしていた一夏を箒とセシリアが止めたが、

一夏は二人を振りきり、アリーナに向かった。

「あのシスコンを止めにしくしかないわね」

「そうだな」

「そうですね」

「はは、結構毒舌だね」

苦笑しながら、四人は一夏の後を追った。

「織斑先生!!! 織斑君達がアリーナに向かってます!!!」

「あのバカ!!!」

他の生徒達が避難している間、五人はアリーナに向かおうとしている。

「あの、距離をみるに、一夏を止める為<sup>バカ</sup>に動いているようだ。し

かも篠ノ之はISを持っていないだろう。

山田先生は生徒達の非難を、私はあのバカを止めに行く」

「は、はい!!」

無言のまま、晶に攻撃を仕掛けるラウラだが、晶は淡々と避ける。

観客席には誰もいなく、二人だけで淡々と戦う絵はシユールだとしみじみ思っている晶。

「さて、システムの暴走か、システム乗っ取られた感じか・・・、  
メンタルアウト心理掌握を再現して、意識を取り戻させられたらいいが、

ミコちゃんと違って、あったことないし。仕方がねえ、魔術で意識を引っ張り出すか」

晶は考え、ラウラの魔術でラウラの精神に干渉しようとしたが、その途中で一夏達が近づいてきた。

晶は魔術を発動する為、回路を換え、魔術を発動させようとしたが、一夏達に気づいたのは魔術を発動した後だった。

その魔術に巻き込まれたのは一夏達とそれを止めようとした千冬だった。

「やべっ、どうしよう」

珍しく困った晶はなるようになるかと開き直り、術式を展開した。

「なんだ！？ 地面が光つ……」

一夏達の意識も一瞬消えた。

真っ白い空間に一夏達いた。

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

そこには、呆れた晶が、

「なんで、くるかね」

「晶！！　ここはどこなんだよ？　それにお前やけに落ち着いてるけど、これもお前の能力か何か？」

一夏は間髪いれずしつもんした。

「半分正解だ。ラウラの意識を取り戻す為に使ったが、お前らが来たのはさすがに予想外だ、悪いがここからは入らないでくれよ。これ以上の精神が入るとラウラの精神は崩壊するぞ」

晶の一言に緊張が走った。

「神代、ラウラの事を頼んだぞ」

「オツケ、利用されてるラウラは別になんとも思えんが、あのシステムを搭載した糞どもをひき肉にしたいしな。その為にはラウラから情報を聞き出すのが早いからな」

笑顔で言う晶に、一夏、箒、セシリアは引き攣った。

鈴音たちはある程度、晶に残酷な事が出来ると聞いたためかあまり動揺してない。

晶はそのまま、前に進んだ。

「私は？」

真っ白い空間で意識を取り戻したラウラ。

「なんだ、此処は！？」

「うーすっ、大丈夫か？」

自分がわけのわからないところにいる事で混乱してるラウラにのんき挨拶する晶。

「貴様！！ 神代晶！！」

「まあ、落ち着け。それより意識はあるな。うん、これなら大丈夫だな」

「何を言ってる！！」

晶の言葉が理解できないラウラ。

「お前さん、自分のISに搭載されてるシステムに乗っ取られて、やばかったぞ？ だから助けに来たんだよ。意識がハッキリしてるなら問題な」

その事で、先ほどの自分を行動に思い出したラウラは

「なぜ、貴様が私を助ける？」

「ぶっちゃけ、そのシステムを搭載させた研究者達をひき肉にした  
いからな、その為にはラウラから情報を聞くのが手っ取り早い」

「.....」

「安心しろ。人肉を食べる趣味は無い。どこかの動物園に売るさ」

ラウラは先ほど戦闘を思い出し、自分が全く歯が立たなかった人物  
を見る。

「あれ、ちがった？」

晶はラウラに人肉を食べる趣味があると思われた為、弁解したが、  
ラウラはそんな事は気にもせず

「なぜ、お前はそこまで強い？」

ラウラは先ほどの戦闘を冷静に分析し純粹に晶に質問した。

「唯の経験だろ？ 才能に勝つにはそれしかない。フーテンプレ  
過ぎてつまんねー台詞だけだな。

俺から言えることは人生楽しみなきや損するだけだぜ。命なんて  
のは有限なんだからな。

楽しくやれば限界なんか超えられるだろ」

呆気ラカンとした答えに

「そ、そうなのか？」

「そうなんじゃね？ それに、俺は自分より強い化け物と何度も戦ってきたんだ。それをかんがえると別に俺は強くないぞ」

晶は過去を思い出しながら苦笑したが、その所為で気が緩んで、発動してる術式にゆがみが生じた。

「げえ、やばいな。ラウラ、とりあえず意識を、自分を強く保て。俺はこの術式をとく」

そういつて、消えた晶だ。

「強いよお前は・・・」

ラウラはそう呟いたとき、突然景色が変わった。

「なんだよ、これ、今度は真っ暗」

「晶さん、どうなってるんですか!？」

「落ち着きなさいよ、アンタ達」

ラウラは一夏達の声聞き、振り向いたら、景色が変わった。

「教官・・・？」

「無事みたいだな」



「はい……」

「一夏、殴るんじゃないかったのか？」

小声で箒は一夏聞いたが。

「あんな顔を見たら殴るきもうせた」

何か、吹っ切れた顔をしたラウラに毒気を抜かれた感じになった一夏。

「そんな事より、あれって晶？」

鈴音の言葉に、全員が振り向いた。

そこに、見た事ない制服をきた晶がどこかの廊下を走っていた。

入った部屋にはモニターが映し出されていた。

「イアン、何があった!？」

「これを、見る木星が」

モニターに映っていた木星にとんでもない事が起きていた。

木星をリング状に取り巻いていた小隕石群が、局所的重力場に吸い込まれた。

「なんだよ、あれ」

「これは・・・」

一夏達もそれをみた晶とイアンと呼ばれた人も驚いていた。

だが、次に、飲み込まれた場所から金属の光沢こうたくをもつ異様な物体が姿を現した。

「エルスの大群!？」

「エルスじゃと?」

「ヴェーダからの情報で、連邦政府ではあの異星体をそう呼んでいるようだ。地球外変異性金属体、  
Extraterrestrial Living-metal  
Shapeshifterの頭文字からとって呼んでる」

晶が説明をしたが、一夏達は異星体という言葉に驚愕した。

「しかし、そのエルスの向う場所は?」

「わからんが・・・、約90日で地球につくスピードだな。くわえて方角地球」

「そんな・・・」

「イアン、ESアシエルでトレーミーに向う」

「ちょっと待てフラン。一人で行くのか？」

「危険よ」

「食料なら倉庫がある。それに刹那達ならエルスと接触するだろうな」

フランという言葉に、先ほど晶達の戦いを観戦した一夏達は驚いた。シャルルが言ったフランと何か関係があると思ったが、目の前の光景はそんな事は知らずと進む。

「わかった、リンダ、アシエルの発進準備に取り掛かる」

「わかったわ」

フランと名乗った晶はアシエルと呼ばれた機体の前まで移動した。

「なんだよ、これ？」

「ロボット!？」

一夏達は晶が乗ろうとしている機体をみて混乱する。

自分達のすんでいる時代にこんな物は存在していない。先ほどの木星の出来事も聞いたことも無いゆえ混乱しているが、シャルだけが冷静だったが一夏達はそれに気にする余裕が無いくらい混乱していた。

「リニア・ボルテージ上昇、720を突破、射出タイミングをフランキシヌスへ譲渡します」

「了解、E・Sアシエル、出るぞ」

そこから、景色が変わったが、晶と晶が乗っているESと呼ばれた機体がある。

「此処は宇宙か……」

誰かが呟いたが、それを考える暇も無くフランキシヌスと呼ばれた晶は独り言で現状でおきている事を呟く。

フランはクラッキングした連邦軍のエルスとの戦いを見ていた。

「ミサイルを取り込んだ！ こいつら学習しているのか？」

映像は途中で途切れた。

「連邦軍はエルスにより全滅したか……」

ん！？あの光はトランザムバーストか、刹那の奴まさか」

アシエルはそのまま、光が漂っている場所に向った。

「ダブルオーがシグナルロスト！？」

レーダーでは別の識別番号の機体もロストと映った。

「今の消えたGNドライブの識別番号はティエリアもか？」

アシエルが付いたときには、三機の機体がエルスから逃亡しているところだった。

「やらせるかよ」

E・Sアシエルの右腕が大型のビームが放たれる。それによって三機の機体を追いかけたエリスを消滅させた。

「なんだ!？」

「あれは! アシエルか!」

「此処は俺が引き受ける。お前らはトレミーに戻って此処から離れろ」

「一人で無茶だフラン」

「さっさと行け、アレルヤ」

一方的な通信で、いまだ追いかけてくるエルスに向ったフラン。

先ほどの戦闘を映像で見ている一夏達も無茶だと叫んだが、本人に聞こえるも無く、エルスと衝突した。

数千という数が「フランに襲い掛かったが、フランは難なくさげ、反撃を行うが、数が圧倒的過ぎると思っていると、

「援軍! あの機体は連邦の新型部隊か!」

『ソルブレイヴス隊スタンドマニューバと同時に散開！弔い合戦だ！！』

『全機！フルブラスト！！』

6機の機体が援軍に来たようだがそれでも数が違いすぎると思った一夏達をよそに、援軍にきた6機の機体とフランはとんでもない操縦技術でエルス達を倒していく。

『久しいな、少年』

『グラハムか！ 挨拶をしている場合じゃないぜ』

『わかっている、君も此処から離れろ』

『悪いが、登場したばっかなんだ、少しは出番がほしいぜ。あんたの動きに合わせる』

『ふふ、私と踊ってくれるか。なら断るわけにはいかな』

蒼い二機の機体は息の合った動きでエルスを倒していく。

「す、すげえ・・・」

「すごい・・・」

お互いに衝突しそうな瞬間に、二機は急停止、そしてUターンして自分達を追いかけてきたエルスを大型ビームでなぎ払った。

「やる・・・、ん！トレミーから通信か」

映像もまた移り変わった。

「こうして、会話するのは初めてだな。少年」

「そうだな」

「それより、もう一人の少年は？」

「エルスとの対話を試みた結果、エルスの膨大な情報によって、脳に損傷、見ての通りだ」

「そうか、味方の援軍に間に合わず、少年すら助けられないとは・・・」

「悔やむより、やる事はあるだろう？」

「そうだな、今はやる事をやるしかないか」

二人が苦笑していると、通信が入る。

「私だ」

『隊長、木星に新たなエルスが！！』

「なんだと!？」

フランも映像端末だした。そこに映ったのは  
今までより、でかいエルスの姿だった。

「う・・・そ、なにあれ？」

「あんなものが・・・存在したのか？」

現実とかけ離れた映像をみて、一夏達は呟いた。

ソルブレイヴス隊と呼ばれていた部隊と別れ、ブリーフィングルーム。

ピンク色の髪をした少女が報告する。

「新たに出現したエルスは月と同程度」

それに対して陽気な青年が言う。

「どうやって、倒すんすつか？」

「リフティ、それを考える為に集まったんだから」

「クリス、俺もリフティの言葉を今使いたいよ」



「刹那の回復を祈るしかないのか・・・、フラン。お前の持つてきたHi-Gundamでなんとかならないか？」

「無理に決まってるだろ。ダブルオーみたいに対話を選べば刹那の二の舞だ、それに俺はニュータイプでもなければイノベーターでもないぞ二ー」

「お前でもむりか・・・」

「それにエルスの思考が理解できないんだよ」

「？」

「アナライザーで見ても、あいつらは精神構造が違うからなのか理解できないんだ」

「なるほど。刹那の回復に頼るしかないのね」

「全く、自分達の力の無さに腹が立つぜ。意識を失ってる刹那が頼りにするしかないとわ」

「兄さん・・・」

「連邦軍は防衛線をはりエルスと戦うそうです」

「今はそれに協力するしかないか・・・」

映像はまた変わっていく。

そこに映っていたのは、大量のエルスと戦っている機体の映像だった。

「なんだよ……？ この数？」

「こんなものに人間が勝てるのか？」

今見ている映像が、過去か未来かは知らないー夏達だが、これは現実起こった事だと本能が理解してしまった。もつとも、それは晶の魔術の影響だが。

エルスの中にはMSに変身していくだけでなく、巡洋艦まで変身する。

巨大なビーム砲すら屈折させられる映像が流れる。

『エルス進行の防衛行動に移る』

『了解』

『理屈なんてどうでもいい。やるだけだ！！』

『例え、刹那がこなくても全力で狙い打つ』

『ライフルビット展開！！ ライフルビット展開』

『そうだな、いくぞライル、ハ口！！』

『了解!! 了解!!』

『ああ』

『一対一万差の戦力さか』

不適に笑い、E・Sアシエルに乗ったフランも二機の緑色のした機体とオレンジ色の機体続いた。

その戦闘は、どう見てもエルス達に数で押されている。

中には侵食されるもの、侵食されそうになった物のなかに自爆するものもいた。

一夏達は歯がゆそうに見ているしかなかった。

フランの機体から、連邦軍の会話が聞こえてくる。

『被害48%を超えました』

防衛線に次々と穴が開き始める。

そんな時、ピンク色のビームがどこからか放れた。

『来たのか!』

『遅いんだよ!』

『うちの切り札が来たか!』

『ナイスタイミングだ!』

『待ちかねたぞ、少年!』

『刹那、対話の為にはエルスの中枢に向う必要がある』

『了解』

『俺達に、任せな』

自分の達の切り札からの会話を聞いたフラン達はエルスに囲まれながらも不適に笑った。

『行くぜ!! ライル、ハロ!!』

待ちのぞんだ仲間復活に精神が高揚した、

当たり前だろ

この戦いの切り札の登場だ。

それが、彼らの精神を高揚させた。

『狙い打つぜえええつつつ！』

『乱れ撃つぜえええつつつ！』

ライルは近距離にいるエルスをライフルビットで倒し、  
ニールは長距離にいるエルスをライフルビットで倒していく。

ビットの数はセシリアが操るBTに比べ物にならない数だ。

それだけじゃなく、彼らはエルスのみに攻撃している。

その事に、セシリアに少なからず後に影響を与えた。

『良いか、反射と思考の融合だ！』

『わかっている』

『了解』

アレルヤ達は自分達の切り札マルトモードを発動して、シザービットを操り、とんでもない高速でエルス達を撃墜していく。

『負けてられねえな、俺もよー！』

E・Sアシエルの両腕のソードビットとHi・ガンダムに装備されたフィン・ファンネルを装着したE・Sアシエルの腰のフィン・ファンネルが展開される。

フランもニール達に見たいに正確にエルスを撃墜していく。

四機の機体は息が合ったように前方のお互いの武器の大型ビーム砲を放ち、刹那の道を作った。

『『『『『行け、刹那!!』』』』』』

『了解!』』

蒼い機体は出来た道を通っていく。

『フラン、お前は刹那の援護を頼む』

『・・・了解』

フランは刹那を追いかけるように、刹那の後を追った。

『何を躊躇している』

『生きる為に戦えと言ったのは、君のはずだ』

フランは少し前方の会話が聞こえる。

『たとえ矛盾をはらんでもいき続ける。それが生きる事だと!』

刹那に道を作るようにブレイブス隊が展開していく。

『私にかまわつな! 行け! 少年!』

戦いながら言う。

『生きて未来を切り開け!』

刹那は唇をかみ締め、彼の言うとおりにした。

『それでいい、そして君もだ!』

追いついてきたフランに言ったのであろう。

それを、理解したフランは無言で刹那の後をおった。

待っていたのは大量のエルス。フランはエルスを迎撃しながら刹那を追ったが、

そこに移っていたのは、幾つかの巡洋艦を取り込んだエルスにトンザムを使ったダブルオークアンタの姿だった。

膨大な光の柱が巡洋艦を取り込んだエルスを消滅させた後、超巨大なエルスに斬りかかろうとした。

『待て、刹那!!』

フランの言葉を聴く余裕のない刹那は斬りかかったが、それすら屈折させられた。

『やはり・・・』

そんな時、先ほど彼ら二人の道を作った男も声が聞こえた。

『少年!!!!』

フランも刹那もそれに気付き、

『未来の水先案内人はこの、グラハム・エーカーが引き受けた』

エルスに取り込まれながらも、攻撃しながら進むグラハム。

『これは死ではない！ 人類が生きる為の ！』

そういいながら、超巨大エルスに躊躇無く激突した。

そのお陰か、超巨大エルスに穴が出来た。

『行け、刹那!!』

『く・・・了解!!』

フランの言葉に従うように刹那は超巨大エルスに侵入した。



『さーて、俺は周りの連中の相手をするか!!』

フランは縦横無にフィン・ファンネルとソードビットを展開してエ  
ルスを迎撃していく。

少したってから、声がどこからか聞こえた。

超強大エルスのそばで戦っていたからなのだろう、そのお陰で刹那  
達の声が聞こえた。

『これが、ラストミッション!』

『人類の存亡を賭けた対話の始まり!!』

『始めたのか』

フランはなぜ聞こえたかに疑問を持たず、エルスを迎撃している。  
そして、超巨大エルスから、ダブルオークアンタが出てきたのが見  
えた。

ダブルクアンタは剣を捨て、全欧にソードビットを円に展開し、  
その中を通り消えた。

その途中でフランはクアンタムバーストの影響で刹那達の会話と思  
考が聞こえていた。

その時、エルスは集まり始め、一つの巨大な花になっていった。

それを、見ていたフランは穏やかに微笑んだ。

『これで、この世界もまた変わっていくか……』

それを、見ていた、ラウラや篝達はただその表情に魅入られていた。自分達が知っている晶とフランは同一人物だと本能でわかっていたから、驚きを隠せない。

気がついたら、晶とラウラが戦っていた場所に戻っていた。

「いま……のは……?」

「夏達は今の出来事に驚いていた。が晶はそんな事は知らず

「全く、無事か?誰も精神崩壊など起こしてないよな」

「え! ああ//」

「なんか、誰かの過去でも見たのか。お互いの精神がごちゃ混ぜに

なるとこだったから、仕方がねえと思うがつて、なんて顔してるんだお前ら？」

女性は晶の顔をまともに見れずにいた。

男である一夏だけが、普通だった、だから一夏は

「フランキヌシスって、晶の名前なのか？」

「！　ってことはよりによって俺の過去かよ。んつでなほかに質問は？」

もう、いいやと投げやりで言う晶に

「通りで、ISの操作がつか抜けてるわけか。それにあの強さ。なんか納得したんだよ」

「いつの過去を見たんだよ？　なあシヤ！！」

質問しようとした晶に白い刃が襲い掛かった。

晶はそれを避けたが、白い刃は地面にあった瞬間白い粉となって飛び散った。

「誰だ？」

晶が刃が飛んできた方向に目を向け質問した。

「神の右席、左方のテッラと名乗りましょうか？　異教徒の猿共」

8話 リウラとの戦闘、晶の過去（後書き）

夜勤なので、修正は後に、眠いです。

## 9話 神の右席戦 前編（前書き）

やっと魔術戦です。今回から短くなります。  
その代わり出来るだけ投稿は早くするようにがんばります。

## 9話 神の右席戦 前編

一夏 Sedo

白い刃らしき物が晶に襲い掛かったが、晶はそれを避けた。

けど、問題はその刃が白い粉となって飛び散った事に驚いた。

晶は白い刃が飛んできた方向に視線を向け

「誰だ？」

「神の右席、左方のテッラと名乗りましょうか？ 異教徒の猿共」

「魔術師か・・・」

マジユツシ？

「ええ、そうですよ。それと、私の目的は学園都市の人間である貴方の命ですから」

なんだって!？

「ちよつと待てよ、なんで学園都市の人間だからって、晶を殺そうとする?」

俺は質問したが。それに答えたのは晶だった。

「学園都市は裏いろんなとこに恨まれてるからな、外の交流も殆どない。そんな時に、外の学園に来た俺を狙うってわけだろう？」

「そうですね」

「でも、随分といいタイミングだな？」

「元々、もう少し様子を見るつもりでしたが「こんな風に、余計な生徒達がいなくなつて、絶好のタイミングだったって事か」……」

「悪いけど帰ってくれない。あんた弱そうだし」

「私が弱いのですか。見た目で判断しないでほしいですね」

「見た目じゃなく、さっきの攻撃。地面に当たっただけで飛び散つたんだ。面白くなさそうだし。もう少し人数増やしたら遊んでやるから」

めんどくさそうな顔をして言う晶。

そうしたら、テッラと名乗った男の右手に白い粉が集まり刃の形を成した。

「何よアレ？」

その形はギロチンだった。70センチ四方の正方形の下端を強引にい斜め断ち切ったような、板状の刃。それが晶に襲い掛かった。

晶が避けようとしたら。

「優先する。

人体の動きを下位に、空気を上位に」

そうしたら、晶の動きがピタリと止まった。

「「「晶!?!」」」

晶は咄嗟に鉄扇を前に投げて、白い刃を防いだ。

「弱いと言っておきなが、防ぎますか」

「なるほど。その刃は小麦粉か」

小麦粉!!

「小麦粉ってあの小麦粉かよ!?!」

だったら、避ける必要は無かったんじゃないのかと思っていたら。

「その武器は神の肉に対応してるのか」

カミノニク? さっきのマジュツシといい訳のわからない言葉が出てきた。



神の肉って肉のことか？　それが何で小麦粉なのか不審に思っていたら。

「ほう、わかりますか？」

「まあな、神話などは最近になって読み始めたからな。ミサではブドウ酒は神の血、パンは神の肉として扱われる。んでもってミサのモデル担ったイベントは『十字架を使った「神の子」の処刑』」

随分と物知りだなと感心したが。

「なかなかの博識ですね」

「『神の子は十字架に架けられた』……冷静に考えればただの人間に『神の子』を殺せるわけが無い。けど神話は時として『優先順位』を変更する。」

お前の魔術はその優先順位だろ？　さつき人体の動きより空気を優先させた為、俺の動きが止まったって所か？」

晶の言葉に俺達は驚いた。

「なんだよそれ！？　そんな出鱈目なことが出来るのかよ」

「現に俺の動きは止まった。物は試しだな」

晶はポケットから手帳見たいのを出して、ページをちぎった。

そっいえば、晶の奴、ラウラと戦った時は私服だったな。よく許可が取れたもんだ。

すると、ちぎった紙は光だし、見えない刃となってテッラに襲い掛かった。

「優先する。 風を下位に、人体を上位に」

刃となった風を受けても無傷のテッラ。

「マジかよ……」

「この私の前では強いさ弱さは関係ありません。そもそも、その『順番』を制御できるんですからねー」

「そんなのに、勝てる訳無いじゃない……」

鈴がつぶやいたが、俺も同意権だ。どんな仕掛けかは知らないけど、どんなに強くても弱くされるようなものだ。そんな奴に勝てる訳無いと思っただら。

「お前、バカだろ？ 見た目どおりかませ犬だな。そういう魔術は一気に決めるべきなのに、これだけ時間がたったんだ。打開策の一つ二つはバカでも思いつくぞ」

「負け惜しみですか。貴方に勝てる要素は無いと思いますが？」

晶は不適に笑い、先ほどと同じように手帳のページを何枚か千切った。

先ほどと違って見えない刃の数が多い。原理はわからないが強力な攻撃だと言っのがなんとなくわかったが、あのテッラの前では意味が無いと思った。

「優先する。 風を下位に、人体を上位に」

先ほどと同じように、見えない刃を食らっても無傷。

「頭は回るほうだと思いましたが なっ！！」

何かの破片がテッラに当たった。

「やっぱりな、あくまで優先の変更だが、変更できるのは二種類だけか」

「貴様！！」

「おーお、いい顔つきだぜ。顔が悪く泣いているところに教会の人間に騙されて、宗教に入った定点的なバカを体現するような顔だぜ。悪魔に呪われた顔と言っても誰も疑問に思わねえんじゃねんか。神の右席とか名乗っても誰も信じないぜ」

ケラケラと笑いながら挑発する晶。

「お前、結構ひどいこと言うんだな」

俺は呆れ気味に言った。

「あの顔だぜ、悪役に最適じゃねえか。自分が協力な魔術をもって

るから、余裕をもってダラダラしてたら攻撃を受けちゃってるし。自分の弱点ぐらいいは補えよ失敗顔。攻撃の余波で出来た副産物まで防げないテメエは弱えよ」

「異教徒の猿風情が！！」

晶の挑発に乗ったテツラに

「死ねよザコの失敗面」

晶は大量に手帳の紙を千切った。千切られた紙は光りだしたが何か飛んできて消された。

「真打登場か？」

「アックア！ 私の邪魔をしないでください」

「そうわいかない。貴様はすこし時間をかけすぎだ。これ以上は時間をかけるわけにはいかない、私も参戦させてもらう」

巨大なメイスを握った男が姿を現した。

「なるほど、そっちの失敗顔と違って強いなあんだ？ で名前？」

「後方のアックア。悪いが時間をかけている場合でないので、即刻決めさせてもらうのである」

晶やテツラと呼ばれたこいつが使ってる力の原理は知らないけど、このアックアと名乗った男はヤバイと本能が告げる。

皆も何か感じたのか冷や汗をかいてる。あの千冬姉ですら。ない晶は

「んんー、いいぜえ。悪役の楽しさをヒシヒシ感じる。かませ犬を倒す直前にお楽しみにな展開になってきた。最近運動不足でな、リハビリに付き合ってもらおうか聖人」

「私を聖人と知っての言葉であるか？ それなら褒められる行動ではないのである」

「聖人のことは噂程度しか聞いたこと無いが、噂どおりの化け物だな、その失敗面とは威圧感が違う。これは。「神の力」<sup>ガブリエル</sup>の性質か」

「これ以上、無駄話するつもりは無い」

そう言ったアックアの姿が消えた。それと同時に晶が吹き飛ばされ、三度バウンドして遮断シールドに激突した。

「「「「晶（さん）！」」」」

「フラン！！」

晶が立っていた場所を見たら、アックアがたっていた。

「テメエ！！！！」

俺はISを展開して、雪片を構えアックアに切りかかるつもりだったが

「優先する。 ISの動きを下位に、空気を上位に」

俺は動く事すら出来なかった。

「くっそ」

「おゝ、痛つてゝ。久しぶりだなこんな怪我をしたのは」

晶は立ち上がったが、体中が傷だらけ、それだけじゃなく三箇所ほど出血してる。

「タフであるな」

「本当に久しぶりだ。それにしても俺にこんな一面があるなんてな。これじゃあミコちんのこと戦闘狂とは言えねえな」

晶の表情は見た事ない楽しいそうな表情だった。

「手を出すなよ一夏。こいつは俺の獲物だ」

悪役がする笑みを浮べた晶。そのまま手をアックアにかざした。そうしたらゲームや漫画などで出てくるような魔法陣が浮かび上がり、雷がアックアに襲い掛かった。

「優先する。」

魔術を下位に、人体を上位に」

「あいつ！また」

雷がアックアに直撃したが、アックアは無傷。だが、晶は自分の雷と同時にアックアの後ろに移動していた。

「何!？」

「とりあえず喰らえ!!」

そのまま、アックア蹴りとばした。アックアは四メートルほど後退した。

「今の動きは？」

「瞬動術、いわゆる縮地だ。それにしても、助かったぜ、人体を上位にしてくれてな。いいタイミングで蹴りをプレゼントできた」

縮地ってあれか、どっかの格闘家や剣術家がかうアレか？ お前何者だよとツッコミたいが晶があまりにも楽しそうなのでやめた。下手に水差すと、痛い目所かマジで殺しに来るぞ。

「さーて、ナギの馬鹿達と組んで以来だな。こんな高揚感は」

悪役も引きそうな笑みを浮かべた晶。





## 10話 神の右席戦 後編

晶 Side

脳内麻薬のお陰か、痛みは殆ど感じなくなっただが、好都合だな。

これだけ歯ごたえがある戦闘は40年振りか？

自分でも興奮しているのがよくわかる。一夏の顔を見る限り、俺は随分と楽しそうな表情をしているようだ。まあ、そんなことより、楽しませてもらうか。

Side out

一夏達はただ驚愕していた。晶の過去らしきものそうだが、道具もつかわず超人的運動性能をみせる二人に。

それに、晶の手から出た魔法陣にも驚いていた。学園都市の能力は説明されたが、能力は科学の産物と認識していたが、今回みたいなオカルト現象が実際に存在している事に戸惑っている。もっとも、シヤルは事前に聞かされていた為、一夏達よりは冷静であるが、晶が吹っ飛ばされた事によって動揺している。

「まずは、鬱陶しい八工を先に始末するか。  
ウィ ウェリ ウィンウェルスム ウィウス ウィキ」

悪役が言うような台詞を口にし、テツラの排除に向った。

「優先する 「遅え、魔法の射手 雷の101矢!!!」

百一の雷の矢がテツラに襲い掛かったが、アックアはメイスを振ってかき消した。

「我を相手に、他の標的を狙おうとするのはあまりにも軽率ではないのであるか？」

「そうか？」

晶がにやけた瞬間、アックアの足元に赤い魔法陣が浮かび上がった。

「焼殺」

晶がつぶやくとアックアの足元の魔法陣から炎の柱が出てきた。

「何!？」

「魔法の射手 光の117矢」

アックアが炎の柱に飲まれた隙に、テツラに光の矢が襲い掛かる。

「優先する。 魔術を下位に、人体を上位に」

光の矢を受けても無傷のおテッラ。

「チッ（魔術に部類されるか）」

「あまり私をなめるな」

テッラが光に矢が無傷だと確認した瞬間に、アックアは晶の背後をとって、メイスを横に振ったが、晶は消えていた。

「「!?!?」」

「後ろだボケ」

晶は

ヘカトンタキス・カイキーリアリス・アストラブサト  
「百重千重と重なりて走れよ稲妻」

キリアキブル・アストラベ  
「千の雷！」

雷がテッラを包んだ。

そして、テッラのいた場所に粉塵が漂う。

アックアは晶の動きに驚いていた。

「虚像だ、虚像を展開した瞬間に転移魔術で移動し、失敗面のうしろで今の魔術を打ち込んだ」

アックアに説明する晶。

「解せんな」

「何が？」

「貴様は五人もいない転移魔術を使うだけでなく、アレだけの動きが出来るにもかかわらず、ISや学園都市側にいるのが」

「ああん？　んなおんこつちの都合だ。態々テムエ等の許可が要るのかよ。それに、ISに乗りたいたいからこの学園にいるわけじゃない。ただ立場上此処に入学させられただけだ」

「そうであるか」

「俺も解せないな、なぜ本気で来ない。貴様の聖痕を解放すれば俺を簡単に殺せるだろ？」

「……」

「夏達は二対一でも押してる晶より、そんな中で押されてるアックアの余裕に不思議に思っていたが、晶の質問で納得してしまった。」

「二対一だから使っまでも無いか？」

アックアは殆ど無傷に対し、晶は全身怪我だらけだ、そんな相手に本気を出せないだろうと思っていた一夏達だが、

「あまり、自分の力を過信するのは軽率である」

そう言ったアックアは、いつの間にか晶の前に移動していた。そして、5メートルを超えるメイスを振り下ろした。

「過信しているんじゃない、楽しんでるんだよ」

そう返した晶。

晶はアックアの腹に掌底を叩き込んだ。

「つく」

「挑発に乗って、敵の目の前まで態々移動ありがとう。これでテーマのアバラは二、三本はイカしたな」

「優先する。 人体を下位に、刃の動きを上位に」

晶に白い刃が襲い掛かるが、晶はぎりぎりですべて避けた。

「へえ、アレを喰らってよく生きてたな失敗面」

悪党の台詞を言う晶。

「なめないでください。伊達に神の右席を名乗ってないんですよ。異教徒の猿」

「話しをしている余裕はあると思えんが」

アックアは巨大なメイスを振り下ろした。

その余波で地面は引き裂けられた。クレータが出来ていた。そして、晶はそれを避けるが、余波で吹き飛ばされた。

一夏達はその威力にお冷や汗どころか、恐怖心の襲われた。

「おゝお、痛え痛え。痛覚は生きてるといふ証明だと実感するよ」

晶の体は動ける状態じゃないのは素人から見てもわかるぐらいボロボロなのに、ケラケラ笑ってもおかしくないくらい余裕な雰囲気だった。

「まさか、此処まで体が鈍ってるとはな（能力に頼ってたツケと学園生活を楽しんでいた代償は大分でかいな）」

そう言った、晶の姿は消えた。実際は消えたのではなく、先ほどと同じように瞬動でアックアの前まで移動した。

だが、先ほどと違って、一本の剣を握っている。

真っ先に晶の動きが見えたアックアはどこから出したのか不思議に思ったが、その思考をかき消し、メイスを振り下ろしたが、晶は剣で受け止めた。

「この攻撃を防ぐであるか。しかし、その剣は別段特別な仕掛けは

無いようであるな」

「必要ねえよ。この剣は俺が唯一認め、従ったある人物が鍛え使用した人類が作った最強の剣だと思っているんでな」

アックアの攻撃を剣で防いだ晶だが、服には血が滲んでいた。どう見ても強がっていられる状態じゃない。それなのに晶の表情は先ほどから変わらない。

「余裕のつもりならこれで終わりである」

アックアがそういった直後、晶はアックアの力にたいきれず数メートル後退した。そして

地面から大量の水があふれた。地価水道のパイプからアックアは水を引っ張り出した。

地面から出てきた大量の水は一滴も残らず宙に浮いている。

その事が一夏達にとって信じられない光景だった。

大量の水はハンマーの形になって晶に襲い掛かった。

とんでもない爆発音がアリーナに炸裂する。

飛び散った水はそのまま、宙に戻り浮いていた。

「あつぶねえ〜。マジで死ぬかと思った〜」

その態度にアックアに少なからず怒り買った。

「これを前でも動じないのであるか。肝が据わっているというより唯の馬鹿であるか」

「さっそと、決めましようアックア。私もあの猿の態度には怒りを感じますから」

二人は、同時にお互いの武器を晶に向けたと同時に晶はアックアの前まで移動した。

「無拍子」

剣で切りかかるが、水によって防がれる。

「油断しすぎである。これで終わりである」

「優先する。 人体を下位に、刃の動きを上位に」

水を警戒していたのか、テッラの白い刃が晶に襲い掛かった。

晶は何とか避けたが、左腕が綺麗に切断され、くるくると左腕が宙に舞っていた。

「油断？ 何の事だ？ これは戦略の一つだ」

左腕が切断されたにも関わらず、笑みを浮かべ、切られた部分をアックアの顔に向けた。その瞬間、切断された腕から大量に血がアックアの顔にかかった。

「何!？」



右腕で掴んでいた剣を強く握り、

「剣に仕掛けは無いが、追加で俺の得意な雷をプレゼントするぜ聖人」

「雷雲剣」

雷が落ちる音が鳴り響き、アックアは先ほどの晶と同じように吹き飛ばされ遮断シールドに激突した。

「アック　　グッハ!!」

テッラがアックアの名前を叫び終わる直前にテッラのあごに晶の左腕が飛んで直撃した。

「ロケットパンチ」

左腕にはテッラのあごの飛んでいくように術式を仕込んでいた。

その、光景や戦い方は現実離れしていて、一夏達は驚くより啞然としていた。

「失敗面のあごは砕けた。これで優先順位は使えない。あとはアンタだけだ聖人。今のは本気でぶちかましたが、これで終わるほどじゃないだろ？」

遮断シールドに激突したアックアは立ち上がったが、ダメージも大きくわずかばかり立ち眩みした。

「これが、言葉通り肉を切らせて骨を立つ。もっとも骨ごと切れたけど」

腕を切断されたにもかかわらず、顔色を変えない晶に呆れや、恐怖や戸惑い、心配などの感情が一夏達の頭によぎった。

「まさか、こんな方法で同時攻撃するとは驚いたである」

「考えが狭いんだよ。これで、アンター人だ。とつとと本気で来いよ。聖人の力を解放してな」

晶はようやく楽しみが来たという表情だが

「悪いが、私の目的はテツラの監視と保護だ。だから下がらせてもらうのである」

その言葉に不機嫌な顔をする晶。

「テツラによつて余計な被害をださなにとそれを止める為に私は動向したにすぎない。貴様との戦闘は私の想定外だ。だが貴様とはいずれどこか決着をつけさせてもおう」

アックアは水を地面に叩きつけた。アリーナに爆音が鳴り響くと同時に、アックアとテツラの姿が消えていた。

「ち、まあいい」

虚がそがれたのか、痛みやら疲労を自覚し、そのまま晶は倒れた。

一夏達は駆け寄ったり、千冬は病院に電話したりとすぐに地下水道の修理の為の電話やらすぐに処置をとった。

## 11話 それぞれの思い

ラウラ Sid o

教官に言われ、精密検査を受けたが、別段悪いと所は見つからなかったが、今日は色々とありすぎて、頭が整理し切れていない。

「検査の結果は何事も無かったようだな」

部屋に入ってきた教官。

「はい。迷惑をかけてすみませんでした」

「全くだ。いいたいとこだが、『VTシステム』は知っているな？」

「……はい……」

『VTシステム』。正式には『ヴァルキリー・トレース・システム』。過去のモンド・グロツソの受賞者ヴァルキリーの武装・動きを複製するシステムトレース。今ではIS条約によって全ての機関がその研究・開発・使用の一切を禁止している。

「それがお前のISに何故か積まれていた」

「……」

「精神状態に蓄積ダメージ。そして何より、操縦者の意志。いや、

願望か……それらがそろりと発動する仕組みだったらしい」

ラウラは千冬の話は聞いているが、視線はずっとシートを握りしめている両手にある。

「ラウラ・ヴォーデヴィツヒ！」

「は、はい！」

突然大声で千冬に呼ばれ、ラウラは驚いて視線を千冬に向ける。

「お前はだれだ？」

「私？……私は……」

「答えられないのなら丁度いい。お前は今日から『ラウラ・ヴォーデヴィツヒ』だ」

「え？」

「あの子の出来事を見たろう？ 神代の過去らしきものに、現実離れた戦闘。あの前に私達常識人の悩みなど、軽いものだろ」

教官は苦笑しながら言った。

「そ、そうだ、教官。神代は？」

「左腕の接合手術はうまくいった。全く神代もそうだが、あの医者もとんでもないな。切断した腕をくつつけるなんて」

「でも、神代は腕もそうですが、体中の怪我は？」

「両足の筋肉繊維が切断しかけているうえ、足の骨は歩けるのが不思議なくらいボロボロだそう。外傷も私達みた通りだ。

全治三ヶ月。少なくとも二週間は絶対安静だと言われている。あの力エル顔の医者いわく『よく、くつついたもんだね。それに切断面を見る限り、彼はダイヤモンドの切断の邪魔でもしたのかい？』だそう。うだ。綺麗に切断されたから接合はうまくいったようだが」

全治三ヶ月か、長いなと思っていると

「織斑達にもそういつて、帰らせた。明日には麻酔が切れるから見舞いは明日にしる」

「授業は？」

「今日の事件で休校だ。そえにしても、神代の心配とは。惚れたのか？」

「な、何を／＼／＼」

「そのほうが良いだろうな。あいつの場合は女の一人や二人ではあいつの手綱は引けんからな、多いに限るだろうな。英雄色好むと言っし」

「そ、それって教官も・・・」

「お互い、大変な奴に惚れたな」

苦笑交じりで答える教官。

「教官は負けてどう思ったのですか？」

今なら教官が負けたり理由も納得も出来た。だから、教官に聞きたかった。

「私だって女であって人間だぞ。正直に言っとうれしかったな。これで私は唯の女だと自覚できたからな」

本当にうれしそうに言う教官。

「神代は何者でなんですか？」

「私を知っているのは学園都市の能力に関わる程度だから。今回あいつが使った不可思議な現象などは一切知らんがそれでも言いか？」

「はい」

それから、学園都市の能力など、現実から離れた現象を説明された。

「神代が今日使ったのは能力なんですか？」

「さあな、それについては明日本人に聞く。お前も学園に戻れ」

「・・・はい」

自分の部屋に戻った。

晶の手術がうまく言ったといわれて俺達は安堵した。全治三ヶ月と言われたが、戦いが終わった後は大変だった。

晶の外傷はテレビなどでしか見た事がないくらいひどいものだったし、切断した腕から出血が止まらなかった。

千冬姉以外の女子や俺達は応急処置すらまともに出来ないくらいに取り乱していた

晶が死ぬと本気で思った。

今日ほど、自分の力の無さを恨んだ事が無かったかもしれない。

「力がほしい。皆を俺に関わるすべての人を守るだけの力がほしい」

ISに乗れるようになって、少しは守れると思ったが、今日の出来事でそんな幻想は打ち砕かれた。

ISを持っても守れない。アックアやテッラ達には歯が立たなかった。それどころか、一言で動きを封じられた。

「晶のお見舞いに行くときに今日のあったことを聞くしかないか・・・」



それだけじゃない、アックア達が現れる前の光景か？

MSにエルス、それにE、S・・・、アレが晶の過去なら晶がISで強い理由が理解できる。

大量といっても足りないくらいのエルスと呼んでいた金属生命体に囲まれても動揺しなかった。それどころか、一対数千という数に対応したビットの操作、晶の仲間らしき人達もすごかった。

セシリアにいったては、同じビット使いでも、自分が代表候補と偉そうにしていた事を恥じているようだったし。その前に晶のことで偉く冷静な鈴に喧嘩してたけど。

鈴も晶に再会して変わったな。俺達の前で告白するといったときは驚いたが、それ以上に一度告白しているというカミングアウトまでしたし。

箒とセシリアは抜け駆けが同の項のいつてたが、鈴はどうして『どうして、アンタ達の許可が必要だったの？ アタシは唯自分の気持ち素直に晶に言っただけよ』と堂々としていた。

それにかんして、箒達は何もいえなくなった。鈴は箒達のことより、晶に無茶させない方法の方が重要だといって部屋に戻ったし。

それに、告白の返事は聞いてなかったな。もしかして振られたのか？

いや、箒達や他の人達がない床だと晶にべったりだった所は何度

が見たからそれは無いか。保留か？  
など、晶の事を考えて眠りについた。

## 第 Side

今日は人生の中で驚くことの連続だった。

小学校の時に助けてくれた晶の知らない顔ばかりを見てしまった。

よく考えたら私は晶のことを全く知らないな。

能力のことは驚いたが、今日のはそれ以上だった。

晶の手から出た魔法陣には驚いたが、それ以上に『瞬動術、いわゆる縮地だ』本当にそんな事が出来るのか不思議に思ったと同時に晶の隣で剣を握って共に戦いと強く思っている。

鈴が晶に告白したお聞いたときは驚いた。一夏は鈴は晶と再会して変わったと言っていたし、告白したからであろう。

(私も晶に告白できるのか・・・／／)

鈴には負けたくないと思っただけでもいざ告白する場面を想像すると頭が真っ白になって勇気がでなくなる。

そう考えても、晶の事は諦めたくない。

そう決意して私は眠りについた。

セシリア Side

今日の出来事は無人機以上の日でしたわ。

鈴さんの告白もそうですが、それ以上に初日の自分のバカさ加減に顔から火がですすわ。

晶さんの過去に出ていたビットの扱いには自分との実力の差が天地ほど離れていると実感が持てました。

自分の実力程度で代表候補とえらそうにしていた過去の自分を殴りたい気分ですわ。

自分の未熟さに呆れても何も始まりませんし、それに、晶さんに告白済みの鈴さんに負けたくありませんし……。

鈴 Side

晶事も気になるけど、それ以上にデュノアが晶の事をフランと呼ん

でいたことが気になった為、デュノアの部屋に向った。  
デュノアが来る前の癖でつい、ノックをせずに入った。  
そうしたら、私以上の胸をしている金髪女の子がいた。

「へ!?!」

「女の・・・子・・・?」

その後、少し混乱したが、デュノアが説明をした。

自分は愛人との間に出来た子供だからとか、父親に命令されてこの学園に編入したとか、色々説明してくれた。

代表候補生となると、色々としがらみがついたり、家庭問題を抱えてるんだなあとすこし苦笑した事は黙っておこう。

「まあ、晶が何も言わないなら、アタシも何も言わないわね」

「え!?!? で、でも僕は皆を騙してるんだよ?」

「それは、バカ親父のせいでしょ? アンタの意志じゃない。それに、アタシもなんとなくわかるのよ」

「え?」

「両親に振り回されてるあなたの気持ち。アタシに両親はね離婚

してるのよ。日本にいたときは仲がよかったけど、そのあとでね、中国で帰っ後色々あってね。アタシは両親の事より晶が行方が気になってね。二人に振りまわされてたまるかーと思って中国の代表候補になったのよ。

それに、代表候補の特権で晶の行方を捜そうとしたけど本人は何事も無かったかのようにIS学園にいたし。

晶に関わってから常識なんて消えたわよ。あんたもそうでしょう？いちいちそんな小さなことを気にしてもしようがないし。

むしろ、そのバカ親父に往復とか考えないの？と聞きたいわよ」

「はは……、なんか鈴音さん、フランに思考が似てるね」

「それよ、私が気になったには。晶の過去か知らないけどフランて呼ばれてたし。あんたは晶に何したの？」

「告白／＼／」

「それだけ？」

「僕の本名も教えたらお返しにっつて、フランの本名を教えてください」

なるほど、納得。

「アタシの事や千冬さんの事は聞いた？」

「うん、二人とも告白済みなのは聞いた」

でしょうね、ていうか、それ以前に双子の姉妹と付き合ってるんだし、普通に考えたら軽蔑するかもしれないけど、晶の場合は足りな

い。

今日の晶の表情を見たらそう思える。

あんなに楽しそうな表情は始めてみた。新しいおもちゃをもらった子供みたいに笑っていた。

自分の体がひどい状態になっても笑ってる晶には自分がどれだけ好かれてるか、自分が死んだらどれだけの人が泣くか自覚させるには。

シャル S e d e

鈴音さんにタオル姿を見られた時はびっくりしたけど、フランに水泳の授業のときははばれるといった為、もうばれちゃったって感じだった。

これが一夏なら叫んでたけど。

鈴音さんにはちゃんと説明をした、何を言われてもめげない覚悟しただけであっさりと受け入れた事に少しは驚いた。

その後、フランに本名を教えたり、押ししてもらった事を説明したら羨ましがられた。

けど、先にフランとあってるし少しくらいいいよねと自分が焼きもちを焼いている事に気づいたら。

「アタシの事や千冬さんの事は聞いた？」

事前に聞いてたから、素直に答えた。

鈴音さんは怒った顔をして

「晶には、自分が傷ついたり、死んだりしたら悲しむ人がいるか  
自覚させるには」

と、独り言が聞こえた。

それには、僕も同感。

フランのことはみんなよりは詳しく聞いていても、今日のような大  
怪我するような事は聞いてなかったし。

ちよつと、お説教がほしいのかなあと思ひ始めた。

「まあ、フランって名前も明日には説明してもらつから言いとして、  
お互い大変なのに惚れちゃったみたいね」

苦笑しながら、鈴音さんが言ってきた。それには僕も苦笑して同意  
した。

鈴音さんには呼び捨てでも構わないといって、自分の部屋に戻って  
いった。

S i d e o u t

翌日、晶の見舞いに行った、一夏達を待っていたのは、晶が行方を

くりましたという出来事だった。



## 11話 それぞれの思い（後書き）

腰を痛め、三日入院しました。あ子の年で腰痛か・・・、そのお陰で仕事は二週間の休みをもらった、ラッキーといたいたいが長く座れないのは痛いです。

さて、意味は全くないけど各キャラの晶に対する性格を簡単に説明しますと

一夏＝ツッコミ

篤&セシリア＝ツンデレ

鈴音&千冬＝クーデレ

シャル&ラウラ＝デレデレ

当麻＝命の恩人（お金の面とテストの面で）

一方通行＝一番親しい知り合い

琴子＝レールガンライバル（但し一方的に）

学園都市サイドは性格じゃないが

時期に二、三話後に一夏達と当麻を接触させる予定です。

今回は心情が難しいです。

## 12話 病院で

晶のお見舞いに行った一夏達を待っていたのは空のベットだった。

「晶は!？」

病院でも騒ぎが起きてないという事は、昨日の連中が使っていた魔術らしきものの所為だと、一夏達は想像した。

「護衛をつけるべきだった……」

千冬は自分の迂闊さに腹を立てていた。晶が強いと知っていても、本人は全治三ヶ月の大怪我のうえ、二週間は絶対安静だといわれている。

そんな、状態で襲われたら結果は目に見えている。

「襲われたわけじゃ無さそうだね……、誘拐かな？」

「でも、此処は病院ですわよ？ 言いたくありませんが人死がでもおかしくないところですよ」

「そうだな、その線を考えてと誘拐か」

人が死んでもおかしくない場所で誘拐するより、その場で事故に見せかけて殺すほうがリスクがすくない。

「晶は生きてるのよね？」

なのに誘拐したという事はまだ生きているという希望に繋がるが、誘拐犯にそんな希望を持てるほど彼らは樂觀視できない。

なぜなら、昨日は非現実な出来事を見ているからだ。人を殺すには凶器は要らない、テッラと呼ばれていた男は小麦粉だけで人を殺せるのだから。

動揺している中、鈴音だけは以上に心配していた。4年前に失踪のある晶がまたいなくなっただけでもあるせい言葉が出ないくらいに動揺している。

「お前等、なに人の病室で騒いでいるんだ？」

そんな、彼女達をよそに誘拐されたと思っていた少年は呆気らんかんとした顔で彼女達に質問したが、彼女達は動転していて気付いていない。

「晶が誘拐されたんだ、騒ぐなはしょうがねえだろ？」

「神代無事でいてくれ」

ラウラの姿にびっくりしている晶。

ちなみに、ラウラは一夏に殴ろうとしてすまなかったと誤ったが、一夏にとっては晶から喰らった天井突撃の方が印象が強すぎてラウラの事は特に何も思っていなかった為、普通に接している。

「同名の人間がこの部屋にいるのか？」

「そんな偶然あ……る……??？」

さつきから会話に入った人間の声に意識を傾けると自分達が探していた人物が不審な目で一夏達を見ていた。

「……………」お前のことで騒ぎになっていたんだ!!!」「……………」

「なんだ？」

一番先に口をあけたのは一夏だった。

「お前どこ行ってたんだよ!? それに包帯はどうしたんだ!？」

ベットで寝かされた晶は体中に包帯を巻いていたが、その包帯が一つもない、その所為で晶の外傷がひどく目に付く。

「コンビニで弁当と今日新発売のフルーツカクテルを買いに。それと包帯があると動きにくいから捨てた。それにしても腕って一日で生えかえるものなんだな？」

その言葉に、全員が呆れ顔になる前に怒ろうとしたが。

「アホか！ お前は全治三ヶ月で二週間は絶対安静なんだぞ？ そ

のために包帯を巻いて動きにくくしたんだ。 学生が酒を飲むな！  
それと腕は生えたんじゃない縫ったんだよ！！」

ツッコミ担当の一夏のツッコミの速さと正確さに一同が感心する。  
その所為で怒るタイミングを逃した。

「そうなの？ どんな医者かって聞く必要はないか。 んで皆でこ  
こに来たということは昨日の事だろう？」

晶は一夏のツッコミは気にもせず弁当をあけて食べ始めた。

「そうだ、魔術と呼ばれた不可思議な現象に、なぜ学園都市の生徒  
であったお前が襲われる理由。この二つだ」

「待ってくれよ！ 千冬姉、それだけじゃない。フランって呼ばれ  
たた、あの時の映像もだぜ？」

「馬鹿者、それは神代のプライベートだ。私達が知る必要ない」

「そ、それはそうだけど」

「じっつそっさん」

千冬に視線を向けてる間に弁当を食べ終えた晶に驚く一夏達、晶は  
それを無視して説明を始めた。

「予想はついてると思うけど、昨日使ったのは魔法みたいなものだ」

「見たいな物？」

「簡単に言うと魔法は魔術で実現不可能な神秘。今のお前らに魔術をおしえるなら魔法という単語がわかりやすいから使っただけ。ちなみにこの世界では五つしか確認されていない」

「五つだけ？」

「まあ、どれも出鱈目な効果だからな。死者蘇生だったり、平行世界の運営だったりな」

「魔術の事はわかった。後はなんで学園都市の生徒であるお前を襲う必要がある？」

「それは、学園都市はそれなりに恨みを買ってるからね。魔術師の中ではISより学園都市のほうが危険だと思ってる人は少なくない。ISを恨んでる魔術師もいるけど、それはあくまで紛争の激化や経済状況を大きく変えただけだからな。それに、魔術は神話やら宗教に深く関わるからな。昨日の失敗面の言葉覚えてるだろ？異教徒の猿つー言葉。神様にお祈りしない人間は敵と考えてる短絡思考の持ち主もいるんだよ」

「お前はそれを知っていて、この学園に来たのか？」

「そう、学園都市の命令ってのが気に食わないけど、そっこのほうが都合がいいからね」

「都合？」

「そう、学園都市じゃあ、衛星で監視されてるからね、学園都市

を出し抜くには外の方が準備しやすいんだよ」

「出し抜くって・・・、お前はどっちの味方なんだ？ 魔術師達の狙いは学園都市だろ？」

一夏の質問に晶は。

「統括理事会の糞どもに好き勝手やらせておくと厄介なんだよ。いろいろ理由をつけられ利用される事もある。お前らが思っている以上に学園都市の裏はドス黒いんだよ。俺はISを動かした男つーことで外の魔術関連の事件の始末を押し付けられたし。くわえて昨日のような連中をおびき寄せる為の餌役でもあるからな」

ケラケラ笑う晶。

「昨日の連中は魔術師だよな？」

「ああ」

「昨日の奴ら見たいのがゴロゴロいるのかよ？」

アックアの強さを肌で感じた一夏は質問した。

「まさか、アックアのような化け物は20人もいないって話だ。大抵の魔術師はISにのって本気で殺しにかかれれば簡単に殺せるぜ。もっとも殺そうとせず叩くとなると逆にやられるけどな」

『……………』

一夏達は少なからずショックを受けた。  
一夏達は人間相手に本気でISを使ったことがない。IS同士だからこそ本気が出せる。いくら魔術師や能力者が相手でも相手は人間では本気で攻撃が出来ない。

「お前は殺すのか？」

「ああ、邪魔になるなら躊躇なく殺すぜ。一夏、俺はお前が思ってる以上に悪人だぜ」

顔色を変えず言う晶にすこし戸惑った筈とセシリア。

「まあ、それは兎も角、学園都市ってそんなに殺伐してるの？」

「ともかくって……」

晶の言葉に全く動じない鈴音に一夏は呆れる。

「殺伐としてるのは裏だけだよ。殆どの学生は普通に学園に通ってる奴らだけだよ。それに人を殺せる能力者は本当にごく一部だけだ。もっとも裏じゃあ非人道的な実験をしているところもあるからな」

「実験？」

「聞かないほうがいいぞ。当分飯が食えなくなるところか発狂してもおかしくない実験だけど、聞くか？」

『……………』



全員がやめておくと表情になる。

「表の科学のIS側に、裏の科学の学園都市、それに魔術結社、その中でISはあまり相手にされてないが、学園都市と魔術側はならみ合ってる関係だ。」

それと魔術組織は大きく分けて三つあり、お互いもいい関係じゃないからISを入れなければ四つ巴だ」

昨日戦闘で自分達の非力さを自覚していても自分達がつかつてるISが相手にされてないとハッキリ言われたことに少なからずショックを受ける。

「ちなみに、学園都市と魔術側には世界をどうにかできる切り札がある。ISは確かに戦闘力は高いが数が限られてる上、使えるのは女だけだ。」

ベテランの軍人が使えば話は少し違つかもしれないけどな」

その言葉で納得してしまった一夏達。

「後は俺がフランと呼ばてた理由だな。お前らが見たのは映像に変わった言葉が出なかった？」

プライベートに関わる事を説明する晶に少し戸惑ったが、知りたい気持ちがあるためか素直に言う一夏達。

「刹那達の世界か……。そっちも感じていると思うが、その出来事は実際あったが、この世界ではない世界での出来事だ」

「は？」

「さつき、魔法の話の中にあっただろ、平行世界の運営、アレはこの世界と別の世界を移動する魔法ってことだよ。俺はそれが使える」  
「お前はIS学園に来る前にあの世界の出来事に関わっていたのか？」  
能力、魔術などオカルト現象があるとわかった今、他の世界が存在するといっても違和感がなくなった一夏達だが。

「んにゃ、この学園どころか、この世界に来る前の前の出来事だけ？」

「なんで、疑問系？」

「だって、俺数百年生きてるし、ぶっちゃけ年などはここ数年しか記憶できないっ—か記憶する気がないんだよ。その世界の出来事は少なくとも60年以上前なのは確かだな。うん」

「「「「「「はああああ!!」「」「」「」」

「うるさいよ、シャルを見習え、動揺してないだろ？」

「いや、フラン。僕は事前に知ってるから、それはちょっと…」

「ちょっと待て。お前不老不死ってやつか？」

「さあ？」

「さあつて、アンタ」

呆れた顔をした鈴音。

「だってよ、死ぬような体験してないから不死といえないし、たった数百年生きてただけで不老ともいえんからな」

「お前が教師をちゃん付けで呼ぶ理由がなんとなく理解できたな」

「そう？ まあ俺はそんな化け物だ。これで俺のほとんどのことは話した。俺に関わらなければこれから危険な目にはあわなはずだぞ。魔術側や学園都市関連に限られるけど？」

これ以上、自分に関われば危険な目に合うから他人に戻れといっている晶に、最初に反感したのはラウラだった。

「ふざけるな！ そんな事は私には関係ない！

お前はお前だろ！ 私はお前に救われたんだ！！」

そう、ラウラは叫んで晶の胸倉を掴み、キスをした。

「お前がなんと言おうと、お前は私の嫁だ！ 絶対に離さないからな！！！」

「……えーと……」

「……」

「ほっー」

「「うわー」」

「婿じゃなくて？」

箒とセシリアは啞然としていて、千冬は関心し、鈴音とシャルは意外だという顔をしている。

ツツコミを入れたのは無論一夏。

晶は告白してきた鈴音達の顔を見たら、ラウラと同意権だという表情している。

固まっている箒とセシリアに一夏は助言するようじ。

「お前らもいい加減素直になったらどうだ。鈴も告白したて言うてたし。今晶に選んでもらえばいいじゃねえか？ 見てて歯がゆいから今すぐに」

「い、一夏！？」

「／／／／／」

それぞれのアクションをした二人に晶は顔を向けた。

「わ…私は「ほ、箒さん！？」 小学校の時からあ…晶のことが好きだった」

「ちよ、えええー！ー！！ 篝さん！？」

「後はアンタだけね。私の気持ちはあの時同じだよ晶」

「鈴さんまで！？」

「はあ、なんでこう俺に好意を向けてくれる子達は頑固なんだろうね」

少し、呆れながら言葉を発する晶。

「そりゃあ、好きになっちゃったんだから」

笑顔で答える鈴音。

「わたくしだって、晶さんのことが好きですわ／＼／＼」

「なんで、この学園にきてから急に俺の女関係が激しく変化してるんだが、何でだろうな？」

「それで、嫁よ。誰を選ぶんだ？」

「そ、そうだ」

「そうですわ」

「はあ、選ぶ必要があるのか？」

三人はその言葉にショックを受けたが、晶は無視して。

「一人選ばないといけないモラルは知ったことか」

「……!!それって!?!?!」

鈴音達は苦笑している。

「悪いが振る気はないからな」

と、ハーレム宣言した時に、

「聞いたかよお前ら？ ハーレム宣言しましたよこの人？」

「全くぜよ。こっちは中間テストの結果で最悪でテンションが下がったのに」

「オマケに大怪我したと聞いたから、学園をサボってまでお見舞いに来て見たら、告白されてるやん」

「よ、よう…晶」

「当麻、土御門、寿士、それに誰だ？」

「僕だけひどいやんあきやん!?!」

「黙れ、エセ関西人」

学園都市にいた時のメンバーがお見舞い品をもって、出口の前に立っていた。

「全く、少女の大声をきいて来てみれば、美少女達に告白されるなんて、なんて羨ましいんだ元生徒会長」

「全くやね。うち等と一緒にあった時はそんな話しが出てきてへんかったのに」

「待てよ。かみやんが近くにいなかったから、美少女達が寄って来たかもしれないにや」

一夏達は唯、啞然としていた。そんな一夏達を無視して、晶の悪友達は話し続ける。

「土御門、それって？」

「そうだ、師匠。かみやんが近くにいなかったからあきやんはもてる、かみやんがいなくなれば俺たちにも彼女が出来るはずにや」

「そうや、ワイ等そんな簡単な話、なんでももいつかなかったんや！！」

三人はツンツン頭の少年を睨みつける。ちなみに殺気付で。

「えーと、何で晶のお見舞いに来たのに、上条さんの抹殺になってるんでしょうか？」

少しずつ、後退していく上条さん。

「師匠と青髪はかみやんを。俺はあきやんを殺る」

「わかった」

「了解や」

「不幸だーーーーー!!!」

「「まてやーーーーー!!!」」

病院だという事を忘れて追いかけてこを始めた三人。くわえて自己紹介もしなず。

土御門は晶に視線を向けた。

一夏達はポカーンとした顔で眺めていた。

「あんな茶番をして、自分が残ったって事は仕事の話しか？」

笑みを浮かべながら。

「そういう事だ。学園都市の人工衛生で昨日の戦闘は記録されてるからな。もつともそれを見たのは俺と統括理事長だけだな。こいつらに魔術の事を話したんだろ？ 映像に映ってたし」

「ああ、だから、そのまま仕事のことを言っても構わん。にしても外に入るのに衛星で監視か？

相変わるずいい趣味してるぜあの統括理事長は」

晶も笑みを浮かべる。そして先ほどまでのふざけた空気が一変し重くなつた。





### 13話 学園都市の闇

「んで、どんな仕事だ？」

晶は単刀直入に聞いた。

「最初は一つだったんだけど、此処に来る途中でもう一つ増えたぜ。もっとも二つ目は今すぐに解決してほしいそうだ」

「初仕事と思つたら、この状態で二つもかよ？」

晶の体は先日の魔術戦で体はボロボロ。

「安心しろ、もう一つは夜のお仕事ぜよ」

「晶の怪我のこと考えてないのかよ!？」

晶達は一夏達を無視して話しを続けた。

「んで、仕事のオーダーは？」

「一つは冬木市って町だ。もう一つはある研究所が警備員アンチスキルに見つかり、殆ど御用となったが、

逃げ出した連中もいるってわけで「学園都市に戻って俺に捕まえるってか？」  
半分解

「半分って事は、こいつ等外に逃げたのか？」

「ああ。ついさっき学園都市を出たそうだ。研究のデータやら何やらを持ってな」

「おいおい、仕事してるのかよ？ 簡単に抜け出せないだろ？」

「普通はな、上がわざと逃がしたんだろうよ」

「はあく、外のどっかの組織と繋がりがあるから、そいつ等も何とかしると？」

「ご名答。もつともそつちの方は俺の仕事だな」

「それでも、俺がこんな状態だつてわかってるだろ？ その命令した糞は誰だよ？ 統括理事長じゃないだろ？」

「さすがだな。命令したのは統括理事会の磯貝と親船だ」

「じゃあ、そいつ等を始末してから受けるわ」

「気持ちはわかるんだけど堪えてくれ。磯貝は兎も角、親船に貸しを作っておいて損は無い。親船最中は統括理事会の中では人格者だ」

「その手の人間は貧乏くじを引かされ、尻拭いしか出来ないんじゃないのか？」

学園都市の統括理事会の殆どは自己の利益しか考えない為、邪魔な人間は排除しようとする自己中心的な人間ばかり。

「多分な。でも統括理事会の権限は捨てがたいぜ。場合によってはお前のわがままを聞いてくれる」

「オーケーオーケー。だが、俺の状態を知ってるなら、返り討ちに遭うっては予想できないのかよ？」

「スーパーシケナル迎電部隊が待機してる」

スーパーシケナル迎電部隊とは学園都市の情報流出防止と、それを行った者の（殺害も含む）徹底排除を目的とする組織である。

「なるほど。俺が返り討ちにあっても、俺をそのまま研究材料に出来るからね。どっちに転んでも損は無いか」

他人事のように言う晶に一夏達は驚いた。

「なっ、なんだよそれ！？ ふざけてんのかよ？」

「別に俺達としては今更だからな連中のやり方は。能力使用は問題ないだろ？」

「ああ、晶はそいつ等を、俺は連中の逃亡先の組織を洗ってつぶす」

「ラジャー」

晶はそのまま、病室を出ようと立ち上がったが。

「ふざけんなよ！！ お前死ぬつもりか？ 自分の体がどういう状態かわかっているのかよ？」

「この程度能力で補える。それに、そいつ等が研究していた内容が気になるからな」

このまま動かなかつたから、統括理事会はもみ消すつもりだ。場合によつちや統括理事会を脅せるネタを持つてるかもしれない」

止まる気が一切無い雰囲気を出してる晶。

「お前を止められないなら私達は勝手についていくぞ？」

晶は晶を止められないと察して、自分達も行くと言い出した。

一夏達も同じ意見だと言わんばかりの顔に。

「いいんじゃない？ オーダーはそいつ等を始末だし、外に逃げられた学園都市の落ち度だから、

外の連中に目撃されず始末は不可能だ（場所によるけど）。俺はそこまで責任は持たない」

「まあ、晶と付き合う気なら晶の見てる世界を見る必要があるしな。俺も止めないぜ。

行くなら師匠達が戻ってくる前に行くぞ」

「あの人達は？」

「裏とは関係ない一般人だ。さっさと行くぞ」

土御門はそう言って、晶についていく一夏達を急かした。

「連中の逃走ルートは？」

「そっちの、携帯のGPSに送るぜ」

土御門は携帯で逃走班の座標を送った。

「結構離れてるな。一夏達は空からISで千冬ちゃんと箒は俺が連れて行くから」

晶はそう言って、専用機を持ってない二人とテレポートで追いかけた。

一夏達はすぐにISを展開して晶達の後を追った。

晶はビルの屋上から屋上へとテレポートを使って、一般人に見られないように移動した。

「全く、あきやんもかみやんと同じで人を惹きつけるかさてと、かみやん達に見つかる前に行くとするかにや〜」

土御門も当麻達に見つかる前に仕事に向った。

その、当麻達は病院の外まで追いかけてこした。

二人を振り切った当麻はメールで晶に謝り、学園都市に戻ったが、その途中で不幸な目に遭ったのは別の話し。

「さてと、連中ならば必ず此处を通るし、人氣が少ないから丁度いいな」

晶は逃走車を通るルートで人氣が無い場所で待ち伏せすることにした。

「晶、本当に体は大丈夫か？」

「ん？ ああ言い忘れてたけど。起きた時、魔術で外傷以外の傷は殆ど治したから、痛みは殆どねえ」

「それを早く言え、馬鹿者」

千冬がそう言っていると一夏達も晶に追いついた。

「なんだよテレポートってあんなふうに使っものなのか？」

「まあな、俺の移動できる最大距離は70Mぐらいだからな、時速

にすれば270km/hぐらいだな。

その日のコンディションで変わるけど、大体はこれぐらいだ」

「これが、嫁の能力か」

「婿だろ？」

ラウラの発言に一夏以外はスルーした。

そんなやり取りの中、晶は携帯で土御門に連絡を入れていた。

『どうしたにや〜？』

「逃走した連中の数は？」

『6人、その内二人は研究員で残りはスキルアウトの人間だ』

「なるほど、そっちも気よつけるよ？」

『そっちより安全だ。終わったら学園都市の人間に適当にかけろ、向こうさんから割り込んでくるはずだ』

「あいよ、全くいい趣味してる」

『同感だ』

晶と土御門はそう言って電話を切った。

「」と、そろそろこっちにくるな」



「どうやって、取り押さえるの？」

「ん、とりあえず足をつぶすのがセオリーだな」

シャルが質問したとき、曲がり角から大型のトラックが見えた。

「俺達はどうすればいい？」

「死なない程度で好きにしろ。対人間には丁度いい訓練だろ？」

「おいおい」

晶はそう言って、木をトラックに向けて蹴った。

晶にけられた木は、真っ直ぐトラックのほうに向った。

トラックの運転手は咄嗟にハンドルを切ったが、トラックはバランスを崩し、横に倒れた。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

「さてと、後は髑殺しにして、学園都市を脅せるネタが無いか調べるだけだ」

晶の行動と言葉に一同が啞然とした。

「なんで、晶に頼んだか少しわかった気がしたな」

「そうですね」

「はは……」

晶がゆっくりトラックに近づくと、3人の男がトラックの荷台から出てきた。

「まさか、能力者が待ち伏せしているとはな」

「IS所持者もいるか……、まあいい邪魔するなら殺すか」

「同感だ」

物騒な言葉を発した三人に一夏達は警戒した。

ブオン！！ という轟音が鳴った。

三人はいつの間にか晶の後ろに移動していた。

「まずは能力者であるお前からだ」

晶はテレポートで移動して避けたが、一夏達は三人の動きに驚愕した。

「何なんだよ、今の動き!？」

「ISでも無理な動きだったわよ」

その動きを見た一夏達はより警戒したが晶は変わらず。

「この運動性能・・・、服の内側に『ハードテーピング発条包帯』を仕込んであるのか」

三人の男達は晶をにらみつけた。

「・・・」

「ハードテーピング？」

「学園都市で開発したパワードスーツの運動性能部分だけ抜き取って、独立させ膝の装着したんだよ。

もつとも生身でそんなことすれば足は自壊するが、こいつ等は鉄板を仕込んで防いでいるか。だが時期に限界が来て、足の筋肉繊維が切れるかやっぱ自壊するだろうが」

「貴様等のような能力者の化け物を相手にするんだこれぐらいやらないと太刀打ちできないだろ？ それにしても満身相違だな」

「お前等は後ろの連中を殺れ、俺はこいつを殺る」

そう言って、二人は一夏達のほうに向った。

「くっ」

一夏は構えたが。

「遅い」

一人はいつの間にか、一夏の横に移動して、一夏を殴った。

「「「一夏!」」」

「他人を気にしてる場合か？」

もう一人はセシリアを掴み、ラウラとシャルがいる方向に投げた。

ISのシールドのお陰が大したダメージは無いが、二人の動きが全く見えなかった一夏達はあせり始めた。

「ISか・・・、厄介な物だ。こっちも限界があるんでな」

そういった男は背中からアサルトライフルを取り出し、撃った。

「空から行けば」

鈴音は空に飛ばうとしたが、もう一人の男は高速で飛来し、鈴音を地面に叩き付けた。

「くっ」

「鈴!」

「なっていないな。少しは連携をしたらどうだ？」

「大したものだな。学園都市は」

千冬は男の後ろを取り、攻撃したが、うまく防がれた。

「なるほど、マシな奴がいるか」

「おーい、後ろ」

緊張感が漂った空間を壊すような言葉が聞こえた瞬間、赤い物体が男の背中にかかった。

「何だと？」

赤い物体が飛んできた方向を見たら、晶がもう一人の男の腹から上下に二つに真っ二つにしていた。

晶にやられた男は悲鳴を上げていた。

「ガアアアアア！！」

晶が投げたのは男の元下半身の一部だったようだ。

「さーて、今度はテムエ等がスクラップになる時間だぜ」

「貴様……」

「!?!」

「あ……き……ら?」

「何を驚いている一夏? これは試合じゃない。実戦だ」

「で……でもよ?」

一夏が問いかけてる隙に、男達は晶に襲い掛かった。

「ツチ!」

晶は後ろにテレポートして避けた瞬間、トラックから雑音が響いた。

「何だ!? なんだ頭に直接響くみたいなこの雑音は?」

晶は苦しそうに耳を塞いだ。

「晶!?」

一夏達は動こうとしたが、ISからエラーという文字が浮かび、ピクリとも動けなくなった。

「ようやく、起動したか」

「何をした?」

千冬は睨みつけ、問いただした。

「ISと能力者を止める機械を同時に起動させただけだ」

「何だと!？」

「ISのは名前は知らんが、能力者のはキャパシティダウンと呼ばれるだろうな。作られたばかりの奴をかつぱらったからな」

「・・・何？」

「強力な能力者が暴走したときに止める為に先日開発されたものだ」

その言葉に晶は。

「（ツチ、統括理事会はその事を知っていて俺を？）」

「ISの方はどっかの技術者が作って世界にばら撒こうとしたが、アシチスキル警備員に見つかり、処分されるところを回収したわけだ」

「そんなものが開発されていたのか？」

一夏達にはキャパシティダウンは雑音にしかしては甲高い音にしか聴こえない。

「……、それ……で、資金を得るつもりか？」

「そういう事だ」

「ック！」

動けるのは千冬と箒だけだが、二人の男は銃器を手にしているため、迂闊に動けなかった。

「（つち、うまく演算が出来ない。病院を出るとき魔術回路から切り替えたばかり、何とか魔術回路に切り替えて魔術を使うと、待機している迎電部隊スーパーシグナルに目撃される可能性もある。……、か八か！！）」

晶はポケットから一枚のカードを出して。

「アデアット」

カードが二挺のの装飾銃に変わった。

「!?!」

その銃は人間が扱うには少々サイズが大きい銃だった。

「（魔力を限界まで送って）……これで!！」



晶は二挺の銃をトラックに向けて発砲した。

発砲された玉はトラックに直撃しただけではなく、トラックそのものはとんでもない衝撃を受けた。

「ゴホッ、ゴッホ・・・」

晶の口からはかなりの量の血が吐き出された。能力を使うための回路で魔力を使用した代償で体の外傷から血が溢れた。

「貴様、なんだその銃は？」

『晶!!』

晶が吐血してる隙に晶に発砲したが。

玉は何故か男の拳銃に命中して、男が持っていた銃は内側から暴発した。

「何!？」

晶は直ぐに一方通行のベクトル操作で反射を再現していた。

「たっく、手間かけさせやがって。とりあえず念の為だ」

ドン!! と晶が軸足が、思いつきり地面を踏みつけた。

硬い地面が下から突け上げられように振動する。晶の足元からトラックまで一直線にアスファルトの道路に放射状の亀裂が走り、トラックに衝突した。  
トラックの窓ガラスは砕け散った。

「昨日の戦闘は楽しめたが、お前等とは楽しめないねえな」

「二つの能力だと!？」

「デュアルスキル  
多重能力!？」

二人の男が驚愕した。

「き……お……付ける……そいつは……お……る……  
す……きるだ」

晶に体半分を切り取られた男が、最後の力を振り絞って口にした。

「オールスキル  
全能力!？」

「本当にいたのか!」

「悪いが、身体中がやばくってな、加減はしねえ。どんな風に死にたい?」

「クッソ！！」

「っち！！」

二人が動き出そうとした瞬間に、晶は二人より早く動き、一人をもう一人の方に蹴り飛ばした。

二人は十数メートル飛ばされた。

「気を失ってない？ タフだね。何割か皮膚を剥いでやるよ！！」

晶は二人に向って跳躍した、一度の跳躍で二人の目の前まで移動して、踏みつけた。

すると、一人の男から悲鳴が響いた。

「テメエは両足をつぶすか」

もう一人の男からも悲鳴が響く。

それを、見ていた一夏達は戦慄した。

「さーて、あのトラックにもまだ人がいるよな」

血まみれの体でトラックまでテレポートしようとしたが、窓から一人の男が出てきた。

その男の見た目は素人が見ても戦闘向きではない。土御門が言っていた研究者だろうと晶は睨み、  
↑プロポイント  
座標移動で自分の目の前までテレポートさせた。

「ヒイイイ！ た、助けてくれ」

「質問だよ？ どんな実験をしていたんだ？」

「ぼ、暴走能力の法則解析をしていた」

「誰の指示だ？それにスポンサーは誰だ？」

「わ、私も知らない。た、頼む命だけは！！」

「被験者は？」

「お、置き去り達だ。全部話したんだ、命だけは」

「うち、殺す価値もねえが、リアル人体模型になってるよ」

晶は研究者の体に触れ、研究者の皮膚を剥いだ。

研究者からも悲鳴が響く。

「なんで、そこまでやるんだよ晶？」

「お前は甘いな一夏。こいつ等がモルモットにしたのは子供だぜ？  
そんな奴等を楽に死なせるほど俺はお人よしじゃないし甘い性格

でもない」

晶はそう言って、トラックの前にテレポートして荷台の中に入った。その中には、男一人が気絶していた。

「さっきの衝撃で気絶したか、もう一人も気絶してるだろうな。ん！　これって！」

気絶した男の周りには容器の中に入っていたであろう脳らしきものが散らばっていた。

「うち、自分をモルモットにすればいいものを」

そう口にして、トラックの中にあるメモリーや書類類などを　倉庫に入れた。

荷台からでたら、篝達が近づいてきた。

「フラン、何かあるの？」

「子供達の脳だが散らばってた、おおかたさっきの衝撃で容器に入ってたものが散らばったんだろ」

その言葉で、シャルや近くにいた篝達はそれを聞いて、驚いた。

「!?!」

「見たければ見る。止めないぜ。これが学園都市の裏の闇だよ。も

「つともこんな事は外の裏でもやってそうだけど」

その言葉で一夏と筈、それにセシリアが動かなくなった。

「……………」

晶は携帯を取り出し、電話をかけた。

『なんだ？』

「残飯処理は終えたぜ。とっとと呼吸するだけの肉塊を処分しに来い。後、金もすぐに振り込め」

『わかった。すぐに処理班を向わせる。』『苦』

ピッ

晶は礼を言われる前に切った。

「何か聞いたそうだが、まずは此処から離れるぞ」

「どうだね」

「そうだな」

「晶、体は大丈夫なの？」

シャル、ラウラ、鈴音の言葉に晶は呆れた顔をした。

「一夏達の態度が普通だと思っ俺はおかしいか？」

一夏と箒、それにセシリアはすこし戸惑った顔をしていたが、他の四人は何事も無かったような顔をいていた。

「私も実験動物みたいな扱いを受けてきたからな」

「僕もそうかな、此処までひどいくは無かったけど。同じ様な感じかな」

「私はないけど、晶は言ったからね。残酷な事が出来るって。だからその三人よりは冷静よ」

「」「！」「」

「貴様等、そんなことより、此処を離れるぞ」

千冬がそつ口にした時。

「おぬしは、相変わらず敵対するものには容赦が無いのう？」

晶が声をする方に振り向くとそこにはかつての友人達が苦笑して立っていた。

「ゼクト！？ 茶々丸！？ それにエ…ヴァー！！」

## 14話 再開と不幸？

一夏 Side

晶が学園都市から請けた仕事を終わらせた直後。

「おぬしは、相変わらず敵対するものには容赦が無いのう？」

見知らぬ三人組が声をかけて来た。

「ゼクト！？ 茶々丸！？ それにエ…ヴァー！！」

知り合いなのか今まで動揺した事なかった晶が動揺していた。

「……ツチ！！」「」

何故か、小さい男の子と三人のうちで保護者的な立場の女の子？とその子の頭に乗っている人形が舌打ちした。って人形がしゃべった！？

「貴様等は……」

「まあ、なんでゼクト達が舌打ちをしたかは気になるが、お前等も先に行ってくれないか。俺はちょっとこの子に話があるから」



晶が黒を基調としたゴスロリ服に身を包んだ少女と話があると言  
って此処を離れるよう言ってきた。

当然、その事で箒とセシリアが若干不機嫌になった。

少し離れてから鈴が

「アナタ達は晶の知り合い？」

「そうじゃよ。しかし、一発でエヴァだと気付いたとは」

小さいのに何故か年寄り口調の子供が愚痴を言い始めた。

「そうですね。てつきり『誰だ？』と口にすると思ってたんですけど」

『全クダゼ。ゴ主人モ嬉シイ顔シテタシヨ。賭ケハゴ主人ノ勝ちカ  
』  
『』

「あの一、賭けって？」

「フランが今話してる子は不老不死での全く成長しなかったんじ  
やが、フランに遭う前に成長薬を作って成長したんじや。

フランが成長した姿を見て、どんなリアクションを取るか賭けたん  
じやが」

「3人とも外れたと？」

「はい」

「以前はどんな姿だったんだ？」

俺はなんとなく質問をした。

「10歳の少女です。しかも600年間その姿です」

『600年!?!』

「わしも同じ様なものなんじゃが、なんで成長したいのかのう、ア  
レは？」

この子も何百年も生きてると言わんばかりな台詞を吐いた。

「賭けは私の勝ちだな。シヨタジジイ。ポケロボ」

自己紹介をしないで余計な質疑応答をしてる間に二人は話を終えた  
ようだ。

S i d e o u t

晶とエヴァジエンリンだけが一夏達と離れて直ぐに晶はいきなり謝った。

「ごめん」

「な、なんだ!？」

昔からの知り合いで、ある程度、晶というよりフランの事を知っていたから突然の謝罪に驚いたエヴァ。

「本当はお前に告白されたとき嬉しかったのに、その感情がなにかわからず有耶無耶にしてお前を傷つけた」

フランは頭を下げ、謝罪した。

「う、うれしかったのか? / / /」

「ああ、あんな風に好意を向けてくれたのは初めてだったからな。それ以前は男女と言うより人間という意味で関わっていたからな、エヴァのお陰で意識するようになったんだよ」

「その結果がアレか?」

「まあ・・・な」

「身内に甘くなっただな」

「自覚してる」

「その代わり、それ以外にはより残酷になったが」

先ほどの戦闘で研究員の皮膚を綺麗に剥いだ後だが、フラン本人はきにしていない。

「見てたのか？」

「ま、まあな」

「これからどうするんだ？」

「私はまだお前のことが諦めきれず此処まで来た。フラン、そ、そのなんだ私はお前のそばにいてもいいのか？」

顔を真っ赤にして口にしたエヴァにフランは苦笑しながら

「俺も変わったと思ったけど、お前も変わったな」

「う、うるさい。お前に振られた時は結構ショックだったんだぞ。性格やあの体型の所為で振られたんだと思って自分を変えようとしたんだからな」

「くす、それはすまなかった。エヴァがまだ望むなら俺の傍にいてくれないか？」

「お前、女たらしになったな」

「……自覚してる」

「性質悪いぞ。それであれで全員か？」

「……………」

無言になるフランに

「おい？」

「後……二人いる」

フランの言葉に呆れ顔になるエヴァ。

「……………」

「なんか言ってくれ」

「呆れて何も思いつかんわ!!」

「はは、さてとゼクト達の所に戻るか？」

「はあ、そつだな」

「エヴァ」

「ん」

「これから、よろしく」

フランはそう言葉にして手を差し伸べた。

「／／ああ。よろしく」

フランはエヴァの手を取り抱き寄せた。

「ありがとう」

「貴様は本当に変わったな女に関して」

「自覚してるって、それより行くか」

フランはテレポートでゼクト達の傍まで移動した。

ゼクト達はフランがエヴァを見てどんなりアクションをとるか賭けていたようだ。

「それより、成長した私の感想は聞いてないな」

「綺麗だよ。あの姿でも人形みたいに綺麗だったんだ。それ以外の感想は無いぞ」

「全く・・・」

フラン達はゼクト達に近づき。

「賭けは私の勝ちだな、シヨタジジイ」

「そのようじゃのう。真祖の吸血鬼殿」

ゼクトの言葉に一夏達が驚くが、フランはその言葉に疑問に思い、ゼクトに聞いた。だした。

「お前等、まさか病院のやり取りを聞いてたのか？」

「そうです。本当は直ぐに声をかけようとしたのですが。マスターが急に怖気づき、様子を見る事にしたんです」

「そうじゃな」

「アア。昨日マデハガキ見タイニハシャイデタノニナ。ケケケ」

「余計な事を言うな                    ツ！！！！」

三人？に弄られるエヴァ。

「茶々丸、その時の映像は？」

「愚問ですね。最高画質で録画しております。可愛いマスターを保存するのは私の使命ですから」

「おい！ボケロボ！？」

「懐かしいやり取りだ」

晶の顔を見た一夏達はエヴァに同情の視線を向けたがエヴァは気付かず。

「さて、自己紹介より先に、おぬしの怪我を治すの先決じゃな」

「ああ、すっかり怪我の事を忘れてた」

「「「「「おい！！」「」「」」」」」

周りのツツコミを無視して、ゼクトは治癒魔法を晶にかけた。

傷がふさっげて行くのを見た一夏達は純粹に凄いと感想を口にした。

「さて、治療も終わったし。自己紹介を始めるか。俺と話してたのはエヴァンジェリン、こっちの子供はゼクト。二人とも俺と同じ数百年生きてる。」

こっちの子が茶々丸、んでもってロボット。以上」

「オイオイ、フランオレハ？」

「忘れてた。この殺人人形はチャチャゼロ。茶々丸と一緒にエヴァンジェリンの従者だ」



「待て待て待て待て。二人については兎も角、こっちのロボットと人形は学園都市製なのか?。」

殺人人形についてはスルーの一夏。

「違うどころか、こいつ等は他の世界から来たんだよ。納得?」

「もう突っ込まんぞ。突っ込まないから。誰がなんとボケようと突っ込まないからな」

大事なことなのか、一夏は三回言った。一夏の発言を無視して、シヤルはエヴァにある質問をした。

「えーと、エヴァンジェリンさんってフランを追いかけて来たの?」

「そ、そうだが／＼」

「無視!?!」

即効で突っ込んだ一夏に千冬が呆れた。

「すごいわね。普通に尊敬するわ」

「まあ、俺が振った所為でもあるからな」

「そっなの?」

「ああ、初めて告白されてな、混乱して断ったんだよ。バカな事に」

「えーと、それまで一度も無かったの？」

「ああ。それどころか、男女じゃなく、人間としてしか興味なかったからな。エヴァに告白されてなければ、

俺は人間の歴史とそれに関わるいがい興味が持てなかったかもな」

フランの意外な一言を聞いた一夏達。その後に一夏達の自己紹介をした。

「さて、自己紹介は終わった。神代、なんで貴様は吐血した」

千冬は自己紹介が終わり、早速、先ほどの戦闘で起きたことを質問した。

一夏達、ゼクト達も晶に視線を向ける。

「魔術と超能力はそれぞれ回路が違うんだよ。さっきは能力を使う回路で魔力を行使したから、  
ああな。逆もまた同じだ。魔術回路のまま超能力を使えばあなる」

「吐血だけじゃないじゃろ？」

「ああ、あの状態で大魔術を使えば体内の血管が破裂して死ぬかもしれん」

「その回路は切り替えには時間がかかるのか？」

「いや、一瞬で終わるけど。回数の問題。一回だけ無痛で換えられ

る。二回目は全身の血管に針が走るような激痛、  
三回目は指を動かすだけでも激痛で呼吸しか出来なくなる。無痛で  
できるのは6時間に一回だけでだ」

「でも、先ほどの戦闘で魔術は使わなかったら？」

「魔術は使わなかったが、魔力は使った。魔力を使うだけでアレだ。  
お前等が思ってる以上に弱点は多いぞ」

「ふむ、なるほどのう。さっき使った能力は何じゃ？」

「テレポートとベクトル操作」

『ベクトル操作？』

全員がどんな能力なのか聞き返した。

「肌に触れたあらゆる物の向きを自在に操る能力だ。運動量、熱量、  
電気量などは問わない。学園都市最強の能力だ」

その台詞に千冬は度す黒いオーラを出して、晶の頭を鷲づかみにし  
た。

「ほう、では昨日のアックアの戦いでそれを使っていたら、あんな  
傷は負わなかったのんじゃないのか？」

「あ……いや……、そのなんて言うか……、この能力を使う

と楽しめないって痛い痛い千冬ちゃん！ギブギブ！」

晶は苦しそくに訴える。

「貴様は、楽しむにも限度があるだろ」

「あたたたた」

「どんな戦闘だったんじゃ？」

ゼクトの質問にシャルが答えた。

「えーと、うまく説明できないけど、最後は隙を作る為、腕を切断したんだよ」

「おぬしという奴は、少しは周りの気持ちを考えたらどうじゃ？」

「その前に、千冬ちゃん痛い

！！！」

千冬は手を離れたが、晶を睨んだまま。

「二度とあんな戦いはするな」

その言葉には皆が同意権のような顔をしていたが

「ぜえ、ぜえ・・・善処はする。頭の隅にでも残しておくレベルだ  
けど」

その言葉に、全員がため息をついた。

「悪いと思ってるよ。でもなんか戦闘に入ったら麻薬をやったみたいに興奮したからな。自分でも止められん」

「わかった。だが絶対に死ぬなよ!!!」

「わつかてる。それより、ゼクトはこれからどうする?」

「エヴァの目的はおぬしと再会じゃが、わしはこの世界を見て回るつもりじゃ。その後には別世界に渡るつもりじゃ」

「そうか、エヴァと茶々丸はIS学園に通ってもらうけど、もういくのか?」

「いや、少し超能力に興味がわいたからの。当分日本におけるつもりじゃ」

昴が使った能力に興味を示したゼクト。

「まで、私は学園に通うつもりは無いぞ?」

「でも、俺は学生だけ。引きこもりに転職するのか?」

「フラン様、マスターはすでに引きこもりでした」

「ええい、わかったから、学園にはいるから黙ってるポケロボ。フランの援護をしないとこいつは無茶するからな」

「エヴァンジェリンさんって強いのか？」

「エヴァ達がいた世界では最強クラスだ。普通ならアックアと互角かそれ以上だな。被害を考えず本気を出せば楽勝だけど」

「その時はどれぐらいの被害だ？」

「軽く、学園どころか、町一つが荒野になるな。ちなみにゼクトも同クラスだ」

『……………』

「バクであるおぬしが言つと、自慢にしか聞こえんのか」

「同感だ」

「え、俺って今弱点のオンパレードだぜ？ さっきの戦闘だってキヤパシティダウンなんてもんに苦戦したし」

携帯を操作しながら、心外と言わんばかりに議論をする晶。

「ほーっほう、こいつは面白い事件まじが開催するな」

講義してる途中で、新しいおもちゃを見つけた子供みたいな顔をした晶に嫌な予感だと一夏達が思った。

「悪い、千冬ちゃん。俺ちよつと用事が出来たから、エヴァ達を俺の部屋に連れてってくれねえかな？ 学園都市の上層部を脅して政

府に三人をIS学園にいられるようにしておくから

「……わかった。何をするつもりだ？」

晶はニヤリと笑みを浮かべ。

「土御門がいったもう一つの事件を面白くしてくれる特別ゲストをスカウトしに。二、三時間したらり寮にもどるかっら」

そういつて、晶は分かれた。

「なあ、なんかあの顔やばいんじゃないか？」

「そうじゃのう。あの顔のフランはやばいぞ。かなりあやつ好みの事件があると見たんじゃが……」

「尾行するか」

「……賛成」

「そうだな。嫁が危険な事をしないよう見張るのは夫の務めだ」

「いや、それ違うから」

満場一致で晶の尾行が始まった。

晶は携帯を取り出し、ある人物に向けた。

「はっろ〜、ヒツキー元気にしてる？」

『テメエ、どんな死に方がいい？』

「冗談だって。暇だろ？ ちょっと外に来てくれないか？ 面白い祭りが始まるぜ」

『やけに、テンションが高えな、オイ』

「それだけ、面白い事件（祭り）なんだよ。GPS機能で座標送るから」

『たっく、メンドクせー野郎だ。まあいいすぐぬに行く』

電話を切り、待ち合わせ場所に向った晶。

一時間後。

「ヤッホー、ひざぶっり〜」



「うぜえ、テンションだなオイ」

現れたのはかなり細身の真っ白な、銀髪というよりは色素が抜け落ちた無気味な白色の髪。

病的なまでの白さを持つ肌にはアルビノ独特な真っ赤な目をした貧弱そうな男とも女とも見れる人物が晶の前に現れた。

それを遠くから監視する集団。

「だれだよ、アレ？」

「弱そうね」

「そうですね。見た目はモヤシですわね」

「あんな、モヤシが私の嫁とデートだと」

「晶はなんであんな奴と？」

「フランは何か考えがあるんだよ」

IS学園の生徒達は好き勝手に言うが、本人に聞かれたらミンチになっただろうことに気付かないが、

「「「「「「「「」」」」」」」」」

「どうしましたか、マスター達も何か言いたそうな感じですけど？」

「貴様等はお気楽だな」

「どついつと」

「エヴァンジェリンの言うとおりだ。あいつは見た目で判断しては死ぬぞ？」

「そうじゃな、アレはやばいぞ」

エヴァ達は晶が読んだ人物い見た目と裏腹に恐怖を感じていた。

一夏達はそんな千冬達を不思議そうに見ていた。

それは仕方ないのかもしれない。晶が呼んだ人物はかなり細身で、誰がみても弱い人間だと言っだろう。

『腹減ったし、どつかで飯食うか？』

『呼んどいていきなりこれかよ。まあいいけどよ』

二人はどこか書記事が出来るところに移動し始めた。

ちなみに、ゼクトの魔法で二人の会話を盗聴している。

二人が、移動してる途中で、バカが現れた。

『その貴方達』

『あん』

『私の買い物に付き合いなさい』

珍しいことではない。この世界は女尊男卑、何処の国にも女性優遇制度が設けられた。その結果、男は街を歩いているだけでも、このように女から命令される始末。断るうものなら難癖をつけられて警察に捕まり裁判沙汰になる。裁判員も女性の方が多く発言権も強いので裁判になったが最後、問答無用で有罪確定だが、今回ばかりは相手が悪かったと、この一部始終を見た人間はいうだろう。

『きこえなかったの？』

『おいおい、なんでこんなバカみたいな豚がよってくるんだよ。折角いい気分なのによ』

『テメエの目ごろの行いの所為だろ』

『自分の立場をわかっていないようね。男が女に逆らってるんじゃないわよ！』

『やだね、ノータリンは。少し黙ってくれる？』

『同感だな。この手の豚はミンチにして動物園に寄付した方が動物

も喜ぶだろっな』

「くっ！・・・良いでしょう。あなたに自分の立場を教えてあげるわ！！」

そう言っつて女性は警備員を呼びに行こうとした時、女性に異変が起きた。

ブリッ

『え！？』

ブリブリブリ

『うっ、うっそ！！』

『おいおい、こんなところで脱糞かよ。年を考えろよ年増さん』

『い、いやー！！』

女性は直ぐにトイレがある場所に走ったが

『たれてますよー！！』

と、晶は大声で教えた。

『テメエ、悪魔かよ？ 何やったんだ？』

『念能力で腹の具合を一気に悪くしただけだ。以能力者同士の喧嘩で見かけてな』

『あそこまでするかー？ ふつう』

『八つ裂きにして殺すよりはマシだろ？』

それを、見ていた一夏達はいろんな意味で晶に戦慄した

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

「死んだ方がマシだぞ」

「同感ね」

「公衆の面前であんな事をすれば自殺もんだな」

など、意見を言っつて。機嫌がいいときの晶を怒らせないようによつと誓った一同。

晶達は喫茶店にはいり、それぞれの食べたものを頼んだ。

『ンで。どんな事件だ』

『ああ、先に、言うておく。これから言う事は事実だ』

『いきなり外国語で喋るんじゃないねえ』

『仕方ないだろ？ これから言う事は科学とは正反対の事だからな。お前も殆どの外国語を喋れるだろ』

『うち、めんどくせーな』

『魔法というものが存在する。実際は魔術と呼ぶが』

『で』

『10年前、冬木市で起きた大火災を知ってるか？』

『ああ、あつたな。そんなの』

『ある魔術儀式のせいであの大火災が起きたんだ。今回もそれが起きる』

『学園都市はそれを止めると』

『ああ』

いきなり、外国語で話す晶に戸惑う一夏達。

「何ヶ国語喋るんだよあいつ等」

「晶ってどんだけ頭いいのよ」

「もう一人の方もとんでもないですわね」

「さすが嫁だな。ドイツ語も喋れるのか」

「フランス語も喋ってたし」

「通訳魔法を使うぞゼクト」

「しょうがないのう」

「本当に便利だな」

晶達がたのんだ料理が来たが、ふたりは会話を止めないで食べ始めた。

『どこが楽しんだよ?』

『まあ聞け。この儀式には7人のマスターである魔術師とその使い魔バトルロワイヤルの戦争だ』

『魔術師ね。確かに面白そうな連中だが』

『面白いのは使い魔のほうだ』

『あアン?』

『使い魔は過去の英雄達なんだよ。どんな風に呼び出すのか知らないがな』

『・・・』

『すでに、4、5人は呼ばれてるらしい。使い魔は強さは冗談抜きで出鱈目らしい』



『なるほど。それが本当なら、下手の能力者より楽しめるってわけか?』

『そういう事だ。その儀式の名前は聖杯戦争。魔術師はマスターと呼び、使い魔はサーヴァントと呼ばれる』

『聖杯ねえ。随分と大それた名だな?』

『名前負けしないぐらいの賞品だ。上からは聖杯を破壊しろと命令を受けてな』

『ンで。俺も呼んだと?』

『ああ。お前の能力をみた魔術師達の顔が見てみたくてな』

『悪趣味だな』

『自覚してる。それにこんな面白い祭りは引つ掻き回すだけ回して面白くするのに限る』

『同感だな。乗った』

『にしても、よく信じるな魔術なんて』

『テムエの顔を見ればわかるぜ。それにしても悪党だなテムエは?』

『大悪党の間違いだろ?』

『自覚してるのかよ?』

二人は不気味に笑い始めたが、そんなときに

「全員、動くんじゃねえ！」

ドアを破らんばかりの勢いで勢いで店内に男が6人入ってきた。何が起こったのか理解できなかった店内の全員だったが次の瞬間に発せられた銃声で絹を裂くような悲鳴が上がった

『おいおい、テメエ何かに憑かれてるのかよ？』

『お前じゃないのか一方通行（アクセラレータ』

『どっつるよ？』

晶と一方通行以外は悲鳴を上げたり、怖がっている。

「あの、強盗達に同情しちまうのは俺だけかな？」

「安心しろ。私達も同じ気持ちだ」

「なんで、晶さんが機嫌がいいときにこんな事がおきるんでしょうか」

「・・・あははは」

「嫁はどんな風に解決するつもりだ」

「死体処理班を呼んだほうがいいじゃないか？」

「オイ、俺毛斬り二入ツイイカ？」

「哀れじゃのう」

「同感だ」

など、遠くからみてる者達は強盗達に同情した。

『貴様等もこっち来い。のんきに飯なんか食いやがって』

『いや、食後のコーヒーとデザートなんだが』

『バカだな。にしても中々つまいなこのコーヒー』

『こいつら外国人か？ だったら』

男は無理やり、二人を引つ張るとしたが、引つ張る前に躓いて転んでしまう。

『おう、バカーネ』

晶はわざとエセ外国人が使うような日本語で言ったが、強盗が転んだ拍子で一方通行のコーヒーに銃が当たり、コーヒーがこぼれた。

『いい度胸じゃねえかよ三下』

一方通行が転んだ強盗を蹴り飛ばしたら、強盗は数メートル離れる壁にぶつかって気絶した。

『て、てめら。よくも！！』

銃を撃つが、一方通行はベクトルの向きを下に変えて、玉を防いだ。

『な、何だこいつは？』

『と、トリックか』

『いいねエ、ザコ所かモブ程度のテメエ等をどんな風に料理しようか？』

『おお、うまいなこのケーキ』

晶は我関せずを決め込み、デザートを食べるが、もう一人の男は混乱して、銃を乱射したら、天井の電球にあたり晶の頭に直撃した、運悪く晶がケーキを口にしようとしたタイミングだった為、フォーくとケーキは晶の口ではなく鼻に入った。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

「おいおい、晶が呼んだアイツモやばいけど。今の晶もやばいぞ？」

「葬儀屋を呼んだほうが・・・・・・・・」

一夏達の心配をよそに、晶は鼻を噛んだ。

『俺も混ぜろ、一方通行』

『邪魔すんじゃないやねえよ。こいつ等は俺の獲物だ』

『話すのも面倒だ。早い者勝ちで同だ？』

『仕方がねえ』

二人は笑みを浮べた。その笑みを目撃した人達は冷や汗をかいただけではなくトラウマになったが、それは別の話。

強盗以外の怪我人は出てなず、事件は解決したが、怪我をした強盗達はもうまともな生活が送れないくらい怪我を負ったらしいという噂が流れた。

目撃者達は恐怖のあまり、強盗達がどんな風にやられたのか覚えておらず、警察は現場の状況を詳しく知る事が出来なかった。

ちなみに暴れた二人は、金を置いて、いつの間にか店を出ていた。

『俺は今夜から冬木市をさぐる。祭りは夜しかやらないらしいからな』

『そうかよ。とりあえず俺も見てみるか』

『言い忘れたが、連中と遭遇したら殺すなよ。唯でさえ参加者が少ないんだ最後のフォーケダンスの為には生きてもらわないといけないからな』

『なるほど、了解したよ。せいぜい楽しいフォークダンスにしろよ』

二人は不気味な笑みを浮べて、分かれた。

それを見ていた一夏達は引き攣っていたのは別の話。

## 15話 仮契約

晶が一方通行と分かれてから数分後。晶は突然止まり

「いい加減出てきたろうだ、覗き集団？」

「気付いてたのか？」

「当たり前だろ。まあ別に聞かれたところでどうでもいいが」

「だったら、俺達がいっても問題なかったじゃねえか？」

その言葉を聞いた、千冬、エヴァそれにゼクトはため息をついた。

「その三人は気付いてるみたいだな」

「さすがにな、アレはなんだ？」

「学園都市最強の能力者 アクセラレータ 一方通行。 さっきの戦闘で使ったベクトル操作はあいつの能力だ」

「人は見かけによらないんだな」

と、のんきに言った一夏に晶は

「ハッキリ言ってる、あいつは化け物クラスだ。演算能力なら俺よりはるか上だ」



「な!？」

「晶より強いのか？」

鈴音は軽い気持ちで聞いた。

「同じ能力でやりあえば俺は絶対勝てない。魔術や俺が持つてる技術を使えば何とかなるが、それらを解読されれば、攻撃を反射され、手詰まりなるな」

昨日のアックア戦でボロボロになっても笑みを崩さなかった晶の言葉に少なからずショックを受けた。

「あいつが本気を出せばこの星の回転エネルギーすら奪い取って武器に出来るぜ。この星の大气ですら計算できるかもしれない頭をしてるからな」

笑みを浮べて言ったその言葉に顔が真っ青になる一同。

「お前等、あいつの第一印象はモヤシと思っただろ？」

ギクッ

と、エヴァ達以外は顔が引き付いた。

「あいつの前で言わなくてよかったな。見た目どおり沸点は低いからな、場合によっちゃ楽に死ねないと思うぜ」

からかいながら言う晶。

「お前はあいつとどんな関係だ？」

「エヴァたん気になるの？」

「エヴァたん言うな!!」

「エヴァたん・・・ハア・・・ハア」

「オイ!! ボケロボ!？」

晶はその光景を見ながらケラケラ笑う。

「まあ、アイツはからかいがあるからな」

その顔で一夏達は笑みを浮かべ顔が引き攣った。

「おぬし、よく殺されなかったのう」

「まあ、なんだかんだで気が合うからな」

「学園都市も魔術側もそれなりの切り札がると言うわけか」

千冬は呟いた。

「一夏はそれを聞いて

「なんか、俺達が強いと思ってたISが途端に弱く感じるんだが」

「魔術は神話やら宗教が深く関わってるからな、神話ではトンデモ話があるだろ？」

「それはそうだが、なんかなあ」

「一夏達は苦笑するが、エヴァが先ほど話していた聖杯戦争について質問した。」

「お前は今晚、先ほど言っていた聖杯戦争に行くのか？」

その言葉で、全員が自分達も付いていくと言わんばかりに晶に視線を向けたが。

「今晚は様子見だ。どれぐらい引っ掻き回せるか見ないと」

どんな悪戯しようか、悩んでいる子供の顔をしていた晶にちょっと引く一夏達。」

『……………』

「付いていくなら二人が限界だ。魔術師は兎も角、使い魔であるサーヴァントの強さは未知数だからな」

その言葉で、場が一気に緊張感どっぷりとなった。

「貴様等は魔法はつかえないだろ。おとなしくベットに寝ている」

「ISがどこまで通用するか試すいい機会だし、アタシがいくわ」

「鈴さん、私のISなら援護として最適ですからわたくしが行きま  
すわ」

「貴様等だと嫁の足手まといだ、私がいく」

「皆は沸点が低いから、僕が行くよ」

「私は自分の力がどこまで通用するか試したいから譲ってもらいた  
いのだが」

「はあ、おぬしは誰を選ぶんじゃ？」

女性陣がお互いにらみ合っている中、ゼクトはため息を付いた。

「じゃんけんで決めてくれ」

「待ってくれ、俺も連れてってくれ」

女性陣が一夏を睨む。

「理由は強くなりたいからか？」

「ああ、今自分に何が足りないか知りたいんだ」

「」「経験」「」

一夏の言葉に即答で答える年寄り達。

「いや、わかってるから、わかってるから実践を経験したいんだよ」

「じゃあ、お前もじゃんけんに参加しろ」

女性陣に睨まれながらも一夏はじゃんけんに参加した。

結果は 鈴音と一夏が同行することになった。

「おっしやーーー!!」

鈴音が喜んでいる中、晶は地面になにやら、魔法陣を書いて、カードを取り出した。

「アデアット」

そう口にした瞬間、カードは二挺の銃に変わった。エヴァ達と会う前の戦闘で見せた武器。

「それが、おぬしのアーティファクトか？」

「ああ、魔力を魔弾にして撃つアーティファクトだ」

「お前のアーティファクトならてつきりバグかと思っただが、意外に普通だな」

「撃った弾は途中で固定して、自在に操作も出来る、属性も決められるからな、組み合わせ次第で面白いくらいの威力を出せるぞ、酸素である風と炎を敵に同時に命中させたりな。風に関しては窒素や二酸化炭素の弾を形成して、口と鼻にぶち込むの悪くないしな」

「おぬしは、そういうことに関しては頭が回るのう」

「さらに、魔力も殆ど使わない、弾切れも無い」

「前言撤回、バグだ」

「今日は普通の弾を意識して、魔力を込めてあの威力だ」

エヴァ達はトラックに向けて撃つたときを思い出していた。

破壊力は無かったが、衝撃が凄かったので印象に残っている。

「それより、アーティファクトって？」

晶は<sup>バックティオ</sup>仮契約について説明した。

「契約した者にしか使えない専用アイテムが手に入る、くわえて魔

力があるものと契約すれば魔力補給で身体能力が上げたり、楽してパワーアップ出来る裏技みたいなものだ」

「そ、そんなのあるの!？」

「俺はある双子と契約したからな」

「双子? どれがお前の主人だ?」

「いゝやゝ、術式を弄って、三人の血を混ぜて飲んだら、マスターと従者の関係が無い状態なんだよ。お互いに魔力補給はもちろん、お互いの召喚ができる出鱈目な契約になっちまってよ」

「おいおい、大丈夫なのか?」

「多分、二人が双子である事と二人の魔術特性が原因だから問題ないぞ」

ゼクトとエヴァは呆れた顔で晶に視線を向ける。

「どつやってやるの?」

「この上でキス、或いはお互いの血を混ぜて飲むんだがな。鈴音はキスで大丈夫か?」

『!?!』

「うん」

「いいのか、ムードもへったくれも無いぞ？」

「それでもいい」

「わかった」

ピク

他の女性陣は二人をにらめつけるが、二人は魔法陣の上に立ち口付けをした。

晶はそのまま抱きしめる感じで手を背中に回した。鈴音もその気になったのか舌を入れ始めた。

「くちゅ…んっ…ちゅ…」

「っ…んっ…ふぁ…」

漏れる吐息。

「…っん…あ、…んん」

「いい加減にしろー！ー！ー！」

エヴァが耐え切れず叫んだ。



箒達も、エヴァと同じ気持ちらしく怒っているが

「これが、パクティオーカード」

「う、うん／＼」

鈴音は真つ赤な顔をしながら受け取った。

『じーーーーー』

二人をに睨めつける女性陣だが、

「お前等とは今度な、それに短時間で何人ともキスするのはどうかと思うし」

と、晶が言ったら、何とか納得させた。

「気持ちよかったにゃ〜」

鈴音はとろんとしていた。

「鈴音」

「え！！な、なに？」

「とりあえず、アデアットと言ってみてくれ」

「う、うん！ アデアット」

鈴音の手にはチャクラムが出てきた。

「うわっ、これが・・・」

晶はアナライザーでアーティファクトを調べた。

「ふーむ・・・、鈴音、増やすイメージをしてくれないか」

「う、うん」

鈴音がイメージしたら、チャクラムは二つに増え、さらに増えたら倍になった。

「次はセシリアのBTみたいに操作する感覚でこれ进行操作を」

「うん」

すると、チャクラムは浮かび上がり、まるで生きてるように左右上下に動いた。

「おおー！」

「数を減らして、操作してくれ」

「わかった」

チャクラムを一つに戻し、操作を始めたら、先ほどよりも精密に操作が出来たようだ。

それを、みたせシリアはお株をうばれた感じになった為、がっくりとひざを付いた。

「なるほど、今はまだ複数の操作は難しいが、それでも使いかっちはかなりいいようだな」

「ああ、回転を入れれば殺傷力は爆発的に上がるしな。鈴音次第ではとんでもない武器になるな」

鈴音に先を越されたと思ったのか、女性陣はうらやましそうに鈴音に視線を向けた。

「一夏、ISを展開してくれ」

「ん？ わかった」

一夏はISを展開した。

「そのまま、防御の姿勢を保ってくれ」

「ああ」

一夏は晶の言うとおりに防御の姿勢をとった。

「契約執行30秒間！ フランキシヌスの従者、鳳鈴音」

鈴音に魔力が補給された。一夏はチャクラムの攻撃がくると思ったが

(鈴音、とりあえず、一夏を思いっきり蹴ってくれ)

(わかった)

念話で鈴音に伝えた晶、ついでに言うとな能力回路を換えてから7時間間はたっている為、魔術回路に切り替えている。

さらに、今いるところは人気が少ないうえ、人払いをしている。

鈴音はそのまま、一夏に向って蹴りをいれたら、一夏が吹っ飛んだ。

その光景をみた箒達は驚愕した。

「まじ!?!」

吹っ飛ばされた一夏と吹っ飛ばした鈴音も驚いている。

「これが、魔力補給で身体能力を強化した結果だ」

「す……すげえ」

「けど、所詮は借り物の力だ。くわえて、主の魔力が切れれば、もちろん使えないし、距離があれば魔力補給も出来ない。加減が難しく、最悪相手を殺す事になる」

浮かれていた一夏はその一言で冷静になった。

「まあ、補給は無くてもアーティファクトだけでも儲けもんだけどな」

「俺も契約できるのか？」

「俺の血とお前の血を合わせ、この上で飲めば出来るぞ」

晶は倉庫からナイフと小皿を出した。

「どこから出すんだよ？」

「無視しろ。契約は？」

「やる」

ナイフで血をだし小皿の上で混ぜて一夏に飲ませた。

「つえ」

カードが出てきて、一夏はアーティファクトを出したが、

「雪片かよ！？ もっと珍しい武器じゃないのか？」

白式と同じ武器な為、新鮮さがなくがっかりした一夏

「贅沢ですわね、一夏さんは。わたしなんてお株を……」

「相手の魔力を切り取る能力だな。魔術そのものを斬って消す事が出来るぞ。よかったな魔術師にとってアンチ武器だな」

「そ、そうなのか？」

晶のフォローで持ち直した一夏。

その後、晶達はIS学園の寮に戻った。

エヴァと茶々丸はIS学園に入学、ゼクトは二人の弟して寮で暮らす許可を得た。

ちなみに晶はラウラのISを止める時に意識不明になって入院したということになっていた為、怪我の事は知らされていない。

「あいつ等はロクな物を持ってこれんのか？」

晶は部屋に置かれていた、荷物をみて呆れた言葉を発した。

「あははは、で、でもいい友達じゃないのかな？ 学校を休んでまでお見舞いに来てくれたんだよ？」

晶が見ている荷物は、当麻達が持ってきたお見舞いの品だ。

「だからって、下駄にDVDって、しかも下駄は見た目は普通なのに鉄以上に重いつて何だよ？」

晶が手にしてる下駄は青髪がもってきた、学園都市製の下駄。

見た目は木だが、重さ一つ30キロする下駄。学園都市の技術で木下駄と同じ感触、同じ音を再現したと言うキャッチコピーが書かれている。

「無駄に技術力を使ってるな、おい。30キロって何だよ、普通は2、3キロだろ？」

「あはは……」

DVDに関しては、『元生徒会長の日常』とかいてある。用は俺を隠し撮りした映像だ。しかも、それを編集して当麻達がナレーションで突っ込みを入れたりしている物らしい。

唯一まともなのは当麻のりんごだけだ。

当麻は金欠気味でも、りんごを買ってくれたようだ。

ちなみに、青髪はこのクツソ重い下駄を送った理由は、これを履いて俺が転び女の子のパンツを目撃させて嫌われるように願ってたそうだ。

「わるい、シャル。頭痛くなってきたから風呂にはいつてくるわ」

「う、うん」

晶はダイオラマ魔法球に入った。

「あ、あの下駄は普通に使わせてもらうか。いい運動になるしな」  
晶がお風呂で愚痴を言っていると、

「お、お邪魔します・・・」

「此处、男湯だが？」

シャルロットがフランと同じ風呂に入ってきた。

「え...と、駄目かな／＼？」

「いや、かまわん。俺とシャルしかいない」

「うん」

シャルは顔を真っ赤にしたまま無言になったが、フランはシャルを凝視し続けた。

「は、恥ずかしいよ／＼」

「だったら、隣に入ればいいのに」



「あう……」

「それに、綺麗だぞ」

「／／／」

「シャル、こっちにこないか？」

「う、うん」

シャルはフランに近づき、フランはシャルを抱き寄せた。

「フ、フラン！！／／／」

「嫌か？」

「ううん」

二人はそのまま、目を閉じて口付けをした。

三秒ほどで口を離れた。

「え？」

シャルの手には一枚のカードが握られていた。

「雰囲気もあるし、シャルはこれくらいでいいだろ？」

「鈴とキスした時はもっと長かったよね？」

自分が三秒ぐらいしかキスしてないから少し不満のシャルに。

「アレはノリで舌を入れたからな」

「む、僕はちょっとだけなの？」

「はは、お互い裸なんだからこれぐらいで」

「／／／／／」

「自分から入ってきたのにな」

「フ、フラン／／／」

シャルを抱きしめからかうフラン。

「もう、・・・フラン」

「ん」

「無茶しないでね？」

「わかってるよ」

「そういえば、どうやって魔法陣書いたの？」

「水を操って、地面に薄く書いた」

「いつの間に・・・」

「シャルの裸を見ていた間」

「／／／」

二人はその後、ダイオラマ魔法球を出て夕食を採った。

夜

全員が晶の部屋に集まった。

「準備できたか、鈴音？ 一夏？」

「うん」

「ああ」

「じゃあ、行って来るわ」

「無茶はするなよ」

「はいはい〜」

「ああ」

「はい」

三人は、転移陣の上に乗って転移した。

「此処が冬木市か」

一夏は町を眺めながら口にし、晶は魔力を感知を始めた。

「どこから調べるの？」

「かなり魔力を持っている奴を見つけた、そいつらがいるところに向  
うか」

「速いな!？」

晶が直ぐに目的の相手を見つけたことに一夏は驚いた。

「お前達、最悪直ぐに逃げろよ？」

「わかってる」

「……わかってるわよ」

三人は事前に晶に危なくなったり、歯が立たないと思っただら直ぐに逃げるよう言われている。

ちなみに、ISの使用も許可を得ている。

晶は二人を担いで、目標に向った。

とあるビルの屋上に二人の男女が立っていた。

二人とも赤を象徴とした服を着ている。

「どう、見晴らしはいいでしょう?」

「確かにいい場所だ、初めから此処に案内されていれば町を歩き回る必要は無かつたろうに」

「ここから、見えるのは町の全景だけよ。実際その場所に行かないと冬木市の仕組みは把握できないじゃない?」

「そうでもない、アーチャーのクラスは伊達じゃないぞ。さすがに隣町までは無理だがあの大橋のボルト数はわかる」

「マジか、すげえな」

「誰!?!」

二人が声をした方向を見たら、晶と鈴音、一夏が立っていた。

「いつの間に!?!」

「気配を感じなかったぞ!?!」

晶達が屋上で、魔術師と遭遇している間に一方通行は冬木市の人通りの少ない場所に来ていた。

「さーで、どんな三下が出てくるンだろうな」

「おい！ そのモヤシ、此処で死んでくれない？」

一方通行の前にはワカメ頭をした男が立っていた。

その後ろには眼帯をした存在感が人間とは違う女性が立っていた。

それを、見た一方通行はニヤリと笑みを浮かべ。

「なるほど、こいつは面白エ、祭りまつりだなア」

そして

そんな、三人を遠くからみる一人の雪のような少女。



## 15話 仮契約（後書き）

一夏達を魔改造するか、悩んでおります、そして二人以外のアーテ  
イファクトもどうしよう・・・。。  
そして、ワカメ頭は死亡フラグを・・・。。

16話 聖杯戦争一日目 1 (前書き)

最後の休みです。腰痛もおさまって、仕事はあしたから再開か・・・、  
めんどくせといたいのが、生活費を稼がないとなと真面目に考えて諦める。

ああ、短い休みだった。

16話 聖杯戦争一日目 1

遠坂 Side

アーチャーと町の全景を見ていたら、突然の乱入者が現れた。

三人の内、二人は魔力すら感じない、でももう一人は笑えないぐらいの魔力を持っている。

アーチャー  
英霊と同じ様に威圧感を感じるが、サーヴァント英霊ではないとわかる。

「何の用かしら?」

Side out

少女は、質問するが、

「何の用って、この聖杯戦争に飛び入り参加の者って言うしかないんだが?」

「はあ?」

少女は晶の答えに驚いた。

「うーん、ハッキリ言えばこの聖杯戦争を引つ掻き回して終わらせ

るのが目的だ」

ニヤリと笑みを浮かべ言葉を付け足した晶。

「ほう、サーヴァントもなしに戦うつもりかね？」

褐色肌の男が口を開いた。

「あらら、わかる？」

「私とて英霊だ。近くに英霊がいるかないか位はわかる」

「英霊と霊脈を調べるのが今日の目的だが、それも終わったみたいだし」

「「はあ!？」」

晶の言葉に驚いたのは一夏達だった。

「なに、お前等が驚いているんだ？」

「いや、だってこの町に来たばっかだろ？」

「英霊は今済んだと同時に、英霊と繋がってる聖杯もある程度理解できた。」

思った以上に引っ掻き回せるな」

ケラケラ笑う晶に不信感をもった二人組み。

「どんな風に引っ掻き回すのかしら？」

「教えたらサプライズにならないが、まあ、いいか。

俺は8人目のマスターとして、8体目のサーヴァントを呼んで引っ掻き回すつもりだ」

「そんな事が出来ると思ってるのかしら？」

この聖杯戦争の仕組みをわかっている者なら当然の質問だった。

「俺の能力はアナライザー、その名通り、計測できるんだよ。英霊もそれに繋がってる聖杯もな。

大聖杯の術式はすべて理解したし、霊脈を少し弄って、8体目の英霊も呼び出せるんだよ。

もったも、英霊はまだ6体しか呼ばれてないからまだ呼ばないけど」

「随分とふざけた能力ね」

晶が言っている事はハツタリではないと察して、素直な感想を言った少女。

晶は一方通行とまでは行かないが演算能力は高いほうである。アナライザーで計測する範囲を大きくして計算できる。

「遠坂さんには悪いが英霊がどれぐらい強いかためさせてもらおう」

晶は戦闘態勢に入った。

「「!!」」

自分の苗字を呼ばれたことで警戒心がMAXになった二人だが、

「待ってくれ晶。あの男の人が使い魔なんだろう？ だったら俺にやらしてくれ」

「鈴音、葬儀屋に予約をいれてくれ」

「わかった」

「ちょっと待て!! 俺が死ぬ前提？」

「俺、此処に来る前に説明したよな？ まあ、いいけど。但しIS  
を使え」

「わかってるよ」

「じゃあ、私はマスターであるあの子と戦う」

「あるえ、俺やることなじゃん？」

三人が漫才をやっているのを見ても警戒心は待ったく下がらない二人組み。

406

(ISねえ、アーチャーはあの男の子を、私は女の子の方をやる。  
真ん中の魔術師を常に警戒をして)

(わかった)

一夏はISを展開してアーティファクトをだした。、鈴音もアーティ  
ファクトを出して両手にチャクラムを握った。

アーチャーは双剣を取り出し、遠坂凜は魔力を練って戦闘態勢に入  
った。

「……………俺は見てますよ」

唯一あぶれた晶は4人を睨んだが、傍観することにしたようだ。

間桐慎二は目の前の光景をみて混乱していた。

自分のサーヴァントの攻撃が全く効いていない人間が目の前にいることが信じられなかった。

ライダーの鎖の付いた鉄杭が全く効いていない。自分はサーヴァントを手に入れて強者になったと思つて襲ったら、それは幻想だったと突きつけられたように絶望感が襲ってくる。



「何やってるんだよライダー！！ そんな奴速く殺しちまえよ！！」

一方通行は飽きたようにライダーを一撃で吹き飛ばした。

「ああ、変わってるのは威圧感だけかよ、はずれを引いちゃったよ  
うだなア」

ギロリと慎二を睨んだら、慎二は面白いように逃げていった。

「いいねエ、狩られる狐を演じてくれるのかア？ サービス精神  
旺盛じゃねエか」

一方通行は足にかかる運動量のベクトルを向きを変え、弾丸のように  
駆け、慎二の真後ろに移動した。

「じアあな三下」

「ひいひいひい！？」

ありえない現象に、慎二はさらに恐怖した。その所為で足の筋肉が  
緊張したのかバランスを崩し転んだ。

そのお陰で一方通行の攻撃を運よく避ける事が出来た。

無様に転んでも、直ぐに起き上がり逃走する慎二。

「いいねエ、最ツ高だなア。悪運もある、無様に生き残ろうとするその三下振り、妹達より面白エよ」

だが、その所為で一方通行を楽しくさせる。

「何やってるんだよライダー！！早くそいつを殺せよ！！」

慎二は叫ぶが、ライダーはいない。

「ははは、はははははははは。くく、ははは、そうか、無様にやられた使い魔がまだ助けてくれるって信じてるのかよオ？」

一方通行は足元にある石を蹴った。石は弾丸のように飛んで慎二の足を貫いた。

「　　ツアアツ！」

慎二は転んだ、だがそれより突然襲ってきた激痛で混乱するが

「アアアア　　、ライダー！！　何やってるんだよ  
ッ！！！！！！」

無様に叫んで助けを乞う。その事に一方通行は

「面白エなアツ！　いいな、おまえ。まだ希望があると思ッて  
ンのか？　そそるぜ、殺してエ、無様に引き裂いて殺してやらア  
」

「ヒイイイツ　　！！」

一方通行は慎二の足を踏みつけて骨を砕いた。

「ガアアツアアア　　ッ！！！！」

更なる激痛が慎二を襲った、激痛で叫ぶも現実はかわるず、化け物  
は目の前から消えない、助けは来ない。

唯、絶望だけが慎二を襲う。それでも慎二は生き残る為に残った腕  
を使って生き延びようと足掻く。

それが一方通行を煽る羽目になるとも知らず。

「あは、あははは、あははははは……」

アハハハハハハ、まだ生き延びてエのかよ!? お前最ツ高だなア。  
学園都市の三下どもよりいいぜエ。  
テメエを二万人作ったほうが楽しかったのになア」

息の根を止めようと腕を振り下ろそうとしたが、後ろからとんでもない殺気を感じて、一方通行はその場を離れるよう真横に跳んだ、その距離は十数メートル。

一方通行がいた場所には筋肉の大男が巨大な斧を振り下ろしていた。慎二はそのまま木っ端微塵だったが、一方通行は新しいおもちゃを見つけたように歓喜に笑った。

「あいつは面白エえ、祭りに招待してくれたなア!」

目の前で常識はずれの化け物を見た一方通行はそう叫んだ。

そのころ、ビルの屋上では

一夏は雪片を構え、アーチャーに突っ込むも、双剣で防がれるが、すぐに後ろに回りこみ、切りかかる。

「!」

アーチャーは体を横に移動して避ける、。

一夏は避けられても雪片を構えたまま追撃するが、双剣によって防がれるが、双剣にひびが入り、粉々に消えた。

「!」

「よし」

好機だと思い、畳み掛ける一夏にアーチャーは蹴り入れて後方に吹き飛ばした。

「厄介な武器だな、魔力を削るか。私にとっては天敵か。もっともそれはその剣を使いこなせばの話だが」

武器を失っても余裕を崩さないアーチャー。

「チツ、……ってえ！ シールドエネルギーがめちゃくちゃ減ってる！？」

たった一発の蹴り、しかも距離をとる為の蹴り。勝負を決めるために攻撃じゃなかった。

その事で一夏は驚愕した。

「マジかよ……、ISを装着してなかったらアバラはどれぐらい折れてんだ」

「ほう、そんなくだらない事を考える暇はあるのかね？」

そう口にしたアーチャーに視線を向けると、アーチャーは先ほどと同じ様に双剣を出した。

「なんで!？」

「やれやれ、これ以上はやばいな。選手交代」

晶はそう言って、二人の間に入った。

「何でだよ!? まだ終わってないぞ?」

一夏は納得出来ないのか、講義をしたが。

「このおっさん、まだ全然ちつとも本気出してないぞ? それにI Sのシールドエナジーが切れたら、お前まじで死ぬし、その後始末は面倒だから交代」

その言葉に一夏はがくりと方を落とした。

「おっさん……………」

アーチャーは割り込んできたよりもおっさん呼ばりされたことのほうが気に障ったようだ。

「俺はそこの一夏と違<sup>バカ</sup>うぜ」

晶はアックアと戦ったときに使った剣を取り出した。アックア戦のときは千冬が回収してくれていた。

「ほう、いい剣だ」

アーチャーは物体の構造を把握することにかけては一流な為、晶が手にしている剣がいい剣だと把握する事が出来た。

「それに、この殺気、彼とは根本的に違うな」

一夏は晶が発している殺気に恐怖を感じた。一夏は今まで晶に関わって非現実な戦いをみてきたが、殺気を感じたのは初めてだった。

その為か、二人から視線をそらし鈴のほうに視線を向けた。

一夏の目には魔術師と互角に戦っていた鈴がいた。

二枚のチャクラムを高速回転させ遠坂の魔術を力づくで消していく鈴。



その手段を厄介な相手とする遠坂凜。

鈴は寮に帰った後、アリーナでチャクラムの操作の訓練をしていた。最初は一枚を高速回転させるのが限界だったが、もう特訓の末、たった数時間で二枚のチャクラムを高速回転させながら縦横無尽に操作できるようになったが、今はそれが限界だとわかっているが、遠坂とは相性がいいようだ。

遠距離からの魔術が効かないなら接近するしかないが、接近すれば高速回転しているチャクラムは自分を襲う。

かといって高範囲の魔術をつかえない。自分達がいる場所はそれほど広くないビルの屋上。

それに、使えたとしてもそれまで敵は待ってくれない。

「このままだと、こっちの魔力切れ勝負が決まるわね。全くいやな武器を使うわね」

「それはどうも。この武器は晶との絆なの。だから簡単に負けるつもりは無いから」

覚悟のある目と言葉に鈴に興味をもった遠坂は名前を尋ねた。

「遠坂凜」

「？」

「私の名前よ」

自分の名前を教えた凜に乗ってか、鈴音も自分の名前を教えた。

「鳳鈴音」

「あら、同じリンなのね」

「そうね、でも負けるつもりは無いんだから」

一夏は二人の様子をみて、二人はなんとなく似ていると思った。

身長は鈴のほうが低いし、髪型は一緒だが色は違う。

「何が似てるんだ？……あっ貧乳でところが似てるんだ！」

思わず口にした一夏。

ピクッ

二人の動きが止まった。それをみた一夏は。

「あれ？俺地雷踏んだ？」

二人の般若は一夏に視線を向ける。

16話 聖杯戦争一日目 1 (後書き)

ワカメー………ッ!!

はバーサーカーにやられ、一夏は……。

17話 聖杯戦争一日目 2

一夏 Side

ヤバイ、どれぐらいやばいかと言うと超ヤバイ。

遠坂と名乗った女の子と鈴に貧乳と言ってしまった。

二人は何かと共通点があったのでよく監察してたらつい口にしてしまった。

あー、俺死ぬのかと本気で思った。

だって、すっげー怒ってる。敵同士なのに息合わせて歩いてきてるし。

諦めたその時、彼女達の視線は俺から外れた。

何事かと思って、二人が視線を向けてるところに視線を向けるとそ

ここには二人が俺から視線をなぜはずしたか直ぐにわかった。

Side out

速い斬撃が赤い外套を襲ったが、アーチャーは晶の斬撃を双剣で受け止めたが、晶の攻撃はやまなかった、目で追うのがやっとな速さで晶はアーチャーに攻撃を加えるが、アーチャーはそれを双剣で受け止める。

晶はただ笑っていた。昨日のアックアの戦闘でも楽しかったと心のそこから思っていた。

学園に通って、一般人の日常を体験してきた。学園都市にいた時はそれが退屈とは思わなかった。

なぜならバカをやる友人がいて、自分の無茶に付き合ってくれた生徒会員。彼等との学園生活は楽しかったといえる。

けど、裏世界こゝろも楽しいと思える。

命を天秤にかけた緊張感がたまらなく思ってしまう。

故に、笑みがこぼれる。

アーチャーはその表情に気にかけることなく攻撃を受け流したり防いでるが、内心では驚愕している。

サーヴァント  
英霊でもない人間が、自分と互角に戦っている事を。

それが、素直に驚愕に値すると内心考えている。

先ほどの、聖杯戦争で8人目のマスターや英霊を召喚すると言った言は聞き流していたが、この戦闘で確信してしまった。

この男はそんな事は片手間で出来る、そう直感してしまう。

くわえて、なにか切り札を隠している、それも自分の予想を大きく上回る数の切り札ジョーカーを持っていると勘と経験が告げる。

「　　ッ！」

「　　クッ！」

そんな事をお互いに思考しても動きには微塵にも出さない。

二人の剣はさらにぶつかり合う。

一夏、鈴音そして凜も二人の戦闘に魅入られていた。

一夏と鈴音は晶の動きに驚きを隠せない。

昨日のアックア戦では自らの腕を差し出し、そこから噴出した血で隙を作り攻撃した。

晶の言葉ではアックアは本気を出していなかったが、晶も本気を出していなかったと思っただが、

この戦闘で本気を出していないと事が確信にかわった。

それと、

晶は魔術には魔術を、能力関係には能力、そして接近戦には接近戦をと相手に合わせて楽しんでいると確信した。

一夏は先程、ISを展開してアーチャーと戦ったが、全く力を出していなかったと思いきらされた。

鈴音は、この戦闘を見る前まで戦闘を甘く見ていた。



二人は未熟なまま付いてきた事を後悔してした。

二人の後悔をよそに、本人は楽しそうに戦闘をしている。

それから、二人の剣の激突が三桁を超える、その時、屋上からも聞こえるくらい大きな爆音が遠くで起きた。

二人の戦闘を見ていた一夏達でなく、戦闘をしていた、二人まで爆音がした方向に視線が向った。

「なんだ!？」

一夏は声に出して驚いた。

「はあく、興が削がれた」

「同感だ。凜どうする？」

突然、声をかけられ戸惑った遠坂。

「へ！？　そ、そうね、とりあえずアナタの目的を聞こうかしら？  
出鱈目な魔術師さん」

「神代晶、どっちでも好きなように呼べ」

「そう、では改めて聞くけどアナタは聖杯がほしいの？」

「いや、俺の目的は聖杯の破壊又は聖杯戦争が出来ないように、大聖杯がある魔法陣を消すのが目的だ。  
引つ掻き回すのは俺の趣味だ！」

ハッキリと、趣味だと公言する晶に呆れる二人組み。

「悪趣味ね。神代君はこれからどうするの？」

「あつちの爆発も気になるが、俺は大聖杯の魔法陣があるところを見に行く」

「まさか、いきなりこの聖杯戦争を終わらせるつもりなの？」

「まっさか、さっき言っただろ、8体目のサーヴァントを呼ぶ為にちよつと弄るだけだ。

折角の祭りなんだからそれを止める野暮なことはいねえよ」

遠坂は口元を手で押さえ、呆れる態度をとった。

「まあいいわ、ここでアナタと戦っても分が悪いし、私達はさっきの爆発があつた場所をみにいくわ」

「そう、……ああ、これはヒント、アルビノの目と白い肌と髪をした中性的な人間にあつたら逃げることをお勧めする」

「そう、その助言を受け取っておくわ。行くわよアーチャー」

「わかった」

「と、その前に」

遠坂は一夏を思いつきりぶった。

「ホンゲツ　グツホツ」

鈴音も遠坂がぶつた後に後頭部を回し蹴りを決めた。

「「すつきりした」」

鈴音と凜は満面の笑みで言った。

遠坂はアーチャーの元に向かい、二人はとんでもない跳躍で爆発が

あつた場所に向つた。

それを見届けた鈴音は

「なんで、最後まで戦わなかつたの？」

鈴音は晶が楽しそうに戦っていたのに興が削がれたと言ってやめた事を可笑しいと思つて質問した。

「俺のスタミナは限界なんだよ。それに、こんなところで楽しみを終わらせるのはもったいないし」

「そっか」

晶の答えに納得いつた鈴音。

「俺は大聖杯に向うがお前等は戻るか？」

「晶と一緒に歩いていい？」

「かまわないぞ。ただ、サーヴァントは思った以上の強さだから、絶対に戦うな」

「うん」

晶は鈴音をお姫様抱っこした。

「あ、晶／＼／！！」

「嫌か？」

「うん」

真っ赤になった鈴音に嫌かと問いて、鈴音はクビを横に振った。

「お・・・お前等、俺が倒れてるのにラブコメなんかするな」

「お前は何やったんだよ？」

晶の質問に答えたのは鈴音だった、ただしポツリと。

「・・・貧乳って言われた」

チュッ

晶は鈴音にかるい口付けをして

「大丈夫だ、俺は気にしないし」

「うん、ありがとう／＼」

「俺がわるかった、イチヤつかないでくれ」

一夏はISで晶達と大聖杯があるところに向った。

そのころ一方通行は、バーサーカーと戦っていた。

バーサーカーの攻撃は単調だが、威力は常識外。

ただ、一方通行にとって巨斧を振り下ろしただけでは想定外の破壊力ではない。

くわえて、一方通行には物理攻撃は効かない。

しかし、一方通行の攻撃もバーサーカーには効いていない。

それでも、一方通行は楽しそうに戦っていた。

自分の攻撃を喰らっても死なないどころか全く効かず、反撃してくる怪物と楽しく戦っている。

一方通行はベクトルを操作して人間を殺せる攻撃をしているがどれも効果が無い。

だが、それは人間相手にだ、英霊というものを解説して演算に入れている、

一方通行はまだ楽しんでいる。

「面白エ、次はどんな攻撃を喰らいたてエンだ、デカブツ!!」

常人なら体を吹き飛ばされてもおかしくない攻撃を繰り返す一方通行。

その攻撃を無傷ですますバーサーカー。

二人の戦いは平行線を保ったままだったが、一方通行の攻撃が始めて致命傷となった。

「なるほどなア、この攻撃なら喰らっちゃまうか」

一方通行は掌の風を操作して、風を圧縮したまま高速回転させバーサーカーの腕にぶつけた。

その結果、バーサーカーの腕は吹き飛んで始めて致命傷になったが、直ぐに再生された。

「再生能力？ いや別の能力だな。あのヤローは英霊は神話に出てくるような英雄だッて言ッてたな……、まあいいか、死なないのなら死ぬまで殺せばいいかア、或いはオレが飽きるまで殺されてもらっぜデカブツ！！」

一方通行は不気味な笑みを浮かべ、致命傷になった攻撃をもう一度したが、聞かないと気付き、一方通行はある仮説を立てた。

「同じ殺害方法では殺せねエかア？ だったら、別の殺害方法を創るだけだなア」

一方通行は不気味な笑いをしながら、人間はおるか戦車などの兵器ですら触れたら木っ端微塵になる攻撃を繰り出して、バーサーカーを殺し始めた。

一方通行の繰り出す攻撃で、周りは戦場の後の様に悲惨になっている。



だが、10回目でバーサーカーが消えた。

「ああ、消えやがった？ それとも限界が来て死んだか。まあいいかア、それなり楽しめたし。  
今日はここまでにするか。にして妹達よりはずっと楽しめるぜエ」

一方通行はそう言って、自分が泊まってるホテルに戻っていった。

最後の部分を見ていた、遠坂とアーチャーは冷や汗をかきながら一方通行を遠くから見ている。

「なんなよ、あの化け物は？」

「さあな、だがサーヴァントをしかもバーサーカーを生身で倒す事が出来る化け物だということは確かだな」

「それでも、異常でしょ！？ 見る限りバーサーカー単体だけでも私達は危ないのに、それを生身で倒すなんて。それに、魔力もオドも感じなかったわ」

遠坂が遠めでバースーカーの能力を見て、自分たちだけでも厄介だ  
というのにそれを倒す化け物がいた。

「それは、私も同意見だ。アレが聖杯戦争に乱入したとなると厄介  
だぞ」

「厄介程度すむの!? あれは厄害よ!! それにしても晶はアレ  
の存在を知っていたし」

「彼が呼んだんじゃないのかね?」

「だったら、………恨むわよ。全く今度あったらアレの情報  
をもらわないと」

遠坂はすこし考え

「今日はここまでにしましよう」

「わかった」

遠坂とアーチャーは自分達の拠点いえに戻っていった。

一方、バーサーカーのマスターであるイリヤスフィール・フォン・アインツベルンは計算外の出来事に困惑していた。

(唯の人間にバーサーカーが10回も殺されるなんて)

イレギュラーにより、当初の目的が一気に瓦解した。

イリヤは令呪を使い、強制的にバーサーカーを移動させた。

(後二回、あと二回バーサーカーが殺されたらまずいわ)

バーサーカーとはいえ、魔力を注いだ全力の宝具を喰らえば、一度ぐらいは死ぬ、今までは十二回も殺さなければ死なない上に同じ殺害方法は効かなかったが、もうそんな事を言っつてられる状況じゃない、聖杯戦争はまだ始まったばかりである。

(今は早く城に戻らないと)

「あら、どこへ行くのかしら?」

突然、頭の中から声が聞こえた。

「誰!？」

「……」

「サーヴァント!？ キャスターね」

「そうよ、しかし思わぬイレギュラーで厄介なバーサーカーが弱ってくれたわ。あなた達には此処で退場してもらおうかしら」

「ック 。 (まずい、バーサーカーの傷はまだ癒えていない)

「終わりね」

魔術がイリヤに放たれ、イリヤに直撃する瞬間におツンツン頭の少年がキャスターの魔術をかき消した。

「!？」

「誰!？ ここは人払いの結界を張ってるというのに」

「訳わからないことをほざいてるんじゃないかねえ。こんな女の子に能力を使うなんて、どういづつもりだ？」

当麻 Side

わたくし、上条当麻は不幸である。

学園をサボってまで親友のお見舞いにいあつたら、何故かクラスメイトに抹殺されそうになり、それを降りきって、学園都市に戻ってきてみれば財布を落としてしまった。

携帯で警察にかけたら財布は届けられていて、ラッキーと思ったが、更なる不幸が待っていた。

別に中身がなくなつたわけは無かったが、財布を取りにいった帰りに、飲み物を買おうと自販機の前に行つたら、五千円札しかなかった。これは上条さん全財産だ、次の奨学金まで一週間、節約すれば余裕だろう。

小銭がなく、五千円でジュースは買えないから、財布をしまおうとしたとき、何故か五千円札が風で飛んだ。

それは、わたくし上条さんが五千円札を手に直接握っていたのが原因だが、と考える前に直ぐに五千円札を取りに行つたら、トラック

の中に入ってしまったのです。

上条さんはトラックに入り、5千円札を取り返したと安堵したら、トラックの荷台が閉められた。

慌てて、ドアを叩こうと移動したとき、トラックが発進、バランスを崩し転倒、不幸だと呟いた。

しかし、荷台にある荷物をみたら、北海道と書かれた荷物を見つけってしまった。

このときは大声で何時もの台詞を叫びました。

気付いてもらえるよう、荷台の中で大暴れしても気付かれず、暴れる体力がなくなっておとなしくしていたら、目的地に着いたのかと思って、もう一度暴れたら、何とか気付いてくれた。

外に出たときは夕方、運転手さんは仕事の後で送ってくれるといったが、強がったのか上条さんは自力で戻れますと行ってしまい、バス停か駅がある場所まで徒歩でいきました。

しかし、しかしですよたくし上条当麻は此処の土地勘がなく迷いました。なぜ、あの時強がったのか自分に問いたかったです。

不幸だと口にしても変わるず、歩くとすでに夜になっていた。

「はあ、俺の自業自得は言え、学園都市まで戻るのにいくらかかるんだろ？ 晶に金を借りようかな。幸い外にいるから、携帯で電話してって……？ なんだ一人っ子いないぞ？」

あたりを見回すと、誰にもいない。

可笑しいと思い、回りの様子を見る為に動いたら、紫色のロープを被った人が女の子に能力を放とうした。

俺は咄嗟に幻想殺<sup>イマジンプレイカー</sup>しで、その能力を消した。

「誰！？ ここは人払いの結界を張ってるというのに」

人払い？ 結界？ 訳のわからない言葉が出てきたが

「訳わからないことをほざいてるんじゃないやねえ。こんな女の子に能力を使うなんて、どういふつもりだ？」

そう言って、ロープの人の声を利く限り女の子の人だろう。

「能力？ まあいいわ。見られたからにはアナタも消させてもらいましょうか」

ローブを被った女性はどこから杖を出して、光のような物を飛ばしてきた。

「効かねえよ!!」

俺は幻想殺しで光をかき消した。

「また！？ だったら」

今度は杖の前に漫画やアニメでみる魔法陣が展開された。

驚いたが、何かやばそうなので、俺は走ってその魔法陣に幻想殺しで触れた、そうしたら魔法陣は鏡が壊れたみたいに砕けた。

「何なのアナタは？」

「答える義理はねえな。アンタがこの子を襲うなら、俺は容赦しねえぞ」



「此処は引き下がったほうがいいわね」

そういった、ローブの人はテレポートとは違う方法で消えた。

「何なんだ？」

能力が二つ以上って、都市伝説の多重能力か？ それとも晶みたい  
に能力者か？

俺は考えたが、今は襲われそうになった子の方が重大だなおもっ  
て。

「大丈夫か？」

「イリヤスフィール・フォン・アインツベルン。この度は助けたく  
れたことをにお礼を言います」

「それはいいよ、それと俺は当麻。上条当麻だ。上条でも当麻でも  
どっちでも構わないぜ」

「じゃあ、私の事はイリヤでいいわトウマ」

これが俺とイリヤの最初の出会いだった。そして、俺が学園都市以外の異能の力を知った日だった。

17話 聖杯戦争一日目 2 (後書き)

上条さんは誰の策略でもなく、自分の不幸で聖杯戦争にかかわりませんでした。

アレイスターは何かと準備していたが、それが徒労に終わった。

ちなみに、それを聞いた土御門は上条に同情したという裏設定。

神代 晶のステータス Fate版

筋力E 但し気や魔力で強化が可能

耐久E 同じく

俊敏D 同じく

魔力A+

幸運E

宝具D アーティファクトを宝具に例えたらこれくらいのクラス

体力D サークヴァントがAとするならこのくらい

本人の言い訳曰く、「俺は会長の際は書類と戦っていたんだ。

強敵だった」

## 18話 本来の日常

晶 Side

「……んん、朝か……」

大聖杯のある洞窟を調べた結果、7人目のマスターは遅くても明日選ばれる。すでに令呪の兆しが出ているようだ。

くわえて、俺が宝石に溜めてきた魔力を少し使えば8体目のサーヴァントが呼べる。

今晚、どっかのマスターの前で呼ぶ予定だ。

だが、その前に自分の体力が思った以上に落ちてるのが厄介だ。

キャスターやアサシンなら兎も角、他のサーヴァントと長期戦は無理だ、魔術や魔力、気を使えば話は別だが。

使っても落ちた体力が戻るわけではない、だから朝早く起きて、青髪がくれた鉄下駄で散歩しようと思った。

あの重さは尋常じゃない、片方三十キロ、両方あわせると六〇キロだから笑える。

本来はバラエティ番組のために制作したそうだ。

まあ、経緯はともかく、使える者は何でも使う。

だが、朝起きたら、全裸のラウラが添い寝をしていた。

唯の添い寝なら可愛いもんだと微笑んでやるが、全裸だ。

気持ちよさそうに眠っている。

つい胸を触ってしまったが気持ちよかったよ、

「・・・んっ」

ラウラの声が可愛かった。

だから、つい揉んだ。

「んっ・・・あんっ・・・!!」

「柔らかいな」

「あ、晶／＼、何してるんだ？」

「お前の胸を揉んでいるだが？」

もしかして揉まれてる自覚がない？

「な、なぜ／＼・・・あんっ！／／／」

「気持ちいいし、癖になるな」

「そ、そうなのか／＼／」

「ああ、それに」

「それに？」

「ラウラの声がかわいい」

「／／／」

真っ赤になったラウラも見れたし散歩に行くか。

「も、もうおわりなのか？／／／」

「悪いな、今日から体を鍛えなおす為の散歩だ」

「？ 散歩だけでは体は鍛えられないぞ？」

「唯の散歩ならな、その下駄を履いて散歩するんだよ」

「下駄とは確か日本文化独自の履物だよな？」

「ああ、これはちょっと、いや大分違うが持って見る」

ラウラは俺の言われたとおり片方を持ってみたが、かなり重かったらしいか、少ししか浮かなかった。

「す、すごいな……」

「だろ？」

「何やってるの、フラン？」

なんか、怒った雰囲気のある声が後ろから聞こえた。

S i d e o u t

シャルが目覚めたら、全裸のラウラが晶の目で鉄下駄を持つとしたが、シャルにはフランが邪魔でラウラが何をやっているのよく見えなかった。

「す、すごいな……」

「だろ？」

ラウラの顔があった位置が悪かった為かシャルは勘違いした。

「何やってるの、フラン？」

「わるい、起こしたか？」

晶が後ろのシャルに気付いて振りむいたら、ラウラが鉄下駄を持つうとしたのが見えた為、自分の勘違いだと気付いたシャル。

「え！？ あ、うん、大丈夫。ただ何やってるのかなあとと思って」

「ああ」

「ところで、なんでラウラは全裸なの？」

「夜這いをしに来たみたいだ」

「よ、夜這い！？」

「布団にもぐ込んだのはいいが何もしなず寝たって落ちたる」

「ギクツ」

「凶星みたいだね・・・」

「お前等は寝てていいだろ。まだ早いし。俺はすこしこの下駄に慣れるために散歩してくる」



「あ、うん」

すると、晶は着替えを始めた。

「フ、フラン!?」 「あ、晶!?!」

二人のリアクションは無視して着替えを終える。

「／／／」

「何やってるんだ?」

「だ、だって!?!」

「ラウラは全裸だろ? それにお前全裸でこの部屋に来たのか?」

「あ、ああ／／／」

「全裸で自分の部屋に戻るのか?」

「・・・・・・あ?」

今気付いたのか、しまったという顔をしている。

「そこに、俺のジャージがあるからそれ着ていけ」

「す、すまない／／／」

「そのまま、寝ていいぞ。戻ってきたとき起してやるから」

「うん、うん」

「じゃあ」

晶が部屋を出てから、少し無言になったが、

「ところで、シャルル」

「な、なに／＼／」

「お前は本当に男か？」

「へ！？ な、なんで、そんな事を聞くの？」

「お前、晶が好きだろ？」

シャルはラウラの質問に否定も肯定も出来なかった。

「／／／」

「晶を見る目が私達一緒だからな。それに、晶の裸を見たとき女のリアクションだったぞ？」

「ラウラの言うとおり僕は女だよ」

「そうか、嫁は知っているのか？」

「うん」

「そうか、ならば私は何も言わない」

「あ、ありがとう」

「けど」

「けど？」

「うぶやましいぞ、嫁と同じ部屋なんて」

「ラ、ラウラだって、全裸で添い寝してたよね？」

二人はその後、少し言い合って、仲良くなった。

「ふあゝ、暑くなってきたな。ん、あれは箒か」

「402、403、404」

晶が見たのは、素振りをしている箒の姿だった。

「ジュースでも買ってきてやるか」

晶は重い下駄を履きながら、自販機の元に向った。

「496、497、498、499、500・・・ふう、朝の鍛錬  
は ひゃー!」

「お疲れ」

「あ、晶!？」

晶は冷たいスポーツドリンクを箸のクビに当てた。

「はい、ご褒美」

「す、すまない」

晶が箸の隣に座ろうとしたら

「す、すまないが、少し離れてくれないか？」

「嫌だったか？」

「ち、ちがう。私は汗を掻いていて、その……//」

「ふむ」

晶はそのまま、顔を箸の首筋に近づけた。

「待ってくれ」

「くさくないぞ。それどころか、甘い匂いがする」

「そ、そうなのか？／／／」

「箒」

「な、なんだ？」

チュッ

「な、な、ななな何をするんだ！？」

「キスだが？」

「／／／／／／／／／／／／／／」

「だって、飲み物よりこっちの方がほしいそうな顔してたし」

箒の顔は真っ赤な茹でタコのようになっていた。

「それに、昨日の夜、皆で見ていたんだろ？　ゼクトかエヴァの魔法で？」

「ああ、／／／」

「妬いたのか？」

「当たり前だろ。鈴音には仮契約だけでなく、お姫様抱っこやキスマで／＼／＼」

「はは、悪かったな。鈴音は昨日頑張ってたからな、箒も頑張れがご褒美をあげるぞ」

「あ、晶」

「ん？」

「その、稽古をつけてくれないか？」

「剣のか？」

「ああ」

「箒には才能がある。でも俺のはな、経験をつみ重ね、一だけを磨いた結果だ。昨日のアーチャーもそうだった。才能がある奴にはそいつにあつた練習がある」

その一言で、箒は黙り込んだ。

「この事件が終わったら、いい先生を紹介してやる」

「ほ、本当か？」

「但し、生半可な気持ちで行ったら死ぬぞ。生き残っても殺人剣に落ちるだけだ。この事件が終わったら返事を待つその間までにしっかりと悩め」

「わかった」

晶はそう言って、散歩を再開した。

「（紹介するといつても人口精霊で造った俺が会った連中の誰かだし。誰にするか。」

鷹の目がユーリかフレン・・・銀は駄目だな、あと誰がいいんだろ・・・ツラか沖田・・・」

## 授業

晶は普通に受けていたが、一夏達は落ち着かない様子だった。

無理もないと晶は思った。彼等が体験したここ二日間はかなりどこ



るかめちやくちや濃い経験だったからか、  
表と裏の違いに落ち着かないようだ。

ちなみに、エヴァと茶々丸は鈴音のクラスに入った。晶のクラスか  
らでも聞こえるくらい、騒がしかったといっておこう。

屋上

「お前等は、もう少し落ち着け」

「わかってるけど、なんか、差がありすぎて」

「はあ、そうか。だったら慣れる」

『うっ』

「こっちが、日常だ。社会に出る為には必要なもんだろ？ 裏に関  
わりすぎると感覚が麻痺して、表で生きていけなくなるぞ」

『・・・・・・・・』

「そうだな、貴様等はまだ若い。少なくとも授業だけはでて、クラスメイト達と話でもして、日常を忘れるな。  
茶々丸、茶」

「はい、マスター」

『・・・・・・・・・・』

「晶、頼みがあるんだ」断る「まだ、言ってないだろ？」

「剣の稽古だろ？」

「うっ」

「少なくとも、この事件が終わるまで待て、そうしたら何とかしてやる・・・・・・・・多分」

「多分ってなんだよ？ それに今の間は」

「俺の気分次第だ。ご馳走様」

『はやつ！？』

冬木市に行く少しまえ。

「はろ、千冬ちゃん、酒盛り、酒盛り。二日間出来なかったし、今日はいい酒持ってきたよ」

のんきに入ってきた晶に呆れたため息をする千冬。

「はあ、お前はこれから冬木市に行くんだろ？」

「だって、酒飲まないで調子で無いし、それに、千冬はこれからも生徒の前だと甘えないし。  
この時間ぐらいは」

「馬鹿者／＼」

晶は千冬を抱きしめ、口付けをした。

「ちゅくっ、ちゅくっ、・・・ちゅ・・・」

「っちゅ……ふあ、んっ、んく、くむ……っ」

最初は戸惑っていた千冬だが、途中から千冬のほづが積極的になっ

ていく。

「はあ……はあ……」

「……はあ……はあ……」

お互いの口を離れた瞬間に地面が光りだし、千冬の手にはカードが握られていた。

「いつの間に……」

「気付かなかった？」

「ああ」

「千冬が積極的に舌を入れてきたときに」

「……／＼／」

「もうちょっとキスする？」

千冬は返事じゃなく、態度で答えた。

「ん……ちゅ……くちゅ……んん……」

「ちゅく……っ……ちゅ……んっ……」

お互いに舌を交差して、積極的にキスをする。

結果

「千冬ちゃん、なにショック受けてるの?」

「う、うんさい… / / /」

自分の変わりようにショックを受けてひざと両手が地面につく。

「ほら、酒でも飲んで、今の気持ちを素直に受け止めなよ」

自分より、遙か年上だとわかってからか、とんでもなく積極的になった自分に自己嫌悪している千冬。

今まで、一夏を育てる為に気を張っていたからか、甘えた事がないゆえ、自分がとんでもなく甘えん坊だと自覚してしまったが、晶にフォーローされ何とか立ち直った。

「今日は誰を連れて行く？」

「誰も、今日は7人目、表向きでは最後のサーヴァントが召喚される、クラスはセイバーだから、昨日のアーチャー以上の接近戦だし、ゼクトは念のために連れて行く、じゃんけんの結果は弟君の一人勝ち」

本当に凄かった、アイコもなしで、一夏の一人勝ちだったし。

「そっか…無理をするなよ」

「わかってるって、さてと、準備をはじめるか」

「もう、こんな時間か」

千冬は晶の胸から離れる。

「んじゃ」

「待て」

「ん？」

千冬は軽く口にキスをした。

「無茶するなよ／＼」

「アイアイアサー」

晶が部屋を出て行った後、千冬は最悪の事を頭によぎった。

「もしこんな私を束に知られたら……………念の為殺傷能力の高い武器を用意するか」

冬木市

「さーで、セイバーはマスターの令呪が強く繋がってきたな、時期に召喚されるか」

「ふむ、セイバーのマスターのところに行くかのう」

「そうだな」



晶とゼクトは跳躍しながら、冬木市を駆けていた。  
一夏はISを展開して晶達についていった。

「ん、アレはアーチャーに遠坂。急いでるみたいだな。あの方向は新しいマスターのところか」

晶はスピードを上げて、二人と接触した。

「アナタは！！」

「神代晶！ それにその男の！！」

遠坂やアーチャーはゼクトから感じる魔力を感じて警戒した。

「はろ〜、目的地は一緒みたいだね〜。どうする？」

今は時間をかけるわけには行かないのか

「アナタに聞きたいことあるし、一緒に行きましょう、それに時間が惜しい」

「なら、黙ってな」

晶は遠坂を片手で抱え疾走する。

「ちょっと、もっとマシな運び方は無いの？」

「無いな」

「そっちの方が、速いしなの」

「同感だな凜」

「……」

晶は遠坂の言葉を即答で答える。他の二人のそっちの方が速いというわけで援護はしない。

一夏は昨日のやり取りで若干青くなる。

瞬動をつかい、本来の遠坂が付くはずだった時間を数分短縮した。

そこには、青い槍兵に襲われてる少年の現場だった。



19話 聖杯戦争二日目 1

「少年は青いタイトスの男に蔵に蹴りで吹っ飛ばされた。防戦一方で蔵の中に逃げた少年」

「あん「お前は何行ってるんだよ？」

遠坂より早くツツコム一夏。

「状況説明」

晶は呑気に答える。

「あーもう、それよりあの人を助けなくていいのかよ？」

遠坂が言いたいことを全部言っ一夏。

アーチャーは遠坂をみてフツとにやける。

「アーチャー、どんな拷問を受けたいの？」

「いや、すまない。彼のツツコミがあまりにも早くて的確だった物で、別に凜の事を笑ったわけではない」

「んな事よりサーヴァントの召喚が始まるぞ。あの蔵にはサーヴァントを召喚する陣があったみたいだな。」

その言葉に遠坂は驚愕した。

「そんな、衛宮君がサーヴァントを召喚する陣を知っているの？」

「いや、陣自体はかなり古い物だ。おおかた師匠辺りが前回の聖杯戦争に使った陣だろ？」

「そんな偶然あるわけ無いじゃない？」

「偶然なんて無い、あるの必然だけだ、なあアーチャー？」

意味ありげにアーチャーに問いかけた晶はアーチャーに睨まれる。

「言っただろ、俺の能力を。蔵に蹴飛ばされたあいつを見て気付いたんだよ」

一夏と遠坂は晶の言葉の本質に気付いていない。ゼクトは晶が何か隠しているのには気付いているが、何を隠しているのかはわかっていない。

「……………」

5人がそんな話をしている間に状況は進み、蔵の中からつ光が放たれる。

「召喚したみたいだな」

「う……そ……！」

「まあ、アレは召喚に応じたというより、召喚されてやった感じだが」

蔵から二体のサーヴァントが出てきて交戦を始めた。

「アレがセイバー？」

見えない武器で青い槍の男を押し少女に一夏は驚愕していた。

始めてみるサーヴァント同士の戦い、昨晚みた晶とアーチャーとも少し違う戦いに魅入られる。

様子見かと思っていた遠坂達をよそに、晶は呑気にサーヴァントの戦場に近づいた。

但し、魔力を抑えずに。

「誰だ!?!」

当然、セイバーとランサーは警戒する。

「始めまして、8人目のマスター、伊藤太郎です」

二体のサーヴァントは8人目のマスターと言うところに警戒したが、

「何だよその偽名は!?!」

と、ツッコム一夏。

「あ……………」

「アホじゃな」

「アホね」

「アホだ」

三人は同時にアホと言われる一夏。

四人に気付き二体のサーヴァント。

「……」

「さっきの姉ちゃんか」

蔵から出てきた少年。

「遠坂!？」

「知り合い?」

晶は呑気に遠坂に聞く。

「同じ学園の生徒よ」

「なるほど。まあ自己紹介できる空気じゃないし、本題に入るぞ。俺は今から8体めのサーヴァントを召喚するから、黙ってみて」



セイバーのマスターは訳がわかるぞ

交戦していた二体のサーヴァントは戯言とあまり気にしていないが、遠坂とアーチャーはかなり警戒している。

「ゼクトもほしいか？」

晶は呑気にこの中で見た目が最年少のゼクトに聞く。

「わしはいらん。面白そうであるが魔力を大半持ってかれると厄介じゃし」

「そうか」

周りの視線を気にしないで話し二人。そして、晶が纏う空気が明らかに変わった。

「  
告げる」

「告げる。」

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。  
聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

「誓いを此処に。」

我は常世総ての善と成る者、

我は常世総ての悪を敷く者。

汝三大の言霊を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ　　「！」

渦巻く風と稲光、それを見ていた一夏は目をあけていられない。

遠坂やアーチャー、それにセイバーとランザーは驚愕する。

「なん・・・だと!?!」

「そんな!?!」

「出鱈目ね」

「全くだ」

「問おう、おぬしが余のマスターか」

魔法陣から出てきたのは髭が似合う大男が立っていた。

「そつだぜ」

「うむ、んじゃあ契約は完了じゃな」

大掛かりな登場に似合わないやり取り。

「貴様はイスカンドル!!」

セイバーは声をだして晶のサーヴァントお真名を呼んだ。

「征服王!?!」

「ほう、こいつが」

遠坂は驚き、ランサーは感心する。

「ん、あのセイバーと知り合いか?」

「さあのう、余は知らんぞ。それよりサーヴァントが3体いるか・  
・、随分とかわったタイミングで呼ぶのう」

「そっちのほうサプライズになるだろ？」

「がははは、違うない。どうやら余は面白いマスターに呼ばれたよ  
うじゃ」

豪傑にわらう晶のサーヴァント。

「どじりするんじゃ、このまま3体を相手にしろといっのかのう？」

余裕でとんでもない事を口走る征服王。

「それはそれで面白いが、明日の夜まで待ってくれ」

「なぜじゃ？」

「大聖杯の魔法陣に仕掛けをした。明日の夜になれば、大聖杯にす  
べてのマスターとサーヴァントを転移させる。決着はそこでつけば  
いい」

「ガハハハハ、それは面白いのう。確かにちまちまと一体ずつつぶすより簡単じゃし、派手なるのう」

「アンタは何とんでもない事をしようとしてるのよ!？」

遠坂は見た目に似合わず、大声で言う。

「さつき、俺のサーヴァントが言っただろ？ 一体ずつつぶすより簡単だって、それにそっちの方が派手だ」

「くっ、なんでそんなサーヴァントが呼ばれたわかったわ」

晶はケラケラ笑い、征服王はガハハハと笑う。

二人の笑いにあっけらかんとするセイバー。

「くくく、確かにな。戦いは派手なほうが面白いな」

と、ランサーも同意する。

「全員を集めてトーナメントでも開くのかしら神代晶君？」

皮肉を込めてフルネームで聞く遠坂。

「まさか、バトルロワイヤルだよ」

「ワツハハハハ、そいつはいいのう。より派手になるわ」

頭を抱える遠坂、そしてそのサーヴァント。

「明日になれば、俺達は轉移させられるのか？ その兄ちゃん？」

「ああ、マスターで無い特別ゲストも招待するし。中には真祖の吸血鬼もいるぜ」

「なつ、何を招待してるのよ！？ あんた聖杯戦争をどうするつもり？」

「言わなかったっけ？ 俺は引つ掻き回す、聖杯かその魔法陣を壊すのが目的だ。」

勝った奴が聖杯を好きに出来る。大して今までの聖杯戦争とかわらんだろ？」

「確かにそうだけど。ルールを破って8体目のサーヴァントをよぶなんて」

「おいおい、この聖杯戦争自体が異常だぜ、何をいまさらルールに従うんだ？  
そんなもの、ぶっ壊して楽しくしたほうが面白いだろ？」

晶の言葉に征服王とランサーは爆笑した。

「た、確かにそうだよな。くっく、俺達の存在自体が異常なのにいまさら常識のルールは意味ないわな」

腹を抱えて言うランサー。

「気に入ったぜ兄ちゃん。俺も兄ちゃんに乗った」

「「なっ!?!」」

遠坂とセイバーはその言葉に驚愕した。

「凜はどうする。彼がしようとする事がいやなら、此处でしとめた  
ほうがいいか？」

「わかってるわよ。でもランサーもいるのよ。それにゼクトと呼ばれた子も神代の見方みたいだし。圧倒的に部がわるいわ」

「なら、彼に乗るか？」

「あーもう、このカオス戦争がおわるならなんでもいいわ！！」

8人目のマスター、しかも馬鹿げた魔力を持っている、さらにそのマスターと同等の魔力を持っている少年、昨日見た化け物の白い少年に、加えて真祖の吸血を呼ぶらしい、いろいろと限界が来た遠坂はどうにもなれと大声で言う。

その姿を見た一夏は同情の目で遠坂を眺める。

「つまり、俺に乗ったと？」

「ええ、もうどうにでもなれよ」



一夏は魔力を感じないから、晶とゼクトの危険性をしらない。  
その為か遠坂が吹っ切れた理由を知らない。

遠坂は二人の魔力が自分と次元が違くと自覚しているから魔術戦では分が悪い、それに晶はサーヴァントであるアーチャーと互角に戦った、

くわえて晶もサーヴァントを手に入れた以上、全てのマスターとサーヴァントが乱戦したほうが安全だと思いたった。

「そっちの、セイバーのマスターは何を言ってるのか知らないみたいだな？」

唯一、全く、これっぽちも話を理解していないセイバーのマスター。

「ああ、頼む、何が起きてるのか教えてくれ……」

士郎に聖杯戦争のことを教えたら、聖杯をみんなに分ければいいとか入ったら、一夏も同意したが。

「アホ、それが出来ないから、五回も聖杯戦争をやってるんだろ？」

「なんで出来ないんだよ？」

「聖杯自体が選ぶのよ。マスター同士を競わせ聖杯を持つにふさわ

しいマスターを選ぶのが聖杯戦争。  
もっとも、その意志をぶっ壊した奴が目の前にいるんだけどね」

遠坂が晶に笑顔を向ける、しかし目と雰囲気は笑っておらず、一夏と士郎は恐怖で震えている。当の晶は

「何言ってるんだっつかり魔術師、俺は俺のやりたいようにやっただけだ。

嫉妬ならやめたほうがいいぞ、手にしたかった英霊<sup>カード</sup>をへっぽこ魔術師に取られたから俺に八つ当たりされてもな」

晶の答えに一夏達は固まった。

「フッフフ……」

「こええな、こいつ等」

ランサーの一言で話を戻した。

「それに、お前のサーヴァントは聖杯がほしいから召喚に応じた。もっとも召喚したんじゃないかとやったと言ったほうがいいけど」

士郎はセイバーに視線を向けた。セイバーの表情は否定しなかった。

「俺は別に聖杯に興味が無いがな」

その言葉で一夏と士郎は驚いたがランサーは直ぐに理由を言った。

「俺はただ、この聖杯戦争なら死力を尽くして戦えるから応じただけだ。その兄ちゃんが用意した舞台なら、なおの事思う存分戦えそうだが」

「アンタにかけられてる令呪は厄介だな」

晶の言葉にランサー「はわかるのかと？」という表情をした。

「安心しろ、明日の舞台では令呪の使用は限定される」

「ちょっと、そんな事聞いてないわよ？」

「今言ったからなく、マスターとサーヴァントが利害一致しないと発動できないようにしてある。理由は低脳な奴に使われるサーヴァントに同情といったところだ。だって、そうだと、サーヴァントの方がマスターより、優れてるのに使い魔だぜ、逆にマスターを使い魔にしてるほうが絶対に自然だぜ」

「「「」」」

士郎と遠坂が反応する。サーヴァントのほうが自分より優れてるか  
ら何もいえない。

「そりゃあ、助かるぜ。俺の今のマスターなんていやな奴だぜ」

ランサーが愚痴をこぼし始めた。長くなると感じた士郎が試しに晶  
に質問した。

「選択の余地は？」

「明日の10時まで全員倒せばいいじゃね？」

士郎がセイバーに視線を向けるが

「さすがに無理ですマスター」

「そ、そうだよな」

「衛宮君、人間諦めが肝心よ」

すでに、明日の乱戦を考慮に入れてる遠坂が言う。

「そつだぜ坊主（言峰をぶつ殺せるなら願つたりかなつたりだぜ）」

「凜の言つとおりだ（自分の目的が果たせそつだな）」

ランサーとアーチャーはそれぞれの思惑の為、否定的な言葉は言わない。

「マスター、わしは聖杯が欲しいんじゃないが？ 余が勝つたら聖杯をどうするつもりじゃ？」

「ん、そんな時は俺を倒せばいいだろ？ それになんで欲しいんだ？ 世界を征服する為か？」

イスカンドルは征服王と呼ばれている為、世界を手にする為に聖杯が欲しいと思つたが。

「いや、余は肉体が欲しいんじゃない。世界はこの手で手に入れんと意味がないじゃろ」

「なるほど、俺に勝つたら聖杯を使わず受肉させてやる」

「「「！」「」」

遠坂、ランサー、そしてアーチャーはその言葉に驚いた。

「マスターは手があるのか？」

「ああ、これを使えば簡単だ」

晶は掌から赤い石をだした。

その石から感じる魔力に士郎と一夏とゼクト以外は驚愕した。

「それは何じゃ？」

「賢者の石だ、昔色々あってな手に入れた。（体にぶち込まれたのを自分の物にしたんだが）」

「アンタ、本当に何者なの？ 伝説上の賢者の石を持ってるんなんで」

「バグじゃよ。全くおぬしが何をしてもわしは驚かんぞ」

ゼクト答えに納得した遠坂。ランサーは面白い奴だと大笑いする。

「さてと、明日までに各自出来る準備はするんだな。時間になった

ら勝手に転移する仕組みになってるから。シャワーを浴びていて、気付いたら全裸で皆と合流なんてことにならないようにな」

「わかってるわよ」

「・・・わかった」

遠坂は直ぐに返事したが士郎は返事に間があった。

「まあ、味方を作るなり、マスターとサーヴァントの絆を上げるなり好きにするんだな」

「ちょっと待って、昨日アナタが言ってた人物を見たけど、何なのあの化け物は？」

「へ、もうあったんだ。アレは学園都市の能力者だ」

「噂は本当だった見たいね。で、学園都市にはあんな化け物がゴロゴロいるのかしら？」

「まっさか、アレは特例、学園都市最強の能力者だ。その事は魔

術教会にいわないほうがいいぜ？」

「わかってるわよ。そんな間抜けな事はしないわ。そんな事をすればやばい事ぐらい知ってるわよ。」

それに魔術教会は聖杯戦争を黙認してるからあの化け物呼んだんでしょ？」

一夏は遠坂の言葉の意味がわからず質問しようとしたが。

「ああ、下手に干渉し聖杯を手に入れたら正教の力関係が瓦解して戦争になる可能性もあるしな。もっとも組織が聖杯戦争に参加したら、

フリーの魔術師達は邪魔な組織の人間を狙うのが落ちだし」

晶の答えで一夏もなんとなく納得した。

「で、あの能力者の能力は？」

「いくら払う？」

「お金取るの？」

「情報だぜ？ つーのは冗談であのヒッキーの能力はベクトル操作。」



触れた者のベクトルの向きを変える能力者だ。ちなみに電気量、質量、熱量は問わない」

「何なのよ、そのバグは!？」

「あいつは聖杯に興味ないから、狙われないように無視すればいいだろ。じゃあ、そういうことで俺達はいくわ」

晶とゼクトは魔法を使い、一夏はIS展開、イスカンダルは神威の車輪で衛宮家をでた。

その後、ランサーも楽しみな表情をして、どこかへ言った。

遠坂とアーチャーも敵になる士郎と馴れ合うつもりがないと言って自分の家に戻った。

「マスター「士郎でいいよ、セイバー」

「そうですね。では士郎、これからどうするのですか?」

「とりあえず、小腹もすいたし夜食でも食つか?」

「はい! 是非!」

士郎はとりあえず現実逃避することにした。

19話 聖杯戦争二日目 1 (後書き)

ちなみにイスカンドルはFate/Zeroと同じクラス、ライダーです。

能力そのものはワンランクアップと言ったところ。

ちなみにサーヴァントはキャス狐に使用かと思いましたが、やめました。

## 20話 聖杯戦争二日目 2

晶 Side

士郎の家を出た後、この冬木市で最も強力なマスターのところに向かっている。

その途中で、俺のサーヴァント、ライダーが突然バカな事を言ってきた。

「マスター、余はMSと言う者に乗ってみたいんじゃないか？」

こいつ、なんて言った？

「なんで、お前がMSの事を知ってるんだ？」

俺が渡ってきた世界で機動兵器を扱う世界は三つほどあったが、その中でMSと言う単語がある世界は二つだけだ。

「余が召喚される時、マスターおぬしの記憶が名が込んできてのう。それで知ったんじゃない。」

余がおぬしに勝ったら、一機貰えんかのう？」

「……いいぜえ。おもしれえ、俺のサーヴァントならそれぐらい破

天荒じゃねえとなあ」

「そうか、いやはや、これでヤル気が出てくるもんじゃ」

「まったく、マスターがマスターなら使い魔も使い魔じゃな」

そんな話をしているうちに、城みたいな屋敷が見えてきたと思ったら、地上から巨人が大岩を俺達に向けて投げてきた。

「何じゃ!？」

「バーサーカーじゃのう。ようやく戦闘が出来る」

「待て、俺がやる」

「待つんじゃ、おぬしは昨日アーチャーと戦っておるじゃろ。ワシ  
がやる」

「なぬ!？ だったらわしの番じゃろ?」

「お前等、喧嘩してないで早く倒してくれ      !おわ!!      俺を狙  
つてきやがった!!!」

さすがの一夏も、バーサーカーと戦わせてくれとは言わないようだ。

「じゃんけんで決めるぞ」

「わかった」

「承知した」

俺達は呑気にジャンケンをしている中、バーサーカーは一夏に狙いを定めて攻撃していた。

「おおわわ!!はやくきめてくれえええ!!」

一夏に木やら石やらを投げていうちにじゃんけんの決着がついた。

勝者は俺だ。というわけで、地上に降りて、ギユスターヴの剣をだして、戦闘の準備をいたら、直ぐに仕掛けてきた。

「!!」

バーサーカーが巨斧で切りかかったが、俺は後方に飛んで避ける。

だって、普通に力比べしたら、アレは死ねる。

「まさか、強化を使うことになるなんてな」

ゼクト Side

フランがバーサーカーの攻撃を避けた。普段なら相手の力を見る為に回避でなく防御をおこなうが、アレは無理もないじやろ。

素人の織斑ですら、あの怪物の危険性を肌で感じておる。

わしも強化を使わないとマジで死ぬレベルの攻撃力じゃし、ナギやラカンも同じじやろ最もあやつらがサーヴァントとして召喚すれば面白いかもしれんが。

フランは気で身体能力を強化して、剣の打ち合いを始めた。

1撃で打ち合った時に力負けして後方に飛ばされたが、4撃目は互角だった。それまでは力負けはしたが、後方に飛ばされる距離が短くなっていった。

（あいかわらずの戦闘センスじゃの。本人は経験であって才能ではないというが、あれは立派な才能じゃな）

5撃目でとうとうバーサーカーの力を上回ったが、フランはすでに息が切れておる。

「あやつ、かなり鈍っておるようじゃな」

「やっぱり、昔の晶は強かったんですか？」

織斑が質問してきた。

「そうじゃの、勘は兎も角、体力は40年前の一割程度しかないのう。接近戦では分が悪いがあの怪物にきく魔法を使うと此処一帯は更地になるし、これはまずいのう」

わしとエヴァ達は4年ぶりだが、フランはすでにこの世界で20年は過ごしておる。時間軸がかなりずれていたらしい。



それは兎も角、あの大战以降まともに戦闘していないなら体が鈍るのは仕方ないが、

「マジ!？」

「大マジじゃ。一体どんな英雄なんじゃろうな、あのバーサーカーは」

バーサーカーと互角な打ち合いをする為に気を大量に消費しておる。しかも、単純な気の強化では届かない故に、フランはバーサーカーと激突する瞬間に気を爆発させて使っておる。

その所為で体力の消費は半端ではない。あの怪物相手ではフランは確実に死ぬ、咸卦法をつかって、一気に決めればいいんじやが、あやつはやらんな。

一度、アルとあやつ過去の過去をみたが、圧倒的な勝利が少なかった、あやつはギリギリの緊張感を味わうのが好きじゃったな、例外はあったが。

そんな風に考えていると、奥からバーサーカーのマスターが現れた。

「待つて、バーサーカー」

雪のような少女とツンツン頭の少年が現れた。

バーサーカーに命令したということはあの少女がマスターじゃろ。  
感じる魔力も先程の遠坂達と桁違いに大きい。

それにしても、もう一人の少年は全く魔力は感じられない。

しかも、少女はその少年の手を強く握っておる。そんなくだらぬ事  
事を考えていたらフランから思いがけない声が聞こえた。

「当麻!？」

当麻 Side

昨日の一件でイリヤを助けたら、お礼が言いたいといって、「イリ  
ヤの屋敷に招待された。

イリヤの屋敷を見た時は城かと思った。

だから、昨日のような奴に狙われたんだなと思ったが違つらしい。

イリヤに問いつめたけど、俺を巻き込みたくないといってきたが、俺はそれを一蹴した。

その後、イリヤは俺に襲われた理由を話してくれた。

魔術の事、聖杯戦争の事を、自分のサーヴァントが思わぬ人物によつて死に掛けた事、その期に準じて自分を殺そうとしたサーヴァントの事。

イリヤのおかれてる状況がわかった時、俺はイリヤの手助けをしたと思つた。

イリヤは断つたが、俺はイリヤに幻想殺しの事を教えて、助けになるかもしれないと説得して協力する事が出来た。

出来たが、その後、何故かイリヤになつかれた。

イリヤの世話係のメイドさんに聞くことによるとイリヤはずっと一人ぼっちだそうだ。

だから、俺もイリヤの傍にいたいと思つて、イリヤに日本の遊びを教えた。

その夜は、イリヤの屋敷で一晩すごした。

翌日もイリヤに遊ぼうとせがまれ、あそんでやった。その途中でイリヤのサーヴァントを紹介してもらったが、イリヤとはミスマッチと言ってもいいぐらいの巨人だった。

イリヤに魔術を見せてもらって、魔術があるとわかったが、バーサーカーのでかさには驚きましたよ。

夜になったら、侵入者が現れたようで、イリヤはバーサーカーに向わせた。

イリヤの魔術で侵入者達を監視カメラのように見せてもらった。が、そこに移っていたのは大怪我をして入院していた親友が楽しそうにバーサーカーと戦っていた。

色々とわからないことだらけだが、イリヤに晶のことを話して、晶のところまで連れてってもらった。

「当麻？」

「やっぱり、晶なんだな。なんでお前が聖杯戦争に関わってるんだよ?。」

バーサーカーを見ても驚いていなかったから、関係者だと思って質問したら、晶はあっさりと答えた。

「聖杯戦争を終わらせる為、ついでに楽しむ為だな」

「それ、逆だろ? お前はついでに聖杯戦争を終わらす為に楽しんでるだろ?。」

「あ、バレた?。」

聖杯戦争を楽しみ、ついでに聖杯戦争を終わらす、こいつはそういう奴だ。学園都市でもそうだった。

「はあ〜」

「そうため息つくな、お前も聖杯戦争に関わってるなんて思いもよらなかったんだし」

「晶、知り合いなのか?。」

あれって、ISだよな。ISを装備した俺と同じ年ぐらいの男が晶に質問してあ。

(あれ？ こいつ、どっかで見たことあるぞ？)

そんな風に考えていると、

「昨日、俺のお見舞いに来たदार。 っていつても自己紹介はしなかつたから無理もないけど」

あ、そうだ、晶の病室にいた男だ。

「おぬしの、知り合いなのか？」

イヤぐらいの男の子が晶にもう一人の男と同じ質問した。

「親友だよ。 かなり不幸体質な親友だ」

「ほう、マスターが親友と言うぐらいだから、面白い人物だろう」

バーサーカーまでとは行かないが豪傑そうな大男が笑いながら晶に言った。

「どづいづこと？」

イリヤが不審な目で、大男に聞いた。

「ん？ 余か？」

「そうよ、サーヴァントはもう7体召喚されたのに、なんでもう一体いるの？」

「そいつは、俺が8人目のマスターとして、8体目のサーヴァントを読んだからだ。」

晶が答えた。俺も聖杯戦争の仕組みを覚えてもらったが、晶の仕業なら納得した。

「そんな、馬鹿げた事ができるわけないわ」

イリヤはそういって、動揺している。

俺はイリヤの頭をなでて落ち着かせた。

「トウマ……」

「イリヤ、晶の前では常識は捨てる。こいつの前では常識は全く役

に立たない」

「お前、恋人に親友の紹介がそれってひどくない？」

「って、誰が恋人だよ？ 俺がイリヤに会ったのは昨日だぞ？」

本当のことを言ったのに晶は呆れた顔になってため息をついた。

「はあく（またフラグを立てやがったな、学園の女子達や土御門が知ったらどうなるんだろうな）」

「なんで、ため息!？」

「なんでもない。それよりお前、聖杯戦争に関わるきか？」

何時もとちがって、真面目な顔で俺に質問をした。

「ああ、こんな馬鹿げた戦争を終わらせるには聖杯を俺の右手で破壊するのが手っ取り早いだろ？」

「はあく、お前の右手で破壊できるだろうが、そんな事したら、お前はこれから魔術師たち狙われるぞ？」



「それでも、止めたい」

俺は自分の本心を晶に言った。聖杯戦争を知ってから、イリヤみたいな子がそんなものに関わって欲しくないと自分手に思っている。

それは偽善だとわかっている。

だが、晶は何か納得した様子でため息をついた。

「お前の性格は知ってるけど、お前は魔術側にとって天敵なんだよ。そのイリヤだっけ？ もし千年紀の神器が簡単に破壊できる、人物がいることを知ったら、魔術結社はどうするか位はわかるだろう？」

晶がイリヤに聞いた。

「そうね、もし知ったら、あらゆる手段を使って殺すでしょうね」

イリヤには幻想殺しの事を話したからか、イリヤは真面目に答えた。

「それでも、イリヤは昨日、殺されそうになった。またそんな事がおきるのに、お前達が言ってる事が本当だとしてもイリヤをほっておく理由にはならないし、聖杯戦争を無視する理由にはならない」

「だろうな。魔術師だけならお前でも何とか対抗できおるけど、サーヴァントは別だぞ？ お前の右手でサーヴァントを消せるけど、奴等がすんなりお前の右手に触れるとは思えないし」

「それでも、可能性があるのなら俺はやる」

「そうか、けど、無理はするなよ？」

「わかってるよ。それより、聖杯って能力で何とかなるのか？」

サーヴァントを呼べるのは魔術師だけとイリヤに教えてもらった。

例外もあるが、それでも魔術に何かかわりがなければ呼べないそう  
うだ。

「いや、俺も魔術が使えるから、今回は魔術だけだ。能力はつかわない」

「……、お前が規格外なのもう知ってるから驚かないが、

「お前も聖杯が欲しいのか？」

「いや、ただ、サーヴァントと戦いたいだけとマスター達の目の前で聖杯を破壊したいだけ」

「前半は兎も角、後半は性質がわるいな」

「聖杯の破壊はお前だっで一緒だろ？」

「それはそうだけど、何も本人達の前で壊さなくても」

俺が呆れていっても、晶はケラケラ笑う。そんな懐かしいやり取りをしていると、イリヤが晶にある疑問をぶつけた。

「私はイリヤスフィール・フォン・アインツベルン。あなたに質問があるんだけど、いいかしら？」

「どうぞ、それと俺は神代晶、こっちは俺のサーヴァントのライダー、イスカンドル。こっち子供みたいなのはゼクト。そんでこっちの機械を装備しているのは織斑一夏」

晶は簡単に自己紹介をして、イリヤの質問を待った。

「大聖杯を弄ったのはアナタかしら？」

「イエス」

「どんな仕掛けをしたの？」

「明日の10時に全ての魔術師とサーヴァントを大聖杯の前に転移させる仕掛け、マスターもサーヴァントも聖杯とある程度繋がってるから可能な事だが」

「そう、それで乱戦を狙ってるの？」

「まあ、そのほうが楽しいし」

相変わるずの性格だな。生徒会長をしていた時も、自分が楽しむ為なら労力を惜しまなかったし。

「聖杯は完成させないからお前は無事でいられるぞ」

無事？　なんで聖杯の完成でイリヤが関わっているんだと思っただら。

「知ってたの？」

「いや、今知った。俺の能力はアナライザー、世界に存在する全てを計測し数値化する、だから聖杯の事も理解できたし、アレが普通じゃないともわかった、お前がが当麻の手を放した時にわかったんだよ」

「そう、本当に規格外な人ね」

「そういえば、さっきまでイリヤは俺の手を握ってたけど、いつの間にか離してるし。」

「まあ、親友の彼女候補を態々死なせるつもりは無いし、呑気に当麻に甘えれば？」

「だから、何でお前はそう解釈する。この年を考えると？ 兄妹みたいなもんだろ？」

「あーはいはい、わかりました。それより、当麻は明日イリヤについていくのか？ お前じゃあ転移できないが、時間が来る前に大聖杯のところに行けばいいだけだ？」

「どこにあるんだ？ その大聖杯って？」

「大丈夫よトウマ。私も知ってるから一緒に行こう」

「ああ、そうだな。晶はこれからどうするんだ？」

「すこし、他のマスターと接触するつもりだ」

「そうか」

「まあ、お互い明日の乱戦で死なないよう気をつけるか」

「そうだな。お前が死ぬとも思えないけど気をつけるよ？」

「あいよ、んじゃ、俺達はいくわ」

「ああ」

晶とゼクトと名乗った少年は中にうかび、一夏となのった男はISで飛んでいった。晶のサーヴァントは無視しよう、なんで牛が飛ぶ

なんて考えたら負けだろう。うん。

「トウマ、戻る？」

「ん？ そうだな」

イリヤはバーサーカーを霊体にさせて、俺達はイリヤの屋敷に戻って行った。ただし、晶の言葉でイリヤがめっちゃくちゃ甘えてきた。それをメイドさんに見られ、俺は数時間も説教されました。

「不幸だ」

20話 聖杯戦争二日目 2（後書き）

当麻はイリヤフラグを立てました。実際はこのために聖杯戦争をぶち込んだんですが、夏休みはある原作にきますが、イリヤも関わらせる予定です。

当麻、イリヤ、インデックスの三人の日常生活を番外編で書けたらいいなと思っています。

後、一夏達は超電磁砲の事件もかかわります。



## 21話 聖杯戦争二日目 3

IS学園の学生寮のエヴァに部屋で、箒達は晶達の行動をエヴァの魔法で見っていた。

「あの馬鹿、咸卦法を使わず、あのまま戦っていたら死んでたぞ」

エヴァの言葉に箒達は驚いた。

「マスターなぜフラン様は咸卦法を使わなかったんですか？」

「あいつは、昔から命を賭けた緊張感を味わう癖があるんだ。気に入らない相手には容赦がなくせに、それ以外の相手は本気は出さないというか、無意識に力や持っている技術を使おうとしない」

「晶が本気を出したらどれぐらい強いのか？」

鈴音が興味本位で聞いたが

「さあな、少なくともあいつは知らない魔法など使われたら直ぐに解析して再現できるからな、私が習得してる魔法も全部再現できるバグなのは確かだ。」

ちなみに本気を出したら、少なくとも攻撃は当たらないどころか、考えまで読まれる、あいつのアナライザーは相手の思考だけでなく世界を数値化し、それを計算すると未来を予測できる。占い師をやれば百発百中だろうな。もっともあいつは、以前つまらないと言って世界の数値化をしないんだがな」

『・・・・・・・・』

「持っている技術を総動員すれば、あのバーサーカーも簡単に消せたのにな。咸卦法を使うだけで、身体能力は互角かそれ以上までアップしていなのかな」

「咸卦法？」

千冬はエヴァ達が先程いつている咸卦法が気になって質問した。

「かんかほうとは何だ？」

「本来なら相反し合う「気」と「魔力」を融合させ、それを身の内と外に纏い、強大な力を得る高難度技法だ。我々の世界では究極技法と呼ばれてるがな。それを習得するには普通なら数年、何十年と必要だが、あいつはそれを初見でマスターした」

「嫁はそれを使わず、あの化け物と互角に戦っていたのか？」

「ああ、もつとも互角なのは数手だけだ、あいつは気だけで戦っていた。本来なら気だけではバーサーカーとあそこまで戦えないが、あいつは武器がぶつかる瞬間に気を爆発させて、バーサーカーの力に拮抗させていた。爆発させそれでえられる力は強大だが爆発させるタイミングをはずれば運がよくて腕ごと吹っ飛んでいた、普通なら半身は綺麗に吹っ飛ばされていただろうな」

その言葉に先程の戦いが危険だという事が幕達伝わった。

「しかも、そんな方法で戦っていたから、あいつの体力は直ぐに減った」

「だから、フランは息を切れしてたんだ」

「ああ、体力が落ちているからと言っても息が切れのが早すぎだ。バーサーカーのマスターとあいつの知り合いが来なかったら、確実に死んでいたな」

「それでも、フランは楽しんでたよね？」

「ああ、それがあいつの生き方だったから、簡単に変わらないだろうが、嫌でも変わってもらわんとな」

エヴァの言葉に同意した女性陣。そんな話をしているうちに晶はゼクト達と別行動をとった。

『お前らはこのまま、あの山まで行ってくれ。俺は少し寄り道する』

『わかったのじゃ』

ゼクト達はそのまま、目的地に向った。

晶はそのまま、下に降りてある人物に話しかけた。

一方通行 Side

今日は昨日のようなエンカントがねエ。

昨日のデカブツはかなり楽しめたし、今日はどんな奴と接触できるか、楽しみにしてたが接触がなかった。

もう少し人気のないところにウロウロしようとした時、神代の馬鹿が空から降りて来た。

「あア、テメエは何やってるんですか？ いきなり空から降りてきやがッて」

「ヒッキーを見かけたからな」

「殺されてエのか？」

こいつは何時ものようにからかいながら言ッて来た。俺もすでになれているが、どうもこんな風に答えないとシツくりこなくなつた。

「冗談だっつーの、それよりサーヴァントと戦ったのか？」

「ああ、最初はザコだったが、その後直ぐにデカブツが出てきたなア。そいつはかなり楽しめたがな」

「デカブツってバーサーカーか？」

「ああ、狂戦士ツて感じだツたなありゃあ」

理性があるとは思えなかつたし。

「ちなみにバーサーカーの正体はヘラクレスだぞ？」

「おいおい、マジかよ？」

ギリシャ神話の大英雄かよ！？

「あいつがバーサーカークラスでよかつたな？」

「どつ言つことだア？」

「バーサーカーはキャスター以外の全てのクラス該当する素質があるんだよ。バーサーカー以外のクラスだったら状況、対象に合わせカタチを変える宝具が使われてたぞ？ まあ、大抵反射でどうにかできると思うがな」

「まあな、それに昨日のデカブツは力業で攻撃してきただけ出しよ  
う」

威力は馬鹿みたいにあつたが、反射が出来ないわけじゃなかったし。

「明日の夜に全員集めてバトルロワイヤルをやる、これを地面に貼れば、魔法陣が出て全員集める場所にいける」

神代が札見たいのを渡してきた。俺はそれを受け取った瞬間に違和感を覚えた。体内が圧迫されるような感じがした。

「どつした？」

「いや、何でもねえ。にしても魔術か、お前が今飛んでた法則は魔術側か？」

「ああ、何なら此処で試してみるか魔術を喰らってみるか？」

場の空気が変わった。おもしれエ。

「いいぜ、魔術がどんなモンか試してやるよ？」

こいつとはキッチリ戦っていなかったしな。

「だけど」

「ああ、先に害虫掃除と行きますか」

俺達は同時にある方向に視線を向け。

「さっきから、覗いてる奴出て来いよ？」

出てきたのは昨日俺が吹っ飛ばしたサーヴァントと背の小さい爺に俺達と同じ年ぐらいの女だった。



「ほっほっほ、よく気付いたな？」

「はっ、文字通り害虫かよ？」

神代の奴の言葉に理解できなかったが、その言葉を聞いた爺の顔色が変わった。

「どオいう事だ？」

「この爺の体は蟲で形成されてるんだよ。全く気持ちわりい。この能力の欠点だな」

確か、こいつの能力はアナライザーか、それで蟲だということがわかったが、その所為で知る必要ない情報まで知って顔色がわるくなつたようだ。

「害虫には悪いが即刻消えてもらう。ああ、何も言っな、あんたの存在自体が気にいらねえ」

はっ、珍しく問答無用で殺やるきのようだ。よほど醜い情報でも読んじまッたか？

「ま、待てまず話を「問答無余、焼殺！」

神代が言葉を発した瞬間に、爺のいる地面から赤い魔法陣が浮び上がった。すると炎の柱が出てた。

普通なら即死だが、爺を守るようにサーヴァントが爺を抱えて避けていた。

（あのサーヴァント、俺と戦った時より強くなってるなあ。……ん？なるほどな確かマスターの魔術師の実力で使い魔の力も比例するんだったな。

つまり昨日のワカメ頭より優秀なマスターに使役したんだろうな）

オレがそんな事を考えてるうちに神代はサーヴァントごと、魔法陣を展開させ雷を放った。

ウエニアント・スピーカマウズ・フルグリエンテイス  
「来れ雷精 風の精!!!」

雷を纏いて（クム・フルグラティオーニ）アウストリーナ 吹きすさべ（フレット・

テンペスターズ）ヨウイス・テンペスターズ・フルグリエンテイス 南洋の嵐

雷の暴風!!!」

「容赦ねえな」

よほど、嫌な情報だツたんだろうなとわずかに同情した。

「右手に魔力、左手に気を、これを戦闘で使うのは始めてだな」

あいつの両手の掌が光ッたと思ッたら、あいつは両手を合わせた。その瞬間にあいつから感じる殺気や殺意が桁違いに上がった。

「てめえの所為で、当分飯がまなくなっちまいそつだ」

目で追えない速さでサーヴァントの腕から爺を蹴り飛ばした。サーヴァントは爺を抱えきれず、爺は吹っ飛んだ。

「光の精霊 千一柱

コエウシテース 集い来たりて サキテンキニミクム 敵を射て

サキタ・マギセリエス 魔法の射手 ルーキス 連弾・光の1001矢!!!

」

吹っ飛ばした爺に向けて、千一の光の矢を放った。

それだけに留まらず神代は掌を空に掲げた、その瞬間、空に魔法陣が展開された。

「天光満つる所に我は在り 黄泉の門開く所に汝在り 出でよ、神

の雷……、  
インディグネーション」

魔法陣から雷が舞い降りた。爺に避けるすべはなく雷をまともに受けた。

轟音が鳴り響き、収まった後には爺がいた場所にクレータが出来ていた。

「雷でクレータツて規格外にもほどがあるぞ？ それに本当に容赦ねエな」

「うるさい、お前にもあの爺の情報を頭に流してやるつか？」

「遠慮しておく」

俺達は残ったサーヴァントと先程から黙ってる女の方に視線を向けた。

神代のやつは殺意を出したままだから、女はおびえている。

「あんたも気にいらねえな、サーヴァントを手にしているのに、あの蟲ケラの人形になって悲劇のヒロイン気取りか？  
アンタは遠坂の妹みたいだな？」

「な、なぜそれを？」

「俺の能力だ、遠坂にも会っているから、あいつの血液の情報と似ていたからな。それで、姉にも助けを求めず、サーヴァントにも助けを求めず悲劇のヒロイン気取りか？」

神代の機嫌は最高に不味いくらいに悪いな。つーか、此処まで機嫌が悪いこいつは見た事ねエぞ？

「あなたに何がわかるんですか？」

神代の殺意に耐えながら言った。

「知りたくもねえ、助けを呼べば答えてくれる奴がいる、力も最近になって手に入れた、それなのに何もしないか、愉快だな」

「私が今までどんな目にあつたかも知らないで……」

「テメエの姉に助けを求めたら助けただろうな。あいつはそれを無視するような冷酷な人間じゃないだろうし。」

その苦しみから逃げ出す機会があるのにも関わらず、何もしないってマゾかよ？ 力があるなら噛み付くくらいはしろよ。もっともそれがテメエの選んだ選択なら俺がこれ以上何言っても関係ないがな」

「これ以上、桜を侮辱するならアナタを殺しますよ」

サーヴァントが二人の間に入る。

「かまわねえよ？ 蟲ケラが消えた今、自由だろ？」

神代を纏う殺気や殺意がさらに膨れ上がった。

「くっ……」

あの女がどんな扱いを受けたかは興味がねえが、この状態で暴れられたらシャレにならねえし。

「アナタには感謝してます。あの人を殺した事で私は自由になりました」

「それで、アンタはこれからどうするつもりだ？」

「姉さんと話をしたいと思います」

「そうかよ。で、聖杯戦争に関わるのか？」

「私は興味はありませんが、先輩が、知り合いが関わっているなら助けたいので」

「そうかよ、明日の10時に全ての魔術師とサーヴァントを大聖杯の前に転移させる仕掛けが発動する。聖杯戦争は明日で最後だ。俺はもう行く。お前に悪いが今は戦いたい気分じゃねえ」

神代はそう言って、消えた。

俺はそのまま何もいわず、自分が止まっているホテルに戻った。

「にしても、魔術か……」

先程の魔術は威力が高かったが、既存の物質であった。

「反射が出来ないわけじゃねえな」

(念のため魔術に気をつければ、生身の人間と変われねえしなア)



一夏 Side

晶と別れ、俺達は晶に言われた円蔵山を目指していたが、途中でロープを被った怪しい奴がいきなり目の前に現れた。

「サーヴァントか？」

晶のサーヴァントが質問したら、相手はあっさりと答えた。

「そうよ、それにしても貴方達の知り合いは厄介な事をしてくれたわね」

「それはすまんかったのう。わしはあやつが仕様としてる事に少なからず楽しみにしておるんじゃないか？」

ゼクトさんは挑発するように答えた。

「このままじゃ私も危ないのよ。だから貴方達の魔力と生命力を貰うわよ?」

ローブを被った敵は掌をこっちに向けたら、魔法陣が浮び上がり、そこから炎の弾や光の弾が大量に放たれた。

「動くな!!」

クラティニオキス  
最強防御!!」

ゼクトさんの言葉で動きを止めたら、ゼクトさん前から魔法陣が浮び上がった。

ローブの奴が放った攻撃を全て遮断させた。

「すげえ……」

雨のような攻撃を一瞬で作った防壁で防いだゼクトさんに驚くしかなかった。

「ほう、やりおるのう坊主」

「残念ながら、わしは数百年生きておるぞ？ イスカンダル殿」

「ガハハハ、そうか、さすがマスターも規格外なら、その盟友も規格外じゃわ」

イスカンダルさんが豪快に笑った。

「くっ……」

敵のサーヴァントはゼクトさんの防御魔法に驚愕したが二人はそれを気にせず余裕で会話を続ける。

「アレと一緒にする出ない。わしはバグではないぞ？」

「そうか？ キャスターの攻撃をあっさりと防ぐ魔法陣の防御を無詠唱で出した時点で規格外だと思うんじゃないか？」

「むう、おぬしは本当のバグを見ていないからそう思っただけじゃ!!」  
褒められているのに、何故か講義するゼクトさん。そんなやり取りをしていると晶が戻ってきた。

「何やってるんだ、お前等？」

「おぬしと同類にされるといって理不尽な印象を持たれてのう、それを講義しておったのじゃ」

「お前、何気にひどい事言ってるねえ？」

晶はあきれた声で言うが

「事実じゃ」

「つかー、誰と戦ってたんだ？」

「キャスターじゃぞ。そこに……って、おらん!?!」

本当だ、いつの間に消えたんだ？ まあ、晶とゼクトさんそれにイ  
スカンダルさんを一人で相手するのはさすがにヤバイだろうし、  
逃げられるなら逃げるわなあ……。

「それより、おぬし機嫌が悪いのう？」

俺は気付かなかったが、ゼクトさんが晶に聞いた。

「すこしな、……気味悪い蟲とそれに黙って従うバカにあった  
んでな」

「？」

「今日はもう戻るか、これ以上気分じゃない」

確かに機嫌が悪い。何があったか詳しく聞かないほうがいいみたい  
だ。

俺達はそのまま、晶が作った転移魔法陣で学園の寮に戻った。

それより気になる事がある。

イスカンドルさんはIS学園では目立つんじゃない？



「・・・あはは」

一夏の言葉に苦笑いするシャル。

晶はエヴァ達が自分達の行動を魔法で見っていた事を知っていたので、部屋に戻るまで我慢していた。

「しかし、塵も残さず上位魔法を連発したたる？」

エヴァが言うと。

「たっりーめだ、念のために周囲5キロにアナライザーを使って生きていないか調べたからな。あの蟲ケラを解説した所為で脳が焼ききれそうだったけどな。」

普段なら大丈夫だったが、あの蟲ケラの存在は予想外だった」

ふらふらな状態でトイレから出てきた晶は何気にとんでもない事を言った。

「はい、お茶でいい？」



鈴音がお茶のペットボトルを晶に渡す。

「ありがとう」

鈴音からお茶を受け取り飲み干す晶を見て、先を越されたと思っていた。

「で、腕は大丈夫なのか？」

エヴァが突然、会話を变えたので一夏達は驚いたが、ゼクトとライダーはそう言えばという顔をしていた。

「まあ、バ・サーカーと後一回ぶつかり合ったらひびが入ってたけどな」

呆気らかんという晶にため息をつくエヴァ。

「それで、明日は派手にバトルロワイヤルを開始するわけだが、何か気をつけける点はあるか？」

「そうだな、一夏達は行かないほうがいいな」

その言葉に納得いかない一夏の表情に晶はわかりやすく説明した。

「ぶつちやけ、今日あったセイバーとバースーカを魔法で倒すには加減が出来ない、味方を気にして加減したらこっちがやられるかな、

俺達の魔法に巻き込まれ死んでもいいなら止めないけど?」

「アシタハミテルダケニシマス」

一夏は晶の言葉に納得して、学園に残ることにした。無論箒達も今日のバースーカとの戦いを見て、足手まといにしかならないとわかってから一夏のように抗議はしなかった。

「そんなに厄介か?」

エヴァが晶にセイバー達の能力を聞いた。

「ああ、特にセイバーの対魔力がシャレにならん。エヴァの「えいんのひょうが」から「おわるせかい」などで決めないとセイバーには効かないぞ・・・たぶん」

晶の答えにニヤリと笑みを浮かぶエヴァをよそにセシリアは

「あー、なんですかその不吉な名前の魔法は？」

セシリアの質問に一夏達も同じ意見という表情をしている。

「エヴァの上級魔法だ、セイバーのマスターはへっぽこだったから、セイバーのステータスは低くなってるのが救いか……」

「ひどい言われようじゃな」

ゼクトは無表情で言う。

「しかし、事実じゃろ。余も見た限りあの嬢ちゃん達のほうが魔術師としてはレベルが高かったのう」

ライダーも問いイスカンダルは遠坂とイリヤのことを思い出し本音を言った。

「まあ、それでもあの士郎という存在は面白いがな、くっくっくっ」

「どういう意味だ？　　そういえば、お前はアーチャーに向って何か言った時、アーチャーはお前を睨んだな」

エヴァは気になっていた事を質問した。一緒に行った一夏やそれを見ていた箒達は気付かなかったが、エヴァとゼクトは何か違和感を感じたらしい。

「言うてもいいが、明日本人が言う可能性があるからな。言わなかったら教えてやる」

晶はい今言う気がないことを悟ったエヴァとゼクトは「そうか」と言って、アーチャーに関しては質問を終えた。

「まあ、明日で聖杯戦争を終わらせるから、お前らは気にせず来月の学年別トーナメントと抜き打ちテストを気にしたほうがいいぞ？」

「「「「「.....」」」」」

その言葉に無言になる一夏達、

予断だがその後、シャルとラウラは学年別トーナメントは兎も角、抜き打ちテストの事と中間と期末テストのクラスの平均点が85点以下の場合、夏休みが補修になると知って顔が青くなった。

「（それにしても、当麻も関わってるなんてな……、アレイスターの差し金じゃねえだろうな？）」

540

晶がそんな事を考えてるいると。

「なあ、あの当麻って奴は大丈夫なのか？」

「ああ、あいつは大丈夫だ。大抵の事は解決しちまうからな。（それに俺と違って全てを救える強さがあるしな）」

当麻のことを誇らしげに語る晶に少し嫉妬した一夏。

当麻の事は躊躇なく親友だという晶は自分の事はクラスメイトとしか見ていない。よく話すのは男は二人しかいないから必然的に一夏が話しかけるからだ。それに、一夏は小学校のころから晶に憧れていた。

「同じ年でありながら（実際は違ったが）、全科目満点のうえ、運動も出来たし友達も多かった（本人はノイローゼになりかけたが）、さらに武器を持った強盗に躊躇なく向っていった強さに憧れた（本人は自宅のトイレを使いたかったから）。

「信用しているんじゃない」

ゼクトが笑みを浮かべながら言った。

「まあな、あいつといると面白い事がおきるし。何より決めたら真っ直ぐに進むからな。くわえて学園の殆どの女子に好意を寄せられているぞ。共学校にも関わるずにな」

あとケラケラと笑う。

晶の最後の説明には信じられない一同だったが、それが事実だとするのは少し立ってからの話。

「もう遅いし、俺は寝たいんだが？」

晶がそう言うと、千冬はそうだなと言って各自帰らせた。ちなみにライダーとゼクトは町を見て回るといって深夜の町に行った。

晶は自室のシャワーを浴びてベッドに倒れた。

「あー、にしてもあの爺は計算外だった」

「大丈夫？」

晶の背中をさすろうとしたら、晶はシャルを引っ張って抱きしめる。

「フ、フラン！？／＼／」

「悪い、少しだけこうしていいか？ 凄く落ち着くし」

「うん／＼／」

昴は抱きしめる力を少し強める。

「ぼ、僕臭くないかな？」

「全然、それどころか甘い匂いで凄く落ち着く」

「そ、それだったら好きなだけこうしていいよ／＼／」

「ありがとう」

「いいよ、僕も好きな人に抱きしめられるのは嬉しいし／＼／」

「そっか」

シャルは嬉しそうな顔をした。

「でも・・・」

「でも？」



「いいのかな、なんか抜け駆けしたような感じで……」

「ん〜、ルームメイトの特権という事で開き直れば？」

晶がそんな事を言った時に部屋のドアが開いた。ドアから出てきたのは部屋に戻ったはずのラウラだった。今朝、晶に借りた服を着てだが。

「む、やっぱりずるいぞシャルロット」

ラウラはムスツツとなって講義した。

「第一声がそれ？」

「……あはは。ご、ごめんねラウラ」

シャルは気まずい空気ながら苦笑してラウラに誤ったが

「悪い、俺から言ったからシャルは悪くないぞ？　ってそれよりシャルが女の子だって知ってるのか？」

「ああ、今朝少しな……、私も混ざっていいか？」

「いいぞ」

晶に告白して以来、すっかり丸くなったラウラのお願いをあっさり  
と了承する晶。

ラウラは甘える様に顔をこすりつけ始める。シャルも晶の腕に胸を  
押し付ける様に抱きしめる。

「明日は無理するなよっ」

ラウラは晶に甘えながら言いつと。

「信用無いな」

「あるわけなよ」「あるわけないだろ」

二人は同時に晶の言う。

理由はアックア戦の戦闘、二対一とはい自分の腕を切断した晶には釘を念入りに刺さないといけない。もつとも、それが効くとは限らないが。

晶は二人に挟まれて一夜を過ごした。

翌日、晶はイスカンダルを呼び出し、自分の代わりに授業を受けてくれと頼んだが、シャルとラウラはさすがに無理があるとツッコミを入れた。

「幻覚をかけるから大丈夫だ」

イスカンダルに護符を渡し、シャル達に別の護符を渡した。

「これは？」

「ライダーに渡した護符は俺だと認識させる為の術式が施されている、シャル達に渡し護符はそれを無効化するためだ。それを持っていればライダーだと認識できるが、持っていないと俺だと認識するから」

「どこか行くのか？」

ラウラは態々ライダーを代わりに授業を受けさせる理由が気になっ為質問した。

「九州のほうに新しい地酒が売られるから、それを買いに」

「そ、そうなんだ」

「教官が知ったら怒るぞ？」

「大丈夫、手は打ってあるから」

事前に千冬の方も購入と言った為、千冬は何も言わなかった。

晶はそう言って学園を出た。

シャルは食堂に行く前に篤達に護符を渡し説明をしたが、一夏は遅れてやって来た為説明を受けずお守りみたいな物だとラウラから受け取った。

結果は食堂に入るなり、イスカンドルが堂々と朝食を採っている場面を目撃して

「何で誰も疑問に思わないんだ？」

「おはよう神代君」

「うむ、余に挨拶か、大儀である」

「あははは、なにそれ？」

挨拶した女子は笑いながら自分の朝食を取りにいった。

「待てええええええええええ！！　なんだそのやり取りは！？」

「うるさい」

エヴァはそう言って自分の朝食を頼みに行った。それに続き箒達も続く。

「待てよ！！　何でイスカンドルさんが晶の制服着てるんだよ？  
何でだれも別人って気付かないんだよ？」

「いちいちツッコミの多い奴だな・・・どっからどう見てもフラインジじゃないか？」

エヴァは説明するのが面倒なのでごまかす事にた。

「どっからどう見ても別人だろオオオオオ!!」

「一夏さん、人というのは一晩で変わる者ですよ。恋人と一晩過ごして起きたらすっかり成長して別人のように」 「明らかに別人だよね? まごうことなき別人だよね茶々丸さん?」

「説明しなくていいのかな?」

シャルは心配そうに一夏を見て言うが

「いいんじゃないか、あいつのツッコミのレベルも上がるだろうし」

篤も説明するのが面倒なので放置する。

他のメンバーも同じ意見らしく特に何も言わない。一夏が騒いでる間に朝食も終え登校する。

「(おかしい、何で誰も突っ込まないんだ? まさか食堂のみんなが結託してドッキリ作戦でも立てたのか? 先生達が何か言うか・

・・）  
「

「（そう思っていた時期もありました）」

「では、出席をとります。」

山田先生は何も言わず出席をとる、そして晶の番がやってきたが

「神代君」

「余は此処におる」



「機嫌でもいいのかな？」

と言って次の子の名前を呼んだ。

「（突っ込まない、突っ込まないぞ）」

そして、授業。

数学

「この数学というのはチンプンカンプンじゃわ、しかしこれくらい出来んというかな」

「（突っ込まない、突っ込まない、突っ込まない、突っ込まない、突っ込まない）」

国語

「東洋の字は難しいのう、アルファベットの方が簡単なんだじゃが・  
・・」

「（突つ込まない、突つ込まない、突つ込まない、突つ込まない、  
突つ込まない、突つ込まない、突つ込まない、突つ込まない、突つ  
込まない、突つ込まない、突つ込まない）」

## 歴史

「ほっほう、東洋の將軍も中々いい判断をしたもんじゃ」

「（突つ込まない、突つ込まない、突つ込まない、突つ込まない、  
突つ込まない、突つ込まない、突つ込まない、突つ込まない、突つ  
込まない、突つ込まない、突つ込まない、突つ込まない、突つ込ま  
ない、突つ込まない、突つ込まない、突つ込まない、突つ込まない、  
突つ込まない、突つ込まない、突つ込まない、突つ込まない、突つ込  
まない、突つ込まない、突つ込まない、突つ込まない、突つ込ま  
ない、突つ込まない、突つ込まない）」

世界史

「はっはっはー、あの男もこんな最後じゃったか、惜しい男をなくしたもんじゃ」

「がーあ！！　いい加減にし　ぐほっ！？」

「お、織斑先生？」

千冬が一夏に強烈なボディーパーカをかまして気絶させた。

「誰か、その一夏<sup>バカ</sup>を保健室に連れてけ」

「は、はい！！」

保険委員の女子が急いで一夏を保健室に連れてった。

「授業を再開するぞ」

「」「」「はい」

昼

「まったく、アンタも馬鹿ね、晶の魔術って気付かなかったの？」

鈴音は一夏に事の説明をした。

「……………、だって本人いないし、認識妨害の魔術があるなんて普通知らないだろ？」

「くっくっく、中々おもしろい日だったようだな、貴様等のクラスは？」

エヴァは愉快そうに篤達に言うと篤達は

「『鬱陶しいかった』」

ツッコミを入れないように我慢していた一夏の行動は何かと鬱陶しいかった様だ。

そのころ千冬は屋上で食事をしていたら

「ただいま」千冬ちゃん

酒瓶を両手に満足な表情で突然千冬の前に転移した。

「おかえり」

千冬は動じず。

「あれ、普通は」どっから現れるんだ」「ってツッコミを入れると  
「ころじゃね？」

「お前に関して常識は捨てたから、私の口から出てきても驚かん」

「いや、さすがにそんな事は出来ないから……」

千冬の発言にさすがの晶も引いた。

「で、目当てのものは手に入ったのか？」

「まあね、千冬ちゃんの分を入れると6本」

「随分と少ないな、お前の事だからてつきり買い占めると思ったが？」

「新しい味は皆に知ってもらわないとね。それに結構おいしいし、この子の味は知ってもらいたいと思ってね」

開封済みの酒瓶を千冬に見せて、飲む？のジェスチャーを送るが。

「いや、今は勤務時間だ」

「そう、立ったら」

チュッ

晶は千冬に口づけをして

「どう、お味のほうは？」

「わ……るくない……な／＼／」

「千冬、かわい　ッ！」

千冬はアイアンクローを決めるが

「……………どういう事だ？」

「……ごめん流石にからかいすぎた……」

「ちがう、何時もなら避けてるはずだろ？　お前昨日の戦闘でどうにかやられたのか？」



何時もなら簡単に避ける筈の晶に千冬は問いた。

「いや、流石に今回は俺に非があるから甘んじて受けただけ」

「本当だろうか？」

アイアンクローを決めているが  
全く力が入っていない為  
真剣に聞いているのがわかった晶は

「本当だ、それにしても信用ないね」

晶から手を離して

「当たり前だ、全く・・・」

千冬を見て晶は「参ったな」と呟いてた。

その後、千冬と分かれた晶は

「ぶっははははは、あはは、ひいはははは、ライダーのボケと一夏の突っ込みを我慢する表情は最ッ高!!」

ライダーの様子と午前の授業の光景を屋上で見て爆笑していた。

夜、晶とシャルの部屋では

「よつやく、暴れられるか」

「ふむ、誰を相手にするかのう？」

「暴レルゼ」

「余はマスターと勝負したのう」

エヴァはウズウズして、ゼクトは誰と戦おうか悩み  
イスカンダルは晶との取引で本人と戦いたがっていた。

それを見ていた一夏達は引いていたが

「災厄が三つ、いえ下手したら倍近く……この世の終わりですよ  
うか？」

茶々丸の一言に一夏達はさらに引いた。

「ポケロボさり気なく自分の主を災厄認定するな」

「自覚が無いんですか？」

「無エミタイダナ」

「巻いてやるぞ？ チャチャゼロと茶々丸は此処にいる」

「何デダヨ？」

これから戦闘を行う空気でギャグをやる茶々丸に尊敬の眼差しを送る一夏達。

「そろそろ行くぞ？」

「晶」

晶がエヴァに言うと、鈴音は晶を呼び止めて

「ん」

チュッ

「無茶しないですよ？」

鈴音は晶にキスして無茶しないよう釘を刺した。

「・・・はあ、わかった」

晶がため息をついて答えたら

「ちょっと待て、ずるいぞー!」

「そうですね、晶さんわたくしも」

鈴音の行動に乗ろうと箒達も行動を起こそうとするが時間が来てしまい、晶達は転移した。

「いちゃったわね」

鈴音はそう言うので。

「鈴さん、卑怯ですよ」

「そつだぞ」

「ラウラなんか、全裸で晶のベットに潜り込んだじゃない?」

「なっ!?!」

その一言で晶の部屋では一悶着が起きた。

大聖杯の前では全てのマスターとサーヴァントが同時に転移させられた。

もつとも晶達とイリヤと当麻は彼等が来るまで先に来ていた。

「さて、転移されたのは兎も角（なんで此処にいるのかしら・・・  
綺礼）」

遠坂は本来いないはずの人間がいて、  
その上サーヴァントを二対引き連れてる事に驚いた

「凜、顔が怖いぞ？」

「うるさいわよ！ それより、アーチャー」

「なんだ？」

「戦闘が始まったら好きしていいわよ」

「待て、どついう事だ？」

自身のマスターの発言に驚いたアーチャー。

「私はあのエセ神父にお話しお話しがあるの。だから好きにして頂戴」

「今、お話の中に物騒な裏の声を聞いたが……まあい  
それなら私も好きにやらせてもらおう」



「どういふ事だ、突然景色が変わったと思つたら、此処は大聖杯か？」

「我をこんなところに引つ張り出した雑種はどこのごいつだ？ 制裁しなければならんな」

「(マジで面白い坊主だな、こりゃあやりがいがあるぜ)」

「くっ、やはり、止められなかった・・・」

「キャスター、此処はどこだ？」

「(面白い事になっているな。それにしても女狐のあの驚きようは

愉快なものだな

くわえ、全てのサーヴァントがそろっている。ふふふ」

「本当に転移してきたわね。さすがトウマのお友達。規格外だわ」

「あのー、イリヤさん？ オレも規格外に含まれてるんですか？」

「ランサーに遠坂か、そのほかのサーヴァントも・・・桜!？」

「シロウ、なぜサクラもいるのですか？」

「いや、オレも知らない、慎二も行方不明になっているし何かなんだか・・・」

「（先輩・・・、それに姉さん・・・）」

「・・・・・・・・」

「くっくっく、楽しい夜になりそうだな」

「全くじゃ、久々に暴れるかのう?」

「あの金ぴか余を睨んでいるんじゃないが……」

「あのデカブツ、ヤッぱ生きていたかア。にしてもオ  
これだけの人数を移動させられることを研究者の屑共が知ッたらど  
う出るんだらうなア」

「さーて、集まって貰ったのは他でもない、なんてくそくだら  
ない説明はしない  
簡潔にいうぞ、勝った奴が聖杯を好きに出来る、サーヴァントには  
利害一致しなければ令呪はきかない。  
以上だ」

「ちょっと、説明はそれだ

「エー？」

「おいおい晶……何するんだ？」

晶の簡潔な説明の後に洞窟の屋上に大量の魔法陣が展開された。

「言い忘れてたけど、最低限この攻撃は避けるよ」

晶の一言で、魔法陣から雨のように攻撃魔術が降り注いだ。

「……………って！！ 無差別攻撃！？」「……………」

当麻、遠坂、士郎それに映像で見ていた一夏が叫んだ。

当麻は右手で魔術を破壊する。

他のサーヴァントやマスターはうまく避ける。

セイバーは土郎の盾になるように自分の後ろに下がらせ、自身の対魔力で魔術を無効化した。

「さて、貴様は此処で消えてもらおうか衛宮士郎」

アーチャーは酒ながら土郎達の前に移動していた。

「アーチャー!？」

「シロウは下がっててください」

セイバーはアーチャーの前に立とうとするが

「おっと、貴様は私の相手をしてもらおうか？」

「何!？」

エヴァはセイバーをこの場から離すように、セイバーを吹き飛ばした。

「アナタは？」

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル。真祖の吸血鬼だ  
貴様のは私の相手をしてもらうぞ」

ハイ・デイルライトウォーカー  
「真祖吸血鬼!!!」



「セイバー!!」

士郎はセイバーが吹き飛ばされた事でセイバーの名前を叫ぶが

「自分の心配をしたらどうだ？ 衛宮士郎!!」

アーチャーは双剣を握り士郎に切りかかるつもりだったが

「先輩はやらせません」

ライダーがアーチャーの攻撃を止めた。ライダーの後ろには士郎によく知っている後輩も立っていた。

「桜!!」

「俺の相手はテメエかレトロ野郎」

一方通行は晶の魔術を反射しようとしたが、反射した直ぐに魔術が消えていた。

その事に疑問を感じていると、紫色の羽織をした男が一方通行の前にやってきた。

「女狐の首を落とすのも一驚かと思っただが、お主から只ならぬ何かを感じた故、

私の相手をしてもらおうか少年？」

一方通行の前で五尺余りの刀を構え。一方通行はアサシンの異様な  
気配を察し、  
笑みを浮かべ。

「面白え、いいぜエ来なアレト口野郎。  
テメエのその刀をへし折ッてやるよ」

「マスターはすでに他の相手に取られたか・・・。  
まあよい、余の相手をしてくれんかのう？  
バーサーカー？」

イスカンドルは晶を探していたが、先に金ぴかの鎧を見に纏ったサ  
ーヴァントに採られた為、  
一番近いバーサーカーを標的にした。

「晶のサーヴァント？」

「トウマは下がって。此処はバーサーカーが相手をするから」

「わかった、俺はあの大聖杯を壊してくる」

当麻はイリヤにそういったら、イリヤは驚いた表情をした。

「勝った奴がと晶は言ったが、勝負がつくまで聖杯には何も出来ないと行ってないしな、あいつは」

当麻は苦笑して言う。

「そうね、じゃあ、聖杯はトウマに任せるから。死なないでよ?」

「わかってる」

「アサシンはどこに？」

キャスターは眼鏡をかけた男を守るように魔障壁を展開して魔術を防いだが、  
自身が呼んだアサシンがいつの間にか消えていた事に驚愕している  
と、

「昨晚の決着をつけようかのう？ キャスター」

ゼクトはキャスターの前まで移動して戦闘態勢をとった。

「くっ、宗一郎様は下がっててください。此処は私が」

「私はあの少年の相手をする」

宗一郎は大聖杯に向っていく当麻をみてキャスターに言った。

「些か理解に苦しむ状況だが。さて、  
どう動くか……」

神父はこれからの行動をどう出るか考えてると

「オレの相手をしてもらおうか言峰？」

ランサーは紅い槍を神父に向ける。

「ランサー……」

「悪いけど、私も混ぜてもらおうかしら？」

ランサーの後ろから、遠坂が笑顔で近づく。

「なんだ、もしかして嬢ちゃんもこの神父に私怨があるのか？」

「まあね、聞きたい事が腐るほどあるけど、」

まあいいわ、死人に口になしって言うし、此処でマスターとして死んでもらおうかしら綺礼」

「ふふ、お前の場合はあの事を知っている私を口封じするの為だろ？」

「・・・そうね、それが目的よ。ランサー、このエセ神父を殺す為に此処は協力しない？」

「いいぜ、オレも個人の私怨があるからよ」

「「ふふふ」

「・・・（まずいな）」



(さーて、俺は誰と相手を……………)

「貴様か？ 我を此処に引っ張り出し、あまつさえ我に攻撃した雑種は？」

「そうだぜ、バカ殿様？」

晶は笑顔で言う。

「……………いい度胸だな」

「はっはっは、最古の王なんだろ？ だったらバカ殿で十分だ  
いいから来な、折角の祭りだ暴れないと損だしな」

23話 聖杯戦争最終日 二（前書き）

色々忙しすぎて投稿できなかつたです。

## 23話 聖杯戦争最終日 二

晶の部屋で一夏達は聖杯戦争をエヴァの魔法でみいた。

「いきなり無差別攻撃って、ひどいな……」

篤がそう口にしたが茶々丸が冷静に現状報告をした。

「確かにそうですが、全員見事に無傷ですね。しかも、いい具合に乱戦になりましたし」

無傷ですんでいる参加者達を啞然としてみていた一夏達をよそに素直な感想を言う茶々丸。

「オレモ参加シタイゼ。クッソー」

チャチャゼロは参加できない事に不満を口にするが、晶達はそんな事を知らず自分の戦いを始めていた。

映像は幾つかに分かれていたが、一夏達は晶が言っていた一方通行と上条当麻に興味があった為、二人が移っている映像を見ていた。

『面白え、いいぜエ来なアレト口野郎。

テメエのその刀をへし折ッてやるよ』

『では、いかせて貰おう』

一方通行が映っていた映像では戦いが始まった。

アサシンはいきなり動いたと思ったら

『 . . . . . 』

刀を一閃したと思ったが、最初にいた位置に戻っていたアサシンの動きに理解できない一夏達。だが、茶々丸と千冬は何が起きたのかその目で理解できていた。

「なんだ・・・あの速さは!？」

千冬は理解していた為、素直に感想を言ったが一夏達は理解できずいたが、茶々丸が説明し始めた。

「あのサムライの初撃は常人なら気付くことなく首を飛ばされる一撃でしたが、あの一方通行さんはそれを反射した為、サムライが与えるはずだった衝撃はサムライ自身に帰ったんです。けどサムライのほうは後方に飛んでその衝撃を逃がしたんです」

そんな、現実離れた出来事が起きた事を理解した一夏達は聖杯戦争の恐ろしさを再度確認した。

『(おいおい、なんだ今の速さは?)・・・』

一方通行はアサシンに動きに驚愕したが何が起きたのかはちゃんと理解していた。

『(反射がデフォじゃなかったら首が飛んでていたな)』

『なるほど、攻撃を跳ね返すか・・・、しかも今のは自動のようだ』

アサシンは初撃で何かを掴んだのか笑みを浮かべ、再度刀を構えた。

『（どうするつもりだ？）』

一方通行は刀を再度構えただけのアサシンを不審に思った。

同じ攻撃なら反射される事はアサシンも気付いているのに、同じ攻撃をしようとするアサシンに半分呆れていたがアサシンが動いた瞬間に。

一方通行は首筋から血が出ていたと同時に後方に数メートル飛んでいた。

『！！（おいおい、咄嗟に足元のベクトルを操作して後方に飛んでなかったら首が飛んでたぞ？）』

一方通行は口には出さず、今起きた事実を確認する為にアサシンの顔を見た。

『ふむ、やはり自動か。跳ね返される前に引き戻せばあるいはと思つたが、正解か』』

『！？（確かに、それなら反射を超える事は出来る・・・、だが、それを思いついても一度で成功させるかア？・・・、いや、これがサーヴァント）』

自分に起きた出来事を理解して受け止めた一方通行は笑みを浮かべる。

『クツクツク、いいねえ。最ツ高だぜえ』

『なら、今度は首を確実に飛ばそう』

『来なア、だが今度は簡単にとらせねエぞ』

『ほう。跳ね返す向きを変えられるわけか？』



アサシンは一方通行の態度で予想した事を口にした。

『ああ、さっきまでは自動で逆向きにしていたが、今度は別の向きだ。命がけの博打といこうかア？レトロ野郎』

一方通行は風のベクトルを右手で操作して、極小の台風を右の掌に維持させた。

『それを喰らえば流石に私も死ぬか。・・・しかし、面白そうな賭けだ』

アサシンも不気味に微笑んだ。

『俺の反射を超えて首を斬ればテメエ勝ち、反射を超えなければ昨日思いついた台風をプレゼントされテメエの負けだア。ああ、ちなみに初撃の時のように後ろに逃げる隙をはあたえねエゼ？』

『ふふ、安心しろ少年。そんな無粋は真似はしない。私も博打は好きでな』

『へエ、じゃあ早速始めますかア!!』

アサシンが一方通行に向って動いた刹那の瞬間、アサシンは一方通行の攻撃で吹き飛ばされていた。

『俺の勝ちみてエだな、レトロ野郎』

一方通行は満足げな笑みで口にした。

『俺に傷を与えたのはテメエが初めてだア。誇り思っただなア』

一方そのころ、エヴァはセイバーに魔法を連発していた。

『無駄です。アナタもわかっているでしょう？ 魔術師では私に勝てません』

エヴァが放つ魔法はセイバーには効かなかったが、エヴァは新しいおもちゃを見つけたような子供の笑みを浮かべ。

『ああ、最初からわかっていた。ただな、自分の目で確かめたかっただけだ。』

魔法だけでは私に勝ち目は無いな。此処一帯を吹き飛ばす威力を使ってもきくかどうかも怪しいがこれならどうだ？』

エヴァの雰囲気が変わり、エヴァは詠唱を始めた。

『 来れ（アギター・） テネフエラ・アビュシイ エンシス・インケンデンス 深淵の闇 燃え盛る大剣！！』

エト インケンナギサムシラエ 闇と影と憎悪破壊

復讐（イニミーキティアエ・デーストルクティオーニス）

ウルティオーニス の大焔！！』

我を焼け インケンダント・エト・ミー・エト・エウム シント・ソールム・インケンデンテース 彼を焼けそはただ焼き尽くす者

インケンディナムナエ 奈落の業火！！！！

スタケネット 術式固定！！！！

コンプレクシオー 掌握！！

スプレメントウムフロ 魔力充？

『 アルマティオーネム 術式兵装』！！！！』

エヴァが詠唱を終えた瞬間、エヴァは闇を凝縮し自分の中に取り込んだ。

『さーて、騎士王。今度は先程のようにかんぞ？』

『闇を自分の中に取り込んだ！　なんて無茶を』

セイバーは目の前の出来事に驚愕するが、意識を集中させ不可視の剣を構え。

『行きます！！　爆ぜよ、風王結界！』

剣を振り下ろした瞬間、風がエヴァを襲ったが。

『エクスキューションソード（エンシス・エクセクエンス）』

エヴァは氷の剣を両手に出現させ、襲ってきた風の暴風を氷の剣で消し飛ばした。

『この剣は物質を固体・液体から気体へと無理やり相転移させ攻撃できる剣だ。其の程度の風では防げんぞ？』

『なるほど、私もアナタを甘く見ていたようだ。今から全力を振り絞りアナタを倒す事にします』

見えなかった剣は先程の攻撃で姿を現した。セイバーはその剣を構えエヴァに向った。

エヴァをセイバーに向う。

二人の剣が激突した瞬間、その衝撃で大空洞に振動が走った。

「これが、エヴァの本気か・・・」

箒達はエヴァの戦いに驚愕していた。最初は見た目は自分達より少し幼いさがある少女に少なからず嫉妬していた。

自分達の知らない晶を知っている事と晶を変えた事に。

そして、ISでは勝てない現実を目の辺りにした。

エヴァとセイバーが本気でぶつかる少し前、上条当麻は大聖杯に向おうとしたが、その途中で眼鏡をかけた男に阻まれた。

『悪いが、貴様をそれ以上進ませるわけには行かない』

『アンタは？』

『一応、キャスターのマスターだ』

『キャスターの！？』

『お前の能力は詳しく知らんが、その能力は聖杯を壊しかけない。その為、ここで死んでもらう』

士郎達が通う学園の社会科教師の葛木宗一郎が当麻に拳を放つが、当麻は避け反撃をした。

『くっ！？』

『悪いが、これでも晶の無茶に付き合ったりしてるんでな、ただの学生だと思ったらいたため見るぞおっさん！！』

『なるほど、確かにこれは私の落ち度だ。次は殺す気で行く』

二人が拳を握り激突しようとした瞬間、大空洞に振動が走った。

二人はそのことを意識して一瞬動きを止めたが、上条当麻は葛城宗一郎より早く意識を葛城宗一郎に戻し、拳を宗一郎の顎に放った。

『あつぶね、今は運がよかったな。この人俺より強そうだったし何とか余裕の演技をしていたけど、さっきの振動が無かったら俺がやられてな』

当麻は運よく勝てた事で安堵していたが、また振動が走った為、あたりを見回したら、エヴァとセイバーの戦いを目撃し目が点になった。

『なんですかあれ、あの別次元のバトルは？ あんなバトルに巻き込まれたら死ぬ・・・、は、早く聖杯を破壊して終わりにするか』

当麻はエヴァ達の戦いを見て一刻も早く聖杯を破壊することに行動を再開した。



そのころ、この聖杯戦争をめちやくちやにした人物はお宝を大量に入れて入れたことで上機嫌だった。

『オラオラ、どうしたバカ殿様？　これで終わりかあ？』

古代最古王、ギルガメッシュは王の財宝でゲート・オブ・バビロン晶に宝具を次々と投擲していたが、どれも全て晶に当たる瞬間に消える。

その理由は、晶がもつ倉庫の出入り口を自分の前に展開した所為で、投擲した宝具は倉庫に入っていく。

600

『貴様あ、よくも我の財宝を！！』

『ああん？　自分で俺に向かって捨てたんだろ？　それを拾ったよ  
うなもんだよ。　それもわからないのかブアーカー』

周りで、振動が走っても気にするそぶりをせず、自分達の戦いに集中している二人。

『さーて、これ以上馬鹿に付き合うのは時間がもつたいないから一気に行くぜ。アデアット』

晶はカードを取り出し、アーティファクトを出した。

『オラア！！』

二丁の銃から炎の弾と透明の弾がギルガメッシュに当たった瞬間爆発した。

『どうよ？ 炎と酸素の弾を同時に喰らう気分はネタに走る気分になつたかバカ殿様？』

威力は大した事無かったが、ギルガメッシュは憤怒していた。

『万死に値する雑種！！』

ゲート・オブ・バビロン  
王の財宝から剣を取り出そうとした瞬間に晶は銃を撃つ。

先程と同じかと思ったギルガメツシュだったが、途端に悪寒が走り剣を取り出す行動を停止して避けた。

『いい勘してるじゃないか、今死ぬところだったぜ。自覚してるか？』

『……………』

ギルガメツシュがいた地面は融けていた。

『この銃は俺が弾だと認識した既存の物質なら、魔力を既存の物質に変換させ撃てるんだよ。今のは硫酸を弾に変換させ撃つただけだ。いま存在するサーヴァントで唯一受肉してるてめえには弱点だろ？』

『雑種が、それほど死にたいようだな』

『いつもなら遊ぶんだが、今回だけは容赦できねえよ。悪いが次で終わらせてもらっぜ？』

『何!?!』

終わらせると自分に言ってきた晶に憤怒するギルガメッシュだが、  
気付いたら巨大な水の塊の中にいた。

『!?!』

『聞こえないかもしれないけど、一応説明しとくは。この銃は弾の  
大きさも魔力の量によって自由に換えられるんだわ。今のは大量の  
水に変えて固定させただけだ』

603

円形十数メートルの中にいるギルガメッシュに、銃を向ける晶。

『さらに、温度も自在だ。此处で問題

これだけの大量に在る水を一瞬で蒸発する炎を撃つたらどうなる  
』?』

『!?!』

晶の言葉が聞こえたギルガメッシュは恐怖を感じたが。

『答えあわせだ。これ喰らってドリフの人間に生まれかわってこいやあー!!』

その瞬間大空洞でとんでもない爆発と爆音が起き、大空洞の酸素を一瞬で奪っていく瞬間にゼクトは瞬時に防御結界で晶の周りに展開した。

604

そのゼクトは、晶の行動に気付く前にキャスターと戦っていた。

最初は魔法の連発して優位に立っていたが、ふと晶の方を視線を向けると背筋に悪寒が走った、何がやばいかは知らないが咄嗟に最強クワテイスターの防御を晶の周りに展開した。アイギス

とてつもない振動と爆音がやみ、結界の中で晶が無傷で。

『おお、ナイスゼクト』

『おぬしはわし等もろとも殺す気だったなのか!?!』

『んなわけねーって、お前も気付いただろ?』

『確かに、わしが使った防御結界がいかに、同じ結界が見えたが・・  
』

『このアーティファクトを出してる間は魔法や魔術は使えないが、  
遅延魔法のようにあらかじめ設置しておいた魔法は発動できるから  
な』

『だからといって、あの攻撃はまずいじやる?』

洞窟で水蒸気爆発なんか起きたら、洞窟に在る酸素は一気に燃え尽きる、そんな中で人間は生きていまい。それどころか爆風に巻き込まれ即死だ。

この映像を見ていた一夏達は戦慄していた。

晶が持つアーティファクトは一夏や鈴音がもつアーティファクトより桁違いに使いかたがいいだけじゃなく、場合によっては核弾頭のように地上を消せることも可能ということに。

「あいつはアックアの時にこの力を使っていれば無傷で勝っていただろうに」

千冬はそう口にし、ほかの皆もそれと同じ事を思った。

『全くだぜ。テメエはあいつかわるず滅茶苦茶だなア』

『おお、何だその傷、誰につけられた？』

『レト口野郎にだ、初めては痛かった？』・・・テムエはいちいち俺に喧嘩を売るなア？ そんなに死にてエか？』

臨戦態勢になった、一方通行に晶は。

『その傷は思った以上に痛いだろ？ 今のお前はデフォで反射できないぐらいに演算が落ちてる。だ・か・らドクターストップ！！』

『はア！？ なに 』

一方通行が何か言う前に晶は一方通行を学園都市の近くに転移させた。

『よいのかアレ？』

ゼクトは呆れ気味に晶に質問する。

『仕方ねえよ。ギリギリの緊張感に比べれば今いい気分じゃないし



く、それにあいつと戦う事になったら自分を抑える自信は全く無い  
！！」

偉そうに答えた晶にゼクトは苦笑する。

『まあ、確かにあやつが纏っている雰囲気は桁ちがいじゃからのう』

『あんったねえー、いきなりなんて攻撃をかましてるのよアンタ！  
？』

『遠ちゃん』

『ぶち殺すわよ？』

晶の呼び方に笑顔な遠坂。

『それよりも、なんつー攻撃するんだ坊主？』

ランザーは引き気味に言う。

『あれ、あんたら組んだの？』

『まあな、あのくそ神父には日ごろの恨みもあるし』

『同じくよ』

ランサーの槍に神父の血らしきものが付いていた。

『じゃあ、今度はお前たちが相手をしてくれるのか？』

晶の言葉に、遠坂は表情を硬くし、ランサーは笑みを浮べたがその時、大聖杯に異変が起きた。

晶達はすぐに大聖杯に視線を向ける。そして、所々で勝負しているエヴァとセイバー、イスカンダル、バーサーカー、イリヤ、そして衛宮達もすぐに戦闘を中断して、大聖杯に視線を向けた。

そのとき、晶とイリヤだけが、大聖杯に起きてる事を理解した。

黒い影達が大聖杯からでてこようともがいていた。

『何よアレは？』

遠坂がつぶや気に晶が答えた。

『簡単に説明するとありゃあ聖杯の中で誕生したアンリマユだ』

『はー！？』

『詳しく説明いる？』

『どれぐらいかかるの？』

『結構かかる。ちなみにあれ、一つでも出てきたら無限に分裂するから』

『ちよつと、それを早く言いなさい。こうなつたら聖杯戦争どころじゃないでしょ!?!』

『まあな、でも大聖杯を破壊しないといけないぜ? いいの?』

『あつたりまえでしょう!!--』

晶の質問に即答で答える遠坂。

『同感じゃな』

『まあ、俺も聖杯に興味ないし』

ゼクトとランサーも遠坂に同意した時、晶は大聖杯の近くで親友の

姿を見て事の事態を理解した。

『あくなるほど。これなら納得だ（当麻が大聖杯の中にあつたアンリマユを抑える術式を破壊したのか。それに幾つかの術式も破壊され聖杯が暴走してる）』

『原因がわかったの？』

『ああ、でもわかってても大聖杯を破壊しないといけないことに変わらん』

『あーもう、ぬか喜びさせるんじゃないわよ』

晶の答えに癩癢を起こす遠坂。その二人のやり取りをよそにイリヤは令呪をつかいバーサーカーに当麻を助けさせた。

『どつするつもりじゃ？』

ゼクトは冷静に晶に対処方法を聞く。

『あそこにいる、俺の親友に大聖杯を完全に破壊してもらうしかないな』

晶が指差したところに、バーサーカーに掴まれて大聖杯から遠ざかる当麻の姿があった。

『しかし、遠ざかっておるぞ?』

『アレは正しい。先に大聖杯を困っている術式を破壊してから、当麻に大聖杯そのものを破壊してもらおう。じゃないと当麻はただじゃすまないかも知れんし。(それにしても一方通行を返したのはまずかったな)』

『そうか、それより他の奴等と合流したほうがいいじゃろ?』

『そうだな』

内心で一方通行を返したことを後悔している晶をよそに遠坂もランサーも同意してエヴァの元に向った。

## 23話 聖杯戦争最終日 二（後書き）

一方通行は螺旋丸を習得し、ドクターストップで退場。

当麻は聖杯を暴走させFate/hollow ataraxia  
の最終決戦のようになりました。

ちなみに聖杯戦争が終わってもサーヴァント達はすこし出そうと思  
います（hollowネタのように）。



24話 聖杯戦争最終日 三

晶達がエヴァたちに向かう少し前のアーチャーは加減抜きで士郎達と戦っていた。

アーチャーは双剣を手にし真っ先に士郎が強化した木刀を簡単に破壊した。

「くっ!!」

士郎は木刀を壊され追い詰められるが

「ライダー!!」

桜の声にライダーが反応して、士郎を守るように鎖の付いた鉄杭をアーチャーに狙いを定めるが、アーチャーは双剣で弾く。

「邪魔だなお前達は」

「なぜ、アナタは真っ先に先輩を狙うんですか？」

アーチャーの悪態に不審に思った桜は質問をした。

アーチャーは聖杯のために戦っているように思えなかった桜。イレギュラーの介入で聖杯戦争はかつて無いバトルロワイヤルになった。聖杯戦争に勝ちあがりたいたいなら、マスターと離れるメリットが無いはずなのに、アーチャーは真つ先に士郎を狙った。

「なあに、その男を殺したいからだ。お前も邪魔をするなら容赦はしないぞ桜」

「え!？」

自分の名前を自然に口にした名前に違和感を覚えた桜。

しかし、アーチャーの一言で士郎は怒りをあらわにする。

「桜に手を出すな。お前が殺したいのは俺だろ」

「邪魔をするなら排除するのが自然だと思っが？」

「だからって、女の子である桜を殺すとするのかよ？」

「これ以上貴様と質疑応答するつもりは無い」

アーチャーはそう言って双剣をブーメランのように士郎に投げた。

「I am the bone of my sword」

そう一言呪文のように唱えたアーチャーの手には先程と同じ双剣を手にしていた。

「投影魔術？」

桜が驚いた隙にもう一度双剣を同じ様に投げる。

二度目の狙いは桜だった。

「ライダーは最初の剣を！！」

士郎は桜を庇うように桜に投げられた双剣の前に立った。

(武器が欲しい。あの剣と同じ様な)

ライダーは咄嗟に士郎の言うとおりに最初の剣を鉄杭を投擲して弾こうとする。

「先輩！！」

桜は自分を庇うように動いた士郎の名前を叫ぶ。

「トレース・オン」

シロウの手にはアーチャーと同じ剣が握られていた。

士郎は咄嗟に自分が手にしている双剣でアーチャーが投げた双剣を弾くが、弾く事事態に成功したが、士郎の双剣は壊れた。

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

咄嗟の投影魔術の対価か士郎の身体中が痛み出しただけじゃなく、息も切れ士郎は肩で息をした。

「せん……ぱい……」

ライダーは残りの剣を弾いたが、桜と同様に士郎がだした双剣に驚いている。

「アーチャーさん……貴方……まさか……」

桜はある可能性に気付いて質問をしようとしたが、大空洞が激しく揺れる。

士郎以外はその原因に咄嗟に視線を移した。

そこにはセイバーと少女が激突していた。大空洞の揺れは二人の武器と魔力がぶつかっている余波であった。

「セイバーを相手にあそこまで戦えるとは、全くあの男の知り合いは化け物か」

セイバーを押している少女、エヴァに視線を向け、苦笑しながらつぶやいたアーチャーだが。

「それよりも、質問をします貴方は                   「お前が知る必要は無い。此処で消えてもらう」

アーチャーが弓を投影して桜を射ようとしたが、爆音が大空洞に響き渡る。

「今度はなんだ!？」

原因に視線を向けると結界の中で煙が立ち籠る。

結界の中から出てきたのはこの聖杯戦争を狂わせた張本人が出てきた。

その後直ぐに、白髪の少年が晶に近づいたが直ぐに消えた、そのあと直ぐにアーチャーのマスターとランサーが晶と接触したが

それと同時に、大聖杯に以上が起きた。

「今度はなんだ!？」

アーチャーは変化する事態に呆れて声を出すと、その目に映っていたのは大聖杯から黒い何かが出てくるところだった。

エヴァは俺達が自分のところに向っている俺達に気付いて、視線を  
士郎達にむけた。

俺達も士郎達のところに向った。

士郎本人は何か無茶をやったのか息が切れていたような顔をしてい  
た。

アーチャーは事態の変化に呆れた表情うをしていた。

あとの二人はどうでもいいか。

「..」  
「..」

ランサーが言う。

「寝る?」  
「..」



「あんた、死にたい？」

俺がふざけた答えをだしたら、遠坂の笑顔が怖かった。

（すっげー、っーかこれ、霸王色の覇気だろ？ ロジャーや白髭が出してた覇気と同じだ……。なつかし〜〜）

「真面目な話、どうするつもりよ？」

「その答えを言う前に、アーチャー達は大聖杯を破壊するのに反対か？」

「この状況を収める方法がそれしかないのなら選択はないだろう？」

戦闘を邪魔され若干怒っている風だった。その後直ぐに当麻達も合流してきた。

「アレはなんじゃ？」

イスカンドルが合流して直ぐ意口にした。

「あれはアンリマユよ」

イスカンドルに答えたのはイリヤだった。

「詳しく説明する暇がないので、このままアレをほっとくと世界中の人間を殺すことになる」

「おいおい、なんでこんな事になったんだ？」

当麻は事態の深刻さに呆れながら質問した。俺は簡潔に

「運がなかったただけだ」

そういつたら。

「いやいや、上条さんが基本不幸だからと言って、世界を巻き込む不幸を発動したんですかぁ？」

何故か敬語に近い言い方で言う当麻。

当麻にわるいが、今回は本当に運がなかった。

もし、当麻が大聖杯のアンリマユを抑える陣を破壊したのがもう少し早かったら起きなかつたできごとだ。

なんせ、俺と一方通行がサーヴァントを倒した所為で、倒されたサーヴァントは聖杯に取り込まれた。その所為で聖杯はsる程度機能してしまった。

そんな状態で当麻がアンリマユを抑えていた魔法陣を破壊してしまつたんだから運がなとしか言いようがない。

もし、サーヴァントを取り込む前に壊していたら特に何も起きず、当麻はそのまま大聖杯そのものを壊していただろう。

そんな事はいえないから。

「とりあえず、癌細胞のように分裂し増殖してるアレを倒して、当麻に大聖杯を破壊してもらおう」

ごまかすようにこの事態を収める方法を簡潔に説明した。

「いやいや、アレものすごい勢いで増殖してますよ？ もうネズミ算式がしょぼいぐらいの勢いでっせー？」

当麻は分裂してる黒い影に指差して言う。

「たしかに勢いが凄いな。アレを一気に殲滅する魔術を使ったらこの大空洞が崩れるぞ？」

エヴァが黒い影を見ながら言うとランサーが。

「少しずつ削るのもめんどくさそうだしな」

「同感ね」

めんどくさそうに言うランサーに遠坂は同意する。

「この際この町ごと消す？」

「却下に決まってるだろ晶!!」

「わかってるよ。でもさっきいった方法が一番可能性が高い。俺達  
あの黒い影……、名前は無限の残骸と名づけるか……」

「名前なんかどうでもいいわよ!!」

「名前がカッコいいのが腹立つ」

突然名前を決めたら遠坂と当麻からツツコミが来た。

「まあ、あの黒い影はわし等に任せればいいじゃろ。問題はこの大  
空洞じゃが?」

ゼクトが一番の問題を口にした。無限の残骸はすでに、アンリミテッド・ペース・ボウル大空洞の三  
割を占める数まで増殖している。

「そこは、そこに盗み聞きをしているキャスターに頼む」

俺が親指を後ろに向けると、そこにはキャスターがいた。オマケに眼鏡のスーツを着た男を抱えてるが。

「『葛木先生!?!?!』」

どうやら、学校の教師のようだ。つか、世間せ狭ッ!!

「.....」

無言で当麻を睨むキャスターにイリヤが。

「バーサーカー!!」

と、サーヴァントに命令。バーサーカーはキャスターをいつでも倒せるような姿勢をとっている。

当麻も随分となつかれるな。いや、好かれてるか？

「ちょっと、こんな事態で暴れないで？」

遠坂がバトルになりかける二人の間に入る。

「私は何をすればいいのかしら？ この狸」

俺のことらしい。

「この大空洞を壊さないように防御結界でもかけてくれ。その人を死なせたくないだろ女狐？」

(( (人質！？) ))

俺達は表情は笑っているが。

(死なせたくなえなら言う事きけ。最悪お前と無理やり契約して令呪使うぞ？ 大聖杯はまだ殆ど機能してるし〜)

(この状況が終わったら、直ぐに首を飛ばしてあげるわ)

(最後のイタチツッペ?)

(・・・)

「おたくら、笑いながら睨み合うな。あの影が笑えないぐらい増殖してるぞ?」

誰が言ったのかはわからないが、無限アンリミテッドの残骸はさらに増殖していた。

「いつの間にな!?」

「わかったわ。宗一郎様が無事に生きられるなら協力しましょう」

「ほんじゃあ、俺とエヴァとゼクトで殲滅魔術で蹴散らすから、俺達の攻撃が取り逃がした奴はお前らに任せる。そのへっぽこは教師を守ってる」



「お、俺もやれる」

「シロウ。此処は彼の言う通りにしてください。私がシロウの分もやりますから」

「セイバー……」

こいつ等をむしして、俺達は上空に上がる。

S i d e o u t

「おいおい、俺達も手伝ったほうがいいじゃないか？」

大空洞の異常事態をみて一夏が叫ぶ。

「ソウダナ、行クゾ。サツサト行クゾ」

一夏は純粹に晶達を心配してるが、チャチャゼロは暴りたい故一夏に同意するが。

「向こうに行く手段がありません」

茶々丸がきっぱり言う。

チャチャゼロは自分も暴れたと本音をだしてベットの上で刃物を振り回していた。

「それに、私達が行っても足手まといだら？」

箒が口にするど。

「それでも、何か手伝えるだろ？ 茶々丸さん本当に方法がないのか？」

「一夏さんがフラン様と契約したカードを額に当てて、念話でフラン様に頼めば何とかかなりますが・・・」

歯切れが悪いように答える茶々丸。

「晶もそんな余裕がないって事か」

鈴音が茶々丸が言いたいことを言う。

「くっそー」

一夏は何も出来ない事に悪態をつくが。

634

映し出されていた映像の現場では点でもないことが起きようとしていた。

「『ト・シユンリック・ラクラ・ラックライラック 契約に従い我ダイアールココ

ネーモイ・ヘートー』に従え

クリユスタリネー・バシレイア氷の女王

来れ（エピゲネーテートー） とこしえの（タイオーニオン） や  
み（エレボス）！

えいえんのひょうが（ハイオーニエ・クリユスタレ）！！

エヴァが呪文を終えた瞬間に黒い影たちの足元が瞬時凍り。

「『<sup>バーサイス</sup>全ての<sup>ゾーサイス</sup>命ある者に<sup>トン</sup>等しき死イソソ・タナトン』を」

<sup>ホス</sup>其は <sup>アタラクシア</sup>安らぎ也

“おわるせかい”（コズミケー・カタストロフエー）<sup>ㇿ</sup>」

凍らされた黒い影たちが砕けた。

「『<sup>ト・シユンポライオン</sup>契約により<sup>ディアコネート</sup>我に従え』

<sup>モイ・バシレク・ウーラニオーノーン</sup>高殿の王

<sup>エヒゲネーテート</sup>来れ <sup>アイタルース</sup>巨神を滅ぼす

<sup>ケラウネ・ホス・テイデーナス・フテイレイソ</sup>燃ゆる立つ雷霆

<sup>ヘカトンタキス・カイ</sup>百重千重と <sup>キーリアキス</sup>重なりて <sup>アストラ・プサト</sup>走れよ稲妻!!!

<sup>キーリブル・アストラペー</sup>千の雷!!!<sup>ㇿ</sup>」

ゼクトが呪文を終えた瞬間、大量の雷が黒い影を襲う。

「『万象を為しえる根源たる力、太古に刻まれしその記憶、我が呼び声に答えて、今此処によりみがえれ  
エンシエントカラストロフィー!!』」

四つの魔法陣が展開される、そしてその上に大きな弾が現れて一つになり爆発が起こった。

三人の魔術、もとい魔法が発動した瞬間だった。

その結果は、大量にいた黒い影の殆どが消されていた。

『・・・・・・・・』

その映像を見ていた一夏達と現場にいた当麻達は同時にポカーンとしていた。

『ほとんど、倒してるじゃない!!』

遠坂が叫んだと同時に当麻は自分の役割を思い出し大聖杯の元に走り出した。

三人の大魔術の数がかなり減ったと思ったら、生き残った黒い影や大聖杯から新たに出てきた黒い影が増殖していく。

他のサーヴァントや遠坂はこれを撃墜してい。

晶達も先程までとは違う魔法で黒い影を倒し、当麻を援護していく。

当麻に襲い掛かる黒い影が幾つかあったが、当麻は右手で殴って片っ端から消していった。

援護の甲斐もあってか、当麻は難なく大聖杯の目の前まで近づき。

「無限に増え続けるなんて幻想は俺がぶち壊す」

当麻が右拳で大聖杯に触れた瞬間、黒い影や大聖杯が殺ころされていく。壊された衝撃で聖杯から溢れていたマナが飛散した。

それを見ていた一夏はただ。

「……………すげえ」

と、誰も聞こえない声でつぶやいた。

晶とは違う自分と変わらないただの男子学生に憧れに近い感情がわいた瞬間だった。

「おわったのか……」

士郎が現状を確かめるように辺りを確認してつぶやいた。

「セイバーは消えるんだな……」

悲しそうにつぶやいていたら、晶達が戻ってくる。

「暴れたりねえ」

「そうだな」

「いや、エヴァは俺より暴れただろ？」



「むう、そんな事はないだろ」

晶とエヴァがお互いの不満を口にして

「呆れたわ。あれだけ、暴れておいておいてまだ足りなの？」

遠坂が呆れた表情で言う。

「しかし、俺達が消えないのは何でだ坊主？」

ランサーが自分達が消えてない事に疑問を持ち質問する。

「さあな、聖杯から散らばった一部を浴びたからじゃねえ？でもほつといたら消えるだろうな」

当麻が大聖杯を壊した時、時間差で周りのマナや魔法陣がこわされる中、聖杯と繋がっていたサーヴァントに聖杯のマナあたりの一部が取り込まれたようだ。

「どれぐらいで？」

「さあな、少なくとも戦闘をしなければ数ヶ月はもつだろ。マスターと契約してる奴等はパスがある限り、マスターが死なない限り消えないと思うぞ」

「「「えっ！！」「」」

当麻の幻想殺しの効果で本来なら一緒に消えるサーヴァント達は幻想殺しの効果が届く前に聖杯と繋がりがさきに幻想殺しの効果で消されていたためだろうと晶は読んでいる。実際は解析すれば原因がわかるかもしれないがやらない晶。

だから

「俺が全部知ってるわけねえだろ。命あつてのものだねとおもって受け入れる。行きたくなかったら消してやるが？」

「まあ、そうだな、聖杯に取り込まれた二体のサーヴァントも生きてるみたいだし」

ランサーが笑みを浮かべながら大聖杯があった場所に視線を向けると取り込まれていたはずの黄金のサーヴァントとアサシンのサーヴァントが倒れていた。

「（相変わらず、全てを救うか当麻は……）」

「この感覚は戦闘をすれば聖杯があったときの数倍の量の魔力が失われるな」

アーチャーが自分の掌を見ながら口にする。

「さーて、寮に戻って寝るか」

「お気楽ね。聖杯が消えた事を魔術教会がしたらどうするのかしら？」

「すくなくとも連中は聖杯を黙認していたんだ、何か言ったら自分達に参加すればいいと言えはいいだろ？イギリスもローマもロシアも何もいえないぜ」

「それもそうね」

「それより、問題なのはイリヤだな」

晶はそう口にして当麻とイリヤの元に近づいた。

「お疲れ〜当麻」

「はあ、マジで疲れた」

ため息をついて答える当麻に晶は。

「イリヤはいいのか？アイツベルンはお前を許さないだろうな」

その言葉にイリヤは「そうね」とあっさりと答える中。

「ど、どついつことだ？」

「アイツベルンの悲願は聖杯を完成させ手に入れる事。それなのに破壊する手助けをしたんだもの」

「だから、なんでイリヤが攻められるんだよ納得いかねえぞ？」

「私にはアイツベルンしかないもの、それも覚悟の上よ。トウマ短い間だったけど楽しかったよ」

笑顔を当麻に向けるイリヤをみて。

「だったら俺のところに来ないかイリヤ？」

当麻の発言に驚くイリヤに当麻はさらに。

「学園都市の中なら魔術師も気軽に入ってこれないだろ？ だったら

俺のところに来ればいいって」

「確かにそうだな、アイツベルンは長い歴史があっても教会に属してるわけじゃないから学園都市と争わないだろうし」

「だろ、だったら俺と暮らさないか？」

「いいの？」

「当たり前だろ」

「（すげえ、言い換えれば同棲しないかといってるようなもんだぞ。本人は自覚してないだろうが）」

晶はそう考えてると。

「IDの件は晶がレポートで入れてもらえるし」

「（ID件は忘れてるわけじゃないか）その必要はないぞ」

「は？」

「この事件で学園都市に貸しが出来たからな、俺から直ぐに連絡しておくから気にせず堂々と玄関に入ればいい」

「なんで、貴方は楽しそうなのでしょうが晶さん？」

不気味な笑みを浮かべてる晶に敬語で質問する当麻に顔を近づけて。

「んで、結婚式は何時だ？」

小声で当麻に質問する。

「はあ！？ 馬鹿か？ 何でお前はそんな風に勘違いするんだよ？ 恋愛話に敏感な女の子かお前は？」

「だってよく気になるじゃん ほかの連中がなんて言うか？」

「お前と違って年齢〓彼女なしの暦のこの不幸な上条さんに妹が出来たかと思うだけだろ？」

「はあく、今はそれでいいか」

しかし、晶は夏休みに知る事になる。同棲相手が一人増えただけじゃなく、一万人近くの女性に好意を持たれる当麻のカミジョー属性の恐ろしさを。

この後、晶はロクに説明せずIS学園に転移魔法で戻った。当麻や他のマスター達はそれぞれの居場所に戻っていく自分達の足で……。

士郎は桜に魔術師だった事を翌日に説明してもらいセイバーとライダーをくわえた以前の生活に戻り食費に問題が起こった。

遠坂は教会辺りになにか説明を求められたらそんな時に考える姿勢で



士郎達とあまり関わらないようにして普通に学園生活に戻っていった。

何故か運悪く遠坂の令呪だけが残っただけじゃなく、効果まで残っていたアーチャーは遠坂の執事をする事になった。

ランサーとアーチャーこと英雄王はなぜか学園都市の人間が関わっている噂を聞いてやってきたとあるシスターのサーヴァントにされてしまい苦勞することに。

キャスターは宗一郎と柳洞寺で居候して新婚生活へ。

そして、アサシンは以前と同じ様に門番を言い渡された。

24話 聖杯戦争最終日 三（後書き）

アーチャーの件は・・・まあ桜は襲ってこないなら関わらない感じ  
でとことでスルーツ。

今回はIS学園偏にもどって、トーナメントと臨機学校。

それが終わったらとある魔術の本編です。

## 25話 第の魔改造計画？（前書き）

今日は色々とやばいネタです。

苦情は聞ききません。無視します。それぐらいの気持ちと勢いでや  
つてしまいました。後悔はありません。

後半はメタ発言があります。ISキャラが全く目立ってません。そ  
れはいつもだが今回はさらに目立ってません。殆ど台詞もありません。  
ん。

という事で、見ないほうがいいと思います。

## 25話 簿の魔改造計画？

前書きの書いたとおり見ないほうが懸命です。

本当にいいんですか？

-----

当麻が大聖杯を破壊して、晶達は寮に戻った夜。

不完全燃焼の晶は寮を出たとあるビルの屋上に来ていた。

「いい眺めだ。この町に半径一キロのクレーターが出来たらどうなるかね」

「お前は何とんでもない事を言ってるんだフラン」

晶が振り返るとエヴァンジェリンが呆れた顔をしていた。

「エヴァも不完全燃焼で散歩でもしていたのか？」

「いや、お前が出て行くのを見たんでな、気になって付いてきただけだ。お前のほうこそどうしてこんな時間に？」

「俺はただ暴れたり無いから、気を紛らわす為の散歩だ」

「アレだけ大魔術を使ってまだ暴れたり無いか？」

呆れながら質問するエヴァに。

「お前はいいだろ。セイバーと結構長い時間戦ってたし。あゝあ、バーサーカーの戦闘は楽しかったな」

バーサーカーの戦闘を思い出しながら明後日の方角を見る晶。

「少しはこっちの心配も考える馬鹿者」

「んゝ、気持ちはわかるけど、戦闘から長く離れていた所為で反動がでかいんだよ」

「全く、バーサーカー戦のときヒヤヒヤしたというのに」

その言葉を言ったエヴァを真っ直ぐな視線で見る晶。

「どうした？」

「いや、おしとやかなエヴァは慣れないな」と思ってな」

「むう、これでもお前に嫌われないように抑えてるんだぞ？」

以前、振られたショックがでかいエヴァは鈴音やラウラのよつたア  
ピールが出来ない。

「うーん、気にせず自分の気持ちに生きればいいんじゃないね？」

そう言つて、一瞬でエヴァの後ろに回つた晶はエヴァを後ろから抱  
きしめた。

「エヴァ……」

「おおおおお前、此処は外だぞ！！！！？」

真っ赤になって慌てるエヴァをエヴァを見て晶は。

（反応がかわいい、癖になりそうだ）

以前からのエヴァを知っている晶にとっては今のエヴァの反応は新  
鮮だった。

（茶々丸がいれば録画するよな）

そんな事を思っているとエヴァは少しずつだが冷静になって行った。



「その・・・初めてだからやさしくしてくれよ・・・嬉しいぞ・・・  
／／／」

「おう、クリティカルヒットですよ」

「お前は・・・こっちは恥ずかしのを我慢してるのに何でお前は冷静なんだ／／／」

「恥ずかしがってるエヴァがかわいいから？」

「本当に変わったなお前は／／／」

「自覚してる。この世界に来るまで性別に興味なかったからな、気があえばそれでよかったし。ところで」

「なんだ？」

「以前の姿に戻る？」

「変態か？」

「そういわれても仕方ないけど、エヴァはあの体型の所為で振られたと思つてたんだろ？」

「それはそうだが……」

晶は抱きしめる力を少し強くして

「アレは俺が臆病だツたから振つたんだよ。自分の新しい一面が生まれてくるのが怖くてな。自分に真つ直ぐに好意を持ってくれる相手にどう対処すればいいのかわからなかつたから、だから逃げた。その後は後悔したお、エヴァのあの顔を思い出すと」

「ばかもの……」

エヴァの体型が少しずつ小さくなり、以前の姿までになった。

「これでいいだろ？」

「懐かしい姿だ」

やさしくエヴァを抱きしめて言つ。

「これでも、成長できる事に感激しているんだが、今日だけは特別だぞ」

「ありがとう……んっっ……ちゅ」

そういつて、唇を重ねる。

「んっ、んっ、ふむっ……っ、ちゅっ、ちゅく……はぁ……  
はぁ、もっとお前が欲しいぞフラン」

「エヴァ……」

二人は屋外で体を重ねた。

その後、自室に戻った晶を待っていたのは以外にもセシリアだった。

「どこに行ってたんですか？」

「何でセシリアがいるんだ？」

「じゃんけんで勝ってこん「デュノアさん！！／／／」  
とい  
うことで僕は何もいえないよフラン」

「じゃんけんって・・・、ラウラが俺のベットに侵入した件のことか？」

告白してからのラウラは行動的だった。

「そ、それは・・・その／／／／」

「別に俺は贖罪するつもりは無いぞ。ただ素直に甘えてくる子には甘えさせるだけだ」

「それって、くる者拒まずってやつ？」

シャルが聞くと晶は即答で肯定した。

「ああ」

「すこしは、気にしたほうがいいよ。誰かさん達は奥手でヤキモチやくからね」

ニヤニヤしながらセシリアを眺めるシャル。

「ただだ誰のことを言ってるんですか!？」

「誰の事かな」

新しいおもちゃを見つけたみたいなお顔をしてるシャル。

「まあ、それより、明日の数学の小テスト大丈夫なのか？」

「へ？」

晶の一言で顔が真っ青になったセシリア。勉強は苦手ではないが、このところ常識外のことが起きてから勉強に手がつていない。それは一夏や筈も同じだが。

「シャルとラウラは転校したばかりだから今回は二人の点数は大目に見るが、セシリア達はそうは行かないだろう？」

鈴とエヴァは別のクラスだから関係がないが、セシリア達は別だった。小テストは点数までも発表される為、無様な点数は取れない。

「部屋に戻って復習してきます……」

がくりと肩を落とし部屋から出て行くセシリア。

「高得点とれたらプレゼントをやるよ」

その言葉で落ちていた肩は元に戻り。

「プ、プレゼントですか？」

「ああ、俺の手作り懐中時計（オルゴール付き）。今回はアックアやら聖杯戦争やらで勉強どころじゃなかったからな」

「わ、わたくし必ず満点を取って見せますわ」

そういって、自室に戻ったセシリアを見てシャレは苦笑した。

「それって、僕達ももらえるかな？」

「いいぞ」

「じゃあ、僕も頑張ろう」

「頑張れよ若者達よ」

「一夏みたいに突っ込まないよ僕は」

「それは残念だ」

翌日、セシリアは宣言どおり満点を取った。

箒も高得点を取って晶の手作り懐中時計を貰った。

その後、箒との約束で箒を鍛える為、ダイオラマ魔法球に案内した晶。

一夏達も興味があると言って付いてきたが、ダイオラマ魔法球の中に入ったら、案の上驚愕した。

シャル Side

フランが持っているダイオラマ魔法球に案内された僕達。僕は来た事あるからもう驚かないけど、皆は驚いたようだ。



「さーで、俺は教えるのが下手なので箒には実践で強くなってもら  
う」

「晶が箒と戦うのか？」

「夏がフランに聞くと。」

「いや、俺が今まで会った連中を人工精霊で再現するから、そいつ  
等と戦ってもらおう」

フランはそう言ってなにか呪文のような事を口にする、光が集ま  
り人の形を成していった。

そして出てきたのは。

「俺のイチゴ牛乳のんだの誰だ！！！！！」

ラウラと同じ髪の色をした人が怒って登場した？

「いきなりこれかよ銀時」

「ああ、てつめえフランか？　なんで俺を呼び出したんだよ」

「つーか、なんで僕は眼鏡なんですか？」

フランが銀時と呼んだ人の服にひかかっていた眼鏡から声が聞こえた。

「いや、お前に鍛えて欲しい子がいてな」

「なんで、俺がイチゴ牛乳飲む直前の記憶を呼び出すんだよ？」

不良の如くフランに突っかかる銀時さんに唾然となって見る僕達。

「なんとなく」

「なんとなくってお前なく、「っていうか、だれか僕の姿に突っ込んでくださいよー!」」

「「だって、新八だし」」

「「どういう事だ!! なんで新八だしってどういう事だ!」」

息を合わせたように眼鏡の人?にいう二人。

「8を横にすると眼鏡になるじゃん?」

フランがどうでもいいみたいな態度で説明する。

「だって、お前眼鏡が本体だろ? 95%眼鏡だろ?」

めんどくさそうに説明する銀時さん。

「じらーーーー！！ 人の存在を眼鏡にするなーーーー！！」

必死の叫びを小指で耳を掻きながら無視する二人。

「まあ、新八は無視して、なんで俺がお前の知り合いを鍛えないといけないんだよ？めんどくせえよ。他の奴に頼めよ。緑色の神様とか、霊が見えるばあさんとか、口と片目を隠してる先生とかよ、ああ、後影分身を使わせるといふ方法があるだろ」

「いや、銀さん折角の初登場なのに何言ってるんだよ？少しはやり気を出しましょうよ？」

「いやだ、めんどくさい」

眼鏡さんの必死の説得をめんどくさいの一言で断る。

「あの、あの方は晶さんの知り合いなのですか？」

あまりの態度にオルコットさんがフランに知り合いかどうか聞いた。

「ああ、血糖値が糖尿病寸前の域まで達している知り合いだ」

「ちょっと何その紹介？ 俺に恨みでもあるの？」

「ああ、俺の酒を勝手に飲んだだろ？」

「アレは俺じゃねえよ。本体だよ。俺だけ俺じゃねえよ」

わけのわからない言い訳を始めたけど。

「でも、事実だろ。血糖値が糖尿病寸前なのは？」

「あーあ、知りません。それなんて言葉？おいしいの？」

「いい加減に僕のこの姿を何とかしてくださいよ？」

「まあ、見た目は死んだ魚のような目をしたこいつだが、結構強いぞ」

箒さんにむけていうが、箒さんは疑っている表情をしている。

「いいの、今は死んだ魚のような目だけど、いざとなったら輝くんだよ。それより、早く帰らせてくれジャン　を読みたいんだよ俺は」

「いや、お前人口精霊だから、帰る場所が無いからジャン　なんて読めないから」

「ンだとコラー、どういう事だ!？」

「だから、筭を鍛えてもらう為に人工精霊でお前を再現したんだよ」

「他の奴に頼めよ」

「そうだな・・・」

フランはそう言って、呪文を唱え。

次に出てきたのは黒い長髪の男の人だった。

しかも、いまどき珍しいというかも骨董品扱いされても可笑しくないカセットテープのラジカセを持って踊っていた。

「やるなら今しかねえーZURA

やるなら今しかねえーZURA

攘夷がJOY JOYが攘夷　ぐっはー

「なんでツラー！？よりによってツラなんだよ！？　しかもうっざいラップを歌ってるよきのツラなんだよ！？」

踊っていた人を蹴り飛ばした銀時さん。しかも凄い威力だ。フランが強かったのが少し理解できた。

「ツラじゃない桂だ。あ？間違えたカツラップだよ」

「るっせー。ラップに包んで窒息死させるぞ？」

「よりによつて桂さんですか。フランさんは何がしたいんですか？」

「あの子に強くしてくれとお願ひされたからな、いい師匠がいないかと考えて銀時を読んだ」

「いや、駄目だろ。人材的考えて明らかに駄目だろ。以前にも僕達頼みましたが最後までぐだぐだでしたよ!!」

「あつ!!」

「なに、今思い出してるんですか!? もっとはやく思い出してくださいよ」

「なに、フラン殿の知り合いを鍛えて欲しいのか? なら俺に任せろ」

「あー、俺ちよつと便所行つてくるわ」

「僕をおいて下さいよ? 銀さんのトイレシーンなんて見たくありませんよ僕は」



「そつだな、お前を便器に流してやるから」

「ちょっと、それ止めてくださいよ」

「うっせーな、わーってるよ。おら、そのイケメンへたれ。こいつを頼むわ」

「夏に向けて眼鏡を投げると。」

「お、俺!?!」

「そつだよ、おれ便所行くからあとのむわー」

眼鏡を受けとった一夏は困惑してる。

「ど、どつとも織斑一夏です」

「ああ、こちらこそどつとも、志村新八です」

お互い自己紹介を始めた。

「それより、フラン殿。強くなりたいたったのはどの子だ?」

「ああ、あの子だよ」

「篠ノ之箒です。よ、よろしく願いします」

箒さんの表情は関わりたくない顔をしている。

「桂小太郎だ。では。まず最初にこのインストラクターの額に桂と書く。そして投げるから、桂とかかれたインストラクターを拾ってくるんだ」

いつの間にかインストラクターが現れた。フランは何もやってないよね?

「お」「おいしいいいい!!」どっから連れてきたそのインストラクタ

「は!？」

一夏が突っ込む前に突っ込みきる新八さん。

「ちなみにその辺のインストラクターを拾って桂と書いても字でわかるからズルは出来んぞ」

「いや「顔でわかるわー」。それよりこれ147話でやったよね、なにその古いネタを引っ張ってるんですか桂さん」

また、一夏が突っ込む前に突っ込み終わる新八さん、一夏が四つん這いになって落ち込んだ。

「むっ、これならいいと思ったが。やはり駄目か？」

「当たり前でしょ。何考えてるんですか？」

そんな時

「ギヤ——————!?!?!?!?!」

「銀さんの叫び声だ」

「銀時!？」

「だれか、侵入したの？」

一瞬でダラダラした空気が緊張感どっぴりの空気に変わった。

叫び声に反応した皆は動こうとしたけど、その前に銀時さんがもの凄く速さで戻ってきた。

675

「てめえー、なんで俺の玉が再現されてないんだよ!?!?!?」

フランの胸倉を掴んで必死に叫ぶ。

「いや、たまにいいんじゃないかね玉が無い日とかあっても?」

「なに、うまい事言ってるんだよ。小便も出来ないだろ?どうするんだよ?」

怒っているのか泣いているのかわからない悲痛な叫びでフランに叫ぶ。

「いや、お前って以前から玉に関してはたまにへんな事が起きてるだろ？」

「だから、うまい事言ってるんじゃないか！　なんで新八を再現してるのに、俺の男の沽券であるあそこを再現してなんだよ！？」

「そこは股間というべきじゃないのか？」

「腹立つ。こいつ腹たつ」

「新八を再現したもんだから、容量が足りなくてよ」

「だったら、新八じゃなくて、俺を完全に再現すればいいだろ！！」

下ネタばかり言うもんだから、皆（男以外）が顔を真っ赤にしてる。

僕もそうだ。

「しかし、ツラも駄目か」

「ツラじゃない桂だ」

「俺を無視するなー!!」

桂さんのツッコミを無視してなにやら考えに入るフラン。

「よし、こいつならいいか」

とって、呪文を唱「たら。桂さんと同じ黒髪の長髪が出てきた。

「ん、どっだこっ?」

「お、ホーリ、ひゃっぶっりーー」

「フランか？久しぶりと言っても俺本体じゃないぞ？」

「アウト……！！」

二人でなにやら話していたけど桂さんが二人の間に割って入って叫んだ。

「な、なんだこいつ！？」

「どうしたツラ？」

「ツラじゃない桂だ」

態々突っ込むんだ。まあ自分の名前だからしょうが無いけど。

「って、そんな事より、キャラが俺と被ってるぞ……！！」

叫ぶ桂さんを見て、僕達は少し引いた。

「どじが?」

「髪型が被ってる。ただでさえ九兵衛殿と堅物キャラで被っているのにこの仕打ちはあんまりだぞ」

「いや、俺は別に堅物じゃねえぞ? つーか、何言ってるんだよこいつ?」

「そういえば、似てるなラピードとか連れてるし」

「エリザベスと同じ生物を連れてるというのか?」

まるで絶望の何かを見たような声で叫んだ。

「ジラヤこいつのことより、俺の股間をどっにかしろ」

「まで、銀時。俺は今自分の全てを賭け戦わなければならぬ時なんだ。邪魔をするな」



「つーか、どんな状況だよこれ？　なんとか説明してくれフラン？」

「もうこうなったら、テメエ等の玉を奪うまねだ」

「邪魔をするというなら容赦せんぞ銀時」

「なにが、どうなってるんだよ！！」

三人？のやり取りでこの場はカオスになっていく中、一夏はツッコミで負けていまだに落ち込んでいた。

「あーあ、なんか収集付かなくなったなこれ、どうしょ？」

困ったように表情をするフランは。

「第」

「な、なんだ？」

「強さとは自分で見つけるもんだ」

「そ、そうだな。へんな頼みとをして悪かった」

「いや、俺もこうなるなんて思わなかったし。此処から出るか」

「そうだな」

「同感です」

エヴァと茶々丸さんは同意するが、他の子達はアレをほって置いていいのかという表情をしている、僕もそうだけど。

「姿を維持する魔力が無くなったら勝手に消える仕組みだからいいよ。それよりかえって夕飯を食べたほうがいい」

そういって、フランは紙を出し、一夏に此処から出る方法をかいて目の前に置いた。まあ、方法といっても入ってきたときと同じだから

難しくないが、正気が戻って皆がいなくなったことを気付いき混乱しないようにとの配慮みたい。

### 今日の教訓

強くなる為に他人に頼らないほうがいい。

## 25話 幕の魔改造計画？（後書き）

銀魂のキャラがゲストの回でした。

ついでにヴェスペリアのユーリも出てきましたけど、台詞すくなく  
つす。

本当はもつとキャラを入れたかったんですが、作者の文才ではこれ  
が限界でした。本当に色々入れたかったですけど、。リタとか、レ  
イブンとか、ハレルヤとかエドワードとか……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6742t/>

---

とあるISの非現実事件

2011年9月29日06時59分発行